

序文

細谷 良夫

今でこそ、軍事上など国家機密にかかわる場所は別にして、中華人民共和国＝中国、中華民国＝台湾のどこでも自由に訪れる事が出来る。しかし、現在のような自由な訪問は、1950～60年代に大学生活をおくった筆者には思いもよらぬ事であった。大学院博士課程を修了した1964年当時では、海外渡航は高嶺の花であり、加えて1972年9月の日中国交回復以前は、社会主義国家中国に賛同する「友好訪中団」などを組織して赴く以外に、中国に足を踏み入れる事は難しかった。研究者の間では、「史料を熟読すれば、史跡は見なくても理解できる」との、負け惜しみに近い文言が一人歩きしていたように思われる。

1967（昭和42）年10月から6ヶ月間、東洋文庫清代史研究室に内地研究員として滞在した。清代史研究室の神田信夫明治大学教授・松村潤日本大学教授・岡田英弘東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所教授の諸先生に、満洲語文献の解読を学ぶと共に、未整理のまま茶箱2箱に保存されていた、清朝八旗の一をなす鑲紅旗満洲都統衙門の記録である満漢合璧を含む満洲語檔案「鑲紅旗檔」の整理、檔案のローマナイズと日本語訳に着手した事もあって、内地研究員の期間終了後も清代史研究室に出入りさせていただいていた。

『満文老檔・原檔』を追って台湾を訪れられていた神田先生の助言を受けながら、1971年12月末から72年1月初旬にかけて台北で開催された「第4回東亜阿爾泰学会」にオブザーバーで出席した。その機会に既に檔案史料が公開されていた故宮博物院図書文献処を訪れて、「宮中檔奏摺」「軍機処檔案」等の閲覧にいそしんだ。1972年9月、「日中国交回復」即ち「日台国交断絶」の折も台北を訪れ、台北市郊外の淡水河で月見をしながら、台湾にしばしの別れを告げた。その後も78年7月に開かれた「国際清史檔案研討会（台北）」に出席するなど、檔案閲覧の可能な故宮博物院図書文献処などに足を運んだ。寺田隆信東北大学教授からは「中国本土に行きたければ、台湾詣では、いい加減にやめた方がよい」とのご忠告を受けたが、それには正直反感を覚えた。

友好訪中団を組織しなくては行けなかった時期を過ぎ、中国で自由な観光旅行ができるようになったのは、中国が改革開放政策に転じた1978年以後の事であろう。筆者は、1979年4月に、香坂昌紀東北学院大学教授に誘われて、北京－呼和浩特－蘭州－上海の旅をし、中国本土・清朝領域の一端に触れることができた。1980年12月には、日本学術振興会短期研究者として神田・松村・岡田先生の驥尾に付して北京の学術機関と史跡を訪れた。そこで、さらにこの経験を深めたいと当時勤務していた弘前大学の1986年度在外研究員に立候補したが、選考会議では、筆者の所属した人文学部の順番であるにもかかわらず、在外経験の無い人を優先するとの理由で選に漏れてしまった。

その1986年7月に「1986年清史国際学術討論会」が大連市で、またその史跡見学が瀋陽（故宮博物院・遼寧省檔案館・東陵・北陵）、承德（須弥福寿廟・普樂寺・安遠廟・避暑山莊）で行われることになり、その招待を受けたので、参加することにした。史跡見学終了後、瀋陽に戻り、在外研究員として受け入れの了承を得ていた遼寧社会科学院歴史研究所にお詫びの挨拶に行った。この時、思いがけない事に、遼寧省新賓県にある清朝発祥の地・赫図阿喇城址を案内して頂くことになった。これを契機に、以後、2016年の北京周辺

の史跡訪問まで 30 年あまり、途切れる事なく八旗史跡を中心に多くの清朝史跡を訪れた。その訪問記録は「清朝初期の史跡を訪ねて―旧老城・老城・薩爾滸など―（上・中・下）」（『東方』76・77・78 号、1987 年 7～9 月）をはじめとして、満族史研究会の機関誌である『満族史研究通信』『満族史研究』、筆者の所属する東北学院大学アジア流域文化研究所の機関誌『アジア流域文化研究』などに報じてきたが、このたびこれらの記録の一部を整理して一書にまとめることが出来たのは望外の喜びである。

本書の作成にあたっては、ともに台湾や中国を歩いた日本大学文理学部加藤直人教授、そして東北学院大学文学部小沼孝博教授、公益財団法人東洋文庫研究部會谷佳光主幹研究員、同相原佳之研究員より多大なご援助を頂戴した。また、本書収録の図版の作成や原稿・写真の整理においては、東北学院大学アジア流域文化研究所の歴代事務職員である松尾謙一・井上あかね・今井ありさ・岡本莉奈の諸氏のご尽力によるところが大きい。ここに記して感謝する次第である。なお、本書各章で名前を挙げている方々の肩書きは、いずれも旧稿発表当時のものである。

《附記》

清朝の史跡探訪における筆者のカウンターパートであり、中国各地の調査で苦楽をともにした中国社会科学院近代史研究所劉小萌研究員の大作『清朝遺跡的調査』（中国社会科学出版社、2020 年）が上梓された。本書の内容とも重なる部分があり、姉妹版ともいえる。あわせてお目通しいただきたい。

目次

序文	i
目次	iii
第1章 貴州と雲南の明清史跡—永暦帝・呉三桂・満文対聯—	1
第2章 三藩の史跡—福州・広州・桂林の旅—	13
第3章 北京からモンゴル高原への道—鶏鳴山駅城・宣化城・張家口を訪ねて—	29
第4章 荊州満城・成都満城・金川平定碑	53
第5章 黄河と丹江をめぐって—潼関・龍駒寨・荊紫関—	79
第6章 黄河中流域の清朝史跡—包頭・銀川・中衛—	97
第7章 北京周辺の三藩をめぐる史跡	121
第8章 珠江・西江流域の明末清初の史跡—平南藩尚可喜と南明永暦帝を中心に— ..	137
第9章 郎世寧をめぐる二つの石碑	167
第10章 新疆ウイグル自治区に残る清代城堡の探訪	177
第11章 長江上流・大渡河流域の旅—瀘定橋・打箭爐・雅州—	209
第12章 満漢合璧「雅州印」について	231
第13章 再訪の海城・鉄嶺・開原・四平・葉赫—1986・88・96・2004・13年— ..	235
第14章 嫩江・松花江流域の清朝史跡—再訪の烏拉街 1987・88・94・2014年— ..	263

第1章

貴州と雲南の明清史跡 —永曆帝・呉三桂・満文対聯—

はじめに

東北地域を歩いていて考えたことの一つに、広大な地域のわりに居住する民族の種類が少ないことである。これに対して広西壮族自治区、貴州、雲南などの南部地域は多数の民族が数えられている。雲南省の場合では25の少数民族を数え、その人口は全体の3分の1を占める。それだけに雲南や貴州のガイドブックのほとんどは、この地域に住む少数民族の解説にかなりの頁を費やしている。このことに示されるように、南部地域の一つの特徴は、さまざまな民族とその民族によって育まれた独自の文化が存在することである。南と北という相違はあるにせよ、同じ中国の辺疆地帯で、どうしてこのような相違があるのか、また東北出自の満洲族政権である清朝による南部地域に対する民族政策が今にまで及んでいるのか、などの疑問を、現地を歩きながら考えてみたかったことが、この旅行の大きな目的である。

また、より具体的な問題として、呉三桂の史跡と長江以南に満文石碑などが残されていないかどうか関心を有している。これまでも「清朝政権に参加した漢人の様相」という研究課題を設定してきただけに、清朝の入関に多大の役割を果たしながら、三藩の乱で反乱者とされた尚之信や耿精忠それに呉三桂をめぐる、彼らが勢力を振った広東、福建、貴州、雲南などにどのような史跡が残されているのか、そしてまた東北・満洲の東北夷の政権と文化を代表する満洲語が「南蛮」の人々にどのように受け入れられたのか、その痕跡を探し出すことなども、今回の旅行の目的の一つである。

さて、私がこれまで東北地域で目にした呉三桂の史跡は少なくない。清軍の入関をめぐる睿親王ドルゴンと呉三桂が会見したといわれる「威遠堡」の土塁の上に立ち南に指呼の間に山海関の城門を望みながら、明清交代の転換点がひっそりと忘れられていることに感慨を覚えた《1988年8月》（以下、《 》内に史跡を訪れた年月を記す）ことを始め、遼寧省博物館の旧本館入口階段下に置かれている『定遠大將軍』と号された「崇禎拾五年拾貳月吉旦」の鑄造銘がある紅衣砲は呉三桂が鑄造させたものという《1999年8月》。吉林社会科学院の李治亭教授は呉三桂の『昭武』、呉世璠の『洪化』年号のある呉氏の銭を見せてくれると共に、「三藩の乱の終結以後、黒龍江には呉三桂の配下が流されその子孫が沢山残っている」と教えてくださった《1988年8月》。呉三桂の鑄造した銭については、伊通満族郷の成立と共に発刊された『伊通満族—ITUI MANJU BEYA—』創刊号（1989年8月）には呉三桂の古銭が掲載されていた《1989年8月》。しかし伊通の満族博物館に赴いた時に、天聰銭の展示はあったが呉三桂銭は見あたらなかった《1996年9月》。呉三桂配下の壮丁が東北に流されたことについて、当時『北方文物』主編であった呉文衡氏や編務室主任の曲守成氏から「呉三桂軍団の壮丁は齊齊哈爾から愛琿に至る駅の駅丁（站丁）に充当され、その子孫は今も家譜を持っているなど、呉三桂配下の壮丁の子孫であることがはっきり判る」との話を聞いたが《1989年8月》、齊齊哈爾から愛琿に至る駅の走っていた富裕県では、富裕県老幹部局の鄭化寧氏から「呉三桂配下の壮丁が富裕を中心とする站丁

となったので、富裕地方には現在でも雲南、貴州の服装や習慣が残っているし言語も相違する。このような集落は4部落が確認できる」との話を聞いた《1990年8月》。また、琿春市郊外の三家子満族郷古城村で医療衛生所所長の関吉勝氏は「私の家は琿春で200年くらい続いたが、その昔の故郷は遼南であり、故郷では遼南を『小雲南』と呼んでいる」と話してくれた《1995年9月》。

呉三桂の銭や壮丁を通じて東北各地に伝わった雲南の文化を知ると、貴州や雲南に呉三桂の史跡が残されているのかどうかを知りたくなる。多種類の少数民族が生じるに至った地勢を眺め、呉三桂が権勢を振るった地域の現状と史跡、ほとんど期待は出来ないであろうが碑文などに残された満洲語文化に巡り会うことを考えながら旅立った。なお、この調査は2000年1月8日北京発貴陽着、以後車で貴陽から安龍を経て昆明に至り、更に昆明から大理を経て潞西（芒市）へ、そして潞西から昆明を経て北京に1月22日に戻るまでの15日間であり、毎年の調査で助力を得ている哈爾濱市社会科学院王禹浪研究員との二人で行った。

以下にこの調査で得られた呉三桂に関連する史跡、出向く前は期待もしていなかった南明政権永暦帝の史跡、そしてわずかに残されていた満文対聯を中心に、貴州と雲南の明清史跡の現状を報じておく。

1 貴州

貴州と雲南の社会科学院には哈爾濱市社会科学院賈院長から、我々が呉三桂の史跡や満文史料を求めて訪れることを連絡していただいていた。貴陽に到着後、王先生は貴州社会科学院に連絡してくれるが、この地には明清研究者は多くなく余り芳しい情報は得られない。西安に行って八旗駐防の跡を尋ねて冷笑されたように、ここでは少数民族の歴史が中心で呉三桂などは興味の対象外らしい。呉三桂に代わって得られた情報は永暦帝をめぐる史跡が安龍に残されていることである。

◆貴州省博物館

歴史部門と民族部門の二部門に大別されているが、歴史部門では貴州が東漢時代から発展していたことをうかがわせる出土品の展示が多い。展示されていた文書の一つ『眷黄』は、清末に楊龍喜が反乱した時の詔書であるが、詔書の中に「大明江漢八年」と明の復興を主張する年号を記し、詔書の文章には激しい反満洲族感情が記されていた。

◆貴州城東門

社会科学院や博物館の情報、ガイドブックにも貴州城の城壁や城門が残されていることなどは全く記されていない。チャーターしたタクシーの運転手が、貴州城東門が残っていることを教え案内してくれた。壅門の名残を示す狭い曲がりくねった道を入り込むと、かなり巨大な城壁と城門が残っている。修復された城壁と城門の上には文昌閣が建てられている。文昌閣の周辺の壁には「康熙三十一年文昌閣重修碑文」など数本の漢文碑文がはめ込まれ残されている。

その後に西門のあった場所にも行ってみたが、繁華街のまっただ中であり城門の痕跡もない。ただ門のあった外側には護城河であった河が今も流れていた。

◆甲秀楼

明代建築の三層楼閣として観光名所となっているが、歴史的な興味を惹かれるものはない。一巡した後にお土産売りのおばさんに勧められて二階の古衣装売りに登ってみると、吹き抜けの天井の横梁に「永曆乙未年孟秋月吉旦火器營都督？？建」（？？の2字は薄暗くて読めなかった）と大書されていて、甲秀楼が南明永曆政権の下で乙未年すなわち順治十二年（1655）に建立されたことを示していた。

◆青岩鎮の明清古建築

貴陽市の南30 kmほどにある青岩鎮は、咸豐十一年（1861）に勃発した「青岩教案」で知られているが、同時に明清時代の建築が多数残っていることで有名らしい。社会科学院歴史研究所で貴州出身の何応欽を研究する熊先生の案内で訪れた。鎮の始まりは洪武年間といわれていて、清代には貴州城南部の交通の要衝を占める城塞であると同時に交易所として繁栄した【写真 1-1】。訪れた当日も農業市が開かれていて、古建築の並ぶ街区に至る狭い通路は歩くのがようやくの大雑踏であった。

青岩鎮の地名が示すように付近から青みがかった石材を産出するので、面積が3 km²の鎮の周囲は石積みの城壁で囲まれ、曲がりくねった鎮内の道や階段もほとんどが石葺きである。城壁には修復して現存する南門（定広門）をはじめとして東西南北の4門が設けられ、門の内側には4柱3間の石造りの牌楼が建っている。城内には9寺、8廟、5閣、2祠、1院、1宮という多数の寺廟などがあるほか、青瓦を葺いた木造の商店が建ち並ぶ通りは、東北では見あたらない習俗、面影が認められる。清末に状元となった「趙以炯故居」は小さな博物館となっていて青岩鎮の歴史を展示している。この博物館にも短時間歩き回った場所にも石碑、碑文のたぐいを見つけることは出来なかった。

2 安龍

◆貴陽から安龍へ

当初の予定を変更して永曆帝の遺跡が残っているという安龍を経由して昆明へ向かうこととした。貴陽を出発、途中で安順に立ち寄り躍動的な龍の彫刻のある柱で名高い「安順文廟」を見学する【写真 1-2】。花江を過ぎると標高1,400mまで登った後に800m余りを急降下、撮影禁止の花江橋で北盤花河を渡り、再び700m余りを登り返す。北盤花河はやがて紅水河、西江と名前を変えて広東省から南シナ海に流れ出るが、盤花河より西側を流れる河川はメコン、サルウィン、イラワジ河に流れこみ、ベトナムやタイ、ミャンマーを経て南の海に流れ出す。盤花河に見られる深く刻まれた溪谷は南部に一般的であるが、この河川はそれぞれの溪谷が合流する下流の平野部が別の国家・文化圏になってしまう。東北の河は低い山脈（嶺）の間のなだらかな谷間を流れ、各支流の間や支流から本流へ往来しやすく、流域全体が一つ文化圏に結節している。閉鎖され孤立する流域と開放的で融合する流域の相違、すなわち南では別の流域と交われない孤立的な流域に居住していることが、多数の孤立した民族を生み出したのかも知れない。こんな事を考えながら夜遅く安龍に到着した。

◆安龍

安龍は明代に土司土官の統治する所で元来は安隆と称していたが、順治九年（1652）に孫可望が永曆帝を迎えて安隆を安龍府と改称、それが今の地名の始まりである。孫可望の

処遇に堪えかねた永暦帝は孫可望の下を離れて李定国の下に走って順治十三年（1656）には雲南に逃れた。順治十五年になって安龍が清軍の支配下に入ると安龍所と改められ、呉三桂の反乱でも呉軍と清軍の争奪する場所となった。こんな歴史のある安龍を、宿泊した双龍酒店の主人の妹である朱おばさんに案内してもらいながら、三輪タクシーで歩き回って南明政権永暦帝の史跡を訪ねた。

◆招堤

康熙三十三年（1694）に安龍鎮遊撃の招国遴が治水のために自費を投じて堤を造ったことが名前の由来であるが、堤そのものよりも張之洞の『半山亭記』などここを訪れた文人の碑記が多数あることで有名。この近くに「永暦王妃墓」があるというので訪れたが、所在は不明であった。

◆明十八先生墓【写真 1-3】

永暦帝が李定国に走ったため孫可望は順治十一年（1654）に永暦帝の侍信呉貞毓など 18 人を殺害して街頭にさらした。逃れた永暦帝と李定国はその忠節を悼み弔い、更に清朝も孫可望と李定国の抗争の犠牲者として追悼して墓所を祀った。中華民国になると国民党中央行政院や貴州省政府も祭葬に手を貸し、民国三十一年（1942）には当時中央軍事委員会委員長であった蔣中正（蒋介石）が「碧血千秋」の碑文を寄せている。この他にも多数の国民党幹部が碑文を記していてそれが崖に刻まれていた。清末民国になってからは永暦＝明＝漢に忠節を尽くした事が評価されたもののようである

◆院試建造物と永暦行宮

十八人墓にある文物管理所で、これ以外に永暦帝をめぐる遺跡は何もないといわれたが、朱さんは三輪タクシーに乗って小高い丘の上の安龍第一中学校敷地に隣接する院試跡に連れて行ってくれた。四方を山に囲まれた小さな盆地である安龍の町を一望する高台のこの一帯は、元来、永暦帝の議政所である文華殿や后宮があった場所で、そのため住民はここを「行宮」と呼んでいるという。清代には総兵の役所などが置かれ、後に兵火で焼失、道光年間に院試を行う建物が建てられ、その一部が今も残っている【写真 1-4】。付近には立派な天主教と基督教の教会があり、永暦帝皇后の天主教信仰の関係を想わせたが、県志によればキリスト教の進出は民国時期であるという。清末の動乱の犠牲となった「万人墳」を回り双龍酒店に帰る。

◆安龍城壁

安龍の城壁は町を囲む市街地内の城壁ではなく盆地を囲む山稜に造られている。興義へ向かう街道から山道を徒歩でたどり、畑と墓に使われている斜面を登りつめて稜線の一角にたどり着く。安龍盆地から標高で 400m 余りの山並みには南門跡とそれに続く立派な石垣の城壁が残っている。山並みに囲まれた盆地の城壁は東北の平野が広がる中に設けられた城壁や山城の拠点を囲む城壁と相違することを実感する。

3 昆明市内

昆明に到着して雲南社会科学院と連絡するが、歴史研究者は現代史が中心で明清の研究者は既に退職してしまったとのことで昆明をめぐる清朝史跡の現地情報は入手できない。

博物館などで情報を得ながら昆明の史跡を訪ねた。

◆雲南省博物館

ガイドブックには「地方史の展示が充実している」とあったので期待して赴いたが、雲南地方史部門は展示していなかった。仏教部門では大理を中心にした漢族とは相違する仏教文化が、青銅器部門では殺人柱をかたどった銅鼓など滇池文化の展示が充実している。館員に聞くと「金殿」に呉三桂史料が多いとのことである。

◆金殿

昆明市北郊の鳴鳳山にあり、世界花博覧会はこの近くで開催されている。鳴鳳山中腹には万暦三十年（1602）に雲南巡撫陳用賓が武当山を模して大和宮を創建したのに始まる道教寺院群がある。寺院群一番奥の紫禁城と呼ばれる地域に呉三桂が康熙十年（1671）に寄進した銅製（銅製であることから金殿と呼ばれる）の眞武殿がある。総量 250 トンの銅を使用したという二階建ての金殿の梁には「大清康熙十年歲次辛亥大呂月十有六日之吉平西親王呉三桂敬築」と大書されている【写真 1-5】。近くの天師殿文物陳列館には呉三桂の使用した長さ 2m 余りある「三桂大刀」（大官刀）が展示されている【写真 1-6】。また「呉三桂と陳円円」と題する展示があり、昆明に広く伝えられる呉三桂と陳円円の故事を 30 幅の絵で説明している。第 1 幅が陳円円の蘇州の出生で始まり、第 30 幅は呉三桂の死後清軍の昆明入城と陳円円の蓮花池入水自殺で終わることが示すように、主人公は呉三桂ではなく陳円円である。

◆蓮花池

呉三桂が陳円円のために造営し陳円円が入水自殺した場所とされているが、特に表示があるわけではなく表通りからは全く見えない。食堂の建物を通り抜けて池畔に出ると、池の中に陳円円の故事が記された石塔が建てられていた。また食堂前の駐車場の一角に康熙年間に作られ文革の最中に破壊されたという陳円円を描いた石碑（本来二つで一对だったが今は一つだけが探しだされた）が置かれていたが、摩滅してほとんど読めない。

◆五華山

昆明市内で一番高い場所であり、元の時代山頂に五華寺を創建したのが始まりで、明代には王府が置かれ、明末には李定国に迎えられた永暦帝の宮殿があり、呉三桂もここに宮殿を設け、今は雲南省人民政府が設けられている。歴史の転変と呉三桂の栄華を偲ぶためにも是非訪れたかったが、衛兵に政府弁公室がある場所には無用の者は立ち入れないと断られ山の下から引き返した。

◆永暦帝殉難処

呉三桂の手でミャンマーから連れ戻された永暦帝は五華山の西側の金蟬寺に拘留され、ここで自縊を迫られ殺害されたという。博物館の写真には金蟬寺のあった場所に建てられた「明永暦帝殉難処碑」の写真が展示されていたので、昆明でも古い町並みの残る青雲街で金蟬寺址を頼りに碑のある場所を探したが、この一帯には開発の手が加えられていて、探し当てることが出来なかった。

◆大華寺

昆明の西 15 kmにある滇池のわきにそびえる標高 2,500m 余りの大華山山中にある元代創

建の仏寺。創建を記した元代に造られた石碑が保存されているが、台石はともかく碑文そのものは後からの模刻であろう。明代には雲南鎮守国公であった沐英の後裔がこの寺を自分の家廟とみなして保護していた。さらに康熙二十七年（1688）には、雲貴総督であった范承勳が呉三桂の五華山王府を壊し、その材料をここに運んで大華寺重修の材料とした。五華山から移された一つが山門の外側にある二つの石碑楼であるという。昆明市内の五華山から遠く離れた滇池の山中に、このような石材を運ぶのはけた外れの労力が必要であったと想像されるが、何が目的でそのような作業を行ったのであろうか。

◆雲南民族博物館

滇池畔に広がる休暇村の中にあり、広い敷地に立派な展示館が建ち並んでいるが見学者は全くいなかった。雲南地方の少数民族について「少数民族の社会形態と改革・発展」、「民族服飾と織物工芸」、「民族の祭日文化と民間楽器」など七つの主題に分けて展示しているが、トーテムや仮面、民間信仰など興味の惹かれる展示が多い。主題の一つに「民族文字古籍」があり、この一室には植物を利用した文字や彝族語の新約聖書、契丹文字の拓本と並んで鎮雄県南台で採集したと説明のある「恵無疆」満漢合璧の対聯の拓本が展示されていた。明日は北京に戻るという日に、満洲語文化が雲南へも及んでいたことを示している対聯に出会ったことに感慨を覚えた。

北京で会った承志氏にビデオを見てもらい満洲人の対聯の風習について問うたが、対聯の風習は知らないとのこと。帰国後に余り映りの良くないビデオを基に承志氏に満漢合璧対聯の解説をお願いしたのが、『満族史研究通信』第9号に掲載の「雲南満文対聯解説」である。

4 大理城と南詔国城址

◆大理城・南詔国城址・巍山古城

昆明の滇池を横目に飛び立った飛行機は30分余りで洱湖を見ながら大理空港に着陸する。城壁に囲まれた大理城は観光地と化しているが、城内にある大理城博物館には順治年間鑄造の紅衣砲が置かれていた。或いは呉三桂軍が持参したものだろうか。

大理の南は2,300m余りの峠を越えて巍山彝族回族自治县に入ると、「アヘン毒品取り締まり」の標語があちこちに大書され、「黄金の三角地帯」に近いアヘン密売地帯を思わせる。紅河の流域にある南詔国の古城を訪れたが、麦畑の中には西壁と北壁の址や宮殿址らしい中央台地が残っていて、この周囲では瓦や陶器が表面採集できる。

古城鎮から車で10分余り走ると、巍山県の中心部でもある巍山鎮に「巍山古城」【写真1-7】がある。ここは洪武年間に開かれた街というが、北門鼓楼【写真1-8】（ここに文物管理所がある）と鐘楼が残っていて、この間を結び歩いて10分ほどの中心街路両側の建物は古い様式を残している。近くの図書館には石碑が保存されているというので訪れたが、新しい施設に移転するため撤去してしまったとのことで石碑を確認することは出来なかった。

5 潞西（芒市）

◆大理から潞西へ

大理を車で出発し下関から高速道路に入るが、高速道路は10分ほど走った平波付近で

終わってしまい、後は高速道路建設中の悪路となる。この道はサルウィン河（怒江）沿いにミャンマーまで続く滇緬公路であり往時の援蒋ルートでもあるが、この付近では谷底と峰の間の高度差 1,000m 余りのアップダウンを繰り返す。走っているのはトラックがほとんど。工事車が落としたのか道の真ん中に大きな石が落ちていて、かなり物騒な道であった。永平で濁流のサルウィン河支流を渡り、ここからサルウィン河沿いに保山を目指す。保山はサルウィン河の両岸に広がる平野地帯。最近建ったらしい保山博物館は月・火曜日が休館、ねばったが責任者が不在で鍵が開かず断念する。

保山から龍陵、潞西（芒市）を目指して次第に高度を下げていくが、高度が下がるに従いバナナ畑が広がりパパイヤが実を付けている。日中戦争で戦略拠点として日中両軍が奪い合ったサルウィン河の渡河点には、「怒江大橋」（恵通橋）が深い谷底に架けられている。ここでは人民武装警察の検問が行われていて、この地域外の中国人である王さんのみが 50 元の入域料を徴収される。谷底から山頂まで再び 1,000m 余りの高度差を登り返すが、途中の段々畑では 1 月なのにもう小麦が穂を出している。龍陵を通過すると徳宏泰族景保族自治州に入りサルウィン河流域の平野部、アップダウンも無くなり道も良くなって、拠点とする潞西に到着した。

◆潞西からミャンマー国境へ

潞西からミャンマーとの国境貿易の街である瑞麗市街を経て、郊外にあるミャンマーとの出入り口の弄島へ出向く。ここには国境検査場があり、土地の人は簡単な手続きで河を渡りミャンマーに行くらしい。我々も 30 分間で往復することを条件にサルウィン河の支流瑞麗河が見える場所まで行くことが許可される。広い河畔の一角には中緬両国の友好記念碑が建ち、のんびりとした流れを小舟でミャンマーに渡っているが、人も物も移動は閑散としていて、茶店の音楽だけが騒々しい。

瑞麗に引き返す途中で見つけたミャンマー式仏塔寺院【写真 1-9】に立ち寄るが、ここでは全く漢語は通じずミャンマー語のみ。どうやらこのあたりにある「一寨两国」（一つの村に中国とミャンマー両国が同居している）のミャンマー地域に入ってしまったらしいので慌てて引き返す。瑞麗市街に戻りこの地域の両国の国境往来と貿易が行われている両岸口岸に出向くが、不思議なことに国境の河であるはずのサルウィン河の左岸も中国領で河を渡った左岸の陸地に国境がある。ここでも両国の人は簡単な手続きで往来していて、緬甸翡翠などの貿易品を扱う商店が軒を並べている。

◆南甸宣撫司衙門

地図で潞西への道をたどっていると、徳宏泰族景保族自治州に「土司衙門」の地名を見つけ、潞西で尋ねてみたが何の情報も得られない。ともあれ行ってみたいのだが潞西から土司衙門のある梁河まで片道 120 km 余りあり、昆明に帰る飛行機は 15 時発、あとは運転手次第である。運転手の張さんは霧が濃くなければ往復することは出来るだろうから行ってみようといってくれる。早朝に出発したが昨日同様の濃霧、幸い梁河への道は次第に高山地帯に入って標高が高くなるにつれて霧が晴れる。曲がりくねった山道はしっかり舗装されていて対向車もないままに飛ばし、2 時間 30 分余りで梁河に到着する。町の人に土司衙門と聞いてもなかなか解らない。行きつ戻りつして探し当てた「南甸宣撫司衙門」は町の真ん中にあった。

入場券を買って入り説明を聞く。正統九年（1444）に始まる南甸宣撫司は各地を転々としてこの地域に衙門を定め、何度か改築されたが現在の建築は咸豊元年（1851）に建て始め、以後 80 年余りかけて完成したものであり、現在は国家級文物の指定を受けているとい

う。総面積 7,760 m²に 150 間余りの建築群、四合院風に中庭のある正堂の他に戯楼や花園、食糧庫や軍需庫、馬屋や監獄まで備えた規模壮大な建築である【写真 1-10】。

おわりに

土司制度が開始された明代以来、明清の交代、清の滅亡と辛亥革命、日本軍による芒市占領、日本の敗退と国民党の支配、共産党軍＝解放軍の進出と中華人民共和国による支配という激しい変動にもかかわらず、当初の土司「刀姓」がこの地方の有力者として君臨し生き残り続け、共産党政権の現在も存続していることが土司制度の特徴であり、理解する一つの鍵となりそうである。

（原載：『満族史研究通信』第 9 号、2000 年）



写真 1-1 青岩鎮の街路



写真 1-2 安順文廟の龍柱



写真 1-3 明十八先生墓



写真 1-4 行宮院試跡



写真 1-5 「平西親王吳三桂」の文字がある梁



写真 1-6 吳三桂大刀



写真 1-7 巍山古城

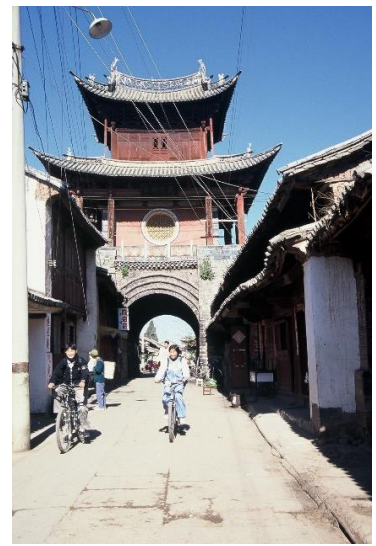


写真 1-8 北門鼓樓



写真 1-9 ミャンマー式仏塔寺院



写真 1-10 南甸宣撫司衙門

第2章

三藩の史跡 —福州・広州・桂林の旅—

はじめに

清朝の中国支配の過程で明朝から来帰した漢人武将の果たした役割は大きい。中でも多数の将兵を率いて来帰した孔有徳、耿仲明、尚可喜、呉三桂の軍事力は清朝が中国南部を支配する原動力となった。順治元年（1644）五月に摂政王ドルゴンの率いる清軍が北京を陥すと、十月には靖遠大將軍アジゲが呉三桂軍と尚可喜軍を指揮して大同から延安へ、定国大將軍ドドが孔有徳軍と耿仲明軍を率いて河南から潼関へ進撃、翌年に李自成軍を討伐した。西部の平定が終了すると、順治三年、平南大將軍に任命された孔有徳は耿仲明と尚可喜を率いて湖広・両広地方の討伐に向かった。順治六年、孔有徳を定南王（定南藩・孔藩）に、耿仲明を靖南王（靖南藩・耿藩）に、尚可喜を平南王（平南藩・平藩）に進封すると共に、有徳には広西地方の、仲明と可喜には広東地方の平定を命じた。耿繼茂⁽¹⁾と尚可喜は順治七年に広州を陥し、孔有徳は順治八年に桂林で靖江王軍を撃破しそれぞれ広州と桂林に駐屯した。順治九年、孫可望に攻撃され孔有徳が没すると、順治帝は有徳の腹心であった線国安を撫蛮將軍に任じて広西地方の支配を引き継がせ、一方では有徳の娘孔四貞に食禄を与え皇帝の娘の資格である和碩格格として遇した。

1 三藩の設置と福州・広州・桂林

中国南部の平定に目処がついた順治十六年、議政王大臣会議は呉三桂を雲南に、尚可喜を広東に、耿繼茂（康熙十年に耿精忠が承襲）を福建⁽²⁾に駐屯させる事を決定、後に線国安が引退すると孔藩の後継者として孔四貞とその女婿孫延齡を桂林に駐屯させた。彼らは以前からの配下を再編成した独立軍団⁽³⁾を率いる藩王として、それぞれの駐屯地に君臨した。

四藩は清朝の撤藩政策から康熙十二年（1673）に「三藩の乱」を起こし、一時は長江以南を勢力下に治めたが、康熙二十年に平定され各藩は解体された。呉藩は呉氏一族を族滅し兵丁を辺境の站丁に当てて消滅させたが、尚、耿、孔藩は反乱の中心とみなした尚之信や耿精忠などを処刑する一方で⁽⁴⁾、それ以外の尚、耿、孔氏一族の清朝への帰順を許し八旗漢軍に吸収した。

(1) 広東遠征の最中に耿仲明は逃人隠匿の疑いをかけられ順治六年十一月に自殺、子供の耿繼茂が承襲した。

(2) 耿繼茂の駐屯地は初め四川であったが、翌年福建へと変更された。

(3) 彼らの組織は八旗制にならって、都統以下佐領に及ぶ官職が設置されていた。なお呉藩は53ニル、尚藩は12ニル、耿藩は11ニル編成であったが、孔藩のニル数は不明である。

(4) 孫延齡は康熙十六年に呉三桂の手で殺された。

四藩は明朝から清朝へ来帰し清朝の中国支配に功績を挙げたが、三藩の乱で反乱し討伐され、ふたたび投降して一族の安堵が認められた。このように清政権との関係が転々とした四藩をめぐる史料は、三藩の乱を討伐した清朝の立場から記述したものがほとんどで、討伐された四藩の側にたつ記録はきわめて少ない。また歴史評価を重視する中国の歴史学では、「清朝＝満族」に対する「四藩＝漢族」という民族問題も加わって四藩の評価はまだ定まっていないようで、博物館などで四藩を取り上げ位置づけている展示を見る事はない。雲南省のいくつかの博物館でも呉藩・呉三桂を正面に据えた記述や展示は見あたらず、三桂の説明は愛妃であった陳円円を中心に行っているように見受けられた⁽⁵⁾。

2002 年 12 月に耿藩、尚藩、孔藩をめぐる史料や史跡を求めて、彼らの拠点であった福州、広州、桂林を訪れた⁽⁶⁾。同行し案内の労をとっていただいたのは、現地の研究者ならではの八旗制研究を発表し続けている劉小萌氏（社会科学院近代史研究所研究員）と折から八旗制研究のため近代史研究所の招聘研究者として北京に滞在していた綿貫哲郎氏（日本大学大学院博士課程）である。私は三藩をめぐる現地史料を、劉氏と綿貫氏は各地の駐防八旗や満族の史料を追う事を目的とする旅であった。

2 福州の史跡

福州では完顔氏で旗人の後裔であるという王宗淦氏と満族である趙氏に案内していた。福州市にある「八旗会館」「于山碑廊」「福州市博物館」「琉球館」⁽⁷⁾、閩江の河口に近い馬尾にある「馬江海戦記念館」⁽⁸⁾、福州市に隣接する長楽市琴江村にある「三江水師旗営」などを訪れた。

◆八旗会館【写真 2-1】

八旗会館は巨大な建築物であり、馬の鞍の形をしている屋根の高さは隣の建物の三階と同じかそれ以上に高い。昔の八旗会館の敷地はもっと広く多数の建物があったが、文革でほとんどが壊されてしまったという。建物の内部に残っている石造りの一本柱、観劇用の栈敷、天井飾りや壁の装飾などが往時の華やかさを偲ばせている。土間で火花を散らしながら溶接作業をやっていたが、門には「福州市五金電器廠」という看板が掲げられていた。「市級指定文物保護単位」の標識が建てられていて八旗会館は福州市の指定文物であるが、近いうちに取り壊す予定であるとの事であった。寡聞ではあるが、現在ここ以外に八旗会館が残っている事は知らない。取り壊さずに残すかあるいは壊す前に計測調査などが行われる事を希望したい。

⁽⁵⁾ 本書第 1 章を参照。

⁽⁶⁾ この時、泉州と厦門にも立ち寄った。泉州では鄭成功と施琅の後裔に会うと共にその宗廟や記念館を訪れたが、この事は別に記す予定である。また金代の女真完顔氏族の後裔であるという粘氏に会い、宗廟を訪れ、『粘氏宗譜』を見せていただいた。厦門では南普陀寺に赴いて、乾隆帝の台湾平定と林爽文の乱の平定を記念した 4 本の満漢合璧石碑を見た。この石碑が中国本土で最も南に残る満文碑文ではなかろうか。

⁽⁷⁾ 修復中であったが、館内には福州で没した琉球人の墓誌銘などが収集されていた。

⁽⁸⁾ 中法戦争の記念館であるが、馬尾は「船政学堂」が置かれた清朝の船政発祥の地であることから、これに関係する史料も展示されていた。

◆于山碑廊

福州市には福州三山と称される于山、烏山、平山があり、その一つである于山の山頂には福州道教協会の置かれた道観がある。道観の玉皇殿の前が碑林となっていて、「于山碑廊」（1983年8月に福州市の第二市級文物保護單位に指定された）の標識が建っている。碑林には明清時代の石碑が10本ほど並んでいるが、最も古い石碑は嘉靖二十七年（1548）「福州府四学新立学田記」のようである。王氏や趙氏が満族の石碑として注目しているのは、年代不詳の満文で「enduringge hese」と記された石碑である。この石碑は隣に建つ漢文の「聖旨」石碑と対をなして、満漢合璧の碑文が満文石碑と漢文石碑に分けて建てられたものである。文革で壊されたという横倒しのままに置かれている漢文の嘉慶己卯（二十四）年（1819）「珠媽祖廟碑記」は、シャマンの伝聞を記した福州の旗人をめぐる碑文であり、旗人の寄進者名が列記されている。筆者はこれらの中で「靖南王耿」と大書されている「河口萬壽橋記」石碑に目を奪われた。

于山の中腹には辛亥革命に反対して戦い敗れ自殺した福州駐防都統の記念碑と「煉胆井」と題された井戸があり、山麓には明代の福州城壁の一部が往時のままに「明代古城牆遺迹」として保存されていた。

◆河口萬壽橋記石碑【写真2-2】

于山碑廊の中の1本が、鼓山の僧侶道霈が碑文を記し王逸が書いた「河口萬壽橋記」と題された石碑である。はじめに碑文本文の全文を示す⁹⁾。

{河／口／萬／壽／橋／記}（この部分は横書き）

福州爲八閩省會、人物殷盛、車馬駢闐。水部門外河口渡、河狹舟小、競渡者衆、往往舟覆。鼓／山比丘成源、惻然於中、乃受上堽善士請、募建石橋。始工於康熙七年五月庚戌、候潮汐退、／以松石累址、結四礮、分水爲三道。礮高二丈二尺、其空處駕以石樑、左右翼以扶欄、其長二／百三十尺、広八尺餘。往來紛如、不俟舟楫、信步而趨、人莫不利。既而復造小庵於橋左、中祀／觀音大士、俾僧世守之。又造阿育王石塔於右、使主河神、？敬呵護、總額萬壽、取祝／△釐也。以明年臘月己酉訖工、共糜白金二千餘兩、求諸施者。是冬余自富沙還石鼓、道由其中、會諸宰官善信、徘徊周覽、踊躍稱頌、以爲難也。又明年冬、源其石請記、遂書其事、勒於岸左。

靖南王耿 {助縁／信官} 程明寿、孫元禔など38人の氏名が19行×2段に記されている。

{信士} 解啓元、龔爾望など114人の氏名が19行×6段に記されている。

{鼓山／比丘} 太安、道悟など19人の氏名が19行×1段に記されている。

{比／丘／尼} 傳慧など38人の氏名が19行×2段に記されている。

{優／婆／夷} 呂傳浄など19人の氏名が19行×1段に記されている。

康熙九年十月念三日、石鼓住山道霈記、三山王逸書。

碑文には、閩河の河口は転覆する船が出るほど船の往来が激しかったので、人々の希望を汲んだ鼓山の僧侶の成源は捐資金を募り、白金2千両余りを費やして、石造りの橋脚4

⁹⁾ 以下に掲載した碑文と梵鐘の銘文は、メモ書きと撮影した写真を参考にして復元したものであり、判読し得ない字や誤読があるが、数少ない現地史料の一端を示すため記した。文中で{ }で囲んだ部分は並列で記された部分、／は改行、△は抬頭、？は判読し得ない字を示している。なお碑文、鐘銘に使われている文字は略字、当て字、いわゆる正字が混じっているが、それを正確に復元する事はせず、特に問題のある以外は通用字で示した。

本がある長さ 230 尺で幅 8 尺ほどの橋を架けた。この工事は康熙七年（1668）五月に開始され翌年十二月に完工したが、人々は橋が架けられた事で大変な便宜を得た。これを記念して橋のたもとに庵を造り観音菩薩を奉祀し、阿育王の石塔を建て河神として祭った。そして道霈がこの由来を記した「河口萬壽橋記」石碑を康熙九年十月二十三日に建てた事が見える。以上の本文の後ろに、工事に協賛した人の名簿が刻されている。

名簿部分の筆頭には「靖南王耿」すなわち耿繼茂の名前が大書されていて、その下には「助縁／信官」すなわちこの工事に協賛した耿繼茂配下の将官であろう程明寿や孫元禔をはじめとする 38 人の名前が 19 行 2 段に記されている。3 段目からは兵丁クラスの信者であろう「信士」として解啓元、龔爾望などを筆頭に 114 人の名前が 6 段にわたって記されている。9 段目は「鼓山／比丘」（発起人成源と同じ鼓山に住む僧侶）である太安、道悟など 19 人の名前が、10 段目からは「比／丘／尼」（女の僧侶）の傳慧など 38 人の名前が 2 段にわたって記され、最下段には「優／婆／夷」（出家しないままの女性の仏弟子）として呂傳淨など 19 人の名前が刻されている。すなわち「靖南王耿」以下には 12 段にわたり総計 228 人の名前が記されている。

信官、信士として名前を連ねている人々は、名前だけで官職名は記されていないので直ちに耿藩の地位などを明らかにすることは出来ない。ただ耿繼茂の呼びかけに応じた人である以上、ここに記された人々は耿繼茂や耿精忠を補佐する任にあった人々であると推測される。耿藩の構成者を具体的に示す史料はほとんどないだけに、ここに見える名前は三藩の乱や乱の平定後に編入された正黄旗漢軍のニルの構成を示す諸史料を理解する手がかりとなろう。

王氏らは満文石碑の存在に気を取られていて、「河口萬壽橋記」石碑には全く気付かなかったとの事で、この石碑が元来どこに建っていたのか、あるいは碑文中に見える橋がどこにあるのかなどはわからないという。ただ碑文に記されている橋と同じ構造の橋は今も残っていると、市内にある幅 20m ほどの河に架けられた全て石造りの緩いアーチ型をした「高陞橋」⁽¹⁰⁾に案内してくれた。漂流物が引っかかりにならないようにするためとの説明であったが、石積みの橋脚は上流下流共に三角形をなしている点に特徴がある。なおこのような橋脚の形は泉州の古い橋も同様であった。

◆福州市博物館と耿王莊

こぢんまりとした福州市博物館には有史以前から現代までの福州市の歴史が展示されていた。福州市の歴史に限定しているためか、三江水師旗營や福州駐防について全く触れていない。歴史を説明する掲示に清代の酷政として「海禁」、「遷界」と共に「圈地」を挙げていて、福州駐防旗下でも旗地が設定されていた事をうかがわせるのみである。「耿精忠の乱」の掲示には「康熙十二年に清政府が撤藩令を出すと、呉三桂、尚可喜、耿精忠が前後して挙兵した。歴史にいう『三藩の乱』である。康熙十五年に康親王傑書に率いられた清軍が福建に入り、耿精忠が投降し福建の反乱は平定された。」とある。そして「福州南公園」の写真を掲げた説明に「元来の名称は「耿王莊」であり、靖南王耿繼茂の別荘であった。耿精忠の反乱が失敗した後に耿王莊は没収された。」と記している。「耿王莊」であったという福州南公園に立ち寄ったが、「南公園国際娛樂園」の看板が掲げられている公園には小さな湖を取り巻いて児童遊具が置かれているだけで、耿繼茂の別荘であった事をうかがわせるものは全くなかった。

⁽¹⁰⁾ 高陞橋の欄干に「劉公橋」とも書かれている。「高」、「劉」は共に架橋に関わった者であろうが詳細は不明である。

なお「福建省博物館」にも赴いたが、新館建設中で開館は2003年1月からとの事で見事は出来なかった。

◆三江水師旗営

閩江、烏龍江、琴江の三江が合流する長樂市琴江村には、雍正六年（1728）、福州將軍の管轄下に水師營が設置された。福州將軍が琴江に出向いた時の駐在処があったという場所には、真新しい「清文／fujiao jiyanggiyūn yabure falgari／福州將軍行轅」【写真2-3】という額が掲げられていた。琴江満族村民委員会が建てた「琴江公衙門簡介」には、水師營に所属した人々の兵舎や住居を「旗人街」⁽¹¹⁾として保存していると記されている。

旗人街の事を一番知っているという許輝氏の案内で街を一巡した。許輝氏は76歳、氏族名は不明であるが、遼東出身の鑲白旗満洲旗人の子孫であり、大高祖は左翼の佐領、高祖は嘉慶年間の挙人、曾祖父は従四品の防禦、祖父は六品で功牌をもらった、伯父は領催であったが父親は民国時代の人だったとの事である。

將軍の駐在処を基点に、高い城壁で囲まれているがそれほど広くない旗人街には「南門」、右翼旗人の子孫廟であるという「毓麟宮」、孝子を表彰した「孝友牌樓」、雍正年間から続く井戸、高い堀に囲まれ豪壮な構えの佐領クラスの官員住居などが修復され保存されている。このような旗人街に対し一般人の住んだ地域が「漢人街」であり、両者の間は高い堀で遮られ自由に往来する事は出来ないようになっている。案内してくれた皆さんは旗人街の出自であるためか、漢人街に対して差別意識があるようにも見えた。戦術用の地形を作り出すために各処で曲がりくねっている道路の両側に兵舎や住居が建ち並ぶ。立ち寄った一軒では、祖先が水師營旗人として活躍した証拠の品々すなわち遠メガネやホラ貝、そして光緒十年（1884）十一月に撥給の「長門等でフランス軍に対抗して功績を挙げた驍騎校許国昌に藍翎を賞する筈付」、あるいは光緒二十九年三月撥給の「福州將軍が世管佐領に対して与えた功牌」などを保管していて、それらを見せていただいた。

旗人街の清末の地名や居住者名などを復元した地図「旧日洋嶼營盤里（今之琴江村）十二条街及各戸姓氏一覽」が作製されていて、琴江村満族の人々の旗人街を歴史的遺産として保管しようとする熱意がうかがわれた。

村はずれの三江が望める台地に「中法戦争烈士記念墓地」があり、最近立てられた満漢文の記念碑⁽¹²⁾と砲台模型が置かれている。ここは祖国防衛教育を伴う観光地として開発中のようで、我々が訪ねた時にも観光バスが立ち寄っていた。

3 広州

筆者にとって、尚可喜が平南王府を置いた広州はかねてより訪れたい場所の一つであった。しかし近年出版の地誌類を見ても、広州は十三公行による対外貿易の拠点あるいは孫文の革命根拠地としての記述がほとんどであり尚氏の事跡に触れるものはないので、ここを訪れても尚氏史跡を探し当てる事は難しいと考えていた。先年、瀋陽の馬協弟氏から広州の満族は「満族聯誼会」を結成し、満族誌を出すなど様々な活動をしていると聞いたの

⁽¹¹⁾ 旗人の住む地域は旗人街と称し、西安や開封で八旗満洲を中心に駐防八旗の居住した地域を指す「満城」という呼称はないとの事であった。

⁽¹²⁾ 碑文は「皇清」と書き中心に「福州三江水師旗営：中法戦争陣亡烈士／戍辺殉職官兵暨眷属／塚」と記し、これに対応する満文が脇に付されているという形式であった。

で、あるいは満族聯誼会を通じて尚氏に関する情報を得られるのではないかとの期待を抱いて訪れた。たしかに満族聯誼会は活発な活動を行っていたが、満族とは直接的なかわりのない尚氏については、全く知らないというよりは関心がないようで何の情報も得られなかった。

広州城は新城と旧城に分かれていたが、順治七年（1650）に広州城に入った尚可喜と耿繼茂は旧城に駐屯し清朝の地方衙門は全て新城に設置された。旧城の中で壮麗壮大を競ったのは尚可喜の王府と耿繼茂の王府であり、順治十七年に耿繼茂が福建に移駐すると、耿王府は尚可喜の子供の尚之孝の邸宅となって旧城は全て尚藩の占拠するところとなった。三藩の乱の後に尚藩の撤藩が行われたので、尚藩の占めていた旧城が空きそこに新城に置かれていた諸衙門が移った。すなわち尚可喜王府は巡撫衙門に、尚之孝王府は將軍衙門に当てられたという。貿易・商業都市として変貌著しい広州市で、これらの史跡を探し出す事は出来なかった。

◆広州市満族聯誼会

広州の満族を集めた「広州市満族聯誼会」の代表である完顔氏の汪宗猷氏、副代表格で瓜尔佳氏の関向欣氏のお二人に広州の満族をめぐる話を聞き案内していただいた。聯誼会の置かれた部屋の入り口には、満漢文「guwang jeo hoton i manju uksura suduri šu wen be sibkire isan／広州市満族歴史文化研究会」という看板【写真 2-4】が掲げられると共に、「妙吉祥室」（横書き）の石造の扁額が埋め込まれていた。

聯誼会に参加する満族は、広州駐防の中の八旗満洲の子孫だけで、辛亥革命の時に漢族籍に入った八旗漢軍の子孫は加えていないという。この事について、第2回少数民族大会で「旗人の子孫を満族とするのが一般的であり、広州の満族を八旗満洲の子孫だけに限るのはおかしい」との批判があったとの事である。これ以外にも広州満族のほとんどの人の満族姓と八旗の旗色が明らかである事、現在でも満族戸籍調査と登記を続けている事、満族の生活困窮者の相互扶助を実施している事、清代の八旗満洲と八旗漢軍の住み分けが今でも残されている事、満族小学校を独自に運営している事、満族墓地を所有し運営している事など他地域の満族と相違する事例が多い。辛亥革命以後に広州満族が何故このようにまとまったのかは興味深い問題であるが、この事については汪氏から様々な聞き取りを行った劉氏や綿貫氏の報告にゆだねたい。本章では聯誼会の活動と広州満族の一端を示す聯誼会の出版物リスト、および聯誼会の置かれている場所すなわち「妙吉祥室」が尚可喜の将来した観音菩薩を祭った「万善宮」に由来する事について記しておく。

広州満族関係出版物一覧（刊行年順）

- 『広州満族文史資料選輯』第二輯・上（広州市満族聯誼会、1988年）
- 『広州満族文史資料選輯』第二輯・下（広州市満族聯誼会、1988年）
- 『広州満族簡史』（広東人民出版社、1990年）
- 『広東満族志』（広東人民出版社、1994年）
- 『越秀区満族志』（越秀区地方志弁公室、1994年）
- 『広東満族研究資料彙集』（広州市満族聯誼会、1995年）
- 『広州市満族小学建校五十周年記念専刊』（穗興印刷工藝廠、1996年）
- 『在改革開放中的広州満族』（広州市満族聯誼会、1997年）
- 『広東満族』（花城出版社、1998年）
- 『満族工作五十年』（広州市満族聯誼会、1999年）
- 『広州満族』1999年第4期（広州市満族聯誼会、2000年）

『南粵満族文集』（広州市満族聯誼会、2000年）

『広州満族』2001年第3期（広州市満族聯誼会、2001年）

『広州満族研究』2002年第1期（広州市満族歴史文化研究会、2002年）

『広州満族研究』2002年第2期（広州市満族歴史文化研究会、2002年）

『広州満族研究』2002年第3期（広州市満族歴史文化研究会、2002年）

◆重修観音古楼改建妙吉祥室記【写真 2-5】

聯誼会の入り口には「妙吉祥室」の扁額が、部屋の壁には、妙吉祥室の復興に協力した同人60人あまりの名前を刻した「改建妙吉祥室、創辦万善仏教講經堂同人題名碑」、妙吉祥室の由来を記した「重修観音古楼改建妙吉祥室記」、広州地方法院が民国二十一年（1932）にこの場所を万善禅院の所有であると認めた判決を記した「本室要據」という三つの碑文が埋め込まれている。石碑の主文である「重修観音古楼改建妙吉祥室記」には以下のように見える。

重修観音古楼改建妙吉祥室記／

竊維善惡之機、動於一念。善念倡、動機斯應之。若善機相応、則仏天護佑、機縁巧合、有不／期然而然者。本室原名萬善宮、所供／觀世音菩薩法像、乃有清尚藩入粵所載南來四像之一。建立斯宮、坐鎮南隅。二百年來、／瑞應昭著、莫能殫述。最靈顯者、同治甲戌火、不成災。民国乙卯魔、不為厲。蓋以此區士庶、／信仏最篤。… 辛亥以後、象教凌夷、四大叢林、鞠為茂草、獨此危楼／一角、巍然猶存。中經寺僧、奸生肘腋、偽造壳契、化公為私。幸而仏誘其衷、自書真相、據以／定讞、璧返珠還。同人等三載經營、以善相勸、不假援助、輪奐一新。易以今名妙吉祥者、預／祝仏教重興、吉祥光放也。…

中華民國二十四年歲次乙亥十二月仏臘月。澹庵・舒謙如恭撰。星垣傳祥聚敬書。／

碑文によれば、ここは尚可喜が広州を平定した時に将来した四組の観世音菩薩のうちの一つを祀った万善宮に由来する場所である。万善宮は靈驗あらたかな広州南面の寺廟として人々の信仰を集め、同治甲戌（十三）年（1874）あるいは民国乙卯（四）年（1915）年の災厄も免れ、辛亥革命以後の宗教を軽んじる風潮の中にも残っていた。しかし僧侶の勝手な振る舞いなどから廃れてしまったので、万善仏教講經堂の同人が寄り集まって妙吉祥室として復興したという。

すなわち「妙吉祥室」の扁額が掲げられたこの場所は、尚可喜の創建した万善宮であり妙吉祥室として再建され今に至っているのであるが、汪氏から万善宮と妙吉祥室に関連する事は全く聞く事は出来なかった。

◆広東省博物館

前庭に嘉慶から光緒年間にかけて製造された大砲が置いてある。館内の展示には広東の歴史部門もあるが、古代の粵南王、貿易港として栄えた広東、アヘン戦争についての展示が中心であり⁽¹³⁾、尚可喜の統治や三藩の乱に触れるものは全くない。

⁽¹³⁾ この中で広東陶磁の「広彩」が輸出用として発達した過程について広彩を用いながら具体的に解説しているが、これは広州ならではの展示であろう。

◆鎮海楼と広州博物館

旧城の北門に近い「粵秀山」一帯は越（粵）秀山公園となっている⁽¹⁴⁾。海が見下ろせる山頂には明の洪武七年（1374）創建の五階建て高さ十余丈あるという「鎮海楼」が聳え建っていて、建物は「広州博物館」に当てられている。鎮海楼は明末清初の戦乱で破壊され、順治七年（1650）に尚可喜の手で再建されたが⁽¹⁵⁾、三藩の乱でふたたび破壊され、康熙二十五年（1686）に巡撫李士禎が再建したという。清末になると山頂に「八旗火薬局」や「神安炮台」が置かれたが、ここに砲台があった事に由来とするものであろうか、清末の大砲を展示している。

また門前には広州に関係する唐代の「太原王府君墓誌銘」を始めとして清末に及ぶ歴代の石碑を保存した碑林があるが、尚氏をめぐる石碑は見当たらなかった。

博物館の展示は（1）宋代までの古代部分、（2）元を中心にした海のシルクロード、（3）広東十三行を軸に海外貿易を中心とする明清時代、（4）清末～近代の4部門に分かれている。（3）明清時代の部門に「平南王鉄鐘」が置かれていた。

◆平南王鉄鐘【写真 2-6】

この鐘には「鉄鐘、口径は 92 cm、重さ約 500 kg。順治初年に平南王尚可喜が铸造したものであり、元来小北門外の飛来庵にあった。鐘の銘文は、清軍が九ヶ月かかってようやく広州城を陥したという史実を反映している。」という説明がある。すなわち「平南王鉄鐘」は広州旧城に設置された七門の一つである小北門の外側にあった「飛来庵」にあったものであるとしている。そして広州城攻略の史実を記しているという銘文は以下のとおりである⁽¹⁶⁾。

鐘銘／

△△△今上龍飛之七年、／平南王奉／△△△△命恢粵、二月初六、師抵五羊城、北白雲山結營山阿。／凡九閱月、將士奮騰、兵馬無恙。其間鑄砲／製藥、隨手而応。陰有神助、是年十一月初二／恢省。追溯不忘、乃捐貲建造太平庵。内塑／△△△△仏像、爰勒之鐘鼎、以誌△△△△力於不朽。仍鐫以銘。／

銘曰、鳴鏜肅旅、以事南征。緣巖列帳、依山岫／分營。百拳彙應、乃克堅城。爰溯△△△△力、鑄／鐘銘用、以永播其芳聲。／

順治壬辰歲三月吉旦／

平南王建／廣州府督捕通判周憲章監造／

順治壬辰（九）年三月の銘文によれば、尚可喜は順治七年二月から広州城の北に連なる白雲山に陣を構え、広州城を九ヶ月にわたって包圍攻撃し、十一月に陥した⁽¹⁷⁾。この事を

⁽¹⁴⁾ 越秀山公園内には孫文の記念塔など多数の記念碑や史跡がある。明清関係では「明代城壁遺構」や永曆帝と帝位を争った紹武帝と彼に忠節を尽くした君臣墓である「南明紹武君臣冢」、永曆帝によって恩平王安侯に封じられ尚可喜によって滅ぼされた王興の「南明王興將軍暨妻妾合葬墓」などがある。

⁽¹⁵⁾ 鎮海楼のすぐそばに尚王府があったので、尚可喜は鎮海楼に登ることを禁じたとか、この一帯を「養鹿院」にしてここから王府に通じる道があったなどの言い伝えがある。

⁽¹⁶⁾ 広州博物館で入手した『広州文物志』（嶺南出版社、1990 年）では、「清順治平南王鉄鐘」として鐘銘本文を収録して紹介している。『同書』では「この鐘は 1982 年に太平庵で発見され博物館に移管された」とある。

⁽¹⁷⁾ 『羊城古抄』巻 4、沿革「平南靖南両王復粵東」の項には、包圍攻撃が十二月二日まで 10 ヶ月間続

記念して捐資して「太平庵」を建造し、庵内に仏像を安置すると共に梵鐘を鑄造したという。前引の「説明」では、この梵鐘は太平庵ではなく飛来庵にあったとしていて、梵鐘を置いていた場所が説明と銘文とでは相違する。

飛来庵について、『広州城坊志』（広東人民出版社復刻本、1992年）の「薬師庵」の項には、小北門直街にあった薬師庵は、「国初平藩之妹在此焚修、故俗称王姑庵。…按王姑、據『南海百咏続編』為是平南王尚可喜女。法名自悟⁽¹⁸⁾。…薬師庵。在小北門内。後為飛来大士庵…」とあって、小北門内にあった薬師庵は尚可喜の娘（妹？）が修行した庵という事から俗称は「王姑庵」であり、後に「飛来大士庵」と呼ばれたとの記述がある。博物館の説明に梵鐘のあった場所を飛来庵としているのは、この梵鐘を尚可喜が娘の修行する王姑庵＝飛来庵に寄進したものと推測した事によるのかもしれない。しかし銘文による以上、鑄造された当時は太平庵に置かれていたとしなければならない。すなわち太平庵と飛来庵の関係が問題となるが、この点は定かでない。

◆大仏寺

『広州市文物志』に尚可喜ゆかりの寺として「大仏寺」の項があったので、この記述を頼りに大仏寺を探し訪れた。創建当時に比べると規模は縮小されたようではあるが、朝早くから参詣客でにぎわっていた。

山門の扁額には「大仏古寺」とあり、右側の柱に「大道有岸」、左の柱には「仏法無道」と大書されている。「大道有岸」の右肩に小さな字で「清康熙平南王尚可喜謀士金澄撰聯」とあって、対聯が尚可喜配下の金澄の撰文である事を記している【写真 2-7】。

山門をくぐり堂内に入ると本堂の右に大きな石碑が建っている。石碑は石質と石色の加減で碑文はきわめて読みとりづらく、題記が「鼎建／大仏／寺記」（2字ずつ横書き）であり、本文は「大仏寺故龍巖寺…」で始まり、末尾が「康熙三年歲次甲辰孟吉旦／平南王尚可喜薰沐拝題」であることは読み取れたが、その他の部分はカメラでもはっきりと写す事が出来ず、復元する事はまだ出来ていない。なお『広州市文物志』に大仏寺の紹介があり石碑にも言及しているが、碑文は掲載されていない。『同書』には、大仏寺は明代の龍蔵寺であり、後に巡按公署となっていた事、順治六年（1649）に焼失し⁽¹⁹⁾、康熙二年（1663）春に尚可喜などが捐資して北京の官廟にならって大仏寺を建造した事、その後次第に拡張され、頭門、鐘樓、鼓楼、天王殿、和大殿、廊廡、方丈、香積厨などが建ち並んだ規模壮大な寺廟となった事、雍正十一年（1733）に宣諭亭が建てられた事などが記されている。

広州では尚可喜ゆかりの遺跡、遺物として「妙吉祥室記」、「平南王鉄鐘」、「大仏寺」の3件を見つける事ができたが、観世音菩薩を将来し寺廟を建て梵鐘を寄進するなどすべてが仏教信仰に関わるものである。尚可喜が寺廟建立に勤めたのは、70万人が屠られたとの記録⁽²⁰⁾もある広州城攻撃の死者を供養するためであったのかもしれない。

いたとあり、銘文より1ヶ月長い。また広州城攻撃では70万人が屠られ、尚可喜軍が入城した時には城内が無人であったとその惨状が記されている。

(18) 尚可喜には32人の娘がいて、その多くが藩下の参領や佐領あるいは総兵や遊撃、さらには広州同知などに嫁している。その中の一人が出家したのであろうか。

(19) 順治六年の焼失は尚可喜の広州城攻撃に伴う戦乱であろう。

(20) 注(17)参照。

4 桂林

桂林は孔有徳の拠点であり定南王府の置かれた場所である。孔藩は孔有徳没後に線国安を経て娘の孔四貞とその女婿の孫延齡によって継承された点で、直系の子供に継承された三藩とは相違するし、孔有徳と線国安あるいは孔四貞・孫延齡との関係など孔藩の支配機構をめぐり検討すべき課題は多い。観光名所として名高い今の桂林に、孔有徳をめぐる史跡が残されているのか不明のままに赴いた。

◆靖江王城・孔有徳王府

洪武帝の甥の子、朱守謙は靖江王に封じられて桂林に王城を造営した。孔有徳は桂林を攻撃して靖江王を捕らえ靖江王城を定南王府とした。周囲 1.5 km ほどの王城の「三元及第」の扁額が掲げられた東門、桂林市の繁華街に通じる南門、新しく築かれた北門（ここで城壁に登る事が出来た）などをめぐった。王城内部の大部分は広西師範大学のキャンパスとなっていて、キャンパスの中に王府宮殿の基壇や井戸などが残されている。大学に「王府博物館」と称する建物もあったが、中には何の展示もなかった。王府の北のはずれには岩壁や洞窟に彫られた石刻で名高い「独秀峰」があり、ここには旗人の碑刻もある。

タクシーの運転手が靖江王城以外にも城壁が残っていると案内してくれたのが、桂林城の外城壁とそれに付随する修復中の「東鎮門」であった。ここにある文物管理所を訪れ、孔有徳の遺跡の有無を聞いたが、全く残っていないとの返事であった。「桂林博物館」の歴史部門も靖江王の事のみで孔有徳には言及していない。

◆福胤庵石碑【写真 2-8】

桂林を訪れた人々は様々な石刻を残しているが、その一部分が「桂海碑林博物館」に集められている。碑林の中に孔有徳に関わる「福胤庵石碑」を見いだした。始めに碑文を紹介する。

{重建／福胤／庵碑／文記} (2 字ずつ横書き)

△△皇上御極之七年、薄海内外、罔不向風、粵西片土、尚梗徳教。／△△帝白、咨爾其董厥師、剪桐錫土、整或戢矛以往、越明年振旅敷功、告／△△廟飲饌。凡彼粵土、深山窮谷、咸厥角稽首。沐浴／△△皇化。而祝／△△聖之？。鞠⁽²¹⁾為茂草、則粵土民、黎久不邇聲教、沐膏澤。寢處於／△王仁洪蕩之中、習焉不察之失也爰。鳩土庀材、建寶刹於普明寺之東、規制宏聳、宮宇壯麗、中廊三殿、東西各築甬道。仏像莊嚴、覆以重閣、永為祝／聖焚修勝地。工之興也、窮困小民、皆得奔走衣食其中、以為度日之計。殿之落也、睹像知敬、過廟起畏。然後蠢爾粵黎、始知君上之尊、仏教之嚴。夙興夜寐、蚤作夜／思、勤其筋力、務其本業、不敢為頑惰不率之民。兵戈之餘、盪以道德。刑威之後、肅以禮教。則寶刹之建、有功斯土也不淺。昔蘇軾築湖堤活杭？饑民數百／萬。李允則建浮屠、鞏戰守之計於幾百年。古人用心？？、寄意精密、往往寓諸土木修築之間者、未嘗不有深恩妙用存焉。豈苟也哉。殿宇既落、費金錢／萬緡。始於順治八年之春、成於順治八年之？／△△皇恩以淳、歲用以和、五穀以登、百蠻以戢、武功終。是為文治之始。因紀歲月、勒？榻珉、凡偕來粵西將士、荷櫛風沐雨之勞者、例得次其姓氏爵位、並書于後？。／

(21) 鞠は鞠の誤りか？

		成功伍錢	萬進学壹兩
		苑有昇壹兩	周志元貳兩
		于光魯壹兩	王成明伍錢
	時彦亨壹兩	徐士恩伍錢	劉得時壹兩
	徐彦賞壹兩	？三才伍兩	？景雲伍錢
	李？？貳兩	王世？伍兩	？守道壹兩貳錢
	白雲龍參兩	張漢？拾兩	？登雲壹兩貳錢
	王允成拾兩	沈邦清拾兩	李成功貳兩
	胡璉貳兩	何九成拾兩	守凌壹兩
	副總府全節伍兩	蔡 斌拾兩	劉登貴壹兩
	功德主李一先貳拾兩	李光前壹兩	蕭有功壹兩捌分
	左翼鎮都督府線国安伍兩	洪文昇伍兩	何光玉壹兩
	巡撫院部 王一品伍兩	参將張大受貳兩捌分	信士馬守權參兩陸錢
定南王孔			
	翼鎮都督府曹得先伍兩	信官張志通參錢	王國明壹兩
	翼鎮都督府馬蛟麟伍兩	築顯明參錢	？ 登壹兩
	功德主董英貳拾兩	王朝惠貳兩	王加相壹兩
	副總府曹三傑壹兩	五得玉參錢	石有功伍錢
	程布孔壹兩	陳世豹參錢	管進功壹兩
	岳其鳳伍兩	劉 舉貳兩	？ 雄壹兩貳錢
	鄭元勳拾兩	李 鐸貳兩	張應？壹兩
嘉慶五年孟春月吉日立	張士挙壹兩	李踊龍貳兩	任崇和壹兩
	盖遇時壹兩	？祭孟壹兩	沉奇名壹兩
		？應運壹兩	張？翔壹兩
		武 榮壹兩	梁應龍壹兩
重建信士 {張殿楊／靳連？}		王白有壹兩	？從政壹兩伍錢
		王進？參兩	鄧？龍伍錢（以下人名略）

大清順治捌年參月 吉日立 書院黃惟鍛薰沐項首拝撰 代書黃文段 塑匠夏文鳳
住持僧如亮 石匠李積明
僧寂全

碑文には、孔有徳が順治七、八年に広西の平定が完了した事を記念して、普明寺の東に大規模な庵寺である「福胤庵」を建てたことを記している。この石碑の題記は「重建福胤庵碑文記」と「重建」の語が見え、加えて順治八年（1651）三月建立の石碑中に「嘉慶五年孟春月吉日立」と刻され、さらに「重建信士張殿楊」と重建者の名前も記されている。すなわちこの石碑は順治八年に建立された後の嘉慶五年（1800）に張殿楊等の手で重建されたことは明らかである。しかし碑文中に「福胤庵」あるいは「福胤石碑」の重建については全く記されていない。石碑の重建に触れていない事からすると、福胤庵の「胤」字が元来は「胤」と書かれていて、雍正帝の名前胤禛を避けるために「胤」を「胤」に改めた重建であり、重建とは言っても碑文はそのままにして題記の部分だけを書き換えたあるいは書き加えたものと推定される。

本文に続いて「定南王孔」⁽²²⁾と大書した後ろに、有徳と共に広西の平定戦争に従事したいわば有徳腹心の将士の名前を官職名と捐資金額と共に記している。この部分の一部を改行せずに碑文に書かれているままの形式で示した。すなわち孔有徳を中心に、右側に巡撫院部の王一品を筆頭に 8 段に分けて 100 人が、左側には翼鎮都督府の曹得先を筆頭に 7 段に分けて 82 人が、両側を合計すると 182 人の名前が見える。王一品に続く線国安⁽²³⁾や馬蛟麟などは孔藩の重鎮として活躍した人々であり、182 人の氏名と官職名は順治八年当時の孔藩の構成を検討する格好の史料である。

◆広西会城定粵禅寺新造大鐘【写真 2-9】

伏波公園の中に「定粵禅寺大鐘」があった。鐘を容れた亭の額には「公主鐘亭」とあり、「大鉄鐘。康熙八年鑄造。重さ 1,262 kg、高さ 2.5m、口径 1.7m」と記した説明がある。この大きな鐘を一周して、以下のような銘文と名前が刻されている。

「皇圖鞏固」／

△広西会城定粵禅寺新造大鐘銘／

本寺剏立始自／△△先藩主定南武壯王。提一旅之師、悉平楚粵遂尔建利以紀？。／名曰定粵禅林。方將殿宇落成、而△先王之晏駕矣。迄今／十数年来、風雨摧殘、能無凋朽之嘆。昨自丁未秋、荷／△郡主／△將軍奉／△△命南鎮、續△先王之餘績、擴而盛其事、進則金壁重輝煥然矣。／厝法門殿、以閣雖周、而鐘鼓未備、亦不足以壯禅林之大觀／也。是臣僧等不惜口業進募、闔旗寔官居士暨／△當道有力大人共捐錙銖、鑄造洪鐘一尺数、重五千四十八觔、／口広五尺自高七尺五寸。然器？雖微、而聲韻交逮、可以／利幽楽之辟述、而為汰界最勝之功德也。謹將／△芳名題左、永示萬古之不朽云。

銘曰

△昔先王、威武揚、紀盛績、開仏場、祝國祚。／壽無疆、今藩嗣、奕芬芳、任其模、華其堂／造日器、扣之彰、徹普漢、吼冥陽、利之連／福且康、檀護題、緇俗昌、天地久、日月長／銘斯器、永無？／

平南王尚可喜／平藩都統尚之孝／平藩副都統聶應挙／平藩下阿里哈超参領周朝英／信官周得龍、周得用／平藩下佐領温守福、張蓬吉、温時茂／平藩下信官秦調名／

「帝軌遐？」／

本旗功德主金名／和碩格格孔四貞／掌管定南王旗鎮守広西等處將軍孫延齡／定南王旗伯線国安／広西駐防都統王永年／管轄定南王下官兵副都統孟一茂／管轄定南王下官兵副都統戴良臣／定南王旗京奇尼哈番金成忠／定南王旗阿思哈々番管参領事何建俊／定南王旗總理堂務事阿思哈々番胡同春／定南王旗阿思哈々番李一第（他 4 名）／定南王旗阿思哈々番管参領事洪恩元／定南王旗管粮餉事阿達哈々番張明德（他 2 名）／定南王旗阿達哈々番興原明（他 5 名）／定南王旗拝他喇布喇哈番管参領事徐文登／定南王旗拝他喇布喇哈番張于庭／定南王旗佐領丁永耀（他 18 名）／定南王旗佐領加一級嚴朝綱／定南王旗拖沙喇哈々番孟成忠（他 1 名）／定南王旗分得撥什庫周興國（他 16 名）／定南王旗一等蝦縱成德（他 4 名）／定南王旗信官施茂魁（他 16 名）

鎮守広西將軍標中營遊撃管中軍事劉彦明／鎮守広西將軍標左營遊撃陳全／鎮守広西將軍標中營都司僉書管中軍守備事陸觀象／鎮守広西將軍標左營都司僉書管中軍守備事常勝／鎮守広西將軍標右營中軍守備武斌／鎮守広西將軍標中左右三營千總李有功（他 5

⁽²²⁾ 「定南王孔」の部分を含んで、左右に双龍の模様を彫って飾っている。

⁽²³⁾ 線国安の名前は、碑林の中にある石窟に彫られた仏像のレリーフの題箋にも刻されていた。

名)／鎮守広西將軍標中左右三營把總滕雲龍(他6名)／
 広東仏山信士陳學儒(他10名)／
 定南王旗僧綱司金信里、戎海澄／
 「法輪常父」／
 定南王善信王國寧(他40名)／定南王旗信女李門朱氏妙資(他10名)／定南王旗定
 粵禪寺住持比丘信辯／
 本寺耆舊比丘性宦信慧、信安、信広、啓機／本寺僧衆玄定(他58名)／李祖成／
 皇清康熙八年己酉大歲孟冬月吉旦、広東仏山仏弟子{黃信心／鑄／何起？／造？明？／}

篆刻体の「皇圖鞏固」に続いて鐘を鑄造した由来が記されている。すなわち孔有徳は湖南から広東を平定した記念に「定粵禪寺」を創建し、落成の時には有徳自らが足を運んだ。孔有徳没後の丁未(康熙六年)秋に郡主孔四貞と將軍孫延齡は広西に赴任する事を命じられ桂林に赴いた⁽²⁴⁾。そして定粵禪寺を改修したが、寺には鐘と鼓がなかったので、孔藩の配下が捐資してこの梵鐘を鑄造したとある。以上の本文に続いて平南王尚可喜以下の名前が刻されている。続いて篆刻体の「帝軌遐？」の後ろには和碩格格孔四貞以下の孔藩の主要な人々の名前が、さらに篆刻体の「法輪常父」の後ろには定南王善信王國寧をはじめとする信者や僧侶の名前が記されている。

鐘に刻された捐資者の官職名と名前は「福胤庵石碑」と同様に、孔有徳あるいは孔四貞・孫延齡に率いられた孔藩を構成した主要な人々の名簿である。この捐資者が三つのグループに分かれている事に注目すべきであろう。すなわち第一のグループは平南王尚可喜を筆頭に都統尚之孝などの名前が刻された尚藩グループ、第二のグループは孔四貞と孫延齡などの名前が見える孔藩グループ、第三のグループは広西將軍配下の中営遊撃劉彦明などの広西將軍グループである。

尚可喜に率いられた尚藩グループが筆頭に書かれている事は、孔有徳没後に直系の承襲が行われなかった孔藩が尚可喜の監督下に置かれていたことを示していよう。第二グループは孔藩を構成していた主要人物のリストであるが、孔四貞の肩書きは「和碩格格」であり、女婿の孫延齡の肩書きは「掌管定南王旗・鎮守広西等處將軍」である。すなわち孫延齡は孔四貞に代わって「定南王旗」と称された孔藩を掌握すると共に、清朝から任じられた「鎮守広西等將軍」の地位にあった事が見いだされる。そして孫延齡の名前が広西將軍配下の諸將を記した第三グループではなく第二グループに記されている事は、延齡が定南王旗の統率者として広西將軍の軍事力を統治していた事を示していよう。

尚可喜以下に記された都統尚之孝以下の9人の名前と官職名および孔四貞・孫延齡以下の総計66名に及ぶ名前と官職名は、三藩の乱をおこす直前の尚藩と孔藩の構成を知る重要な手がかりとなる。また、ここに記された名前や官職を「福胤庵石碑」に記されたそれと照合する事で、孔有徳時代から孔四貞・孫延齡時代への変遷を明らかにする事が出来よう。

第2グループに見える官職名は都統、副都統、参領、佐領など八旗と全く同じ官職名を使用し⁽²⁵⁾、くわえて「阿思哈々番」などの品級や「一等蝦」⁽²⁶⁾など皇族の王府と同じ官職名を用いていた事が見出せる。八旗や王府と同じ官職名や品級名を使用していた事から、孔藩は八旗と同じ組織を有した「定南王旗」と称されるにふさわしい「旗制」組織であり、

(24) 線国安に代わって孫延齡を広西將軍に任じ桂林駐屯を発令したのは康熙五年五月であり(『聖祖実録』巻19)、この時に孔四貞も桂林に赴いている。

(25) ここに記されている参領と佐領を復元する事で、不明であった孔藩のニルの数が明らかとなろう。

(26) 「蝦」は「蝦」の事で「hiya」の漢語表記であり、「一等蝦」とは「一等侍衛」の事である。

侍衛などを設置した皇族と同様の王府を構成していた事がうかがわれる。このような王府を持つ旗王的な体制に加えて、さらに広西將軍として左營、右營、中營に分かれた綠營をも支配していたものであり、定南王は諸王と同様あるいは諸王以上の軍事力を備えた藩王であったと見なし得よう。

おわりに

短時日に走り回った福州、広州、桂林には、三藩の乱、辛亥革命、文化大革命などを経ながらも今に伝えられた、耿藩、尚藩、孔藩の一端をうかがい得る資料が残されている事を紹介してきた。今後、これらの碑文や銘文の正確な復元と解説を行い、檔案類と照合しながら『実録』や『平定三逆方略』の記述を再検討し四藩の実態を明らかにしたいと考えている。

最後に現地の調査に当たっては劉氏と綿貫氏の両氏の助力を、不鮮明な写真から碑刻を復元する事や碑文や銘文の解説には、2003 年まで特別研究員として東北学院大学で筆者と共同研究を行っていた中国人民大学清史研究所助教授の張永江氏、2003 年 4 月から東北学院大学客員教授として赴任された湖北省社会科学院歴史研究所所長夏日新氏にご教示を得た事を記し感謝の意を表する次第である。

(原載：『満族史研究』第 2 号、2003 年)



写真 2-1 八旗会馆

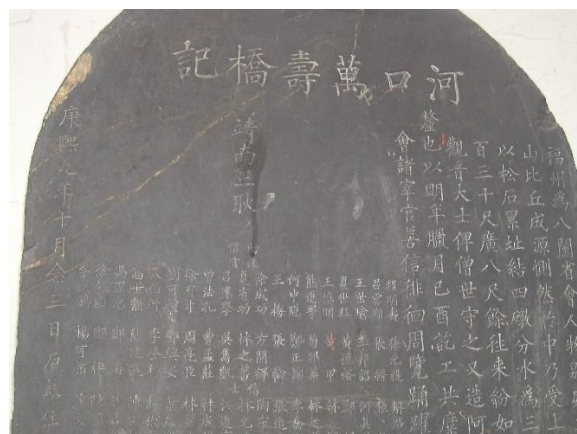


写真 2-2 河口萬壽橋記石碑



写真 2-3 福州將軍行轅の門額



写真 2-4 廣州市滿族歷史文化研究會の看板



写真 2-5 重修觀音古樓改建妙吉祥室記



写真 2-6 平南王鉄鐘



写真 2-7 広州大仏寺対聯



写真 2-8 福胤庵石碑



写真 2-9 定粵禪寺大鐘

第3章

北京からモンゴル高原への道 —鶏鳴山駅城・宣化城・張家口を訪ねて—

はじめに

2005年8月25日から29日の間、北京西直門外の中苑賓館を会場にして、「故宮博物院成立80周年国際清史学術討論会」が開催された。この討論会は故宮博物院成立80周年を記念すると共に、現在10年計画の国家プロジェクトとして進められている清史編纂事業の一環でもあり、筆者も討論会に招へいされ『平定三逆方略』與『平定三逆方略』稿本—圍繞三藩之乱的史料⁽¹⁾と題して報告を行った。討論会の一環として、折から修復の完了した「武英殿」を会場に「清宮典籍文化展」が開催されたが、この展覧会は題名通りに、清宮すなわち清朝皇帝の宮殿に置かれていた書籍＝活字文化をめぐる展示であった。経部は黄色、史部は赤色、子部は紫色、集部は緑色と四部ごとに色分けされた鮮やかな表紙で装釘された『四庫全書』、大紅綾本『大清実録』、黄綾本『大清高皇帝聖訓』、18世紀清朝の全領域を示す巨大な地図である『皇輿全図』を印刷するための銅板、極彩色の『萬寿盛典図』などなどと共に、筆者が討論会の報告で取り上げた漢文本『平定三逆方略』も展示されていた。

国家が支援して歴史書の編纂事業を実施することには中華世界の歴史意識がうかがえて興味深いものがあり、稀覯展といって良いであろう「清宮典籍文化展」（この展覧会は国際清史学術討論会の参加者に公開されたのみで、それ以後は閉ざされているようである）も紹介すべき事が多いが、本章では言及しない。筆者は討論会の終了後に、劉小萌氏⁽²⁾と二人で、北京を基点に河北省北部から内モンゴル東部に所在する清朝を中心とする史跡、喇嘛廟、王府などをたどる旅をしたので、ここではこの時行った旅の一部、すなわち明清時代の首都であった北京からモンゴル高原へ到る街道に所在する鶏鳴山駅城、宣化城、張家口の史跡の現況を報じたい⁽³⁾。

同行者である劉氏とは2004年9月に旅順沖にある広鹿島や遼寧省海城市で尚可喜一族の史跡を訪れ、2005年3月には湖北省荊州市や四川省成都市で清代に満洲人が駐屯していた「満城」をたずね、成都から足を伸ばして四川省の西に位置する海拔5,000m余りの巴朗峠を越えて大渡河の流域となる小金川、大金川へ赴き、乾隆帝の満・蒙・蔵・漢文と4種類の言語で記された「大金川平定記念碑」を調査した。これまで何度も調査旅行を行っている二人だけの旅であること、現地情報が充分には得られなかったことなどから、今回もおおよその予定をたてるだけで後は現地に対応することとした。たどった経路は、北京を

(1) 本論文については『平定三逆方略』の編纂と『平定三逆方略』稿本—三藩の乱をめぐる史料—（『アジア流域文化論研究』1、東北学院大学オープン・リサーチ・センター、2005年3月）を参照されたい。

(2) 2004年度東北学院大学大学院客員教授兼オープン・リサーチ・センター研究員として日本に1年間滞在された。

(3) 本章の基になったのは劉氏が行った現地の聞き取り記録と劉氏と細谷のそれぞれの記録であり、劉氏から提供された記録を合わせて細谷の責任でまとめたものである。

出発して北上し、八達嶺を經由して河北省の鶏鳴駅村、宣化城を経て張家口へ、ここから張北高原を經由して内モンゴルの多倫、正藍旗、錫林浩特などを訪れ、錫林浩特から西烏珠穆沁旗を往復した後に、東烏珠穆沁旗を経て巴林左旗と巴林右旗を經由して赤峰まで到達するという長い行程である。以上の行程を短時間でたどるためには車を用いる以外の方法はない。近年になってこれまでの砂利道がアスファルト道路に造り直されるなど交通路は急速に整備されたとはいえ、各地点が何百kmも離れていること、現地で雇えるタクシーなどは北京でお払い箱になってしまった車を修理して再利用しているのがほとんどであることなど、交通が不便な地帯の旅はそれほど簡単ではない。荷物をコンパクトにまとめて出発したのは8月29日の早朝であった。

1 北京から鶏鳴山駅へ

今日一日で鶏鳴山駅を探訪し、宣化古城を訪れた後に張家口まで赴こうという欲張った行程である。北京の環状道路は朝のラッシュがものすごいので、特に月曜日のそれが始まる前に旧市内を離れ八達嶺へ向かう高速道路に入ってしまう必要があると、午前7時には中苑賓館を離れた。幸いにして心配した渋滞に巻き込まれることなく高速道路に乗り入れると、まもなく今日の目的地である張家口まで189.3kmとの道路標識があり、案外近いと感じる。内長城の観光地である八達嶺を過ぎると懷来県に入り、車窓から土木鎮の地名が遠望できた。土木鎮は正統十四年(1449)に明朝皇帝の英宗がエセン汗の支配下にあったオイラット軍と戦って敗れ捕虜となった「土木の変」の戦跡地である。ただ当時の土木堡があった場所は、今は土木鎮の地名が残るのみで史跡などは全くないとのことである。

高速道路を懷来で降り京張公路(北京張家口の国道)へ入るが、ここから南東に向かえば北京の水壩となっている官庁ダムがあり、北西へ向かえばこの公路沿いに鶏鳴駅村がある。目指す鶏鳴山駅城⁽⁴⁾には、午前9時少し前に到着した。鶏鳴駅村は予想に反して高く長く続く城壁に囲まれている。京張公路が走る北側に面した城壁には入り口となる城門がないので、城壁沿いにつけられた土埃の道を西側に回り込むと西城門があった。城門やその上に建っている楼閣、崩れかけた城壁などを見ていると、我々の車を目敏く見つけ追いかけて来た人がいて「私は鶏鳴山駅城のガイドである」と自己紹介する。名刺には「鶏鳴山古駅站旅游服務處馬雲經理」とあり、馬雲さんは個人経営のガイド、案内料金は20元と安価であり、鶏鳴山駅のガイドブックもなく勝手の分からない我々はこれ幸いと馬雲さんにガイドをお願いした。以下、馬雲さんの説明と馬雲さんが説明に使用していた『曠世奇迹：鶏鳴駅』⁽⁵⁾に依拠して、鶏鳴山駅城の現況を記すこととする。

(4) 鶏鳴山駅の所在は河北省懷来県鶏鳴駅郷鶏鳴駅村である。現在は懷来県の所属であるが、明清時代は東に隣接する宣化府の管轄下にあった。なお鶏鳴駅の呼称は鶏鳴駅と鶏鳴山駅の二通りあるが、本章では史跡としての駅を指す場合は西城門の扁額に「鶏鳴山駅」とあることに基づいて、鶏鳴山駅と表記し、現在の地名として用いるときは鶏鳴駅と表記した。

(5) 安俊杰主編『曠世奇迹：鶏鳴駅』(国際炎黄出版社、2003年)は、2002年9月に鶏鳴駅村を会場に張家口市政治協商会議主催で「中国・鶏鳴駅城散文筆会」を開催した時の出版物である。

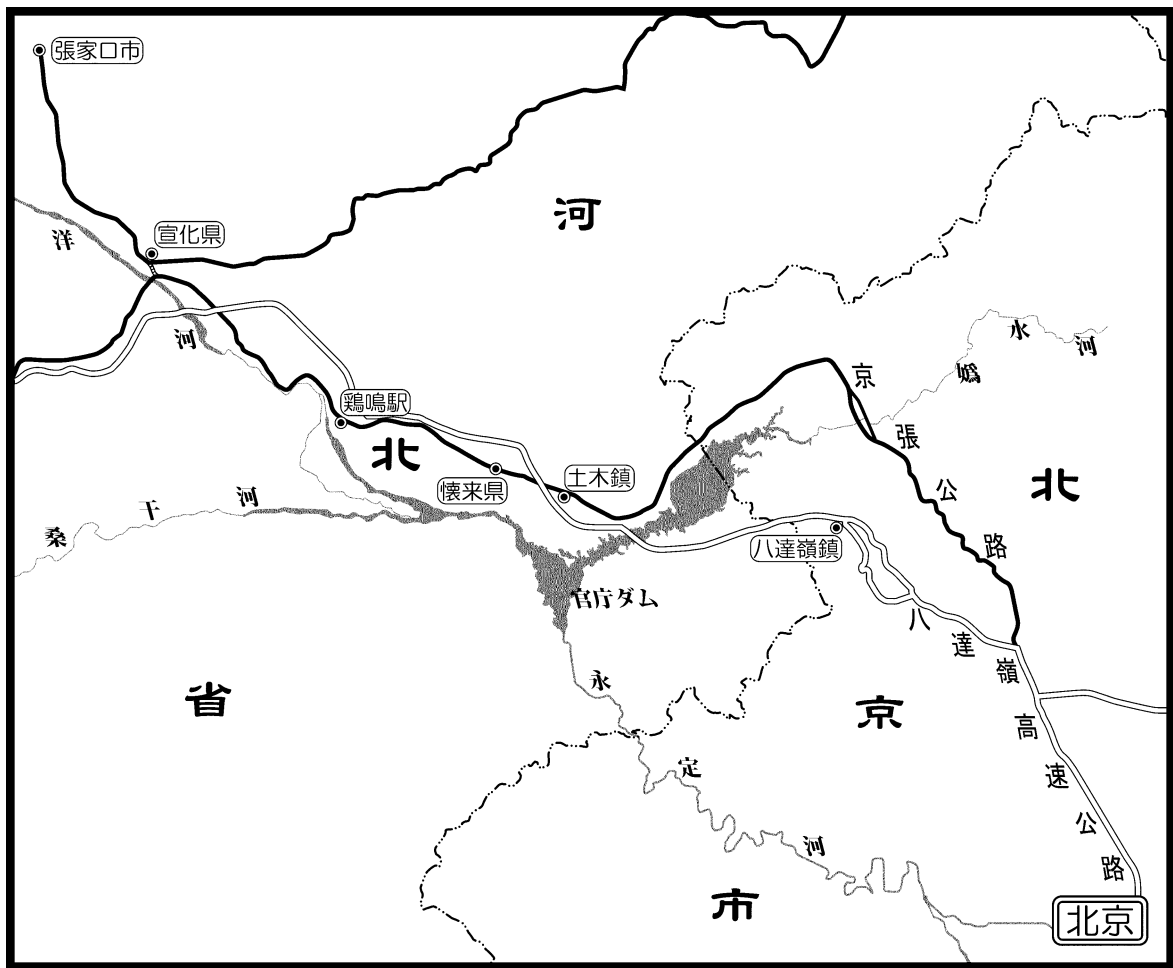


図 3-1 北京－張家口

◆鷄鳴山

この駅が「鷄鳴」駅と名付けられたのは、ここから北西に 1 km ほど離れたところにある独立峰で海拔 1,129m の鷄鳴山の山名からきたものである【写真 3-1】。そしてこの岩山が鷄鳴山と呼ばれるようになった由来は、唐朝の太宗が北征する途中で山麓に宿泊したところ夜中に山の頂で鶏の鳴き声が聞こえたので、この山に鷄鳴山の名前を賜与したことに始まるという。以後、鷄鳴山は名山の地位を得たようで、北魏の孝文帝が建てた道観「碧霞元君殿」、遼朝の聖宗が建てた「永寧寺」、清朝でも康熙帝が登って途中で休んだ「臥龍石」など数多くの旧跡があるが、これらの史跡、旧跡は文化大革命の最中にその多くが破壊されてしまったとのことである。二人共々山歩きを趣味にしているので、山頂まで足を運びたかったが、駅のある場所と山頂の標高差はほぼ 600m、往復すれば 4 時間は必要であり諦めざるを得なかった。

◆鷄鳴山駅

鷄鳴山駅は歴代王朝から今に至るまでの中国の首都北京と西北方にひろがる草原地帯を結ぶ街道の中心に位置している。西北方面から南下して河北の地を支配したモンゴル族の元朝は大都（北京）と上都（多倫諾爾）をつなぐここに「站赤」と「急遞鋪」を設置、それに続く明朝は永楽十八年（1420）に万全都指揮使司の管轄下に鷄鳴駅を設立、鷄鳴山

駅は宣府管轄下の重要な駅として機能した。清朝でも明朝の駅の機能を受け継ぎ、康熙年間には駅の監督官である駅丞の下に駅兵 250 人、駅夫 45 人、駅馬 82 匹が常駐し、1 年間に 3,000 両をこえる餉銀が費やされていたという。北から南を見るか南から北を見るかの視点の相違はあるものの、通信手段を人力馬匹に頼る時代では、交通の要衝に置かれた鶏鳴山駅の軍事的な重要度も高いものがあり、はじめは兵部の管轄下に置かれていたが、やがて康熙朝中期以後になると民間駅としても利用され、以後は軍民が併用する駅として栄えたようである。しかし電信電報など近代的な通信手段が発達するにつれて駅の機能は次第に低下し、光緒二十二年（1896）に清朝政府は郵政制度を発足させて駅を郵政局に切り替え、1913 年に中華民国政府が鶏鳴山駅を廃止して以後、鶏鳴山駅は歴史の波の中に埋没して今に至っている。なお、鶏鳴山駅城は 1982 年に河北省文物重点保護単位に、2001 年には全国文物重点保護単位に指定されている。

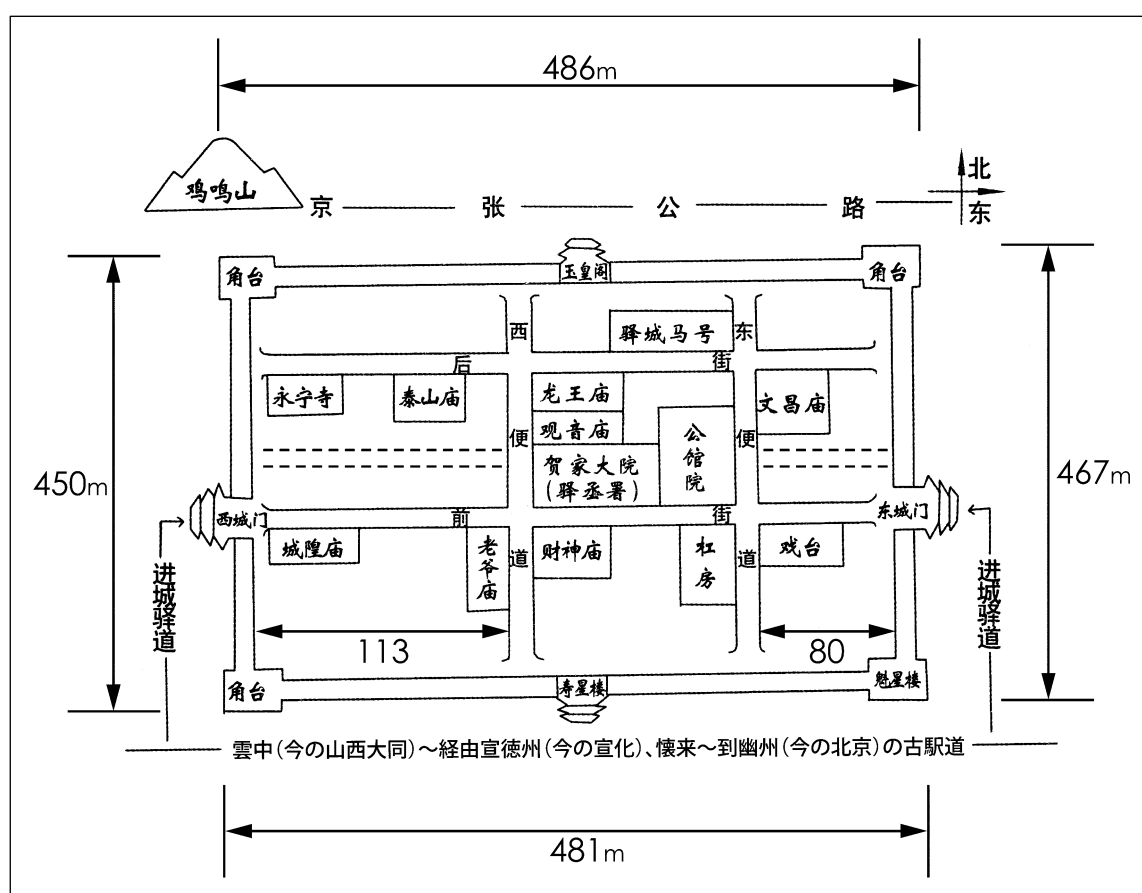


図 3-2 鶏鳴山駅図

◆城壁と城門

ここを訪れる前は、「駅」という名称から鶏鳴山駅も駅館などの施設設備が残っている程度でと考えていた筆者は、村全体を巨大な城壁で囲んで城郭を形成する鶏鳴山駅城の大きさに圧倒された。駅城を囲む城壁は明朝の成化八年（1472）に土壁が築かれ、隆慶四年（1570）に至って土壁は磚築（土壁を煉瓦で覆う）に改修されたという。城壁は北側と南側が 480m 余り、東側と西側が 450m 余りと若干南北が長い長方形であり、城壁の全長は 1,890m 余り、その厚さは底部が 8～11m で上部は 3～5m、高さは 11m 余りある。さらに城壁には 4

つの「角台」(物見櫓)と26個の「馬面」(張り出し)が設けられ、城壁上部には外側に向かって雉堞(姫垣)をめぐらし、3.5m間隔で射撃と排水のための「望孔」が設けられ、城外には各地への連絡に用いる「煙墩」烽火台(連絡用ののろし台)が設置されていて、まさに軍事施設としての城壁城郭といって良い造りである。

城門は東城壁と西城壁の南寄りにそれぞれ一門ずつ設置されていて、西城門【写真3-2】には「鶏鳴山駅」、東城門には「氣沖斗牛」の門額が掲げられている。城門のない北城壁のほぼ中央の内側には玉皇閣が、南城壁の内側に壽星楼が建っていたが、今は共に失われてしまっている。城門の上には二階建ての樓閣が建っていて、その下の城門洞(城門の下の通路)内部は石畳が敷き詰められ、門扉を閉めたときに使用する門孔なども残っていた【写真3-3】。我々は西城門を見ただけであるが、門額はどうか後には磚をはめ込んで作り直したようであり【写真3-4】、城門の上の樓閣はここ鶏鳴山駅を映画の撮影舞台にした時⁽⁶⁾に修復したものであり、歴史的な復元ではないらしい。城壁全体は京張公路に面している北側の城壁は磚が積まれたままに残っているものの、旧街道沿いの南側の城壁にかけては磚が剥げ落ち土壁がむき出しとなっていた【写真3-5】。西城門付近の馬道⁽⁷⁾(城壁の上に登る道)を利用して城壁の上に登ってみると【写真3-6、3-7、3-8】、最も賑やかだったという東西門大街の彼方には東城門が望まれ【写真3-9】、眼下には密集して建ち並ぶ古い民家が見えた【写真3-10】。

◆城内の道路と建築物

駅城であるから街道は城内を通っていくと考えられようが、実は街道は南城壁の外側を東西に走っていて、街道に面した南城壁には城門が設けられていない。すなわち街道を往来する人や車や馬は城内を経由せずに行き来できたので、城内の道路が渋滞することがなかったとのことである。城郭内部の道路は東西に走る幅7~9mの前街(東西門大街)と後街(三道街)、その間をもう一本の道路である二道街の3本の道路が東西に走り、南北には東便道(中街)と西便道(西街)の2本が走っていて、これら東西南北に走る5本の道路で大小さまざまな12の区画が形成されている⁽⁸⁾。これらの道路に面して商店や駅特有の施設、さらには多数の寺廟が設けられていたが、その中でも東西に走る幅7~9mの前街がメインストリートで、さまざまな施設がこの通りに面してあったという。今もある商店は昔からあった間口の広々とした商店が多いが、昔は酒屋、布屋、薬店、米と小麦粉店、質屋それに「杠轎房」(駕籠担ぎなどがたむろする場所)、倉庫などがあったという。

乾隆三十七年(1772)建立『鶏鳴駅新建魁星樓碑』⁽⁹⁾には、「…本城商號達三十八家之多、其中僅當舖就有九家。還有前為門市、后為作坊的釀造、搾油、手工造紙等業」と記されているので、鶏鳴山駅では釀造業、製油業、製紙業などの手工業を営みながら商店も経営していたようである。駅関係の施設は鶏鳴山駅を総括する「駅丞」の役所であったと伝えられる賀家大院を中心に、「馬號」(馬を飼っておく場所)や駅倉が建ち並んでいたらし

⁽⁶⁾ 鶏鳴駅は80年代の「孫三趕驢」、「中華英雄」をはじめとして「藍色的花」、「大決戦」などのロケ地となり、これらの映画を通じて鶏鳴駅の知名度が高くなったらしい。

⁽⁷⁾ 馬道の名称が示すように、馬を登らせたり大砲など重量物を持ち上げたりすることが出来るように坂道となっている。

⁽⁸⁾ 馬雲さんの説明と『鶏鳴駅城』の説明では、東西に三本の道路が走っていることになっているが、『鶏鳴駅城』掲載の地図では、二道街が記されていない。これ以外にも馬雲さんの説明を地図と照合すると、必ずしも一致しないが今は馬雲さんの説明を記録しておく。

⁽⁹⁾ この碑文は後述の文昌宮に現存する。

い。また旧来は城内に十カ所を超える寺廟があったが、現在も残っているのは龍王廟、財神廟、泰山行宮（泰山廟）、城隍廟、普渡寺、永寧寺、白衣観音殿（観音廟）の七カ所である。馬雲さんから以上のような概観の説明を聞いた後に城内に入って各所を探訪した。

◆城隍廟

西城門から入って東西街大街を東に向かうと、道の南側に「一進三間」⁽¹⁰⁾の城隍廟があった【写真 3-11】。荒れ果てて崩れかけた西院の墙壁には、鞭を振り上げたり鎖や木杖を手にして盔帽（かぶと）を被ったりした眉の濃い、目の大きな少数民族風の容貌をした衙役が墨絵で四幅描かれていた【写真 3-12、3-13】。馬雲さんの話では鶏鳴山駅城は順治八年（1651）に大地震があって多数の建物が毀れ、今残っている建物はその後ろに再建されたものなので、この絵もその後ろに描かれたものであろうとのことであった。正殿の壁の上にも彩色画が描かれていたが【写真 3-14】、今はそのほとんどは毀れてしまっていて残っているのはわずかである。

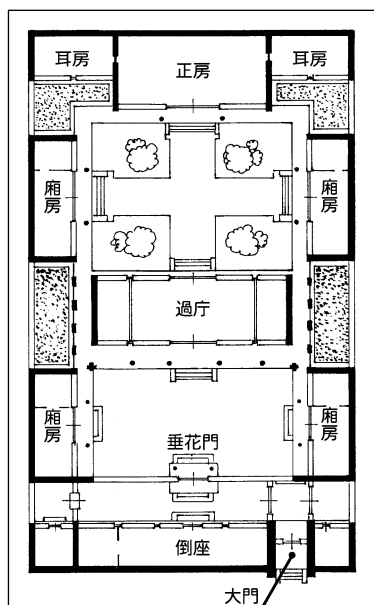


図 3-3 四合院形式の一進院

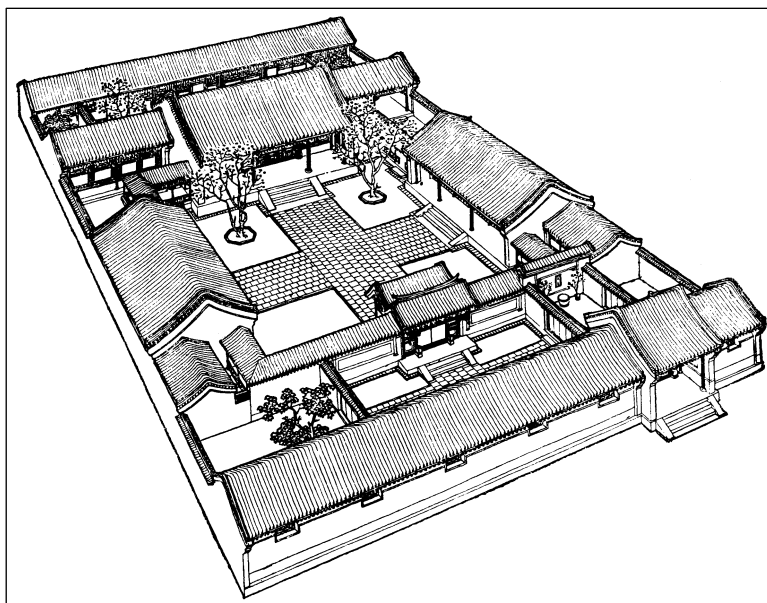


図 3-4 立体復元図

◆東便道付近

丁字街に赴くと、そこには幅が 5.5m ほどある照壁【写真 3-15】と石で出来た馬の水飲み槽【写真 3-16】が残されている。照壁の西側にある馬雲さんの自宅は馬神廟の旧址であるという。馬雲さんの屋敷の中にも石碑が転がっていたが、碑面が下を向いているので碑面に文字があるのかどうか何の碑文かは不明のままであった。

馬神廟の北側が駅馬を飼っておく場所の「大馬圈」（馬號、大號とも呼ぶ）であったが、今は全て民家になってしまっている。馬雲さん宅の通りを挟んだ向かい側が、役人が車や

⁽¹⁰⁾ 一進院は四合院形式の邸宅である。すなわち「四合院は中国北方漢族の典型的住宅形式。…中央の院子・院落（中庭）を囲んで四方に建物が配置される。…大邸宅になるといくつかの四合院を組み合わせる。中庭の数により一進、二進、三進などと呼ぶ。」（中国国家文物管理局編、鈴木博訳『中国名勝旧跡事典』第 1 巻、「中国建築の用語解説」、1986 年、ペリかん社）とある。また一進三院の図（閻崇年『古都北京』朝華出版社、1987 年）を参照されたい。

轎子（駕籠）を停留させ、駕籠を担ぐ人夫が用命を待ち宿泊する場所「杠轎房」である。杠轎房の向かい側に「馭館」（宿場の旅館）があり【写真 3-17、3-18、3-19】、今でも残された一部、部屋の間仕切りを飾る琴、棋、書、畫、荷、蓮、蝙蝠、蟬などを模したさまざまな彫刻は優れた芸術作品とのことであったが、時間のない我々は一見したのみであった。

◆普渡寺

続いて元来は観音菩薩を祭っていたという普渡寺に赴いた。境内は草が生い茂り、残っている建物も壊れるにまかせている。ここからさらに東に行くと、道の南側に「戲台」（芝居小屋）が残っている。ここは改革開放以前には食糧倉庫として使われ続けていたというが、西側の壁には見事な蓮の彫刻が施されていた。

◆龍神廟

戲台の北側が三進院形式の龍神廟であり【写真 3-20】、正房の壁には彩色画の龍王出巡図【写真 3-21】が描かれている。そして廟の両側にある耳房の壁には、天上から下界を通す「千里眼」（望遠鏡のこと）【写真 3-22】、下界を聴き知る「順風耳」（遠くを聞くメガホンのこと）【写真 3-23】の二人が墨絵で描かれているのは通信施設だからなのであろうか。この絵も城隍廟と同様に順治八年以後に描かれたとのことであったが、城隍廟の衛役を描いた絵と似通った筆遣いを感じられる。

◆白娘子廟

龍神廟の北側に白娘子廟があり、ここには白蛇、青蛇が祀られていたという。馬雲さんは白娘子廟が解放前に郷政府の置かれていた場所であるが、村人はここを「石頭政府」（農民を圧迫する政府）と呼んでいたという。それは当時、「反革命」と断じられ死刑の宣告を受け処刑される時に、弾丸の無駄を省くために鶏鳴山の石を使って窮死させたことからきたらしい。なぜか屋内の壁や柱には1956年の新聞が多数貼り付けられていた【写真 3-24】。陰惨な過去を振り切った今は、旅遊客を迎えるための修復作業が始められたようで、梁にはきれいな彩色画の陰陽図等が描かれていた。

◆泰山行宮

泰山廟、碧霄元君廟、送子娘娘廟、奶奶廟などと呼ばれている。正殿の前には左右に配殿があり、正殿の壁には壁いっぱい大きな絵が描かれている【写真 3-25】。なお上記の各廟にも山門の向かいに戲台が建てられていたという。今でも龍神廟の前にある戲台には見物席が残っていて、昔はお参りや芝居見物でにぎわったであろう事を偲ばせている。

◆文昌宮

鶏鳴山駅にある廟の中で最もよく保存されているのが文昌宮で、山門【写真 3-26】、正殿【写真 3-27】、齋堂、廂房などの建物群がまとまって残っていて、正殿には「至聖先師」すなわち孔子が祀られている【写真 3-28】。山門や正殿などの建造物、あるいは娘娘尊を描いた絵画なども修復中であり、境内の東西には石碑を集めて小さな碑林を作っている。この中に、先に引用した乾隆三十七年『新建魁星樓碑記』【写真 3-29】を見つけることが出来た。また、道光十八年『征修鶏鳴駅文昌宮碑記』などもあり、これらの碑文には「文昌宮の設立年は不明であるものの明代に既にあったこと」、「康熙己亥年（1719）に道員の江鼎が義捐金 48 両を拠出して学田を購入し宮内に義学を設立したこと」などが見える。

なお「駅学」（鶏鳴駅義学）は齋堂に設けられたことから「齋学」とも呼ばれたが、やが

て中華民国時代に「鶏鳴駅女子小学」に、解放後は「鶏鳴駅初等小学」に改められた。なお、交通の要衝にあった鶏鳴駅は外来文化の影響を受けやすく教育を重視したので、中華民国時代には永寧寺の後に男子学校である洋風建築の「鶏鳴駅二等小学堂」を設置したが、これは今でも残っているとのことであった。

◆駅丞の私宅

鶏鳴駅を監督していた駅丞と把總には、それぞれ駅丞署と把總衙門が設けられていたが、駅制度が廃止されると共にその署や衙門の場所も明確にはわからなくなってしまったという。駅丞の私宅であったという建物が残っているが【写真 3-30】、この敷地内には古い井戸や太湖石が残っていて盛時の面影を偲ばせている。そしてこの駅丞私宅の前のほうにある、今は賀家大院と呼ばれている建物が旧来の駅丞署であるという。

◆賀家大院

賀家大院とは中華民国初年に、当地に産出する石炭の炭坑を経営して産をなした賀翰氏の屋敷のことであるが、元来はこれが駅丞署であったという。賀家大院は前街路に面していて、鶏鳴山駅城の中で最も規模の大きい「五進院落」形式の建築である【写真 3-31】。ただ現在では前門や後院の建物群はなくなってしまっていて、前院の正房と西側の廂房それに中院の両側の廂房が残されている。残された建物の各所に、出世することや幸福を願う「金榜題名」「鶏鳴駅立馬封猴」「福祿壽」などを寓意した彫刻が施されているなど、明清時代から伝わる装飾が多数見られる【写真 3-32、3-33】。

この屋敷には、光緒帝と慈禧太后（西太后）が滞在したことがある。すなわち光緒二十六年（1900）、義和団事変で八カ国連合軍が北京に軍を進めると、光緒帝と西太后は山西を目指して北京を落ち延びたが、その途中で鶏鳴山駅に 1 泊している。すなわち『徳宗実録』巻 467 には以下のような記事がある。

光緒二十六年七月甲子（26）日「是日駐蹕沙城堡」

乙丑（27）日「是日駐蹕鶏鳴駅」丙寅（28）日「是日駐蹕宣化府」

すなわち光緒帝と西太后は旧暦 7 月 26 日（新暦 8 月 20 日）に沙城堡に 1 泊、翌 27 日に鶏鳴駅で一夜を過ごして宣化府に向かったのである。馬雲さんは『実録』とは相違する「旧暦 7 月 26 日に大学士李鴻章が第一進院に、小皇上（光緒帝）が東廂房に【写真 3-34】、西太后が第二進院の西廂房【写真 3-35】に、宮女たちは正房に宿泊、一夜を過ごした西太后は鶏鳴駅を「太平城」に封じた」という伝承を説明してくれた。光緒帝や西太后が過ごしたと伝えられる第二進院の東西の建物は小さな房屋であり、この時の惨めな逃避行を偲ばせるに十分なものがある。現在でも賀家大院第二進院の東側の壁には「鴻禧接福」の 4 文字が彫刻されていて【写真 3-36】、光緒帝と西太后が過ごしたことを大きな喜びと表明した刻字が残されている。

賀家大院にはもう一つの歴史、国共内戦当時の悲惨な歴史があるという。すなわち 1949 年に共産党の率いる解放軍と国民党軍が北平（北京）争奪をめぐる戦いの「平津戦役」で、解放軍の放った大砲の弾が賀家に当たって、そこに集まっていた人々 7 人が死亡、その肉片が四散した悲惨な情景が語り継がれてきた。そのため 1950 年代の土地解放の時に賀家大院に住む権利の生じた貧農下農なども、この屋敷は不吉と誰も住まずに長い間空き家のままで、水庫建設で移動を強いられた人々が遠くからやって来て、ようやく住民が出来たのだという。

2 鶏鳴山駅から宣化城へ

すっかり世話になった馬雲さんのもう一つの商売が、京張公路に面したところにある雑貨屋兼食堂といっても一膳飯屋、この一膳飯屋で遅い食事をとり別れを告げて宣化城⁽¹¹⁾に向かったのは午後2時をまわっていた。鶏鳴山駅を離れ、再び高速道路に入って宣化に赴くが、途中で「丹拉高速」とクロスする。これは北朝鮮との国境の町丹東と西藏^{チベット}ラ薩^{ラサ}を結ぶ高速であろう。まだ全通していないが、改めて中国の巨大な広がりを感じ知らされる道路標識であった。鶏鳴山駅を出発して40分余りで宣化の街に到着した。

◆宣化城

宣化城＝宣府は燕山山脈中の要害の地を占め、北京と西北をつなぐ交通の要衝に位置していたことから、明代にモンゴル族や女真族の侵入を防衛するために設けた九邊鎮の一つがここに置かれていた。元来の宣化城は城壁の一周が20里余りと大規模な城郭都市であったが、現在では城壁のほとんどが取り壊され残存していない。光緒帝と西太后の逃避行でも鶏鳴山の翌日は宣府に逗留しているし、古来要地として多くの史跡が残されているようであるが、今回はモンゴル高原に残された史跡探訪が主目的であるので、旧城の中心を南北に貫く道路上に配置された拱極楼、鎮朔楼、清遠楼の三つの城門楼を短時間で訪れたにすぎない。

◆拱極楼

鶏鳴山駅から宣化市に入るとはじめに通過するのが、現在は昌平門の門額が掲げられた城門に建つ拱極楼【写真 3-37】である。この門は正統年間に起源を持ち河北省重点文物保护单位となっているが、ほとんどは近年に再建されたもののようである。この門から遠くに鎮朔楼の建物が見える。両門を結ぶ大通りは両側に新築された商店ビルが建ち並ぶ新開地であり、歩行者天国になっていて車は通り抜けられない。

◆鎮朔楼

鎮朔楼は清遠楼の南側にあり、俗に鼓楼とも称され【写真 3-38】、全国重点文物保护单位となっている。明代に宣府總兵が「鎮朔將軍」印を帯びていたことに名称の起源があり、明代の正統年間に築かれ、後に清代乾隆年間に重修されている。高さ8.4mの磚造りの土台の上に高さ15mの二階建ての楼閣が築かれ、南側には「鎮朔楼」、北側には「神京屏翰」と記された、共に乾隆帝御筆の扁額が掲げられている。なおこの扁額は直隸總督那蘇図⁽¹²⁾が掲げたものであるという。元来ここには時を知らせるために水時計と太鼓が置かれていたようであるが、今は旧来のそれを復元したという直径1.4m、長さ2.2mの太鼓が置かれていた【写真 3-39】。楼閣内部には20世紀初頭に撮した宣化の町並みや建物の写真が多数展示されていた。楼閣の上から北側には清遠楼が見え【写真 3-40】、拱極楼、鎮朔楼、清遠楼を結ぶ街路が、旧来の宣府城の大通りであろう。この通りの北側には古い建築が多数見受けられた。

(11) 現在の行政区画では河北省張家口市宣化区である。

(12) 那蘇図は康熙末年から頭角を現して雍正時代に兵部尚書などの要職を歴任し、乾隆十年(1745)～同十四年の間に直隸總督の任にあった。

◆鎮朔樓の碑林

鎮朔樓の北側は碑林となっていて当地の文物局などが発掘収集した明代成化年間から文化大革命時代に及ぶ石碑 30 本余りと門額、亀趺、石獅子などが置かれている【写真 3-41】。中には「戸部執照」を刻した地図付きの碑文、宣府の何れかの門に掲げられていたであろう「定安門」と記された門額【写真 3-42】など珍しい物も見える。ただ我々が探している満文で記された碑文は見つからなかった。なお、宣府で出土した墓誌類は『宣化出土古代墓志録』（遠方出版社、2002 年）として出版されている。

◆清遠樓

清遠樓は俗に鐘樓とも称され【写真 3-43】、全国重点文物保護単位となっている。明朝の成化十八年（1482）に築かれたもので、全国の鐘樓の中の傑作といわれている。高さ 7.5m の磚造りの土台の上に、外観は三階で、内部に入ると二階造りの高さ 10m 余りの樓閣が建っている。樓閣から南に鎮朔樓を望むことが出来るが、ここからも清遠樓と鎮朔樓の間には古い家並みが続いていることが見て取れる【写真 3-44】。樓閣の内部には、明代嘉靖朝の都御史であった郭登雍が鑄造した銅製の「宣府鎮城鐘」⁽¹³⁾が吊されている。この鐘の澄みわたった音が数十里の遠くにまで響きわたったことが「清遠樓」の名称の起源であるという。後になると「東は三つ、西は四つ、南は五つ、北は六つ」打って火事が起きた方角を知らせたという。樓閣の土台をなす門洞部分をくぐって東西と南北の十字に道路が通っていたので、門洞に敷かれた石畳には車の通った轍の跡が深く刻まれている。明代からの歴史の流れを示す刻印である【写真 3-45】。

3 宣化城から張家口へ

宣化府にいた時間はほぼ 1 時間半、駆け足で三つの城門と樓閣を見て歩き、今日の最終目的地である張家口へ向かう。清遠樓を離れてまもなく「八里墓群」の標識がある。これは近年知られるようになった遼代の墓であるので、とりあえず案内標識をたどってみる。今の中国の常ではあるが、国道に標識があるのみで、後は全くない。ただ田舎道の中に一本の舗装道路が走っているのでこの方角だろうと車を走らせると、道が行き止まりになった場所が八里墓群であった。

◆八里墓群＝遼代壁画墓

八里墓の入り口には何の標示もなく鉄柵の門が閉まっているが、のぞき込むと墳丘が見える。『中国文物旅游図冊』によれば、「八里墓群は遼代の壁画墓で、すでに 9 座を発掘したがそのうちの 8 座は漢人の張氏家族墓であり、1 座は韓師訓の墓である。墓の壁画は主に契丹人統治下の漢人生活の風習や衣冠と服装を示している。墓の天井部分には二十八宿と十二天宮の天文図が描かれている。」などのことが記されている。或いは何か見ることが出来るのではと、門の下をくぐり抜け近くまで行ってみたが、既に墓道も埋められ黄土がむき出しになった墳丘があるのみで【写真 3-46】、当然壁画は見る事が出来ない。墳丘を写真におさめていると、監視人が自転車でおせき切って走ってきて非公開だと告げに来る。聞くと、今は盗掘が多いが、道路修理の工事人が少し前に墓に向かった人がいると告げたので、あわてて駆けつけてきたとのことであった。監視人から張家口への道を聞いて

⁽¹³⁾ 説明書きには「高さ 2.5m、直径 1.7m で重さ万余斤」と記されていた。

先を急ぐ。ここから張家口市區まで公路をたどるが、多くの公路は大きな町を通過すると「公路費」通行料を徴収しているので、公路費の合計は高速道路の通行料金より高くなる。なにか昔の内関制度を思い起こさせる公路費である。

◆張家口市

午後5時過ぎに今日の最終目的地である張家口市に入った。モンゴル名カルガンの張家口は宣徳四年（1429）に万全都指揮使張文帯が城堡を設け嘉靖年間に改築、城壁の北側の小北門を「張家口」と称し、以後は明朝の対モンゴル族・女真族の前線に位置する軍事拠点となった。清朝の太宗ホンタイジは、北京を落とした順治元年（1644）に先だって、天聰六年（1632）から崇徳三年（1638）にかけ張家口を攻撃して明軍に大きな痛手を与えた。清朝は北京に軍を進め占拠すると共に、早くも順治元年には内モンゴルとの交通路を押さえるために張家口の北側に大鏡門を開き、以後、大鏡門がモンゴル各地へ向かう交通路の基点となった。モンゴルと中国本土の貿易拠点は明代には来遠堡であったが、清代の早期から張家口に移り、その後も雍正五年（1727）のキャフタ条約締結によって張家口と庫倫（ウランバートル）をつなぐ「張庫大道」の起点として繁栄【写真 3-47】、咸豐十年（1860）の露清条約で対ロシア貿易地に指定され、民国三年（1914）には列国の貿易地に開放され、大鏡門外の西溝一帯は「旱碼頭」陸港と呼ばれたという。このように清代の張家口は対モンゴル、ロシア貿易の商品集散地であったが、各種商品の中でも重きをなしたのが毛皮であり、中国最大の毛皮集散地として「皮都」とも称された。民国十年の統計では、張家口の戸数は15,298戸、人口76,462人を数えたが、そのうち商店は11,450家、35,000人と大半が商業従事者であったことから、貿易拠点として繁栄した張家口の姿がうかがわれよう。なお、大鏡門の内側にある「市圈」と名付けられた場所が、モンゴル族と漢族の間の「茶馬互市」（茶と馬の貿易）が行われたところであるという。

◆大鏡門と烽火台

張家口市區の北端の明德北街にある大鏡門は、張家口の城門であると同時にここを走る外長城【写真 3-48】の門でもあって、大鏡門の内側や長城沿いに烽火台も見える【写真 3-49】。この烽火台は明代に長城線沿いに設置されたものであるとのこと。磚で築かれた門は高さ12m、幅9m、厚さ13mであり、門洞には鉄で掩った木製の両開き戸が設けられていて、河北省重点文物保護単位となっている。門を中心に左右に走る長城は各所が修理中で、この長城は市内から続く公園の一部となっているらしい。門の外側すなわちモンゴル高原側には1927年に察哈爾都統であった高維岳が書いた「大好河山」の門額が掲げられている【写真 3-50】。入場料を払って延々と連なる長城の一角に登り、大鏡門の上を渡って急な階段を西にたどると【写真 3-51】、長城の外側に黄土を版築で固め部分的に磚で被った烽火台が残っている。また大鏡門の内側に毀されずに残っている烽火台の付近には古い建物が見える【写真 3-52】。

◆関帝廟

長城の上から、大鏡門内側の烽火台の側に古い廟らしい建築が見えたので、薄暗い中ここを訪れてみると関帝廟があった。この関帝廟は明末に建てられたものであるというが、山西出自の関羽は特に晋商（山西省出身の商人）に崇拝されたが、この関帝廟も張家口で活躍した山西商人が捐資して建てたものであるとのこと、廟の前には香火が焚かれていて、今でも参詣人が絶えない様子がうかがわれる【写真 3-53、3-54】。

長い一日を終え交通大酒店に宿泊、翌日も早朝に出発して張北高原を経て元朝の上都な

どの探訪に向かったが、偶然にも張家口市郊外で、皮都張家口に縁の深い道観を訪れることが出来た。

◆水母宮（張家口市の西北郊外、臥雲山の山麓）

張家口市区を離れて張北高原への道を北にたどるとまもなく、「水母宮」の看板を見つけた。何を祀る廟なのかは不明のままに立ち寄ってみる。臥雲山の山道を少し登ったところに水母宮の山門があり【写真 3-55】、山門である由来をたずねると「水母」⁽¹⁴⁾とは龍王夫人すなわち水神のことであり、水母宮は龍王夫人を祀った道観であるという。

毛皮をなめすためには質の良い清水が必要であるが、張家口の毛皮商人たちは臥雲山の麓に湧き出る泉に毛皮を浸し毛皮をなめした。この泉を使った結果、張家口産の毛皮は柔らかく毛色の綺麗な上質な商品という特産品の名声を得ることが出来るようになった。張家口の毛皮商人たちは自分たちの巨利を産み出す基となった臥雲山の泉水に感謝して、乾隆四十七年（1782）に水神を祀る道観を建造して奉納したことが水母宮の始まりであるという。いかにも皮都張家口らしい言い伝えのある道観である。確かに「水母宮案内図」には「洗皮池」と記されているが【写真 3-56】、今の池はただの水たまりになってしまっていて洗皮池の由来があるとは思えない池であった。

山の中腹に建造された道観【写真 3-57】、の近くにいくつかの石碑があり、その一つには「大清??年…」と、年紀の部分が欠損して見えないが、清朝から続くという歴史の一端を証している【写真 3-58】。一帯は公園となっていたが、中華民国初年の軍閥であった馮玉祥の屋敷があったようで、一郭には彼の銅像が建ち【写真 3-59】、故居は記念館になっていた。

おわりに

水母宮を離れると、ここから先は行政区画こそまだ河北省であるが、張北高原に入り次第に高度を上げ海拔 1,000m を越えた草原地帯【写真 3-60】、河北平原の漢族文化圏とは相違するモンゴル文化圏となる。

この日から 1 週間余り、元の上都や中都それに遼の上京を、また康熙三十年（1691）に外モンゴル喀爾喀部のハーンが会盟して康熙帝を推戴した多倫諾爾、錫林郭勒盟の首都錫林浩特市にある貝子廟をはじめとして各地にあるラマ廟などモンゴル文化圏の史跡を訪れたが、これら各地の状況は別の機会に記すこととする。

（原載：『アジア流域文化論研究』Ⅱ、2006 年）

⁽¹⁴⁾ 水母は、一般的には水神を指す。



写真 3-1 京張公路からみた鷄鳴山



写真 3-2 鷄鳴山駅城西城門とその上に建つ門楼



写真 3-3 西城門の門洞の石畳



写真 3-4 西城門上にはめ込まれている「鷄鳴山駅」と記した碑



写真 3-5 西城門の南側を望む



写真 3-6 西城門の馬道と楼閣



写真 3-7 西城門の楼門



写真 3-8 西城門付近の城壁上部（左奥に北西角の角台）



写真 3-9 西城門から東西門大街



写真 3-10 西城門付近の建物



写真 3-11 城隍廟、左が西城門



写真 3-12 少数民族風の容貌をした衙役の絵画



写真 3-13 衛役の絵画



写真 3-14 城隍廟に残る花鳥をモチーフにした彩色画



写真 3-15 馬雲さん宅近くの照壁



写真 3-16 照壁の近くに放置された馬の水飲み槽



写真 3-17 馬館のある通り、左側が駅館



写真 3-18 駅館の建物

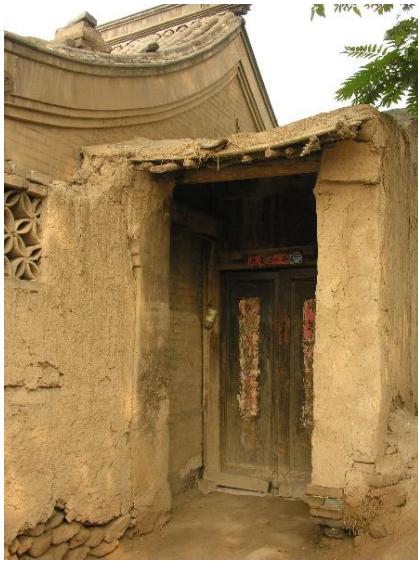


写真 3-19 駅館の建物



写真 3-20 荒れ果てた龍神廟



写真 3-21 龍神廟の龍王出巡図



写真 3-22 龍神廟の千里眼



写真 3-23 龍神廟の順風耳



写真 3-24 白娘子廟に貼り付けられた 1956 年当時の古い新聞



写真 3-25 泰山行宮に描かれた絵画

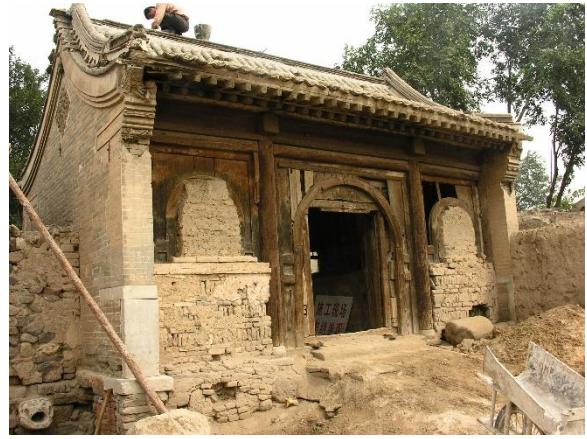


写真 3-26 修復中の文昌宮山門



写真 3-27 修復中の文昌宮正殿



写真 3-28 「至聖先師」孔子を祀る本殿内部

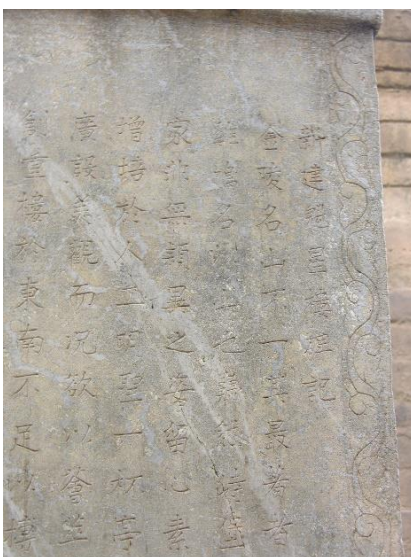


写真 3-29 『新建魁星樓碑記』



写真 3-30 駅丞の私宅



写真 3-31 賀家大院の明清時代の彫刻



写真 3-32 賀家大院の明清時代の彫刻



写真 3-33 賀家大院の入り口

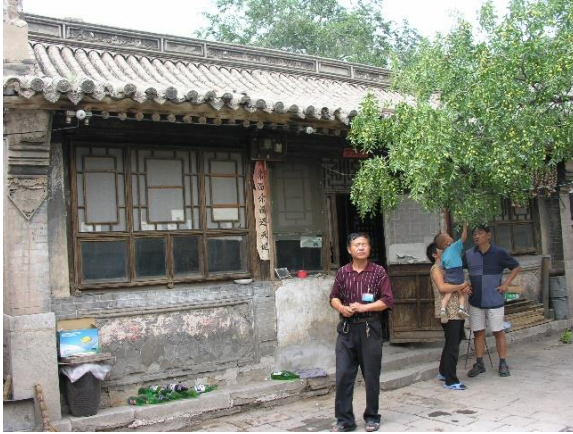


写真 3-34 光緒帝の宿泊した東廂房



写真 3-35 西太後の宿泊した西廂房

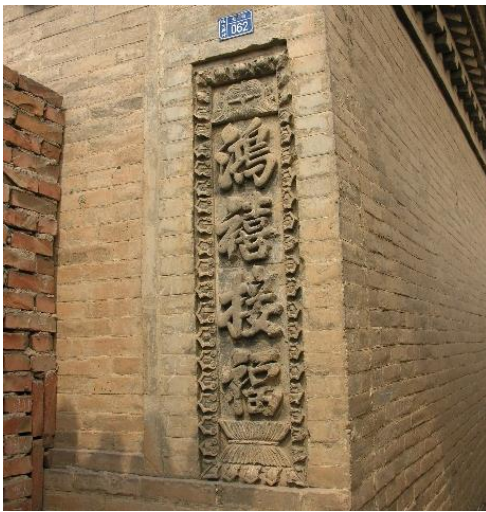


写真 3-36 「鴻禧接福」の彫刻



写真 3-37 宣化城の昌平門と拱極門

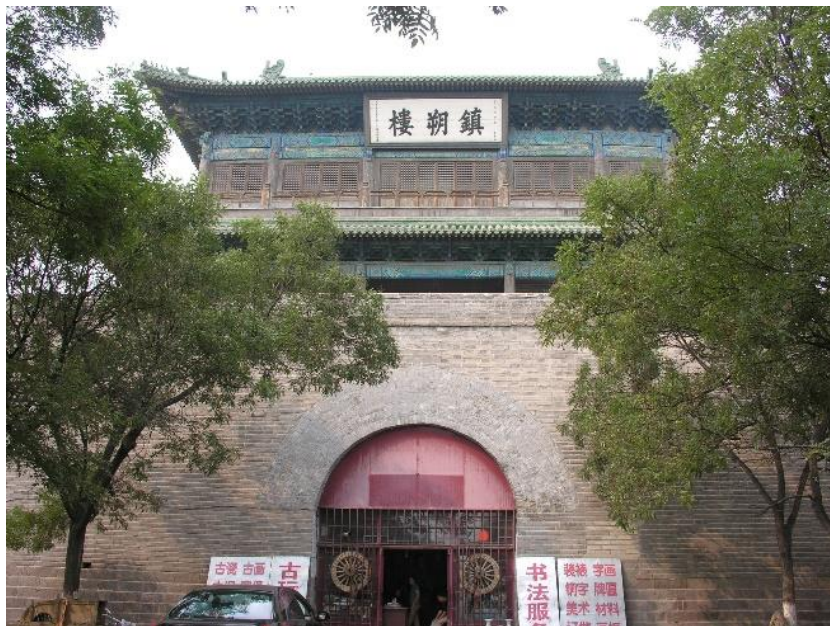


写真 3-38 宣化城鼓楼の鎮朔樓、匾額は乾隆帝御筆



写真 3-39 鎮朔楼の二階にある修復された太鼓



写真 3-40 鼓楼から北に清遠楼を望む



写真 3-41 鎮朔楼の脇にある碑林



写真 3-42 鎮朔楼の碑林にある定安門の匾額



写真 3-43 鐘楼である清遠楼



写真 3-44 清遠楼から鎮朔楼を望む



写真 3-45 清遠楼門洞内に残る車の轍



写真 3-46 遼代八里墓の墳丘



写真 3-47 大鏡門の外側

川沿いに西に向かう道は庫倫へ、北に向かう道は多倫
諾爾へ通じている



写真 3-48 張家口市の大鏡門付近を走る外長城



写真 3-49 大鏡門内部の烽火台、右が関帝廟



写真 3-50 大鏡門の外側に掲げられた門額



写真 3-51 急傾斜の長城(修復中)



写真 3-52 長城から大鏡門付近を望む(中央に烽火台と関帝廟)



写真 3-53 大鏡門付近にある関帝廟



写真 3-54 関帝廟の門の彫刻



写真 3-55 水母宮の山門



写真 3-56 水母宮の案内図、中央部に「洗皮池」の表示が見える



写真 3-57 水母宮道観



写真 3-58 年紀が欠損した清代の石碑



写真 3-59 水母宮に建つ馮玉祥の像



写真 3-60 果てのない張北高原

第4章

荊州満城・成都満城・金川平定碑

はじめに

2005年3月9日から20日までの12日間、劉小萌氏と一緒に清朝と八旗の史跡を求めて、武漢を経て荊州へ、続いて成都を経て丹巴と大金川の流域に赴き成都に戻る旅をした。満族が観光と史跡の対象となり得る東北や北京とは相違して、滅満興漢を呼号した長江流域とその南では、満族・八旗どころか清朝の史跡をめぐる情報も多くはない。準備不足のままの、限られた情報や資料を手がかりにした短い時間の探訪記録であり、誤認や脱落が多々あろうが、未だ伝えられていないことを記しておくことにも意味があろうかと筆を執った。本章は、劉氏による聞き取りと記録、細谷の記録を合わせながら細谷の手でまとめたものである。

1 北京にて

劉氏と旅する時の北京の定宿は西坝河にある重慶飯店。ホテルの裏手に劉氏と綿貫哲郎氏に教えられた、「尚書加三級科爾坤」に与えられた「奉天承運皇帝制曰…」で始まる満漢文の誥命の石碑がある。康熙三十六年（1697）七月十九日の年紀の誥命石碑は、北京所在の石碑でも古い方に属するものであろうが、都市化の波の激しい北京内城ではいつまでこのまま残されるのか、一度全文を記録する必要もありそうである。武漢に飛び立つ時間を利用して修復がほとんど終わった白雲觀に赴き、小柳司気太著『白雲觀志』に掲載されている満漢文碑文を探す。所在は判らずじまいであった。

東北学院大学が展開しているオープンリサーチセンター「アジア流域文化論」の共同研究とシンポジウム開催のため、中国社会科学院考古研究所へ赴き副所長の白雲翔氏と安家瑤氏に挨拶する。政協委員の安氏は、今、人民大会堂で全国大会が開かれているのでここを避けて空港に向かうようにとアドバイスしてくれた。荊州へ赴く経由地は武漢。北京から飛行時間は1時間40分、気温25度と暖かい武漢空港へ降り立った。

2 荊州

荊州は近くに空港はなく、交通は余り便利ではない。朝7時、霧が立ちこめ薄暗い武漢を車で出発、1950年代の中ソ蜜月時代にソ連の援助で架けられたという「第一長江大橋」を渡り、宜昌へ向かう高速道路に入る。菜の花畑などが広がる中に湖沼が点在し山並みはほとんど見えない。内蒙古や東北とは全く相違する景観の中を200kmあまり走りぬけ、沙市で高速を下りると荊州市はすぐ間近、武漢から2時間余りで到着した。荊州は、東は武漢に西は三峡に接し、南に長江を北に漢水を臨む交通の要衝であり、古来、長江上流の成都、下流の江寧（南京）と並ぶ中流の拠点である。禹が中国を九州に分けたときの一州、

戦国七雄の楚の都（江陵）、『三国演义』の中で「劉備借荊州」とか「関羽大意失荊州」などの故事が人口に膾炙している場所として知られている。明末清初の戦乱や三藩の乱でも荊州は要衝の地として争われ、成都、江寧共々に荊州にも大規模な八旗駐防が設置されたが、辛亥革命以後になると、荊州駐防とその史跡は歴史の彼方に押しやられてしまい殆ど記録されていない。

2.1. 荊州駐防の歴史

清朝が南明を滅ぼし雲南を平定した直後の康熙元年（1662）、魏裔介は満洲軍を荊・襄（荊州、襄陽）に駐屯させることを奏請したが猷策は入れられなかった。しかし三藩の乱で荊州が三藩軍と清軍の必争の地となったことから、三藩の乱が平定された直後の康熙二十年（1681）十二月に、議政王大臣は荊州駐防の設置を奏請し、二十二年にかけて荊州駐防が設置された。この事から魏裔介には先見の明があったと讃えられている⁽¹⁾。このようにして設置された荊州駐防の將軍、副都統以下の官員と兵丁数について『欽定八旗通志』卷 35、兵制志 4「八旗駐防兵制」には以下のように見える。

湖廣荊州將軍一人。左右翼副都統二人。滿洲協領八人。佐領三十二人。防禦四十人。驍騎校四十人。蒙古協領二人。佐領十四人。防禦十六人。驍騎校十六人。隨印筆帖式三人。八旗滿洲・蒙古委前鋒校十六人。前鋒一百八十四名。鳥鎗領催一百七十六名。鳥鎗驍騎一千八百二十四名。領催一百六十名。驍騎一千六百四十名。礮驍騎八十名。歩兵七百名。養育兵四百名。弓・箭・鉄匠各五十六名。

すなわち將軍以下前鋒校に及ぶ官員が 190 名、前鋒から養育兵、鉄匠に及ぶ兵丁 5,332 名、総計 5,500 名余りの満洲蒙古旗人からなる大規模な八旗駐防軍が駐屯していたのである。

荊州駐防は長江中流域を支配する拠点としての役割を果たす一方で、康熙三十九年（1700）に四川の西、チベットとの境にある打箭爐（現在の康定）「蠻」の平定、同四十二年（1703）に湖南の西の臘爾山に住む苗族の平定、あるいは後にふれる大小金川の平定に派兵するなど周辺の非漢族平定の拠点でもあった。また清朝中期以後になると、嘉慶朝の白蓮教徒の乱、咸豊朝の太平軍の乱でも清朝を守る防波堤としての役割を果たしていたが、辛亥革命の勃発でその様相は一変する。

2.2. 辛亥革命と荊州駐防

辛亥革命によって一挙に崩壊した荊州駐防について潘洪鋼氏は以下のようなことを述べている⁽²⁾。宣統三年（1911）に武昌で革命の火蓋が切られると、荊州駐防軍は南下してくる清軍と合流して革命軍・湖北軍政府を側面から攻撃しようとした。しかし革命軍は十一月十九日に荊州城を包囲攻撃したので、駐防軍は大きな損失を蒙り援軍もないままに一ヶ月余り城内に閉じこめられた。食糧は尽き士気は落ち込み戦闘意欲を失った旗人は、家族共々副都統恒齡の衙門で悲嘆にくれるのみであった。この有様を恥じた恒齡は自殺したので、城内は大混乱に陥った。一方、荊州將軍連魁には戦う意志がなく、日本領事やフランス宣教師に講和を依頼し、十二月二十三日駐防軍は湖北軍政府に投降した。それと共に、駐防軍は軍政府の法令を遵守しその保護下に入ること、駐防軍所有の軍用品を引き渡すこと、駐防軍の公有の財産と土地の没収、困窮旗人に対する半年分の兵餉支給などが取

(1) 『郎潜紀聞二筆』卷 2、「魏文毅之先見」。

(2) 潘洪鋼「辛亥革命与荊州駐防八旗」（『満族研究』1992 年第 2 期）。

り決められ実施された。このような経過をたどって、荊州にいた満蒙旗人の生活・身分・地位は大きく変貌することとなった。

◆人口

荊州駐防の旗人は家族連れで荊州に居住していたので、満蒙旗人の総数は 15,000 名余りであったが、光緒六年（1880）の統計では、旗人は 55,670 余戸 220,900 余名であるが、光緒三十年（1904）に「4 萬有奇」という報告もあり、宣統末年の統計では、旗人は 6,029 戸 24,466 人であるという。2 万数千を数えた旗人は、辛亥革命以後になると八旗官員あるいは兵丁の職を失い、職を求めて各地に流亡して、荊州在住の旗人は減少した。旗人が外部に流出した理由の一つに、民国元年（1912）に荊旗善後局が実施した政策、すなわち貧困な満蒙旗人 1 人に銀元 30 塊を与え、湖北の東南部に送り農業に従事させるという政策がある。荊州から湖北の農村に流出した旗人は、結局は農村に定着出来ないままに村を離れた者が多く、彼らは荊州と付近の郷村や武漢などに住みついた。このようなこともあって、解放当初の満族は、荊州に 1,000 人、近郊の沙市に 2,300 人が、1992 年頃の調査では荊州に 800 人余り、沙市に 2,000 人余りが数えられているのみである。なお現在湖北に居住する満族と蒙古族のほとんどが荊州駐防旗人の後裔である。

◆職業

兵丁レベルの旗人は、辛亥革命以後に最下層の労働者となるものが多かった。前述の荊旗善後局によって湖北東南部に送られ農業に従事した旗人は、異なる生活習慣に慣れないままに荊州に戻ってきて都市の貧民になってしまった。荊州を離れたがらない旗人は、不動産の家屋のみならず衣服まで売り払って生活費にあてたが、それもすぐ尽きてしまい、男は人力車夫や手間賃取り、物売りや簡単な加工、あるいは外地に出て兵隊となり、女は荊州で富商の雇い人や保母となった者が多かった。

◆宗教

辛亥革命後の急激な変化の中で、頼るものがなくなった旗人はカソリック天主教を信仰する者が多くなった。民国初めに荊州城東門にあった天主教教会の信徒 300 余人の内には満蒙旗人が多数いたが、彼らが天主教に走った原因の一つに婚姻問題があった。

◆婚姻

荊州の旗人の婚姻は、満族や蒙古族同士あるいは満洲蒙古間の通婚が一般的であり、中には漢人（民人）の娘を娶る者もいた。清末に近づくに従い満蒙旗人と民人の間の境が少なくなり、漢族の娘を娶る者が次第に多くなって、光緒時代になると清朝政府も旗人と民人の通婚を既成事実として承認し解禁したので、旗人と民人の間の通婚が多くなった。旗人の婦女は元来が大脚（そのままの足）であり、民人の婦女は小脚（纏足）であったが、旗・民の通婚が進むにつれて満族の婦女にも纏足が見られるようになった。

辛亥革命後に旗人の地位が低くなって結婚相手が得られなくなると、旗人は天主教教会の運営している修道院や孤児院で養われていた孤児の娘を配偶者に選ぼうとしたので、荊州では多くの旗人が天主教徒となった、このことが旗人の天主教信仰の一因であるといわれている。

◆文化

荊州城内には満蒙旗人が 200 年余り居住し、旗人と漢人（民人）は城内に界牆を建てて

東（満城）と西（漢城）に別れて住み通婚もしないのが原則であった。このため様々な面で満漢文化の乖離があるが、同時に旗・民間の融合も生じている。

言語では、共に使う漢語の単語と発音に差違が生じ、旗人の居住する満城は「方言島」となった。新編『江陵縣志』には、駐防旗人の言葉が県境の近代方言に大きな影響を与えたことを指摘、旗人の使用する北方方言を「城里頭話」と称し、西南官話に属する西城（漢城）の荊州方言と対照的であるという。辛亥革命の後に界牆は取り除かれ旗人は分散したので、このような言語にも少なからぬ変化が生じたが基本は変わらなかった。

荊州の満族である関順培氏は次のように指摘している⁽³⁾。旗人の中でも言葉や口語音は二つに分かれる。すなわち満城の中央にあった將軍府（衙門）を中心線にして、東側に住む右翼四旗の旗人が使う「東辺腔（語）」と西側の左翼四旗の「西辺腔」の間には、発音や単語に細かな相違があった。例えば芝居を見ることを東辺では「瞧戲」、西辺では「看戲」と表現した。このような相違は、左翼と右翼の旗人の祖先が、北京からやって来たあるいは南京からやって来たという、出身地の相違が原因であろう。関氏の家では父親が鑲藍旗人で西辺口語、母親が正白旗人で東辺口語と2種類が使われていたと言う。

一方、飲食などでは両者が融合していた。一般的には南方で北方風味の料理を賞味することは難しいが、荊州では有名な楚菜・江陵菜の中には北方風味がしばしばある。光緒時代以後の荊州の有名な料理店「聚袖園」の料理は、荊州の旗人関煥海兄弟と没落した宮廷料理人が創り出したものであり、代表的な料理の「千張肉」、「散燴八宝飯」等々はみな北方風味であった。ただ旗人の中で、祖先祭祀に満族は豚を使用するが、蒙古族は牛と羊を使用するという区別もあった。

2.3. 荊州城探訪⁽⁴⁾

◆城壁と城門

護城河に架けられた九龍橋を渡って東門に当たる「寅賓門」から城内へ入る【写真 4-1】。現在も残る城壁に囲まれた城内は「荊州古城公園」となっていて、看板には「荊州は三国文化と荊楚文化の中心」と唱われている。荊州城は関羽が土城を築いて始まったといわれるほどに古い歴史があるが、現在の城壁は明代洪武二十四年（1391）に護城河を掘削し城門6門を備えた城を築いたことに由来する。明清時代を通じて長江の氾濫による水害を受け、しばしば補修されているが、明末清初の動乱では張獻忠軍が荊州城を占拠し立ち去る時に城を壊したことなどから、清の支配下に入った順治三年（1646）に大幅に修築、その後は道光十八年（1838）など清末にも補修の手が加えられたことが記録されている。すなわち現存する城壁の大部分は明初に造られ、清初に修築したものをもとに整備し直したものである。

城壁は内部を版築で固め、その外側を組石と重さ約 4 kgあるという青い磚を埋め込み、石灰と糯米を煉った糊で固定してある。城壁の長さは東西が 3.75 km、南北が 1.2 kmあり城壁に囲まれた城の平面は全体が歪んだ長方形である。城壁の厚さが下部は10m、上部は3～5m、高さは9mであり、その総延長は 11,281m、城内の面積は 4.5 km²ある。そして城壁の上には弓を射る弓箭兵の防禦施設である蔵兵洞が4ヶ所、砲台が24ヶ所設置されていた。

城門は東に東門（寅賓門）と小東門（公安門）の2門、北に大北門（拱極門）と小北門（遠安門）の2門、西は西門（安瀾門）、南は南門（南紀門）の1門ずつの合計6門であっ

⁽³⁾ 劉氏が1回目の荊州調査で行った荆州市民委民族科長の関順培氏からの聞き取りによる。

⁽⁴⁾ 荊州城の現況は以下の2冊が伝えている。徐正鈞主編『古城荊州』（香港根川出版社、2004年）、張世春編著『荊州城文字磚』（武漢出版社、1999年）。

たが、1970年代になって城外への交通緩和のために、新東門、新南門、新北門の3門を新設して今に至っている。そして東門の上には1987年に重建された「賓陽楼」が、北門の上には道光十八年（1838）重建の古い城楼が残されている。

城壁の上に上る道は、上に向かって右側は人の登る階段で、左側に馬を登らせるスロープ「馬道」があり、馬道には磚を作製した役所、官職、人名、年代などを記した「文字磚」があちこちに嵌め込まれていて、この文字磚が荊州城建築史を考証する重要な史料となっている【写真4-2、4-3】。

◆満城

このような城壁に囲まれた城内は、東側は將軍府の置かれた旗人の居住区である満城（旗城）であり、西側は府衙門の置かれた民人の居住区であった漢城（民城）であり、満城と民城の間には界牆が築かれ、勝手に旗人が民城に民人が満城に出入りすることが出来ないようになっていた。東門には満城と民城の境を明記した荊州城図が掲げられていたが、この図がいずれによるものかは不明である⁽⁵⁾【写真4-4】。ただ現在では界牆は取り払われてしまっていて、それがあつた痕跡を確認することは出来なかった。

なお、八旗駐防の駐屯地では必ず満城を設置して旗人と民人の居住区を分けているが、満城の設置方法には二通りある。その一つは旧来の城内を区切ってその一部を満城とするもので、ここ荊州駐防の他に広州、福州、江寧、杭州、成都駐防などがこの方式を採っている。もう一つの方式は従来の府州県城などとは別に、その付近に満城を建設して旗人を駐屯させるものであり、山東青州、内蒙古歸化城（呼和浩特）、寧夏銀川の駐防、福建琴江の八旗水師營、浙江乍浦の八旗水師營などがこの方式で築かれている。

2.4. 荊州城内の史跡など

東門から内城に入って、満城部分を中心に何ヶ所かの史跡を探訪した【写真4-5】。

◆碑苑

荊州駐防をめぐる碑文を求めて東門の近くにある碑苑に赴いた。しかしここには現代の人々が荊州を謳った碑文のみで、清朝をはじめとする歴史史料となる碑文は見当たらなかった。

◆荊州博物館

西門の近くに荊州博物館が開設されている。当然のことであろうが、展示は楚国や西漢を中心とする古代の史料が中心であり、古代から荊州が長江中流域文化の中心地であったことを知ることができる。中でも珍品館で展示されている西漢168号墓の発掘品には瞠目する品々が多い。ただ清朝時代をめぐる展示は陶磁器と仏具のみで、八旗駐防に触れたものは全くなかった。

◆開元観

開元観は博物館の裏手にあり、この道観の名前は唐代開元年間に創建されたことに因んで名付けられたという。現存の建物の由来は万暦年間とされているが、ここに置かれてい

⁽⁵⁾ 光緒六年刊重修『荊州府志』60巻の巻首掲載の図は、この荊州城図より簡略であり、光緒五年刊『荊州駐防志』16巻（遼寧大学出版社、1990年復印「清代八旗駐防志叢書」）は「満城全図」として満城の部分だけが掲載されている。なお同じ光緒五年刊『荊州駐防志』16巻を複印した2002年刊の湖北地方古籍文献叢書本には「満城全図」は掲載されていない。

る梵鐘を見ると、元代至大二年(1309)、明代万暦二十三年(1595)、清代康熙二十八年(1689)などの年紀が見え、歴史の古さをうかがわせる【写真 4-6】。

◆関帝廟

南門の近くに関帝廟(荊州関公館)は、関羽が荊州を支配した時分の屋敷跡であると称している。関帝廟の建築は明代洪武二十九年(1396)の創建であるが、儀門、正殿、三義殿と続く奥行きのある現在の建物は 1987 年の建築であり、古くから残っているのは三義殿の前にある万暦時代に植えられた銀杏の木だけだという。儀門に掲げられている乾隆五十三年(1788)御題の「澤安南紀」、正殿の雍正十年(1732)勅賜の「乾坤正氣」や同治御賜の「威震華夏」の匾額が、この関帝廟は清代には旗人の尊崇を集めていたことをうかがわせる。

◆玄妙観

大北門にまわり玄妙観を訪れた。本殿に相当する玉皇閣は万暦十三年(1585)の重建であり、至大三年(1310)に欧陽玄が撰文したという石碑が残っている。置かれている梵鐘には、康熙三十三年(1694)に「大清国湖広荊州府江陵県城内外居住」の人々が鑄造して寄進したことが鑄込まれていた。玉皇閣を補修した寄金名簿を刻んだ同治五年(1866)の年紀がある「玉皇閣碑記」の中に、荊州地方の漢人官僚と共に「満前任四川副都統全亮、鑲藍旗佐領裴霖阿」などの満洲人の名前が見え、玄妙観にも旗人が詣でていたことを偲ばせる。

荊州は楚の文化を誇る地であり我々の求める旗人文化については、それを伝えるものがほとんど見当たらなかった。中国東北や北京一帯はともかく、今まで訪れた杭州、福州、広州、貴州、昆明などでも同様である。あるいは武漢で始まった辛亥革命、滅満興漢の流れの中に、満文碑文など満洲＝清朝＝旗人文化を顕示するものが排除されてしまったのではなかろうかと考えながら武漢に戻った。

3 武漢

◆辛亥革命博物館

博物館の正面広場には孫中山(孫文)の銅像が建ち、「武昌起義軍政府旧址」(全国重点文物保護単位)の標示が出ている。説明版には辛亥革命の勃発と共に清末に建てられた湖北諮議局が「中華民国軍政府鄂軍都督府」(紅楼)となり、この場所で宣統年号を排除して中華民国の設立を決めたことが記されていた。残念なことに停電のため展示館などは休館で、記念品の展示は見られなかった。その他に武漢では黄武二年(223)の創建で「天下江山第一楼」と唱われている「黄鶴楼」を訪れ、最上の五階から長江を遠望し、11 日夕方、2 泊 3 日のあわただしい滞在を終えて成都へ向かった。

4 成都

成都では、劉氏が八旗研究と同様に熱意を持って調べ記録している「知識青年」の仲間に迎えられた⁽⁶⁾。巴蜀の呼称が示すように、四川地方は巴(重慶)と蜀(成都)が歴史の中

⁽⁶⁾ 成都では劉氏の「知識青年」の仲間、四川省美亜旅游公司董事長吳榮輝氏をはじめとする方々に、情

心である。しかし史跡としては、成都市内には諸葛亮の祠堂である「武侯祠」⁽⁷⁾、詩聖と称えられる杜甫の故居である「杜甫草堂」、唐代に始まる道観である「青羊宮」が、郊外には広漢市にある3千年前の墓葬から出土した縦目の青銅器仮面で名高い「三星堆博物館」、B.C.3世紀に始まったという岷江の治水事業「都江堰」、道教の聖山「青城山」などが名高く、ここでも清朝・八旗史跡の影は薄い。

4.1. 成都駐防の歴史

清朝では順治三年（1646）に四川巡撫を成都に、川陝総督を陝西に設置し緑営軍を配置したが、八旗軍を駐屯させたのは康熙六十年（1721）と遅い。すなわち康熙五十六年にジュンガル部のツェワン・アラブタンのチベット侵攻に対抗するため四川の軍事力増強を図り、翌五十七年に荊州駐防の満洲軍 2,000 人を成都に移動させたのを始めとして、その後も増強を続け、蒙古旗人を含む 3,000 人がここに駐屯、乾隆四十一年（1776）には将軍も設置され、チベットをも視野に入れた中国西南部を支配する拠点が形成された。成都駐防の将軍や副都統以下の官員と兵丁数について『欽定八旗通志』巻 35、兵制志 4「八旗駐防兵制」には以下のように見える。

成都将軍一人・副都統一人。協領五人・佐領十九人・防禦二十四人・驍騎校二十四人・八旗蒙古委前鋒校八人。前鋒一百十二人、領催一百二十名、驍騎一千七百四十四名、礮驍騎四十名、歩兵二百五十六名、養育兵二百四十四名、弓・箭・鉄匠各三十二名。

すなわち将軍より前鋒校に及ぶ官員が 82 名、前鋒から養育兵・鉄匠に及ぶ兵丁が 2,376 名、満蒙旗人の総計は 2,400 余名で、荊州駐防の半分程度の規模であった。

4.2. 満城（少城）

成都駐防は荊州駐防と同様に旧来の成都城を東西に区切って西側を満城すなわち旗人の居住区としたが、元来の成都の都城全体を大城（太城）と称し、太城に対して満城を少城と称していたという。満城の中には将軍衙門などの役所、八旗の兵営、見張り所、兵器や火薬庫、練兵場、寺廟や祠堂、八旗官学、書院などが設けられていたが、満城とそこにある兵営や住居などは四川に所属する州県が負担して建築したという。満城はカマキリの形に似ていて、南から北にむかい頭の部分に将軍衙門、体に相当する部分には長順上街・中街・下街が続き、足に当たる部分に東街と西街があつて、長順街の東が左翼で西が右翼の左右翼を形作っていた。

成都駐防は満洲旗と蒙古旗を混ぜた編成で、毎旗は 3 つの甲（佐領）に分かれ八旗合計は 24 甲編成、各旗の頭甲と二甲は満洲、三甲は蒙古で編成されていた。旗人の住宅は甲を単位とし分給されていたが、その土地の広さは旗によって相違があった。すなわち正黄旗・鑲黄旗・正白旗の「上三旗」は満城の北側に在って比較的広く 80～60 m²、鑲白旗・正紅旗・鑲紅旗は「中三旗」と言い 60～50 m²、正藍旗と鑲藍旗は「下二旗」と言い満城の南側の金河以南に置かれていて、土地は広いが低湿地帯であった。そして馬甲の住宅地は歩甲に較べてやや広いのが一般的であった。

報の提供、車の提供や手配、蔵族自治州への連絡など大変お世話になった。この事を記して感謝の意を表する次第である。

⁽⁷⁾ 武侯祠の諸葛亮殿の匾額「名垂宇宙」は允礼の書であり、その他に完顔崇実の書いた匾額など満洲人の匾額が掲げられている。『成都武侯祠匾額対聯注釈』（成都武侯祠博物館、2004 年）参照。

4.3. 満城の変貌

民国二年（1913）に八宝街から老西門に至る満城の北側城壁が取り壊されたのを始めとして民国十年と二十四年に満城の城壁は全てが取り壊されてしまった。それと共に、某々「衚衕」（胡同）と名付けられていた満城内の街路は、胡同は北方の、清朝の名称であるから改名しようという運動が始まり、やがて今の名称に改められたという。そのいくつかの由来を紹介する。

◆長順街

満城内を南北に走る幹線道路で昔は街の名前はなかった。辛亥革命の後に通順街と名付けられたが、大城内にも似た名前の街があって間違いやすいため、「長久通順」の意味のある長順街に改められた。

◆同仁路

満城西面の城壁に位置していたので西城根街と呼んでいた。民国初年この街に工場を開設して八旗の子弟に技術を学ばせ生計の助けとした。工場は「一視同仁」の意から「同仁教養」工場と呼ばれたが、それに由来して同仁路と名づけられた。

◆支磯石街

この街は君平胡同という名前であったが、民国時代に街路の入り口に置かれていた「支磯石」と呼ばれた石の塊に因んで改名された。1958 年になって文化公園に移されたこの石は、織女の機織りの塾石であるとか、天から降ってきた隕石であるとか、様々な言い伝えがあったが多くの人は古蜀の大石文化の遺物と考えていた。

◆井巷子

この街は、最初は如意胡同と呼ばれたが、街の入り口にあった明德坊に因んで明德胡同と改められ、民国時代の改名に際して担当者が街に井戸があるのを見て井巷子と名づけた。

◆寛巷子

以前は仁里頭條胡同と呼ばれていた。辛亥革命後に改名しようとしたが良い名称が思いつかないままに、ある人がこの衚衕は両側の衚衕に較べて広いことを見つけたことから、あっさりと寛巷子という名前に決まってしまった。

◆窄巷子

この街は仁里頭條胡同の隣にあり仁里二條胡同と呼ばれていたが、民国時代の改名の時に隣の街に較べて狭いことから窄巷子と名づけられた。

◆西勝街

将軍衙門の西側にあったので右司胡同と呼ばれていたが、民国初年に辛亥革命で勝利したことを記念して今の名前に改められた。

4.4. 辛亥革命と成都駐防⁽⁸⁾

◆人口

成都駐防は、本来は駐防兵が3年で交代する「三年一換」の原則であったが、交通が不便であり交代制は実施されずに長期駐防に改められ、駐防旗人 2,400 余人が家族を携えて駐屯することとなった。ただ設置されてから 100 年間は頻繁に外部へ遠征していたことなどから旗人人口は余り増加せず、嘉慶時代の戸数は 2,150 余戸で人口は 10,990 余人であった。光緒三十年（1904）の調査では戸数 5,100 余戸で人口は 21,000 余名（男 12,000 余名で女 9,000 余名）であった。辛亥革命後になると、旗人は生活のために成都から外に出たので人口は激減し 3,000 人ほどになってしまったが、この 50 年余りで回復して 2000 年に行われた「第 5 回全国人口調査」では 11,400 余人（満族 6,000 余人、蒙古族 4,000 余人）となっている。成都駐防旗人の後裔である成都の満族と蒙古族は、成都の少数民族の中で多くの割合を占めている。現在彼らは以下にあげるような特徴がある。

◆自治組織

1957 年 1 月 13 日、成都市西城区第五中心校（今の少城中学）を会場に、成都市民族宗教事務委員会の指導で満族と蒙古族の自治組織である「成都市満蒙人民学習委員会（学委会）」が成立した。学委会が置かれていた黄瓦街 53 号には、古風な高い塼をめぐらせた黒漆の大門の上に繁体字で「少城組合小学校」と書かれ、門柱には繁体字の「成都市満蒙人民学習委員会」の左右に満洲文字と蒙古文字の 3 体で記された看板が掛けられていた【写真 4-7】。学委会は近くのビルに移転したが、新しい建物には簡体字で「成都市満蒙人民学習委員会」、満洲文字で「manju」モンゴル文字で「mongyol」と記されていた【写真 4-8】。

◆学校と財産

清朝は入関以後に騎射を重視すると共に旗人教育の普及に力を入れた。成都でも乾隆時代に八旗官学と 24 甲の各甲に設置した八旗小官学、後には少城書院と八旗義学を設立した。学校の経費は募金、地代収入、馬価銀の貸し付け利息などで賄い、八旗の子弟の教育費は免除が原則であり、優等生には物品を与え貧困な学生には学費を援助していた。民国時代になって八旗の学校制度は改正され、八旗初等小学堂、八旗初等女子学堂、24 カ所の牛泉小学（小官学）、八旗義学は総合されて組合小学となり、後には少城小学と改められた。1941 年に省立少城小学校校産管理委員会が成立し、50 年代の末になって全ての学校財産は学委会の管理に移管されて今に至っている。すなわち現在の少城中学がそれである。

学委会が管理する不動産は、成都市内にある建築物の総面積が 10,716.09 m²、住宅が 115 軒分（建築面積 6,285.49 m²）、営業、事務、学委会事務室、公墓遺骨保管室などの住宅以外が 84 間（建築面積 4,430.6 m²）、公墓の土地が 2,756.9 m²、学校の運動場になっている空き地が 3,824.19 m²である。

◆相互扶助

民国時代に省立少城小学校校産管理委員会は満・蒙族の学生に奨学金を提供した。その後学委会が成立すると、貧困家庭の満・蒙学生に対して家賃収入の内から書籍代の補助を行ったが、1982 年から会の収入が増えたので、奨学金支給規定を定めて現在に至っている。この事は学生の学習意欲の向上に役立っている。学委会は学期ごとに成都の優秀な満・

⁽⁸⁾ 以下の成都駐防の歴史や現在については截選（張天民修訂整理）「成都満蒙族歴史沿革及現状」（『工作滙報』総 28-29 期合刊、成都市満蒙人民学習会、2003 年）を参考にしている。

蒙学生に奨学金を出しているほかに、省の試験で1～3位の者には奨励金を与え、大学と専門学校を受験する満・蒙子弟に援助金を与えている。その他に満75歳以上の満・蒙族人に毎年、重陽節と春節には慰問金を贈り、孤児や寡婦などの生活困窮者には援助をしている。

4.5. 満城（少城）の現状

丹巴と金川の探訪後に成都へ戻り、旧満城を中心にあちこち歩き回ってみたが、満城が在ったことを示す跡はほとんど失われている。清代の満城は楼閣が建ち並び古木が鬱蒼と茂る静かな街並みであったが、辛亥革命後には誰でも入れる場所となった。そのため外からやって来た商人が質屋を開き旗人の財産を買い付け、軍閥や豪紳の劉湘、楊森、田頌堯、李家鈺などが自分の公館を設けるなどして一変してしまったという。

◆人民公園

現在なお満城の痕跡を示す地域は人民公園付近、寛巷子、窄巷子の二つのみであるという。成都市少城路の南側にある人民公園は、満城の南端にあたり面積は百畝余りである。旗人の生計が苦しくなった清末に、鑲紅旗満洲旗人で宣統三年に成都將軍となった玉昆が、旗城内の富裕な旗人の庭園を一緒にして「少城公園」を開設、公園に花や樹を植え鳥や動物を飼って動物園を造り、中に茶畑や商品展示所を設け、この入場料収入で貧困旗人を救済した。この公園は50年代に「人民公園」と改称された。

◆寛巷子と窄巷子

寛巷子と窄巷子は旗城の中心街を何10mかの距離を置いて平行に走っていた通りであるが、成都では「寛巷子不寛、窄巷子不窄」と言われているように、二つの通りの広さは大差ない。寛巷子には八旗官員が、窄巷子には八旗兵丁が住んでいたため、寛巷子では建物が高くそびえ立ち人は少なくきれいだったので、通りは広く見えた。一方の窄巷子は兵丁など庶民が集まる街で、通りには飯屋、床屋、料理屋、洗濯屋などが建ち並んで道を塞ぎ賑やかだったので自ら狭く見えたという。窄巷子の住民は寛巷子の住民のところで仕事をして収入を得る、寛巷子の人は窄巷子の人に手助けしてもらうというように、寛巷子が主人で窄巷子が従者という相違があるものの、両者は互いに依存しあっていたという。

満城の面影が残る寛・窄巷子に出向き、そこかしこで1碗3元の成都のお茶＝花茶を飲み、竹の椅子に座って日の光を浴びてくつろいでいる年配の人々を目にしたが、これこそ古都成都の光景なのだという。

2003年に成都市政府は寛巷子と窄巷子をめぐる重大な方針を決定した。それは元来の満城の西側にあたる同仁路を「古建築街道」として、寛巷子と窄巷子を歴史文化の街道に整えて保護する。そのために、この地域の住民は全員移転させ、古い家並みは歴史的な街並みに作り替え、その後に住民を戻すというのである【写真4-9】。今の街並みが建て直された後の寛・窄巷子の様子がどうなるか、建て替えて利益を貪る人々が住民や世論の非難を一時的に避けるための手法であろうと、多くの人々が疑問のまなざしで見ているという。

大規模な取り壊しが次々に行われていて、すでに多くの屋敷が空き家になっていた【写真4-10】。次回に訪れた時に満城の歴史の証は跡形もなくなっているのであろうかと、まだ残っている古い邸宅の大門、門墩、馬繋ぎ石、古い牆、反りかえった軒先、軒に彫られた花模様等を見つけては写真に収めた【写真4-11】。

◆茶館にて

寛巷子 27 號に宋仲文さんが経営する茶館があった。宋さんは広い額に黒いフレームのメガネをかけた温厚な顔つきの年配の人、名刺には「寛巷子詩人」とあり民間詩人を名乗っていた。寛巷子の将来に思いをいたす宋さんは、茶館を訪れる人々から寛巷子に対する感想と署名を集めていたが、中国のみならず国外から訪れた人々の名前が見られるノートには老街への熱い想いと取り壊しへの不満が記されていた。

茶館に今も寛巷子に居住している満族の人がいて、彼の家の歴史を話してくれた【写真 4-12】。彼の父親はこの一帯の泡桐樹街に住み紅牆巷や西大街にも少なからぬ不動産を持っていた。父親には3人の夫人がいて、彼は第三夫人の子供で11人兄弟であった。父親は不動産を次々に売り払ってしまい、解放当時はほとんど無くなってしまっていた。買ったのは旗人もいたし漢人もいた。解放後には寛巷子の西の端に住んでいたが、その住宅は北京の北京四合院と同様に、北側が正房で南に門があり、正房の両側には廂房、中央には客庁があった。正房には「賽蘇里」と書かれた横額と「郝」字と「墨」字で始まる対聯が掛けられていたのが印象に残っている。後に大邸宅を売り払って小さな家に移ったが、小さいといっても十数部屋があって大家族と一緒に暮らしていた等々である。限られた時間で聞いた話であったが、成都旗人の転変がうかがわれよう。

寛巷子と窄巷子が取り壊され、住民が散り散りになってしまったら、ここの歴史も消えてしまうのであろうか。そうなると満城の歴史は東・西・南・北校場、驛馬市、羊市、老東城根街、祠堂街などの地名に残るのみになってしまうのであろうか。

◆黄瓦街

学委会の置かれている黄瓦街にも旗人の歴史がある。黄瓦街の入り口には説明書きが掲げられており、それによれば、東は商業后街中段、西は長順中街に及ぶ黄瓦街の両側には、ここは清朝時代に松柏胡同と呼ばれ、平屋建ての建物、紅い塼、緑の瓦の街並みが旧時の風貌を偲ばせている。街並みの由来は財産家が破産してしまい、やむなく古い廟に使われていた紅い磚と黄色の瑠璃瓦で塼を築いたことから黄瓦街の呼び名が始まったという。しかし新しい建築が続く今では、「紅磚黄瓦」はほとんど見つけられなかった【写真 4-13】。

1998 年 7 月に、チベットで遊んだ帰りに成都に立ち寄り、杜甫草堂で「成都旧城壁図」の掲示を見つけ、新築同様に修理されてしまった城壁、その周辺に老城牆の地名が残っていることを見つけたが、このたびは足を運ぶいとまがなかった。

5 雅安市上里古鎮

呉栄輝氏自らが運転する車で、成都の北 30 km ほどの広漢市にある「三星堆博物館」を案内していただいた。さすがに見応えのある博物館で見終わった時は昼近くなっていたが、続いて雅安市にある明清時代の村である上里鎮に行こうという。上里鎮は広漢市とは逆の方向で成都の南西 110 km ほど雅安市から今度は北に向かい 26 km 行ったところにある。幸い雅安までは最近高速道路が通じたので、広漢市から 1 時間半ほどで到着した。途中は山の彼方まで行けども行けども菜の花畑が続く。日本でも菜の花畑を売り物にする観光地があるが、ここはスケールが違う。ただこの景観は 10 日余りとのことなので、こんな光景を見ることが出来たのは幸運であった。

雅安市雨城区に属する上里鎮は、四川や雲南からチベット、青海に通じる古の茶馬古道の駅の一つであり、1982 年に四川省はここを歴史文化名鎮と命名している。川の流れる

丘陵、田園の中にある農村で狭い通りに木造の「吊脚楼式」建築の家並みに明清時代の農村集落の面影が残っているという【写真 4-14】。上里鎮の主要な史跡は古橋、牌坊、古い住宅、古塔であるとのことであったが、時間のない我々は古橋と住宅を見て回った。

5.1. 古橋

◆「二仙橋」と「宝塔」

上里鎮には古橋が 10 余座残されている。これらの橋は今も往来に使われているが、それと共に古鎮の歴史、昔の架橋技術を示してくれる。その代表が「二仙橋」であるが、この橋は乾隆時代に当地の名望家である楊氏の始祖楊銀蘆の玄孫である楊毓柏が架けたもので、毓柏の架橋に要した大変な努力と真心に感じた 2 人の神仙が協力して完成したという伝説があり、それに因んで橋の名称が二仙橋となったという。

半円形の高いアーチ型の二仙橋は、橋の上部に龍頭が、橋のたもとに宝塔がある【写真 4-15、4-16】。宝塔の中に祭られた 2 人の神仙が夜になると虹に化す龍を鎮めているので、今に至るまで災害が起きないのだという。橋のアーチ中央と宝塔には、白い幟（東チベットに多いタルシンだろうか）が掛けられている。2 段に分かれた宝塔の神龕は、上の神龕には黄色の着物と帽子をつけた高僧が、下の神龕には官服官帽をつけた座像が見える。白い幟や二つの像は当地の民間信仰とチベット仏教が混じりあったものと思われるが、「茶馬古道」による雅安地方とチベットの往来、文化の交流の表れでもあろう。

宝塔には楊氏の祖先が、水害が起きるたび、乾隆十三年（1748）、十八年、四十一年に橋を重修したことが記されているが、この碑文を刻した年代は記されず、塔がいつ造られたのかについては不明であった。

◆楊氏

二仙橋を架けた楊氏の歴史を「楊氏古譜」は以下のように伝えている。北宋が滅びた時に楊氏は武を捨て文の道に入り各地に分散した。明末、張献忠の支配で人気の絶えた四川に、清朝順治帝は湖北・湖南などから移民をさせたが、楊氏の始祖の楊銀蘆と妻の丁氏は湖北の麻城県孝感郷から四川の嘉定府夾江県牛仙郷九皇廟に移り、その後上里鎮楊家溝にやって来た。上里鎮に居してから 300 年余り 20 数世代を数え、分家した子孫は雅安の各地に 2 千人を超えている。楊氏は読書、教育を重視したので、科举官僚となり二品から八品の官位を占めた者が合わせて 72 人に及び、2003 年には「第一回楊氏宗親大会」が開催されるなど当地の名族であることを誇っている⁽⁹⁾。

5.2. 韓家大院

上里鎮の歴史的邸宅の代表が韓家大院で、山裾にあり河に面し三日月の形をした小山と竹林の間に隠れた邸宅は「七星抱月」と称するようである。邸宅に赴くと、大院大門には青地に黄字で記した「衛守府」の額が掲げられていた【写真 4-17】。韓家大院の房屋には、それぞれに名称が付けられていて、街道に通じる房屋は「接待堂」、奉旨の匾額「旌表節孝」や「採草梭鏢」の匾額が掲げられた正堂は「貞節堂」、習武の場所は「武魁堂」などである。祠堂の中には黒地に黄字の匾額「介景福」が掲げられ、その下には四世祖の韓璉の画が貼られていたが、線も色もはっきりしている墨絵は最近画かれた事を推測させる。韓家大院の建築は康熙三十二年（1693）に始まると称しているが、道光年間の著名人であった韓大成時代の建築のうち、民国時代にあった上里鎮の大火で焼け残った一部が今に伝わってい

⁽⁹⁾ 以上のことは 2003 年 3 月 8 日付『雅安日報』が伝えている。

るではなかろうか。

現存する房屋の柱、土台石、欄干、軒先などに古い面影を残している。窓枠、欄干、壁に施された彫刻は、二十四孝の故事を始め、神話、伝説、戯曲、民間習俗などを題材にした当時の工芸の粋を伝えるもののようである。

◆韓氏一族

「韓氏家譜」などに依拠したという説明文では、韓氏は山西省南部から四川に入って上里鎮で家業を営み、一族は官僚になったり商人になったりして富裕を誇ったようで、「韓家銀子」という言葉もあるという。韓氏一族は清代に文武拳人と官僚を輩出したが、特に習武の伝統があって、武將を輩出している。中でも韓耀文(号は韓大成)は、道光十二年(1832)に武拳人、翌年に武進士となり緑營千総になった。武進士に進んだ時に友人が「武魁」の匾額を贈り、清朝は彼の父親や妻の羅氏など一族に誥命を与えた、そして韓氏の後裔は韓大成が兵部尚書に進んだと称しているが、これは伝説であろう。

6 都江堰から丹巴へ

上里鎮を訪ねた翌日、龍虎山の創始者でもある張道陵が天師道を開いたとされる青城山の山上にある天師殿を訪れ、帰路に古代の治水技術を示すという都江堰を訪ねて都江堰市に1泊、3月14日、金川平定碑を求めて金川県を目指した。

成都から金川へ赴くには、都江堰から北上して汶川や馬爾康を経由して大金川の上流に出て川沿いに下ってくる道と、都江堰から西に走り岷江の支流焼湯河を遡り、巴朗山峠を越えて小金川の上流である沃日河(下流で小金川と名前が変わる)・小金川を下り小金を経由して丹巴へ、ここから大金川を遡って金川に至るという二つの道がある。前者が那曲を経由してチベットへ出る大道であるが距離はあり、後者は4,500m近くの峠を越えるが距離は短く、峠を越えた先には秀峰四姑娘連峰のトレッキング基地となっている日隆があり宿泊も容易であるとのことから後者の途をたどった。

◆都江堰から日隆へ

都江堰から映秀鎮までは高速道路の工事中で旧道は掘り返されたままの悪路、加えて観光地で名高い九寨溝へ向かう大型バスの往来が多く遅々として進まない。四川省ではあるが東チベットの領域に属する阿坝藏族羌族自治州に属する映秀鎮で昼食休憩。ここから焼湯河沿いの谷底の道、兩岸には山頂まで2,000mはあろうかと思われる山稜が聳え連なっている。一带は「熊貓」(パンダ)を中心とする「臥龍自然保護区」、臥龍にはパンダの保護研究センターがあり、我々もここで一時を遊んだ。

◆巴朗山峠と幺娘峰

谷の奥にある鄭生からは九十九折りの道で高度を上げていく。上るに従い成都市区と阿坝藏族羌族自治州との境界をなす、標高5,000m前後の雪を頂き日に眩しい山並みが姿を見せ始め、4,000m付近の森林限界から上の草地ではヤクが放牧されている。やがて巴朗山峠4,485mに到着する。乾隆三十六年(1771)の小金川への遠征で記されている「巴朗拉山梁」(拉は峠)とは、この峠を指すのであろうか⁽¹⁰⁾。峠にはチベット文化圏では常に見る、仏

⁽¹⁰⁾ 「乾隆三十六年、將軍溫福征金川。令將成都駐防兵四百人從攻巴朗拉山梁、與烏什哈達督兵自山右

塔チヨルテンに見立てた岩塊に、経文を印刷した旗タルチヨを結びつけた竹竿を立て、タルチヨが風に舞っている【写真 4-18】。峠の西側は大渡河（上流で大金川と名が変わる）流域の支流である沃日河（下流で小金川と名が変わる）の源流地帯、北緯 31 度と中国でも南に位置するものの標高 4,000m を超えているだけに先日降った雪が凍結している。我々の目指す日隆から峠への登り道が各処で凍結していて、途中で立ち往生している車が多く、狭い道ではすれ違いも出来ないままに寒風の吹き抜ける峠で 2 時間以上待たされる。日の長い四川でも日がかげり始めた 19 時過ぎにやっと出発、我々の車も時々スリップしながら標高で 1,500m ほど下って 20 時過ぎに日隆へ到着、ここの案内を引き受けてくれた張さんは 3 時間余り待っていたとのことであった。

翌日、パンダを守るために豹と戦った美しい四人の姉妹が四座の秀峰に化したという伝説のある、末娘の峰「幺娘峰」6,250m が主峰の四姑娘山麓に切れ込む長坪溝から「唐柏古道」を歩いた。谷へ入る丘には文化大革命で破壊された僧院が無惨な姿をさらし、白いタルシンや五色のタルチヨが今でも神聖な場所であることを示している【写真 4-19】。折に触れ目にする文革当時の破壊を、歴史書の書き換えと同じ次元でとらえるのは、清朝～中華民国～中華人民共和国を重ね合わせた思い過ごしであろうか。

◆日隆から丹巴へ

前日、日隆に到着してから、沃日河を下り丹巴へ通じる道は不通なので小金に近い労営から撫辺河沿いに北上して馬爾康へ出なければ大金川流域には入れないと伝えられた。迂回路をたどるとなれば今日は悪路を 300 km 以上走る行程、朝食抜きで出発し小金を目指し沃日河右岸沿いに高度を下げていく。やがて長征の時に紅軍が山越えてたどり着いた達維を過ぎ、その下流にある沃日に 7 時半到着。ここには高い石碉とそれに付属する建物の残る「沃日土司官寨」があり、一時を過ごす。やがて馬爾康への分岐路のある労営に到着。この付近から紅軍の長征時にも使われた「猛固橋」などが保存されている。ほどなく小金に到着して丹巴へ直接行くことが可能との情報を聞き安堵する。これで今日 16 日は金川平定碑を探し丹巴で宿泊、明日 17 日は碑文探しの予備日と丹巴周辺の史跡の探訪、その後は小金まで戻って宿泊、明後日 18 日に小金から往路をたどって一日で成都へ戻る目途が立った。

◆沃日土司官寨

丹巴を中心に東チベットに広がる石碉を初めて目にしたのが、州級文物保護に指定されている「沃日土司官寨」である。乾隆十二年（1747）に清軍が小金川の土司沢旺と共に沃日の三寨が降り大金川に攻め込んだことが記されている⁽¹¹⁾が、ここがその沃日なのであろうか。兩岸は高く聳えた山々に囲まれた狭い谷間の対岸に、順治年間に起源があるとされる四角形の石碉と経楼が建っている【写真 4-20】。以前は今残る石碉の東側にも六角形の石碉がもう一つあったが、文革で破壊されてしまったという。確かに『平定金川戦図冊』所収の「収復小金川」と題された画にも 10 本余りの石碉が見られる⁽¹²⁾。今残っている石

登、奪卡六。再戰、官達色發敵毀賊碉、戰三晝夜、克之、賜號巴爾丹巴圖。」『清史稿』卷 333、列伝 126 官達色伝。

(11) 「乾隆十二年六月丙子、小金川土司澤旺率衆降、並歸沃日三寨。官兵進勦大金川、攻毛牛及馬桑等寨、克之。」『清史稿』卷 11、高宗本紀 2。

(12) 2 度にわたる金川平定戦争の後に、乾隆帝は『平定金川方略』『平定両金川方略』を編纂すると共に、

礪は底辺がほぼ 6m 四方で十三層造り、先端になるほど狭くなり、高さ 37m ある。長い間風雨にさらされてきたので、破損した箇所もあり崩壊の危険もあるようで「危険」の標示が出ていた。高く聳える石礪の下には、1945年に再建されたという五階建て経楼がある【写真 4-21】。経楼の壁は石積みだが、反りかえった軒と瓦葺きの屋根で、チベット風と漢族風が入り混じった建物である。土司官寨から数 100m 離れた山の上に望遠できる城壁は清代に築かれたものであるという【写真 4-22】。このあたりから沃日河・小金川沿いのあちこちに石礪が見受けられた。

◆猛固橋、馬鞍橋、三関橋

小金（旧名は懋功県）県城の西 7 km に猛固橋と馬鞍橋がある。沃日河に架かる「猛固橋」は清代の木橋を民国二十一年に民衆の寄金を集めて 6 本の鉄索に木の板をわたした橋に架け替えたもので、長さは 25.5m、広さは 1.68m だとのこと。今使われている橋と平行に少し上流に保存されているが、橋のたもとにあるアーチ型の橋頭の門額には南側に「長平」、北側に「猛固」と刻まれていた。

この沃日河に北側から急流で流れ込む撫辺河（上流にある撫辺鎮を經由して馬爾康へ出る道がある）に架かる橋が「馬鞍橋」で、この橋も清代の木橋を猛固橋と同じ民国二十一年に寄金を集めて鉄索橋に架け替えたもの。長さ 30m に幅 1.65m とあり、橋頭の門額には北側に「伏龍」、南側に「馬鞍」とあり、併せて懋功県長による竣工題記が記されている。

急峻な谷間を流れ下ってきた沃日河は、達維河や撫辺河を合わせて小金川と名を変え、丹巴で大金川と合流する。丹巴への道は美興鎮の西南で小金川を左岸に渡るが、ここに架けられた橋は小金、金川、丹巴三県を往来する関門を意味する「三関橋」と名付けられている。小金川本流の橋だけに幅 1.8m、長さ 48m と大きな三関橋は、乾隆四十一年（1776）に始まる木橋を民国十二年（1923）に 11 本の鉄索を渡した鉄索橋に架け替えられたもので、橋頭の南側に「魚鱗閑關」、北側に「靈巖鎖江」の門額が掲げられていた。これらの橋のたもとにあるチョルテンとタルチョは、ここが通行の安全を祈念する必要がある危険な場所であることを示している。沃日河・小金川沿いに住む人々は、絶えず土砂や岩石が崩落する急峻な兩岸、狭い谷間に流れる急流など天然の要害に守られていて、清軍が金川平定で手を焼いたのも、紅軍が橋をめぐる激しい戦闘を行ったのも肯ける。

◆紅軍一・四方面軍会師遺址

小金川の河傍にある小金県城美興鎮は紅軍の長征をめぐる歴史的な場所である。小金川流域の交通網の掌握をめぐる「三関橋」などの争奪戦が紅軍と国民党軍の間で繰り広げられている一方で、毛沢東や周恩来などの紅軍第一方面軍が大渡河流域の瀘定から大雪山系の夾金山を越えて沃日の上流にある達維に到着、1935 年 6 月 16 日の夕方に小金県城で、この一帯を手中に収めていた張国燾などの第四方面軍と合流に成功、体勢を立て直した後に毛沢東などは北上を続け、四姑娘山塊の西側を越えて岷江上流域の松潘へ向かって長征を続けている。

小金県城の広場には紅軍兵士が握手する合流記念碑と像が建てられ、近くにある民国八年（1919）にフランスの宣教師が建てたカトリック教会は、毛沢東・周恩来・朱徳などの宿舎となり合流記念会を催した場所であり、「長征時紅軍一・四方面軍会師遺址」と題して省級文物保護単位に指定されている。

金川戦の様相を宮廷画家徐揚等に画かせており、その『平定金川戦図冊』に収められた画に石礪の様子を見ることが出来る。故宮博物院編『清史図典』第 6 冊（紫禁城出版社、2002 年）を参照。

7 丹巴

小金からさらに西へ 70 km 余り走って丹巴大橋を渡ると丹巴县城章谷鎮（章谷はチベット語で「岩石の上の街」の意とのこと）である。丹巴では本流であり北から流れる大金川、我々がたどってきた東から流れ込む小金川、北西から革什札河、南西から東谷河と 4 つの河が合流し、ここから下流で大金川は大渡河と名前を変えて流下する。大渡河沿いに南下すると清代の打箭爐（現在の康定）を経てチベットへ至る道もあり、丹巴は古から交通の要衝の街である。兩岸が切り立った谷に沿って延びる丹巴の街は、「美人谷」、「千碉古国」として知られている【写真 4-23】。

◆美人谷

小金（阿坝藏族羌族自治州）の西で甘孜藏族自治州に変わり、丹巴も甘孜藏族自治州に属している。行政区とは別に、丹巴一帯は羌族と嘉絨系に属する藏族が多数を占めているが、大金川流域の嘉絨系藏族は比較的低地（丹巴の標高は 2,000m）に住み、牧畜ではなく農耕を生業としているなど通常の藏族とは相違するという。気候、風土、生業に加えて、この元来の住民である康巴系藏族に外来の血すなわちペルシャ系とか西夏王国滅亡後の亡命貴族などの血が混じったことから美女が生まれるようになったと伝えられている。特に嘉絨の美女は有名で、毎年 5 月 21 日から 23 日に美女選びの「選美節」が行われているとのこと。はっきりした目鼻立ちの女性が纏う艶やかな民族衣装、折からの春の柔らかな日射し、薄いピンクの梨花が美人谷の雰囲気盛り上げていた【写真 4-24】。

◆石碉

丹巴地域は古い石碉が最も集中している場所で、「千碉古国」とも呼ばれている。この一帯には合わせて 3 千座余りの石碉があり、1 村の中に百座余りの石碉が建てられていた村もあるという。長い間風雨にさらされたこと、使用しないので日常的な手入れがされなくなったことから崩落したり、文革で人為的に破壊されたりしたので、現在残っている数は 160～600 座とはっきりしない。2005 年の丹巴県全県の調査では県内には 300 余りが数えられ、現在、一つ一つを記録し写真に収めて世界文化遺産に申請する準備をしているとのことである。

石碉が造られた時代と用途には不明なことが多く、いろいろな説がある。フランスの研究者が石碉に使われている木材を調べた結果、最も早いものは 1000 年前に建てられたものと推定している。石碉は石と木材を組み合わせで築き、四角、五角、六角、八角、十二角、十三角など様々な形があるが、基本的には下が広く上が狭い角張った塔である。高さは高いものになると 60～70m 余りに及ぶものもあるが、平均して 20m のものが多い。今、石碉の残されている場所は、村の中だけではなく山頂や両側が切り立った崖の上などであるが、石碉の建てられた場所から、石碉は戦いに備えた防禦用の「戦碉」、通信や警備を目的とした「了望碉」、「哨碉」、「烽火碉」、沃日のように土司の官寨として使われた「寨碉」、個人の家の「家碉」や「界碉」、「風水碉」などに分類されている。

大・小金川の戦争で険しい地形に多数建つ石碉の攻撃に手間取った清軍は、捕虜にした石碉造りの職人を北京に連れ帰り、北京西郊の香山に石碉を築かせ、八旗健鋭營の兵丁に石碉攻略を学ばせた。そのため香山一帯には石碉を築いた跡や石組みが残っている。そしてこの時に北京へ連れて行かれた職人たちは、八旗番子佐領に編成され現在の香山紅旗村附近に居住した。そのため彼らの後裔が建てる住居は嘉絨藏族の住居の特徴を伝えているとのことである。

◆梭坡郷と中路郷の石碕

丹巴一帯で最も多く石碕が残されているのは、章谷鎮から少し南の、大渡河左岸にある「梭坡郷」、東の小金川左岸の高台にある「中路郷」である。大渡河の右岸沿い道路から梭坡郷の石碕を遠望したが、河から高距 1,000m はあろう山並みからの傾斜地に、段々畑と石造り三～五階建てのチベット族の住居が広がり、そのあちこちに様々な形の石碕が点在している。『平定金川戦図冊』に見られるように、石碕は村の中に、切り立った溪谷の岩壁の上に、山並みの頂稜部にと至る所に見ることが出来る【写真 4-25】。

中路郷への道は修理中であつたが、幸い村まで赴くことが出来た。小金と丹巴の道のわきに石碕風の石積みで築かれ、チベット語・漢語・英語で「中路古遺址蔵寨古碕群」と記された看板があり、中路村には 2 km²内に 88 座の石碕があること、今から 3,500～5,000 年前の遺址と石棺墓葬群があることを記している。小金川左岸の急な斜面にジグザグにつけられた道を一気に 500m 余り高度を上げると、河岸というには余りにも河から離れた高い位置にある台地に中路郷が広がっている。ここでも山裾に広がる段々畑、満開の梨の花、緑の萌えだした木々、石造りの住居の中に石碕が点在している【写真 4-26】。

とある家を訪れると、ご主人の益西桑丹さんは甘孜州丹巴県文化館勤務で、中央民族学院芸術系出身、劉小萌氏とは同期生に当たる。5 月になるとお客が多くなるここで、観光旅館をも経営しているとのこと。居間で酥油茶（奶茶）と胡桃をご馳走になりながら話を聞いた。中路郷の住民は最も古い人で千年前くらいから、800 年前から外地「蕃」が多くなり、一番新しい住人でも乾隆時代からの人であるという。丹巴県には 300 をこえる石碕があり、この調査にアメリカ人とフランス人が入っている。益西桑丹さんも全ての石碕を調査し写真記録を作成したが、まだ出版には至っていないとのことであつた。

この家にも途中で折れてしまった石碕があるので中に入って見せてもらう【写真 4-27】。石碕の中には狭く急な階段がついていて、石碕から隣接した部屋にも入れるように加工されていた。一番下が家畜小屋、二階が客間、三階が居間、四階がタンカも掛けられた仏間で、その屋根の上には祭祀の飾りが付いている。石碕の上部から仏間の上に出るとタルチョが立てられていたが、同時にそこは絶好の展望台であつた【写真 4-28】。

8 金川平定碑

◆安寧郷への道

大金川・大渡河一帯は地震が多く崖崩れ地滑りの多発する地帯で、道路はしばしば通行不能になるという。我々も日隆で丹巴に入る道は通行止めと伝えられ回り道を覚悟したが、幸い丹巴の街へ直接到着することが出来た。しかし丹巴の中心街は大規模な地滑りで通行止め、1 日 7 回 1 回 10 分だけ歩行者の通行を許可している。我々も乗ってきた車を置いて、徒歩で中心街を通り抜け街の北側に出て、おんぼろのタクシーを雇って金川平定碑を探しに出向いた。

平定碑は大金川沿いで金川より南の安寧郷にあるとのこと。大金川右岸についている道はほとんど未舗装、対岸は急な斜面に開かれた段々畑、満開の梨の花（丹巴梨は名産品で清朝でも貢品として朝廷に納められている）、石造りの蔵族住宅、そして石碕とこの付近ならではの光景が続く。丹巴から 50 km 余り 2 時間ほどかけて安寧郷に到着した。石碑は対岸の左岸にあるが、幸い昨年完成したという自動車も通行可能な橋を渡って左岸に行く。村人に石碑の建つ場所を教えてもらったが、柵をめぐらし鍵を掛けてあるとのこと。劉氏は鍵の管理者を捜しに行き、管理者を見つけ石碑の場所を案内してもらう。彼はこれまで

台湾からの観光客が訪れたことがあるが、研究者の訪問は初めてという。

◆平定金川噶喇依碑

安寧郷は金川県の東南で丹巴県の境に位置し、清代には大金川安撫司の支配地で噶喇依土司官寨が置かれていた。乾隆四十年（1775）十二月、大学士阿桂が清軍を率いて大金川の最後の拠点となった噶喇依を包囲し、兵糧攻めにしながら昼夜を問わず砲撃、翌年2月に索諾木は一族、配下の族人や喇嘛を率い降伏、索諾木は北京に送られ処刑され、前後4年にわたった第二次金川戦争は終息した。『平定金川戦図冊』『攻噶喇依』には、大金川の左岸の山の上まで多数の石碣が画かれているが、今、周囲には石碣は見えない。

乾隆帝は北京の大成殿前に金川戦勝の記念碑を建てると共に、現地の美諾（今の小金県美興鎮）、勒烏圍（今の金川県勒烏郷）、ここ噶喇依（金川県安寧郷）の三ヶ所に平定碑を建てたが、ここ安寧郷以外は保存されていない。山裾が大金川に続く傾斜地の、川から60～70m上った段丘の上に建てられた碑亭の中に、金川平定碑は西向きで、大金川に面して建てられていた【写真4-29】。碑亭の前に「平定金川勒銘噶喇依之碑簡介」があり、ここが安寧郷炭廠溝であること、元来は噶喇依官寨のあった場所であること、石碑は乾隆四十一年（1776）に建立されたこと、碑文の高さは4.5m、幅は1.57m、厚さは25cmあること、碑文は表側に漢・満文で、裏面に蒙・蔵文で噶喇依を平定した戦功が（漢文で）480文字で記されていること、この石碑は大・小金川の戦争の歴史的証拠であり、戦役が終わった後に建てられた3本の石碑の中で最も保存状態の良いものであること、2002年に四川省人民政府は省級文物保護単位に指定し保護していることが記されていた。

碑亭の中の石碑は、簡介が記すように、表面に満・漢文、裏面に蒙・蔵文が記されている。碑面は、「御製」と記された碑頭をふくめて、文章が記されている部分は黒色の石碑、それに白い文字が陰刻で刻まれている。拓本を採って黒くなっているのかと思ったが、どうもそうではなく黒色の碑面らしいが、寡聞にしてこのような碑面は初めてである【写真4-30、4-31】。この石碑も文革の最中には碑面をコンクリートで覆って、その上に「革命烈士紀念碑」と書いて破壊を免れ、文革が終息した後にコンクリートを取り除いて現状に復したと伝えられている。

◆清朝時代建立の石碑

碑亭の下の方にある畑の中に二つの石碑が建っているのを見つけた。その一つは「？履康莊」と題された乾隆五十一年（1786）建立で、大金川に架かる橋を補修したことを記述した石碑、もう一つは「美繼前功」と題された道光九年（1829）に橋を補修したことを記述した石碑であった。二つの石碑は金川を平定した後のこの地方の状況を伝える史料となろうが、惜しいことにかなり破損している。紅軍は1935～36年にかけてこの地に滞在したが、二つの碑文の上に彼らのスローガンを刻んだので、元来の碑文を読み取ることが出来ない部分が多くなってしまっている。元の碑面の上に大書した「國民黨是帝國主義的忠馴走狗」、「中国」、「帝國主義」などの文字が読み取れる【写真4-32】。丹巴に戻る帰り道、馬爾邦郷でも道ばたに「乾隆？三年」の年紀である「徳政流芳」と題された石碑を見つけたが、この碑面にも紅軍のスローガンが刻まれていた。

おわりに

この先しばらく行けば金川県城に至るし、その途中で蔵族の村から漢族の村に変わるといので、もう少し先まで足を伸ばしたかったが、丹巴の街に入る最後の10分間の通行許可時間を逃すと、今夜の宿にも戻れなくなるので帰路を急ぐ以外に方法はなかった。あわただしく短い時間ではあったが、これまで知られていなかった平定金川石碑を見た満足感に浸りながらの帰路であった。

翌日は丹巴の周辺を探訪した後に、小金で1泊、18日新雪で覆われ凍り付いた巴朗山峠を再び越え成都に帰り着いた。

(原載：『満族史研究』第6号、2007年)

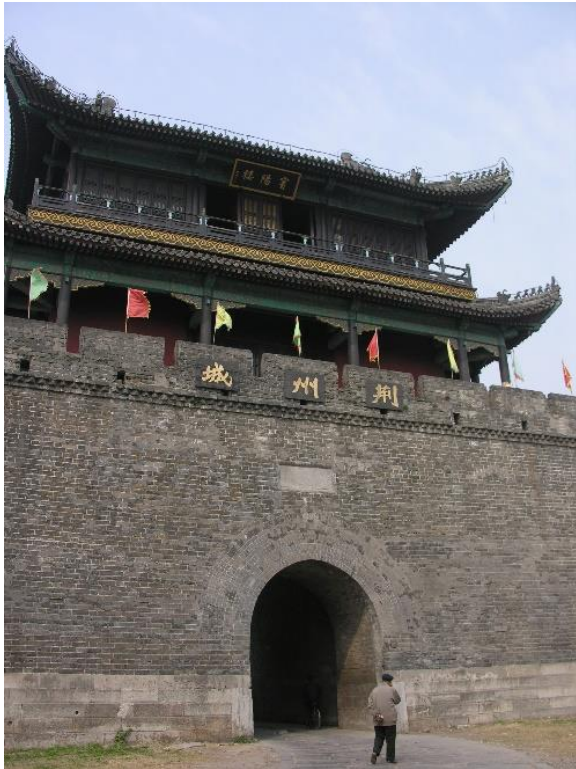


写真 4-1 荆州城東門

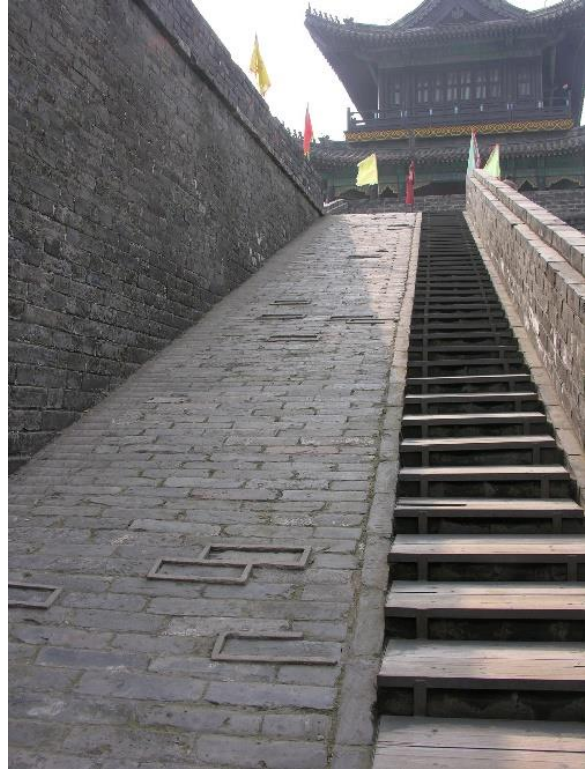


写真 4-2 城壁階段



写真 4-3 文字磚

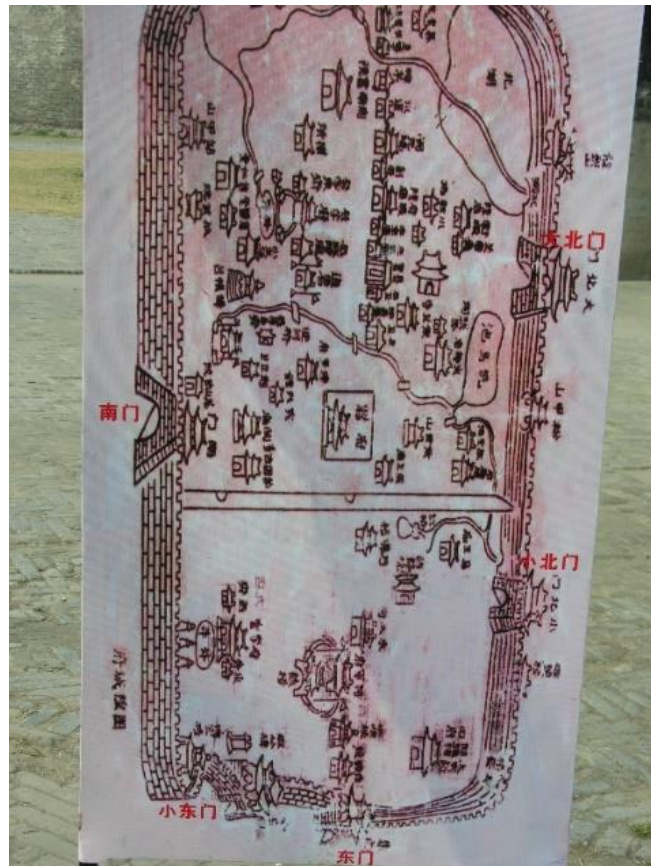


写真 4-4 荆州城圖



写真 4-5 東門の上からの内城



写真 4-6 開元觀の梵鐘



写真 4-7 成都市満蒙人民学習委員会



写真 4-8 新しい成都市満蒙人民学習委員会



写真 4-9 寛巷子と窄巷子の完成予想図



写真 4-10 空き家になった寛巷子



写真 4-11 大門のある古い邸宅



写真 4-12 茶館で聞き取りをする劉氏、左が宋さん



写真 4-13 黄瓦街



写真 4-14 上里鎮の家並み



写真 4-15 二仙橋と橋のたもとの宝塔



写真 4-16 宝塔



写真 4-17 韓家大院の大門



写真 4-18 雪の巴朗山峠



写真 4-19 破壊された僧院



写真 4-20 沃日土司官寨全景

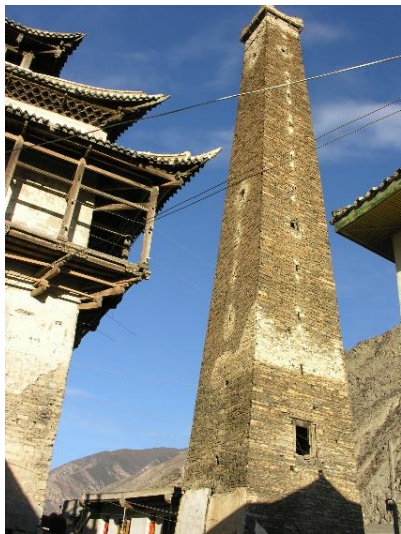


写真 4-21 石碉と経楼



写真 4-22 山上の城壁址



写真 4-23 谷底に広がる丹巴の街



写真 4-24 梨の花と民族衣装の女性



写真 4-25 梭坡郷の石碉群



写真 4-26 中路郷の石碉群



写真 4-27 石碯の石組み



写真 4-28 建物の最上階の屋根



写真 4-29 碑亭



写真 4-30 平定金川碑の表面（満・漢文）



写真 4-31 平定金川碑の裏面（蒙・蔵文）



写真 4-32 乾隆・道光朝の石碑

第5章

黄河と丹江をめぐって —潼関・龍駒寨・荊紫関—

はじめに

2008年3月25日から4月9日までの間、清朝・満洲族をめぐる史跡の探訪を目的に、北京から西安へ、西安から東南に秦嶺山脈を越えて河南省に入り、丹江をめぐる史跡を訪ね、南陽を経て洛陽に赴き北京へ戻る旅をした。旅の仲間はずっと同様に劉小萌氏、そして講義の合間を縫って西安の探訪に加わった張永江氏である⁽¹⁾。筆者が以前に西安を訪れたのは1991年8月のことであり、当時は今の西安博物館がオープンしたばかりで、見学できる史跡も限られていた。17年ぶりの西安の各地は、史跡の整備すなわち観光地化が進行し、場所によっては史跡として見るのに戸惑わされるものも少なくなかった。しかしその一方で、日本では知り得ない史跡の情報が入手し得る、未開放であった史跡が開放される、そして何よりも道路と交通事情が格段に良くなったことから、以前は訪れることができなかった場所も今では1日で往復してくることが可能となるなど、著しく進んだ現代化の恩恵に与る旅でもあった。

西安で、筆者は八旗制度を研究課題とする劉氏と張氏とともに、清代に満洲族が駐屯した西安満城を八旗研究の観点から見直すこと、清朝の国語であった満洲語碑文を探ることなどを調査課題としたが、満城の規模をうかがい知り、満・漢文「平定回部告成太学之碑文」に巡り会うことなどができた。満洲族清朝や八旗研究にかかわる問題は別の機会に記すこととして、本章ではこの時訪れた黄河を渡って山西省へと通じる風陵渡黄河大橋とここにあった旧潼関、南の長江流域の物資を西の西安へと運んだ丹江に沿う水運の街、龍駒寨と荊紫関について記すこととする。

1 黄河大橋と潼関

3月28日朝、西安の南門をくぐって東の郊外へ出た後に、国道310号線に沿う高速道路を走る。臨潼を過ぎると秦兵馬俑博物館へ32km、潼関へ110kmの標識が出てくる。この高速は潼関から黄河沿いに東に向かうためであろうか、山東ナンバーのトラックが多い。道路の左側（北）には渭水が流れ、右側（南）は秦嶺山脈の山すそ、左右には山あいには咲く桃の花、黄土台地を利用した洞窟住居の窑洞、無公害野菜の生産基地と記された看板を掲げた農地などが広がる春ののどかな眺めが続く。1時間余り走って秦東鎮で高速を下りると、黄河のほとり港口に到着する。

⁽¹⁾ 劉小萌氏は歴史学博士・中国社会科学院近代史研究所研究員、張永江氏は歴史学博士・中国人民大学清史研究所教授であり、お二人共々東北学院大学の客員教授をつとめられたことがある。



図 5-1 旅程図

◆ 港口

港口は小さなひっそりとした街であるが、港口付近には女媧の墓があるとの言い伝えや仰韶文化の遺跡などが示すように、古くから黄河と渭水をめぐり発展した場所である。また港口は陝西、山西、河南三省交界の位置を占める交通の要衝であり、今はここに山西省へと通じる「風陵渡黄河大橋」(橋を渡った対岸に山西省風陵渡鎮がある)が架かっている

【写真 5-1】。黄河大橋を橋の半ばまで歩いて見た。この橋は車と人間用であり、陝西省と山西省をつなぐ鉄道の橋が、今いる黄河大橋より少し上流に架けられているのが遠望できた【写真 5-2】。架橋に適した地形のためか、この橋の長さすなわち黄河の幅は数百メートルであろうかそれほど広くはない。橋の下には黄濁した流れが見え、河辺にはこの付近の名産「草魚」の養殖や料理の看板が見える。

水源から東に向かって流れる黄河は、甘肅省蘭州付近から北東へ流れ、内蒙古に入って東へ、そしてほぼ直角に曲がって南下し、港口の少し上流で再び直角に曲がって東進する。そして西安から東に向かって流れてきた渭水は、黄河が大きく曲がり東進する地点で合流する。このように複雑な流れを形成する黄河沿いの港口には、自然地形を利用した関門である潼関が置かれていた。

◆ 潼関

後漢から始まるという旧潼関と現在の潼関の街は場所がかなり相違する⁽²⁾。現在の潼関は三門峽水庫(ダム)のバックウォーターなどのために移動した後の街であり、時代によって相違するが、旧潼関は黄河大橋の南側から現在の潼関の東にかけて置かれていた。港口付近に築かれていた唐代の潼関を基礎に、明初洪武五年(1372)、南北に2門ずつ東西は1門ずつを備えた周囲6kmの城壁を築き、更に甕城や箭楼を増築、清代には明代の潼関城を重修、増建して近代に至っている。旧潼関の史跡は、部分的な城壁址、南門の門洞、水坡巷にある民間住宅、城を取り巻いて築かれた烽火台が残るのみであるという。潼関は交通の拠点であるだけに、明朝覆滅の軍を起こした李自成軍と明軍との戦い、日本軍の潼関爆撃、紅軍と国民党軍の争奪戦など、数多くの攻防が繰り広げられた場所でもある。

黄河大橋を後にして黄河沿いに現潼関へと向かう途中に城壁址が残っていた。地元の人は「土圉子」(村の城壁)というが⁽³⁾、磚で築かれた構造と規模から見て旧潼関の城壁の一部であろう【写真 5-3】。

潼関の街に向かう道が河を離れて山道にさしかかると、山の上に烽火台とそれに続く城壁が見えた【写真 5-4】。潼関を取り巻く烽火台は十数個築かれていたので、これもその中の一つであり、潼関が要衝であったことを示すものである。

現在の潼関の街を訪れたが、ここには昔を偲ばせるものは何もなく。草魚料理で遅い昼食をすませて出発、途中で中国五岳の一つに数えられる華山に立ち寄り西安への帰路についた。

(2) 潼関については、姚允文・胡長坤『千古潼関』(三秦出版社、2005年)を参照した。

(3) 華北の農村について、福武直氏は平野義太郎氏の「土地の開発を目指して協働する必要と匪賊に対する共同防衛の要素とが…やや大型の村落に聚落せしめ、この聚落の周囲には土壁を繞らして、城郭の様相を帯びしめる」を引用しながら「治安の悪い地方には土圉子をもつ村落が多く、土圉子がなくとも各家の圉壁が連続しているために之等が村の土壁をなしている。」と指摘している。福武直『中国農村社会の構造』(大雅堂、1946年)の第2部「華北村落の構造」、第1章「村落の基礎構造」。

◆丹江の流域へ

3月31日の朝、時々小雨の降る中を河南省南陽市内郷県へ向かって出発した。月曜日とあってか市内は交通渋滞で出発も遅れてしまう。市内を西に走った後に高速道路に入るが、ほとんど未完成ですぐ国道312号線を走る。猿人で名高い藍田を過ぎるあたりから秦嶺山脈にさしかかり、渭水の支流の深い谷間を抜けながら高度1,200mあたりまで上り、あい続くトンネルで秦嶺山脈を越え【写真5-5】、丹江の上流域に至った。丹江は長江の支流漢水のその支流であるから、秦嶺山脈を越えることで、中国漢土の南北に位置する二大河川、黄河流域から長江流域へ移ったこととなる。南東に走りながら次第に高度を下げると商洛市に出る。ここから丹江沿いの道を50km余り走ると、我々の目的とする船幫会館の建つ丹鳳県龍駒寨鎮に到着する。

2 龍駒寨鎮

龍駒寨の元来の名は「龍龜寨」であったが、漢の高祖劉邦が秦を討つ時にこの地の駒に乗ったことから龍駒寨と呼ばれるようになったと伝えられている。この言い伝えが示すように古くからあった集落であり、金朝の華北支配に伴い、この一帯は宋と金の国境地帯となり、龍駒寨は金の統治下に置かれた時もある。明清時代に入り商業が活発になると、丹江水運による物資の集散地として繁栄した街である。

龍駒寨は「北通秦晋、南接吳楚」と称されるように、「吳楚」すなわち長江下流の産物は長江を遡って漢江に入り、更に漢江から丹江を遡り、後に述べる荊紫関を経て龍駒寨に至る。ここ龍駒寨は長江～漢江～丹江と続いてきた船運の終点地であり、貨物は船から陸揚げされる。そして龍駒寨から馬の背に積まれて、「秦晋」すなわち西は西安から蘭州へ、北は洛南から潼関を経て山西へと運ばれていった。このため「水旱碼頭」と称される水運と陸運の拠点であり、最盛期には商店が軒を並べ、商人が雲集する商売の不夜城であった。光緒二十六年（1900）、八カ国連合軍の北京占領で、北京を脱出して西安へ移った西太后に南方の産物を届けたのも、龍駒寨を経由してであった。このように賑わった龍駒寨も、清末から建設の始まる江蘇省連雲港から河南を西進して潼関、西安を経由し蘭州へと達する隴海鉄道の敷設と開通に伴い衰退していった。

◆船幫会館

龍駒寨が水運で繁栄したことを示す船幫会館は、龍駒寨鎮の西南隅、丹江の流れに面して残されている。清代の龍駒寨には、丹江水運を支えた船幫（船乗り同業組合）をはじめとして、馬幫、塩幫、青磁幫、黄幫などの十大幫が組織されていた。その中でも船幫は一大勢力ではあったが、独自の会館がないためその他の同業組合に対して肩身の狭い思いをしていた。そこで艚公（船頭）や搬運工（運送労働者）などが、運送貨物1個につき銅錢三個を集めると、少しずつの寄金を長い間にわたって貯め、嘉慶二十年（1815）に完工したものが現存する会館である⁽⁴⁾。

⁽⁴⁾ 船幫会館については、会館内部に掲示されていた「船幫会館簡介」を参考にした。なお、船幫会館は陝西省重点保護單位に指定されている。

◆門楼

今の丹江はすっかり河水が枯れ、船運が行われていたことを示すものは全く見当たらなかった。わずかに幾つかのアーチを備えた長い橋と高い川岸【写真 5-6】が、昔はここに蕩々とした大河が流れていたのであろうことを思わせるのみである。このような丹江に面して、船帮会館の「安瀾普慶」（浪静か＝天下太平）と「明王宮」の扁額が掲げられた大きな門楼が聳え建っている【写真 5-7】。現在、この門は閉じられていて、逆側が入り口となっているが、ここには「丹鳳県博物館」の標示があった【写真 5-8】。

入り口付近の建物に積まれた磚には、「船帮會館」、「平浪宮」と共に「咸丰九年」⁽⁵⁾と刻されているのが目についた【写真 5-9】。これは船帮会館が咸豊九年（1859）に修復されたことを示しているのであろう。

◆大殿【写真 5-10】

中に入ると、大殿と戲楼が中庭を挟んで南北に向かい合って残っている。こぢんまりとして簡素な大殿には、船帮会館の別名である「明王殿」と記された扁額が掲げられている。殿内には幾つかの神像が置かれているが、中央に祭られているのが船帮会館＝明王宮の別名である「平浪宮」の祭神「楊泗爺」⁽⁶⁾であろうか【写真 5-11】。

◆戲楼

明王宮の向かい側に「和聲鳴盛」の扁額を掲げた戲楼が建っている【写真 5-12】。船帮会館は花廟（廟会）とも称され、楊泗爺を祀る平浪宮の大祭では演劇を奉納する。この舞台である戲楼は、棟木の長さ 22m、奥行き 11m、舞台の間口 8m と大殿に比してひときわ大きな建築である。戲楼の建築様式は、北方建築の「莊重大方」（格調が高く堂々とした）と南方建築の「華麗細膩」（華麗で細やかな）の南北の特徴を兼ね備えたものであるというが、欄間など各処に「鳥獸虫魚」、「花草樹木」、「大舜耕田」、「夏禹治水」などの図案が精緻に彫刻され【写真 5-13】、大きく張り出した屋根には神像や石獸が飾られ、修復の手が加えられたのではあろうが華麗な姿を残している。

◆石碑

大殿と戲楼の間にある回廊には、龍駒寨の水運と繁栄を示す明清時代の陶磁器などの文物が展示されている。また塀には石像や石碑が未整理のままに建てかけられている【写真 5-14】。限られた時間ではあったが石碑を見て歩くと、「皇清」と記された碑頭、「龍駒寨者商？之巨鎮也其四方往来商賈」の文言で始まる「三聖宮碑文」（道光二十九年（1849））、「關帝（廟）／（重）修／（碑）記」⁽⁷⁾（雍正十三年（1735））、門額と推定される「武関」と記された扁額⁽⁸⁾などが目についた。時折小雨の降る中、訪れる人もない船帮会館で一時を過ごした後に、内郷県へと向かった。

(5) 「船帮」「咸丰」と簡体字であるが、「會館」は繁体字であり、右から左への横書きから、旧来の刻字を模して修復された磚であろう。

(6) 平浪宮と楊泗爺については、荊紫関の項に記した。

(7) 【写真 5-14】で見えるように、この石碑は「關帝」の下に丸い穴が開けられ、帝の下に 2 行に記された字が削られている。すなわち（ ）内に記した（廟）（重）（碑）は、残された部分からの推定である。また／は行替えを示している。

(8) 龍駒寨から潼関に至る武関河沿いの北方ルートの入り口にあった武関鎮の門額ではなかろうか。

3 内郷県衙門博物館

龍駒寨鎮から内郷県までは 200 km 余りある。商南を過ぎてしばらくすると豫辺、ここで陝西省から河南省に入ると、南京まで 916 km、内郷まで 101 km の標示が出ている。この付近から東に通じている高速道路に丁河インターチェンジで乗り入れたが、まだ西安方面に通じていないためであろうが、ほとんど走る車もなく閑散としている。内郷で高速道路を降り、本日の目的地である内郷県衙門博物館へ向かう。

内郷県は牛伏山脈の西端に連なる「宝天曼」景勝地、恐竜の卵の化石が出土することなどが名高い。それとは別に内郷県に置かれていた清代の知県衙門を修復して「内郷県衙門博物館」として公開していることでも知られている。我々の目的の一つはこの博物館を見学して、書籍などでは解りづらい知県衙門の機能や様相を目で確かめることである。博物館に到着すると、李茗公博物館長や徐新華博物館員などが、船幫会館に立ち寄ったため到着が遅くなった我々を待っていてくれた。李館長は劉氏の古くからの友人、文人であると共に衙門、衙役、胥吏などの研究者であるが、近く退職するのでその前に衙門博物館の見学をと誘ってくれたのであった。

内郷県衙門は元朝大徳八年（1304）に創建され、明末崇禎十五年（1642）に李自成軍によって焼き払われたが、清朝に入って順治十八年（1661）から康熙五年（1666）にかけて修復され、光緒二十年（1894）に重修された。このような経緯をたどった建築物を、近年大がかりな改修工事を施して県衙門博物館として発足したものである。

知県がここで「聖諭」を読んで民衆を教化したという宣化坊【写真 5-15】、衙門の入り口である大門から儀門を経て大堂、二堂、内宅、三堂、花園と一巡して見学した【写真 5-16】が、衙門建築の修復と共に明清時代の地方役所の機能、役人の姿などが展示されていた。

徐氏によれば、現在、このような知県、知府などの地方衙門が修復整備されているのは、知県衙門では内郷県の他に河南省新密県と葉県、江西省浮梁県、山西省平遥県、湖北省南漳県の 5 県、知府衙門では河南省南陽府と山西省霍州府の 2 府であるとのことであった。我々は後の行程で南陽府衙門をも訪れ、衙門建築を通じて知県と知府の規模の相違を実感したが、本章では続いて李氏と徐氏に案内していただいた南陽市淅川県荊紫関鎮にある丹江水運の旧街である荊紫関について記すこととする。

4 荊紫関

4 月 1 日、今日は少し遠いが荊紫関を往復するとのことで、李氏と徐氏に連れられて 8 時過ぎに出発する。火山の噴火のためとのことであったが両側は岩だらけの山、それを利用した石屋があちこちに見える。ほぼ 1 時間で淅川県に到着、更にここから 2 時間余り走って 11 時 30 分荊紫関鎮に到着した。鎮政府には荊紫関の案内者が待っていてくれる。

荊紫関は丹江に沿う水運の港として繁栄した街である。荊紫関鎮の外れに位置する河南省淅川県荊紫関鎮白浪河（豫）は、「一脚踏三省」すなわち湖北鄖県洋溪（鄂）と陝西商南県汪字店郷（秦）の「豫・鄂・秦」を一踏みにすることができる場所であり、それを記念して三省それぞれが撰文した石碑が白浪街に建てられているという。ここを訪れる暇はなかったが、この碑が示すように荊紫関は河南・湖北・陝西三省交界の地、交通の要衝であり、それだけに戦乱の時には必争の地となった。李自成は北京進軍の軍隊を整備し、民国初年の軍閥時代や日中戦争などでも戦火を浴びた場所である。そして隴海鉄道の開通と民

国二十年の丹江大洪水などが原因で衰退して今に至っている。

「荊紫関」の名称になったのは意外に新しい。ここは漢代に「草橋関」、元代に「荊籽口」、明代に「荊籽口関」、清代には「荊籽関」と称されていたが、民国時代になって、付近の山野に多い荊（アカシヤ）の花が紫色であることから「籽」を「紫」に代えて荊紫関と称するようになったとのことである。

荊紫関は龍駒寨と同様に丹江流域の水運の街であるが、龍駒寨に残されているのは船幫会館のみであるのに対して、荊紫関には「清代一条街」と称する旧来の街並みと、街並みには「平浪宮」、「山陝会館」、「禹王宮」など水運をめぐる種々の建築が保存されている。以下に訪れた史跡を、現地で入手した書籍⁽⁹⁾を参照しながら紹介しよう。

◆関門（別名は守城門、花城門）【写真 5-17】

荊紫関鎮南街の最南端にある旧街の入り口で、高さ 7m、幅 6m、奥行き 1m の磚積みで造られた門で、門洞の上に掲げられた門扁には「荊紫関」と記されている。関門はしばしば建てかえられていて、現在の門は民国三年（1914）の建築である。ここから先、左手に流れる丹江沿いに荊紫関の旧街「清代一条街」が続いている。

◆清代一条街⁽¹⁰⁾

「清代一条街」と名付けられた通りは、丹江沿いに 2.5 km 続き、南街【写真 5-18】、中街、北街に区分されている。ただ、通りを歩いてみてもどこで区分されているのかははっきりしない。通りに面した建物の多くは、清代～民国時代の様相が窺えるように修復されているが、その多くが民家として使われている。舗装された路面の下に昔の石畳が見え隠れする通りを北に歩くと、平浪宮に付随する鼓楼と鐘楼が見えてくる。

◆楊泗爺伝説

丹河は洪水の多い河であり、清代の洪水では河床から 20～30m は上に位置する村の中を船が行き来し、民国二十年（1931）の洪水では三つあった碼頭の中の二つが破壊されてしまった。丹江の洪水をめぐる、「洪水の元凶は黒河の悪龍であったが、楊泗爺＝楊將軍が悪龍を退治して洪水が治まった。悪龍が退治された時に流れた血で黒河が赤く染まって赤（丹）河となり、これが丹河の名称の由来」という伝説がある。悪龍を退治した楊將軍は、治水と祈雨の神として「平浪宮」の祭神となり、船運労働者や商人、農民の尊崇を受けてきた。そして悪龍を退治した日とされる六月六日に廟会を行い、廟会では演劇の奉納と共に、楊將軍の過ごした艱苦の一生を忍んで草鞋を焼いて祈る風習があり、今でも荊紫関では草鞋を売っているという。

◆平浪宮（大門楼・鼓楼・鐘楼）【写真 5-19】

平浪宮の大門楼は間口 3 間、奥行き 2 間、入り口の上に掲げられた縦型の門扁は「平浪宮」と記されているとのことだが、ほとんど読めない。中院と後院があるという門楼の中には入ることができなかった。

門楼の両側に順治初年の建造という三層造りの鼓楼と鐘楼が建っている。鼓楼も鐘楼も

⁽⁹⁾ 李国新『商迹—南水北調中線渠首—浙川歴史文化巡礼上冊』（哈爾濱地図出版社、2007 年）。

⁽¹⁰⁾ 今、中国では観光開発を兼ねて、清代の建築と街路を整備しているところが多い。今回も荊紫関一条街以外に、社旗（賒店）山陝会館の前に広がる一条街、孟津県魏坡村にある、窑洞も住居として使っている農村の「清代古鎮」を見ることができた。

外壁や床は失われて柱と骨組み、屋根だけになっている【写真 5-20】。立派な草花図案が刻された礎石【写真 5-21】、「平浪宮」と刻された磚などに【写真 5-22】、往時の繁栄が偲ばれた。

平浪宮を過ぎると「万寿宮」が残されているが、この付近が中街のようである。

◆馬飲橋

北街に入るところに山側から丹江に流れ込む小さな川がある。この川に架かる橋には「この河水磨溝は暴れ川であり、南街と北街を隔てる天然の障壁であった。後に光武帝となる劉秀が王莽に追われた時、この川が障壁となり逃げて荊紫関の居民に保護され、劉秀がここで馬に水を飲ませた」との伝説があり、この伝説が橋の名前となったという説明が記されていた【写真 5-23】。

馬飲橋を渡って北街に入ると、「禹王宮」や「山陝会館」などの会館、そして唯一残る丹江船運の船着き場「碼頭」などがある。この付近の軒先で、煙草の葉、鍬や鎌などと共に、平浪宮に奉納する草鞋を編んでいるおばあさん【写真 5-24】と草鞋を売る屋台【写真 5-25】が目についた。北街には観光客用の食堂があり、我々もここで昼食休憩、午後は碼頭や山陝会館を訪れた。

◆中碼頭

長江から漢江を経て丹江を大船で遡ってきた貨物は、ここ荊紫関で小船に積み替えられて、上流すなわち昨日たどってきた龍駒寨を目指して運ばれていった。荊紫関は貨物の中継基地であり、往時、碼頭は上・中・下と三か所あり、これらの碼頭を中心に河街と呼ばれる街並みが続いていた。碼頭と河街の繁栄ぶりは「碼頭には常に 100 隻の、多い時には 300~400 隻の貨物船が係留され、水運業者や商人のための宿屋や酒樓が 600m に及んで河街を形成していた。嘉慶七年（1802）に副将と都司を設置し、南陽府の塩捕同知や水利同知も駐屯した」と記されている⁽¹¹⁾。しかし、民国二十年（1931）の大洪水で上・下の碼頭は破壊され中碼頭だけが残し、河街は衰退し今に至っている。残された中碼頭を訪ねた。

碼頭に下りる階段の入り口には門樓があり、ここを入って十数段の階段を下りたところが、船着き場の一角らしい【写真 5-26】。ここからはるか下に、水のほとんど流れていない丹江の流れが見えるが、河辺には菜の花が植えられていて【写真 5-27】、昔大船が往来したとは思えない光景であった。河街に連なる岸辺の建物は長い柱の上に建つ「吊脚樓」【写真 5-28】であり、昔はこの柱の下に船が繋がれていたのであろう。

◆山陝会館

碼頭から遠からぬ場所に山陝会館がある。清代に山西商人と陝西商人がここにあった関帝廟を遷して会館を建築したという。総面積 4,000 m²を誇る広大な敷地の中に前館、中館、後館と多数の建物が残っていた。道路に面した「前館」【写真 5-29】を入ると、下に通路が設けられた「過道樓」があり【写真 5-30】、過道樓の内側（中館側）は演劇を奉納する戲台となっている。この奥には、二層建築の鼓楼（一部は民家の通路となっている）と鐘樓が左右に建ち並ぶ「中館」=春秋閣（関羽が『春秋』を読む場所という）があり【写真 5-31】、春秋閣の左側には白虎【写真 5-32】、右側には青龍が画かれていた。ここを過ぎると前殿と後殿に分かれた「後館」=関公樓【写真 5-33】で、山西会館や陝西会館には欠かすことのできない関羽が祀られていた場所である。

⁽¹¹⁾ 1905 年編『淅川直隸州郷土志』。

手入れが行き届いたとはいいかねる中庭のあちこちに、碑頭とおぼしき石に彫られた龍、会館の建築や重修を記す石碑が置かれている【写真 5-34】。石碑の中には「遷修關帝行宮 功程告竣碑記」（年月不明）、「創建春秋閣序文」（大清道光庚戌＝三十年）と読み取れるものもあった。

荊紫関には山陝会館の他に湖広会館＝禹王宮、江浙会館＝万寿宮、河南会館などがあるが、いずれも中に入ることはできず、外側を一瞥したのみである。

◆禹王宮

山陝会館の近くに建っている。治水の神である禹王の名に因むここは湖広会館すなわち湖南商人と湖北商人の集まる場所であった。現存の建物は嘉慶十年（1805）重修と記されている。大きな門楼【写真 5-35】には縦書きで「禹王宮」と、横書きで「聲立身度」の門額が掲げられ、門洞の上に「竹林七賢人」の図の彫刻が【写真 5-36】、その他にも浮き彫りの人物や花草の図案があちこちに施されている。門洞の左右の対聯は、本来記された文言に代わって何回かにわたり革命の標語を記したもののようであるが、「祖国」以外は意味が不明であった。

◆万寿宮【写真 5-37】

平浪宮の並びにあるが、ここは江浙会館なのか江西会館なのかはっきりしないという。乾隆十年（1745）創建と歴史を誇っていて、文物保護指定のプレートが標示されていた。ただ民家となって使われているので、通りに面した入り口部分を見るのみであった。入り口の上に「白蛇殿」と記されていることが、白蛇伝説のある杭州地方の会館と推定される根拠となっているらしい。

◆河南会館（別名は懷幫会館）

河南商人が建てた会館であるというが、民家として使われている建物には特に文物保護標示も見当たらず、判然としないままであった。

ほぼ6時間にわたり一条街のあちこちを歩き回り、17時過ぎに荊紫関を後にした。帰路は清代に内郷県衙門の胥吏であった呉登鰲の墓を呉埡村（現在石文化村として名高い）に訪ね、途中で夕食をすませてホテルに帰り着いたのは22時を過ぎていた。

◆丹江水庫

翌4月2日午前中に再び浙川県を經由して丹江旅游区を訪れた。丹江が漢江に流れ込む合流点をせき止めてできたダムは、アジア第2の規模と称するだけに巨大であり、我々の訪れた旅游区は丹江の支流浙川の入り江のようであるが、丹江本流に続く入り江がどこにあるのか見当もつかない【写真 5-38】。そしてこの旅游区付近が、長江の水を黄河の左岸・北京に送る「南水北調」の三本のルートの中の一つ、中線の開始点であるという。丹江流域をめぐる探訪の最後に、晴れ上がり春の草花が咲き始めた水庫の展望台を散策して帰路についた。

おわりに

丹江水庫を訪ねた後に内郷県に戻り、午後は社旗（賒店）にある中国でも規模の大きいという「山陝会館」を訪ね、その後に南陽市に赴いた。翌3日、南陽市で修復された「南陽府衙門」などを見学して洛陽へ赴いた。洛陽ではすっかり整備された龍門石窟などを再訪すると共に、明代福王府を清代に改建した「潞澤会館」、そして洛陽の「山陝会館」、洛陽郊外の孟津県魏坡村にある「清代古鎮」、孟津県郊外に架かる延長7kmという洛陽黄河大橋を眺め、4月6日、国花である牡丹の咲き誇る洛陽を離れ北京に戻り、10日余りの陝西から河南をめぐる旅がおわった。

（原載：『アジア流域文化研究』Ⅴ、2009年）



写真 5-1 黄河大桥、対岸は山西省



写真 5-2 陝西（左）から山西（右）に至る鉄橋



写真 5-3 河辺間近に残存する潼関の城壁址



写真 5-4 山上に見える烽火台と城壁



写真 5-5 秦嶺山脈の景観



写真 5-6 丹江とそれに架かる橋



写真 5-7 堂々とした船幫会館の門樓



写真 5-8 丹鳳県博物館（船幫会館）の入口



写真 5-9 船幫会館・平浪宮・咸丰九年と刻す磚



写真 5-10 扁額「明王殿」が掲げられた大殿



写真 5-11 明王殿の内部



写真 5-12 「和聲鳴盛」と記された戲樓



写真 5-13 戯楼に施された精緻な彫刻



写真 5-14 並べられた「関帝廟重修碑記」碑



写真 5-15 内郷県衙門の宣化坊と大門



写真 5-16 大門から儀門などの内部



写真 5-17 「荊紫関」の全景



写真 5-18 南街から見える関門



写真 5-19 平浪宮の大門楼と鼓楼

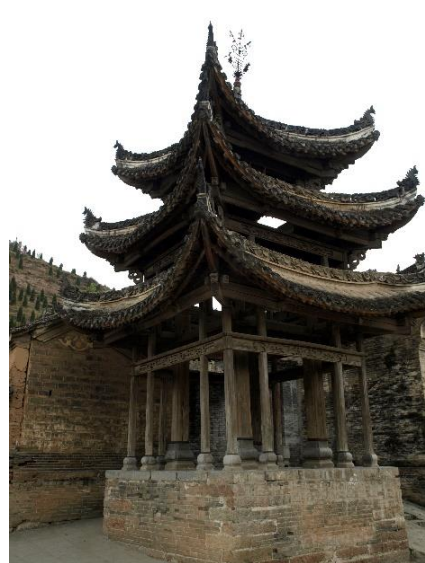


写真 5-20 三層造りの鼓楼



写真 5-21 基礎に刻された花草図案



写真 5-22 「平浪宮」の文字が見える磚



写真 5-23 伝説が記されている馬飲橋



写真 5-24 藁を撚って草鞋を編むおばあさん



写真 5-25 平浪宮に奉納する草鞋



写真 5-26 中碼頭の一角から望んだ門楼と階段



写真 5-27 水の枯れた丹江下流



写真 5-28 長い柱に支えられた吊脚楼



写真 5-29 左右に石獅子が置かれた前館



写真 5-30 楼閣の下に通路が設けられた過道楼



写真 5-31 鼓楼と鐘楼を備えた中館（春秋閣）



写真 5-32 春秋閣左側の壁に画かれた白虎



写真 5-33 後館(関公楼)の前殿



写真 5-34 放置された「遷修關帝行宮功程告竣碑記」



写真 5-35 禹王宮と革命の標語



写真 5-36 「竹林七賢人」の彫刻



写真 5-37 万寿宮の入口「白蛇殿」



写真 5-38 果てしなく広がる丹江水庫

第 6 章

黄河中流域の清朝史跡 —包頭・銀川・中衛—

はじめに

前章において、黄河に渭水が合流する港口＝潼関について紹介し、「源から東に向かって流れる黄河は、甘肅省蘭州付近から北東へ流れ、内蒙古に入って東へ、そしてほぼ直角に曲がって南下し、港口の少し上流で再び直角に曲がって東進する。」と記した。全長 5,460km 余りに及ぶ黄河の流れは、どこが上流でどこからが下流であるか明確ではないが、蘭州から港口まで、鍋づる状にわん曲して流れる黄河の屈曲部は（本章ではこの一帯を黄河中流域とする）、西・北・東を黄河に囲まれたオルドス（鄂爾多斯）地域であり、ここは土塊、砂礫、沙漠の中に草原が点在する景観が続いている。黄河中流域は古くから牧畜民と農耕民が接触、抗争しながら歴史を形成してきたが、近世以後ではタンゲート（党項）族やモンゴル（蒙古）族の支配下におかれ、港口から下流域の黄土地帯、漢族領域とは異なった歴史をたどる。本章では、これまで通過し探訪した黄河中流域の記録から、寧夏回族自治区を中心に、いくつかの史跡を紹介するものである。ただ、これらの地帯に対する筆者の関心は、清朝とりわけ政権を担った満洲族の足跡であり、その探訪の合間に見た史跡の皮相的な観察に過ぎないことをお断りしておく。

黄河中流域に足を踏み入れたことは 3 回ある。1 回目は 1979 年 4 月、現代化のかけ声の下で、それまでの「日中友好」を旗印とした友好使節団の呪縛から解き放たれ、旅行社が企画し一般人の参加を募った旅に参加したものである。この時は、北京からフフホト（呼和浩特）へ飛行機で、フフホトと蘭州の間は列車で、蘭州から上海へ飛行機で移動する 2 週間の旅であった。出発前に北京、フフホト、蘭州、上海の滞在日程は知らされていたが、各地へ赴く飛行機や列車の時間、滞在地でどこを見てどこのホテルに宿泊するのかなどは、企画した旅行社も不明のままに出発した。現地に到着した後、現地の受け入れ準備に従って、赴く場所、出発時間、宿泊先が明らかになるという旅であった。フフホトに到着すると、ジープに乘せられ陰山山脈を越え武川鎮を経由し烏蘭図格人民公社を訪ね、一泊して牧畜民の生活を垣間見て、フフホトへ戻った。その後、北京と蘭州を結ぶ第 44 次列車に乗車、フフホト発 23 時、翌日夜 21 時 20 分に蘭州へ到着するという、1,145km を 22 時間 30 分で走る鉄道の旅を体験した。車中から見える黄河とオルドスの景観に圧倒され、柳絮の飛ぶ銀川駅のホームで春の日差しを浴びながら賀蘭山を遠望し、西夏の史跡に想いを寄せた思い出がある⁽¹⁾。

2 回目は 2003 年 8 月に、内蒙古大学出身の張永江氏に先導されながら、同学の劉小萌氏、綿貫哲郎氏の 4 人で⁽²⁾、オルドスに残る清朝、特に八旗駐防の史跡を探訪した。すな

(1) この旅については細谷良夫「呼和浩特・包蘭線・蘭州紀行」（『月刊「シルクロード」』第 5 巻第 6 号、1979 年）、南川三二郎写真・細谷良夫解説「蒙古草原・ゴビ砂漠横断の旅」（『家庭画報』1979 年 9 月号、1979 年）に記した。

(2) 張氏は中国人民大学清史研究所、劉氏は中国社会科学院近代史研究所所属で、共に東北学院大学大

わち北京から大同へ列車で赴き、大同から車で、清朝時代旗人が駐屯した威遠堡や右衛を訪れた後に内蒙古への関門であった殺虎口を経由して和林格爾へ、そしてフフホトへ赴いた。フフホトでは内蒙古大学蒙古学研究所の方々に案内されて、綏遠將軍衙門、綏遠城城壁、旧城にある大召寺、五塔寺、清真寺を訪れた。フフホトを後にして、美岱召に立ち寄って包頭へ、そして五当召を訪れた後に包頭から黄河沿いの 110 号線を車で走り、五原を経由して銀川まで 1 日かかりで走り抜けた。銀川で念願の寧夏駐防址を探し、西夏王陵へ赴き、西夏窯址を訪ねて北京へ戻る旅であった。

3 回目は 2009 年 2 月、前回銀川に赴けなかった劉氏と弘前大学時代に遼史を学んだ木村柁樹氏の 3 人で、北京から飛行機で銀川に赴き、銀川で寧夏駐防址を再探し、西夏王陵や賀蘭山岩画を訪れた後、銀川から先の黄河を遡りながら中衛と中寧に残る史跡を探訪した。

第 1 回と第 3 回の旅の間には 30 年の時がある。第 1 回の折りには、フフホトも蘭州もようやく外国人訪問が自由化されたばかりで、フフホトで見ることが出来るのは近郊にある王昭君墓など特定の場所に限られていた。フフホト市内でも、旧城地域に立ち入るためには「特別許可」が必要であった。第 3 回の当時は、中国の富裕層を中心とする観光旅行が盛んになっていて、各地の史跡は次々に整備開放（別にいえば観光地化）されていた。第 1 回と第 3 回の間では史跡の様相も大きく異なり【写真 6-1、6-2】、30 年の時を隔てた様子を一緒に記すことは出来ない。そのようなこともあって、以下では 2003 年と 2009 年の探訪を中心に、黄河中流域に残る史跡を記することとする。なお、各史跡名称の後に探訪した年月を記しておいた。

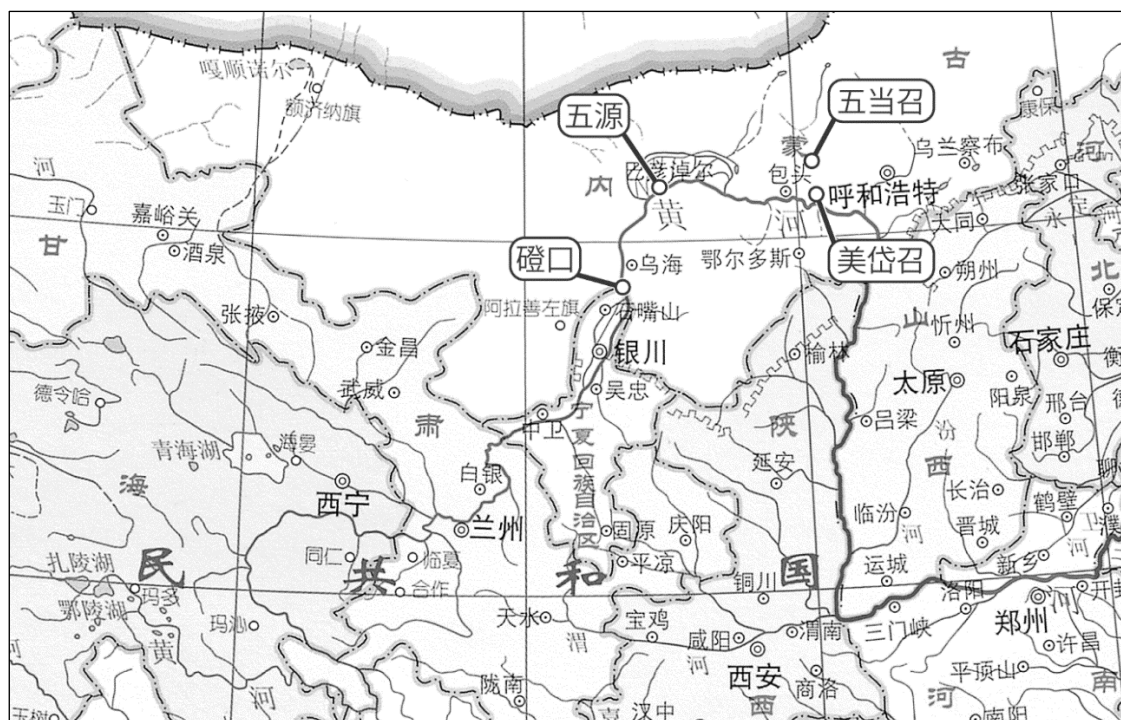


図 6-1 黄河中流域（原図：『中国地図集』中国地図出版社、2004 年）

学院の客員教授をつとめたことがある。綿貫氏は日本大学非常勤講師で、共に清朝史・満族史・蒙古族史を研究対象としている。

1 包頭付近の二つのチベット寺院

フフホトにある清朝史跡の探訪を終えた後に、張氏の手配してくれた車で美岱召に立ち寄り包頭まで行くこととなる。フフホト市の郊外では、ここから西寧、甘肅、青海を抜け拉薩へ到る高速道路を建設中であったが、我々は 110 号線で包頭に向かう。

◆美岱召《2003 年 9 月》

美岱召は包頭の東 50km、フフホトと包頭を結ぶ 110 号線から少し北側に入った山ふところに位置しているチベット西藏仏教の寺院である。美岱「召」すなわち「廟」は、周囲を 1 辺 150m ほどの表面を石で覆った版築の城壁で囲まれた中に、僧侶と一般人が一緒に住む、寺院と城塞を兼ね備えた「寺城」である。寺城の形式をした廟は内蒙古では唯一であるという。確かに内蒙古の各地、承德、ラサ（拉薩）などで数多くの廟を見てきたが、四隅に望楼でもある角楼を設けた、城壁に囲まれた廟【写真 6-3】は見たことがない。

美岱召の起源は、明代のモンゴルで強勢を誇ったトゥメト（土默特）部の長であるアルタン・ハン（阿勒坦汗）が明代隆慶年間に順義王に封じられたことを契機に、土默川上流のここに万暦三年（1575）に城を築いたことに始まる。創建当初は靈覺寺、後に寿靈寺と呼ばれ清朝は福化寺の名を与えたが、万暦三十四年に活仏のマイダリ・フトクト（邁達里・胡図克図）が布教にやってきたことから邁達里廟＝美岱召が通称となったものである。南城壁の中央にある城門の泰和門【写真 6-4】には、「皇圖鞏固、帝道咸寧、萬民樂業、四海澄清」と、末尾に「大明金國丙午年戊戌月／己巳日庚午時建」と記された扁額が嵌めこまれていて、この寺城が明王朝の金国すなわちアルタン国の丙午年＝万暦三十四年に造られたことを示している。城壁の内部には寺廟の部分の経堂や大雄宝殿などと共に、アルタン・ハンの執務室だったという瑠璃殿や一族の生活施設が混在して建っている。

廟の一角に建つ 1984 年 10 月に包頭市文物管理所が記した「重修美岱召記」碑には、「十年動乱」すなわち文革で建物や文物は壊滅、1978 年の三中全会以後に復興に尽くしてきたことが記されていて、1997 年に全国重点文物に指定された今の寺城は、それ以後に建て直されたものであることを記している。

◆五当召《2003 年 9 月》

美岱召に立ち寄った後に包頭に到着、包頭テレビの副局長をつとめる張氏の友人に迎えらる。五当召は包頭から北東 70km 余りの山中に位置しているので赴くことは難しいといわれていたのだが、友人が RV 車を提供し案内してくれることになり、標高 1,400～1,500m の山道を 1 時間半ほど走って到着した。この道は更に北に抜けるようであるが、五当召は山中の、道の行き止まりに建っている感じがする。廟の前に駐車場や土産店、観光用の駱駝や馬が繋がれている【写真 6-5】が、観光客はほとんどいない。

五当召は康熙年間に創建された古刹で、チベット語では「巴達嘎爾（白蓮花）」といい、「五当（柳樹）」溝にあることから五当召と呼ばれ、乾隆十九年（1754）には章嘉国師の呈請に応じて「広覺寺」の寺名が賜与された【写真 6-6】。乾隆時代に次々に拡張され、最盛期は 2,500 室余りを数えた数多くの廟宇は、全て白壁造りのチベット式建築であり、内蒙古で最も整ったチベット寺院であるという。人里離れたここは、チベット仏教黄帽派の学問寺、最盛期には 1,200 名を超える僧侶がチベットからモンゴルに伝えられた仏教の研鑽につとめていたという。「東方の小ポタラ（布達拉）宮」とも称される五当召は、漢式仏教寺院とは全く相違するたたずまいを見せているが、美岱召同様に三中全会以後に改修が進められているのであろう、各処の建物はほとんどがまだ修理中であつた。なお、ここは 1996

年に全国重点文物に指定されている。

2 包頭から銀川まで

◆列車の旅《1979 年 5 月》

包蘭線第 44 次列車は包頭を出発すると銀川まで、ほぼ黄河の流れに沿って走る。明るくなるのを待ちかねて車窓からの風景を見続けた。西に向かって走る列車の左手には黄河の右岸に広がるオルドスのクブチ（庫布齊）沙漠、右手は陰山の南麓、初めて見る沙漠、乾燥しきった大地に圧倒された。五原に近くなると黄河に流れる扇状地で、これまでの乾いた大地とは相異して緑が鮮やかであった。バヤンゴル（巴顔高勒）を過ぎるとこれまで西から東に流れていた黄河は 90 度流れを変え、南から北へと流れる。磴口で黄河を右岸に渡る【写真 6-7】と右手は沙漠から屹立する障壁のような賀蘭山、左手はオルドス高原の東端をなす桌子山、このふたつの山並みにはさまれて流れる黄河の流域は、寧夏平原を形成し、黄河を水源にした灌漑農耕で畑が多くなる。こんな景観を見ながら銀川の駅には昼近くに到着した。

◆車の旅《2003 年 9 月》

出発の朝、雨が降って肌寒い。車は張氏の友人が手配してくれたサンタナ、出発する間に長距離なので安全確保のため運転手を 2 人にしたいが良いかといわれる。長距離を後部座席 3 人は窮屈だが、安全のためならば仕方がない。8 時 45 分、混雑する市区を離れ 110 号線を西へと走り、烏拉山を 9 時 50 分に通過、運転手は全く休まないで飛ばしていく。この頃から雨が上がり視界が良くなると左手は庫布其沙漠の一角であろうか、荒涼とした景色が続く。烏拉特前旗を過ぎると烏海市まで 300km、五原まで 59km の標識がある。五原にさしかかると、1979 年に列車から見た時もこの一帯の緑が印象的であったが、中流域で最も豊かなところと云われるだけあって、トウモロコシや蔬菜類など農作物の広がりが目に付く。

磴口で黄河を左岸に渡るが、架橋するだけに兩岸は狭いのであろうが、濁流がすさまじい勢いで流れている。それでも水かさの多い時の半分だという【写真 6-8】。黄河の左岸を南下する 110 号線の右手には谷が広がり緑が多い。臨河市をすぎた八岱郷で昼食としたが、ここはトマトの大口割引販売をする場所とかで、道路に山のようにトマトが積んであり、乾燥地帯とはほど遠い景観である。この一帯の地図を見ると、「渠」、「溝」の名称がついた灌漑水路が張りめぐらされていて、今問題になっている黄河の流量低下すなわち中流域の水利用の一端を知った。烏海市に近づくにつれて左手は荒涼とした山並みが続くが、このあたりが一番乾燥し荒れ果てたいわゆる「灘」であろうか。烏海市街を過ぎると 110 号線は再び黄河を左岸に渡り返し、ほどなく内蒙古自治区から寧夏回族自治区に入る。寧夏に入って最初の街が石嘴山市、思いがけないことにここから中寧まで高速道路が開通している。小休止の後に高速道路に入ると銀川まで 120km の標識、開通してまだ間もないのであろうか、走っている車は多くない。ほぼ 1 時間で銀川市内に入ったが、銀川市が不案内の運転手は、タクシーを雇ってガイドにして繁華街の真ん中にあるホテルに 18 時過ぎに到着、10 時間を要して 620km 余りを走り抜けたので、さすがに疲労感が強い。折から銀川市では「少数民族大運動会」が開催されていて、めぼしいホテルは全て満室であった。国際電話も出来ないホテルだが、埃を流せるだけよいとして、オルドスを車で走り抜ける念願の旅を終了した。

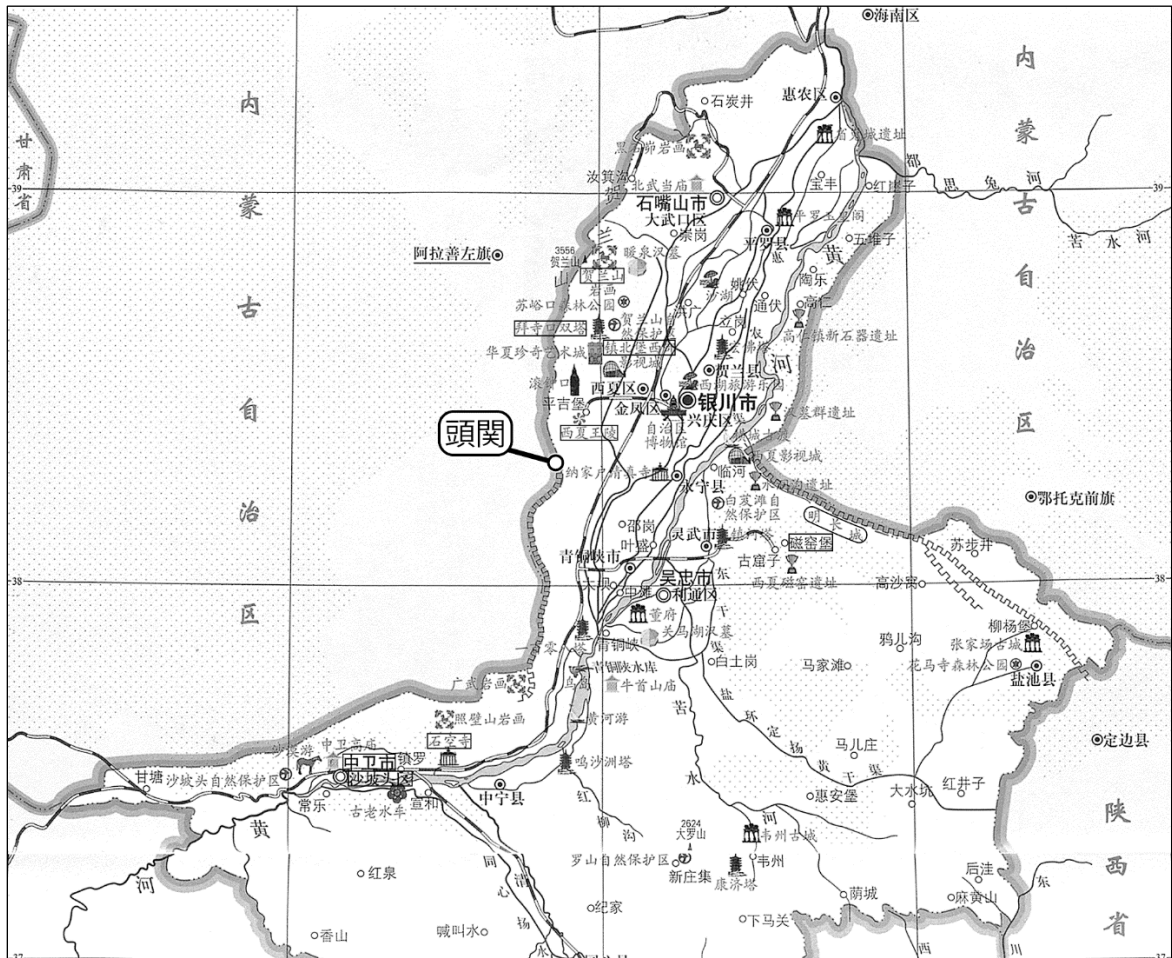


図 6-2 寧夏回族自治区北部（原図：『寧夏回族自治区地図冊』中国地図出版社、2006 年）

3 寧夏回族自治区

寧夏回族自治区は中国の西北部に位置し、北部と東部、西部は内蒙古自治区に、東部の一部は陝西省に接し、南部は甘肅省に取り囲まれている。首都銀川市を中心とする一帯は、清代から黄河の水を引く灌漑農耕が行われていて、今でも銀川をはじめとする黄河沿いの都市に自治区全体で 600 万余りを数える人口の大多数が集中している。

銀川付近は賀蘭山岩画にうかがわれるように、古代から人々が居住していたが、秦の始皇帝による全国統一後に、灌漑農耕が開始されてから聚落が形成され始め、唐末の動乱を経て 11～13 世紀にチベット系に属するタングート人李元昊が夏王朝（宋人の呼称で西夏が通称）を建国した。西夏は宋、契丹＝遼、金王朝の抗争の間で独立国を保持して 1227 年にモンゴル帝国チンギス・ハンによって滅ぼされるまで、興慶（銀川市一帯、銀川市には旧名にちなんだ興慶区がある）を首都とし、西夏文字に代表される独自の文化を展開した。元朝が西夏の領域を「寧夏路」としたことから、この地域は「寧夏」と称され、明、清時代には「寧夏府」が置かれ、中華民国時代になると、はじめは「甘肅省寧夏道」であったが、1929 年に「寧夏省」が設置された。中華人民共和国は 1949 年に「寧夏省人民政府」を設立したが、1954 年に甘肅省に編入、1958 年 10 月に銀川市を首都とする「寧夏回族自治区」が成立し今に至っている。

◆回族自治区

寧夏回族自治区は回族を標榜する自治区である。漢民族を対象とする省に対して、漢民族以外の民族に省と同レベルの地方行政を施行する区域が自治区であり、各自治区はそれぞれの民族の「民族文字・言語の使用権」、「財産管理権」、「警察・民兵部隊の組織権」、「区域内法令の制定権」などを認めることになっている。55 を数える少数民族全てに自治区が設定されているのではなく、自治区は 5 つを数えるに過ぎない。すなわち回族の寧夏回族自治区（少数民族人口数で第 3 位）以外には、壮族の広西壮族自治区（人口数で第 1 位）、ウイグル族の新疆維吾爾自治区（人口数で第 5 位）、モンゴル族の内蒙古自治区（人口数で第 8 位）、チベット族の西藏自治区（人口数で第 9 位）がある⁽³⁾。すなわち寧夏回族自治区は、回族と称される人々が自治行政を営む地域なのであるが、寧夏回族自治区内に居住する人口の 70% 余りは漢族、回族は 30% 弱で⁽⁴⁾、人口数の上では圧倒的多数が漢族である。加えて回族とは、唐～元代に流入したアラブやペルシャ系の西域民族と漢族が混血し、その混血した人々の中でイスラム教を信仰する集団を起源とする人々であり、回族となった後も漢族の間で混血が繰り返された結果、漢族と変わらない風貌、風習を持つに至り、中にはイスラム信仰を捨ててしまった回族が現れるなど、民族といっても他の少数民族とは相異なる複雑な様相がある。確かに銀川の街を歩いている人を見かけるのみであり、文字もアラビア文字より西夏文字を見かける機会が多そうである。

◆清代の寧夏（駐防八旗）

清朝時代の寧夏をめぐり特記すべきことの一つは、銀川に寧夏駐防が設置され満洲人、蒙古人、漢軍旗人がここに駐屯していたことである。すなわち今も地名に残る「満城」とは、寧夏駐防旗人が駐屯した城に由来するものである。寧夏に駐防が設置された契機は、康熙十二年（1673）、雲南貴州に藩王として君臨した呉三桂の反乱（いわゆる三藩の乱）が起きたことにある。すなわち呉三桂に呼応した陝西提督王輔臣は、康熙十三年十二月に反乱を起こし、翌十四年二月に蘭州を攻略して甘肅から寧夏一帯を勢力下に収めた。王輔臣が西北地域を手中に収めると、康熙十四年十二月二十二日に寧夏提督陳福の配下の参将熊虎などが緑營の官兵を率いて反乱を起こし、陳福は戦乱の中に没した⁽⁵⁾。清軍は派兵して反乱を平定すると共に、翌十五年に寧夏に寧夏駐防將軍と左右副都統以下、満・蒙・漢軍旗人 2,930 名を駐屯させた⁽⁶⁾。清朝は三藩の乱を平定するとジュンガル（準噶爾）部の討伐に乗りだし、自ら出陣した康熙帝は康熙三十六年三月には寧夏府城に駐蹕した。

このような流れの中で寧夏駐防は体制を整え、寧夏將軍以下副都統をはじめとする 3,500 名余りが寧夏府に駐屯した⁽⁷⁾。当初、八旗駐防軍は寧夏府城内に居住していたが、雍正二年（1724）に至って、寧夏府城から東北 3 里すなわち 1.5km の場所へ、周囲 6.3 里すなわ

⁽³⁾ 人口数で第 2 位の満洲族（満族）は、「滅満興漢」や「偽満洲国」など、現代中国の成立過程で否定的な立場に置かれたことから、人々は満族を名乗らず、1973 年の統計では 240 万人で、第 7 位であった。

また彼らは全国に分散居住していることもあって自治区は形成されなかった。このように人口数と自治区は一致せず、現在、人口数で第 4 位苗族、第 6 位土家族、第 7 位彝族は自治区を形成していない。

⁽⁴⁾ 後に記す八旗駐防に起因する満族も 24 万人ほどが住んでいるという。

⁽⁵⁾ 『聖祖実録』巻 59、康熙十五年正月丁亥の条。

⁽⁶⁾ 康熙十五年の設置は、なぜか『皇朝文獻通考』巻 188、八旗駐防 10 の康熙十年の条に見えるのみである。

⁽⁷⁾ 『欽定八旗通志』巻 35、兵制志 4、八旗駐防兵制・甘肅の条。

ち3.2km弱（1辺800m弱）の満城を築き、同五年にかけて、城内には将軍、副都統衙門をはじめとして、兵丁の居住家屋などを築いた。駐防城の建設について、『欽定八旗通志』巻117營建志6、八旗駐防規制2、各省駐防2「寧夏駐防」には、以下のように記されている。

雍正二年。設満城一座。離漢城東北三里、週圍六里三分。大城樓二十間、甕城樓十二間、角樓十二間、鋪樓八間。

五年。設將軍衙署一所一百二十四間。副都統衙署二所、各六十四間。協領衙署六所、各四十間。佐領衙署二十四所、各三十間。防禦衙署二十六所、各二十三間。驍騎校衙署二十四所、各十二間。筆帖式衙署三所、各十八間。理事廳衙署一所、六十五間。會府一所、十間。恩騎尉衙署二所。大街牌樓四座、馬甲房四千四百八十間。歩甲房六百間。大街廊房五百八十八間。官廳門軍房五十間。演武廳二所、一所在城内、一所在城外、各五間。

このように大規模な満城を設置したが、それから十五年を経た乾隆三年（1738）十一月、大地震が寧夏をはじめとする西北地域を襲い、多くの建築物に被害が生じた。満城も例外ではなく、『欽定八旗通志』「寧夏駐防」にあるように、「城垣と房屋は全て崩れ落ちてしまう」という状況に至った。満城が全滅した結果、翌四年に、倒壊した満城を捨てて、従来の満城とは逆側の「漢城の西門外に周圍1,360丈すなわち4,488mと以前よりは少し大きな新満城を築き、城内に旧満城に設置していた将軍衙門や兵房などを従前通りに復旧建築した」と見え、寧夏府城の東側に新満城を築いたのである。

寧夏銀川の満城が、ガルダン（噶爾丹）征討戦以後も蘭州と並んで重要な拠点であったことは、乾隆末年から頻発する「回民」⁽⁸⁾の乱でも示される。すなわち、『高宗実録』巻1045乾隆四十二年十一月壬午に載せられている以下の記事は注目に値しよう。

諭軍機大臣等。昨勒爾謹奏、河州民黃國其、聚眾豎旛。倡教拒捕一案。實屬不成事體。且非光天化日之下所宜有。其情罪甚為可惡。…但恐該省回民最多。又素習拳勇。性復護其同類。恃眾滋事。…但恐綠營兵丁。必有回民在內。若輩袒護徇情。積習難改。或不肯奮勇上前。…則雖有官兵在彼。仍不能得力。因思此等剿賊打仗之事。臨時勇往爭先。恥於退怯。惟滿洲兵最為足恃。從前王倫一案。派大學士舒赫德、督率八旗兵前往。不旬日即行剿滅。其明驗也。…該省距京較遠。惟調駐防兵。最為便易。著傳諭三全、於寧夏駐防內。即選派滿洲兵一千名。

すなわち河州で起きた回民黃國其らの反乱は、多数を頼んで不法を蔓延させ、その勢いは侮れないが、回民討伐に当たる綠營軍の中に回民が混じっていて、綠營内の回民は、回民の肩を持ち、討伐の前線に立たず、回民と結託するなどして役に立たない。一方、そのようなことのない滿洲旗人は前線に立てば退かず、彼らこそ頼りになる。滿洲旗人が頼りになることは、先年の白蓮教徒王倫の乱を旬日ならずして討伐したことで明らかであるという。この様な考えによるのであろう、河州回民の討伐には寧夏駐防の兵丁1,000名が動員されている。

既に述べたように、回民とはイスラム教を信じている漢族をさすものであるが、綠營は地域ごとに編成されるので、寧夏の綠營に回民が多数編成されていたことは推測に難くない。また回民ではない綠營兵も、反乱した回民と同じ地域の住民としてのつながりがある

⁽⁸⁾ 清代では、今の回族だけではなくイスラム教を信じる東郷族や撒拉族を総称して回民と呼ぶ。

ことも当然であろう⁽⁹⁾。一方、北京や東北から移動してきた寧夏の駐防八旗の内部には、回民もいなかっただろうし、地域と住民とのつながりもなかったことから、西北地域に独特の回民反乱に彼らがかかり出されたことは首肯できよう。

この寧夏駐防の旗人をめぐっては、以前に聞き取りをしたことがある。すなわち 1995 年 9 月に日本大学加藤直人、一橋大学江夏由樹氏と共に、琿春市の三家子満族郷古城村を訪ねて、古城村医療衛生所所長の関吉勝氏と氏の父親の関慶瑞氏から話をうかがって、関氏の先祖の出自は「按出拉瓜拓加」であり、故郷は斐優城と温特赫古城、そして「先祖の家族の一部は寧夏にも北京にもいる」と聞いたことを記しておいた⁽¹⁰⁾。この記事を目にした李凝祥氏は著書『寧夏満族述往』（寧夏人民出版社、2002 年）の中で、黒龍江出身の満族が寧夏にいてることを明らかにされている。寧夏にいてるという東北出自の駐防旗人の末裔に、一度会って聞き取りをしてみたいものである。

4 銀川市区の史跡

◆寧夏博物館《2003 年 9 月 5 日》《2009 年 2 月 19 日》

各地の歴史や史跡の概要を知る最も良い手立ては、地域の博物館を訪れることである。2003 年当時、寧夏博物館は承天寺の境内にあるこじんまりとした博物館【写真 6-9】で、西夏文字をふくめた西夏王国の文物、回族の文物と習俗、賀蘭山の岩画を主題とした展示であり、我々が探している寧夏駐防や旧城と新城などをめぐる満城などの情報は全くなかった。展示を一巡した後に修復された承天寺塔を訪れた。

2009 年に訪れた時は、自治区成立 50 周年を記念して 2007 年に新装開館したとのことで、現代的な大きな博物館に生まれ変わり【写真 6-10】、展示も一新し場所も以前とは別の所に移動していた。もちろん展示の主題は西夏、回族、岩画であるが、西夏陶磁も加わり整った展示となっている。しかし以前と同様に、八旗駐防や満城の建設、乾隆三年（1738）の寧夏大地震、それに伴って西側に建設された新しい満城については全く触れていない。ただ特に説明がないままに、「満人四門官花園地之図」と題して掲げられている図は、『寧夏満族述往』に「図 2-5 寧夏新満城建築原図」（付図参照）として作図されている原図と思われる。またそれに並べて展示されている「寧夏満營駐防事宜」鈔本は、李氏が各論述の典拠として引用されている「清代手抄史料『事宜』」の原本であると推定される。さらにこれらと共に展示されている「趙氏家譜」は、あるいは北京から寧夏にやって来た駐防旗人趙氏の家譜かもしれない。そうであるならば、この 3 点は駐防をめぐる参考資料として価値の高いものであろう。特に「園地之図」は、寧夏駐防のみならず各地の駐防（満）城の図としても貴重なものであるが、残念なことに館内は撮影禁止、まだ「寧夏新満城建築原図」と「満人四門官花園地之図」の照合を行っていない。

⁽⁹⁾ 寧夏駐屯の緑旗と八旗の錢糧支給をめぐって「蓋綠旗兵丁、系土著之人。經營度日。稍覺容易。滿洲兵丁、於錢糧之外。無所資藉。故特加恩惠以養贍之。」（『世宗実録』卷 44、雍正四年五月壬辰の条）とあり、緑旗の兵丁が現地の人と結びついていることが指摘されている。

⁽¹⁰⁾ 細谷良夫「琿春の満族」（『満族史研究通信』第 5 号、1995 年）参照。なお、この報告は『満族研究』（1996 年第 4 期）に転載された。

◆旧城（東街）満城《2003年9月》《2009年2月》

2003年、2009年共に李凝祥氏の著述を手がかりに、旧満城があったと記している銀川市東郊紅花郷満春村を目指して赴く。2003年には「満春郷」の道路標示を確認【写真 6-11】、2009年には2003年当時よりは家が建て込んできた感じがする通りの裏手に入り、土壁の家が並ぶ「満春大隊6隊」などの標識がある一帯を探訪してみた【写真 6-12】が、何もない。地震で壊滅し放棄した場所である以上、旧来の建物を探すのは無理であろう。今となっては旧城の東側外郭（城壁）も定かではなかった。

◆新城（西街）満城《2003年9月》《2009年2月》

2003年の時は新城では「満城北街」の地名を探し出して引き返した【写真 6-13】。2009年には、『寧夏回族自治区地図冊』（中国地図出版社、2006年）などに、新城地区には「満城北街」と「満城南街」の街路名が記されているので、満城南街を訪れたが「満城南街」はバスの停留所名となっていた【写真 6-14】。南街から北街の端まで行ってみたが、北街の先には畑が広がるのみであった。拡幅された満城南北街は地名が残るのみで、北街にも南街にも古の面影を見つけ出すことはできなかった。以前は往々にして、將軍衙門のあった場所に人民政府が置かれているなど、旧来の街と今の街並みを相互比較することができたが、旧城東街と新城西街が一つの街になってしまった今の銀川では、そのような手がかりも無くなってしまっているようである。

◆二つの清真寺

銀川は回族自治区の首都、当然のことながら回族の信仰の基盤となるイスラム寺院清真寺が多数ある。Google マップで検索してみると、市区に10座の清真寺が数えられる。清末の回民の反乱以後、漢人は城内に、回民は城外に居住させる漢回分離政策が実施されたことが指摘されているが⁽¹¹⁾、マップを見ると旧城の西側すなわち新城との間に4座、旧城の東側に3座が数えられ、あるいは清真寺の位置が旧城城郭を示すのかも知れない。10座あるという中で以下の2寺を瞥見した。

(1) 東関清真大寺《2009年2月》

旧城の東側にあり、満春郷を見た後に立ち寄った。ミナレットも漢式ではなく丸いドーム型であり、「碑記」に、光緒十三年（1887）この場所に典型的な宮殿様式で建築されたとあることを裏付けている【写真 6-15】。礼拝時間なのであろうか、建物の前には多数の自転車が並んでいた。この寺院は1937年の抗日戦争の時に建物の一部が小学校として使用され、以後、ここで回族学生にアラビア語を教えていた。文革の時には「四旧」として破壊、売り飛ばされて80年余りの歴史を閉じた。1978年の三中全会以後に民族・宗教政策が大きく変わって以後、イスラム教を信奉する人口が増加し、1998年に至って大寺が完成し今に至っているとある。

碑記のそばに掲げられた「建設資金寄金名簿」には7,000元から100元までの寄金者名や敷地寄進者名が記されている。土地国有化の建前と土地の寄進との関係、あるいは個人ではない村や市場、工場の寄金に興味が惹かれる。

(11) 村松一弥『中国の少数民族』（毎日新聞社、1973年）「回族：回教徒の乱」に、同治陝甘の回乱の後、清朝は漢人と回族の分離居住政策をとって、漢人は城内、回族は城外に住ませたことが記されている。また、車から見ただけである旧城「南関清真大寺」は、明末清初に南門外に創建、1915年に城内の今の場所に移築されたという。

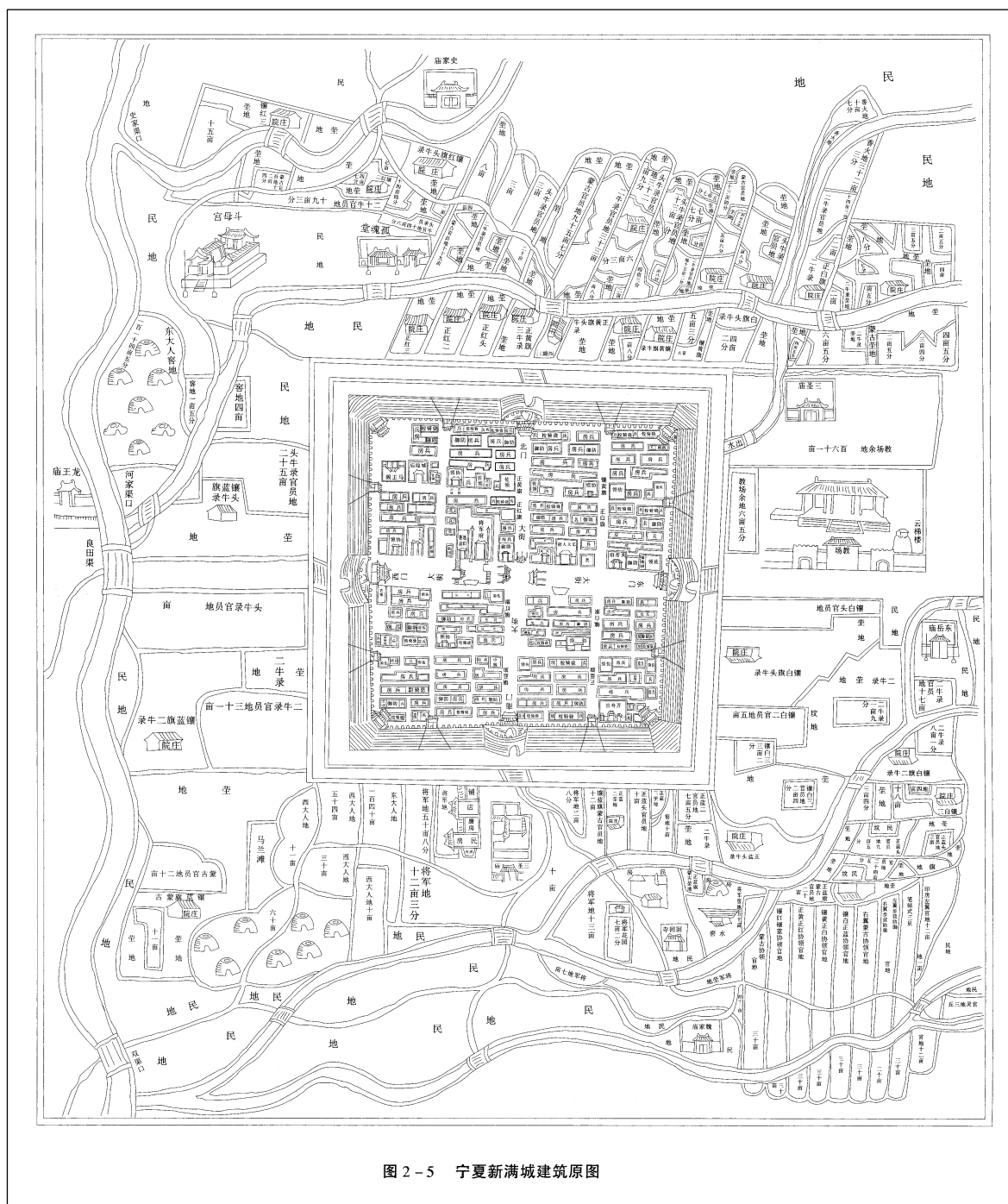


图 2-5 宁夏新满城建筑原图

图 6-3 寧夏新滿城建築原図（原図：『寧夏滿族述往』寧夏人民出版社、2002 年）

(2) 銀川新城清真大寺

バス停留所「満城南街」の所に建っていて、漢式の門楼にはアラビア文字と漢字「銀川新城清真大寺」が掲げられ、漢式ミナレットの建つ奥の本堂には「銀川新城南門清真寺」とあり【写真 6-16】、壁面に嵌めこまれた 2000 年の竣工記には「銀川寧城清真大寺」とあって、どれが正式の名称なのか不明である。今の建物は 2000 年に完成した新しいものであるが、古い由来があるのかも判らない。

◆二つの仏塔

(1) 承天寺塔《2003年9月》

仏教寺院承天寺の塔なので承天寺塔、旧城の西南に位置することから西塔とも称される。西夏の天佑垂聖元年（1050）に創建され、明代初期に承天寺は廃れたが、塔はそのまま残り、乾隆三年（1738）の地震で崩壊、嘉慶二十五年（1820）に再建され今に至っている。承天寺塔は樓閣式磚造りで8角11層、高さは64.5mあり、1963年に「自治区重点文物」に指定されている【写真 6-17】。狭く急な階段で最上部まで上ると、寧夏市内が一望できた。塔の周辺に二つの梵鐘が置いてあり、その一つには「大明國鎮守寧夏／總兵官西征將軍張□（＝傑）／発心命工于／楊清寧…」⁽¹²⁾と、別の一つには「萬曆拾伍年捌月吉日造」との銘があった。この鐘の銘記からも、明末になっても承天寺塔が尊崇されていたことがうかがわれよう。

(2) 海宝塔《2009年2月》

別称は赫宝塔、黒宝塔、また旧城の北郊に位置していることから北塔とも称される。創建年代は不明であるが、万曆『朔方新志』に「黒宝塔、赫連勃勃重修す」と記されていることから、5世紀初め五胡の夏国王時代にさかのぼれると考えられている。現在の塔は、康熙四十八年（1709）秋の地震で四階が崩れ、康熙五十一年に修復、その後も乾隆三年の地震で再び崩壊、乾隆四十五年に重建したものである。我々が訪れた時は、2008年四川大地震の後だったので、塔の入り口に、2008年5月23日付けの「四川地震によって亀裂が生じたので、修理のために参観はしばらく閉鎖する」という張り紙があった。高さ10mちかくある基座の上に聳える、樓閣式磚造りの平面は四角形（亜字形で凸部分に塔門がある）、底辺は辺10m、天蓋を含め9層、高さ45mの塔【写真 6-18】は、1961年に全国重点文物に指定されている。

塔の前に大雄宝殿があるが、その入り口には「海宝塔寺」と塔の名前が冠せられた寺名が、基座に残された碇型の飾りには、「海寶塔寺／甲子仲秋吉日／蘇州民豐廠造」と記されていて、承天寺塔とは相異して海宝塔は塔のみが尊崇の対称となっていたことをうかがわせる。

◆旧城南薰門（南門）《2003年9月》

西夏時代に始まり、明の正統年間に重修、康熙帝が駐蹕した時に、ここで閲兵をしたと伝えられている。2000年に建てかえられ「小天安門」とも称されているだけに、古の面影は全くないが、1985年に銀川市文物に指定されている【写真 6-19】。

◆玉皇閣《2009年2月》

旧街の東街にあり、その創建は不明であるが、嘉靖『寧夏府志』には「譙樓」、乾隆『寧夏府志』には「玉皇樓」と記されているという。玉皇樓（閣）と道教の名称を持ちながら、上に樓閣が築かれた長方形の基座には、南北に道路が通じる門洞が開けられていて、鼓楼や鐘樓と同じような造りである【写真 6-20】。「重修玉皇閣碑記」などによれば、玉皇閣は明清時代に鼓楼の役割をつとめると共に、真武大帝を祀っていた。乾隆三年の大地震で倒壊し同五年に重修、光緒末年に紳商が捐資して別の場所に鼓楼が建築されたことから、新建の鼓楼に対して今までの鼓楼は玉皇閣といわれるようになったという。玉皇閣には1935年4月に寧夏省立図書館、54年に文書館、88年に銀川市文物管理局が置かれた。今の建物

(12) 『万曆実録』巻93、万曆七年（1579）十一月丁巳の条に「原任鎮守寧夏總兵官張傑仍充鎮守寧夏地方總兵官」とあることから、銘文の□は「傑」であろう。

は 2005 年 8 月に改修、06 年 10 月に完成した建物であり、1963 年に自治区文物に指定されている。朝、ここを通りかかったが、中心街の広場とあって、多くの人が太極拳などに興じているのはどこも同じ光景である。

5 銀川郊外の史跡

銀川郊外の史跡といえば、西夏王陵であり賀蘭山岩画であろう。共に観光客用に整備されてしまい、清朝をめぐる史跡を探すことは出来ない。

◆西夏王陵国家重点風景名勝区《2003 年 9 月》《2009 年 2 月》

2003 年と 2009 年では相異した様子は余りない。「西夏博物館」は西夏文字で記された馬牌、漢字「第十二副将…」などの文字も見える門牌、碑亭の土台であった四尊力士像など、見て楽しいものが多く、西夏陶磁の展示も充実している。「西夏史話芸術館」には「明／詔封夫人／金氏墓／誌銘」など明代の墓誌銘があったが、それ以外はすべて人形の展示、「西夏碑林」に並べられた石碑も全てが現代の人々のものであった。

公開されている「西夏王陵」は、9 座の帝王陵と 250 余座の陪葬墓の中の一つ、「昊王塚」と称される李元昊の泰陵（3 号墓）である。泰陵の塋域は 15 万 m²、塋域の四隅に角台が、域内には左右対称に鵠台、千を超える西夏文の石碑残片が発掘されたという碑亭（模造の四尊力士が置かれている【写真 6-21】）などがある。塋域の中心は、凸字形の月城（今は標識のみ）と陵城、陵城の中に献殿、墓道、陵塔がある。陵城の中心は 7 重の陵塔（仏塔）。外側を覆っていた磚はすべて剥落して黄土の版築がむき出しとなっているが、基礎の直径 36m、高さ 24m ある堂々たる陵塔で、西夏の仏教信仰を示す代表的建造物というだけあって見応えがある【写真 6-22】。陵塔を経て東北角の角闕（望楼）をまわって围墙沿いに南門付近に戻って見学を終えた。

◆賀蘭山岩絵《2009 年 2 月》

賀蘭山の山麓の 110 号線を銀川から北に走る。途中の山裾に李元昊の避暑行宮があった場所に拜寺双塔が 100m ほどの距離を隔てて建っている。時間がないので遠望するのみ。この付近は野生生態系保護区域で「寧夏回族自治区賀蘭縣／小麦野生近縁植物原生境保護項目／建設単位賀蘭縣農牧局／建設時間 2005 年」の標識が建っている。小麦に近似した野生植物があるとするならば、寧夏平原ではかなり古くから小麦栽培を行っていたことが考えられる【写真 6-23】。

岩画観察路の手前にゲートがあり、観察路入り口と「銀川世界岩画展覽館」がある。

「賀蘭山賀蘭口岩画風景名勝区」は、賀蘭山山脈の東斜面に 3,000～10,000 年前の岩絵が 6,000 枚（そのうち人面画は 700 枚）あるという。観察路に歩を進めたが、岩画は狭い谷間の兩岸の岩肌に書かれていて【写真 6-24】、谷間は日がかげり、風が出始め、川の水はすっかり凍っていて寒い。岩画の書かれている場所には説明表示と赤マークがある。人面や動物絵に混じって、「總理寧夏鎮城遊撃將軍潘固振會／同洪廣遊撃將軍文應奎於萬曆三十／七年五月初一日恭／{部院黃／總鎮蕭} 明文重修賀蘭口？？？／築土圓墩一座／架梁督主事？總{人名？}」と読める。すなわち万曆三十七年（1609）に寧夏城將軍潘固振と洪廣遊撃將軍文應奎が賀蘭口関牆を重修したことを記した刻文である【写真 6-25】。また下流に刻された「明嘉靖十七年題刻…」には、嘉靖十七年（1538）に寧夏巡撫を派遣して賀蘭口関隘を修築したと軍の駐屯の状況が記されている。これらの文字碑刻は明瞭に読

める部分が多いが、近年に碑刻そのものを修復したと推定されるものもある。これらの碑刻から、今は岩画で賑わうここが頭道関から連なる賀蘭山を長城とする隘口、関門の一つであったことが読み取れよう。観察路は途中で谷を渡って下流に戻るが、この奥にもかなり岩画があるとのこと。途中、「巨人が山を開き水を取り万物を潤していることに天が感じて、大山に口を開いてくれたので「豁了口」と呼ばれていたが、後に音の同じ「賀蘭口」になった」という賀蘭口の伝説にまつわる「巨人の足跡」と称する場所があった。岩画に混じって西夏文字の碑刻もあるが、西夏文字があってもおかしくはないにせよ、どこまでが本物でどこからが偽物なのかが疑問であろう【写真 6-26】。帰途、「銀川世界岩画展覧館」に立ち寄ったが、ここには賀蘭山岩画と並んで世界各地の岩絵、今まで見たアムール河や新疆アルタイ地区の岩絵も展示されていた。

◆鎮北堡・西部影視城《2009 年 2 月》

賀蘭山岩画から銀川に戻る途中に立ち寄った「鎮北堡・西部影視城」は、「紅高粱」（紅いコーリャン）をはじめとする数多くの映画やテレビドラマが撮影された映画村として名高い。しかしこの映画村「鎮北堡」は、弘治十三年（1500）に築かれた明の堡塞であり、それが乾隆三年の地震で倒壊した後、その北側に乾隆五年（1740）に築かれた清の堡塞である。清の堡塞は東に城門を持つ 1 辺 160～170m 程ある堂々たる城で、「鎮北堡古城堡」として 1985 年に銀川市文物に指定されている。

外側から見ただけであるが、版築で築かれた城壁や望楼は修理の手が加えられたとはいえ元来のものであろう【写真 6-27、6-28】が、角楼や城門は明らかに後の作り物である。中に入れば名画のセットが再現されていて、史跡としてよりは映画村として名高い存在である。我々には史跡破壊に思えるが、明清時代の史跡に対する、歴史の時代感が相違する現れであろう。

◆頭関長城《2009 年 2 月》

寧夏一帯はアラシャン（阿拉善）地方を根拠地にしたモンゴル族と漢族の接触地帯であり、モンゴル族の活動に悩まされた明王朝は、16 世紀前半嘉靖年間にアラシャン沙漠から賀蘭山山脈にかけて長城、辺牆を築いた。それから既に 500 年近くを経ているので、消失してしまった所も少なくないが、場所によっては未だ長城が残っている。その一つが銀川の西に設けられていた長城の関門、三道関の中の一つ頭道関（頭関）であり、頭関は銀川と巴顔浩特をつなぐ 102 号線の寧夏と内蒙古の境に位置している。銀川からさほど遠くないので、西夏王陵を訪れた足をのばして出向いてみた。西夏王陵区から南東へ向かうと、公開されていないいくつかの王陵が右手に見える。沙漠の混じる荒涼たる景観の中を西に走り、賀蘭山のコルにある頭関へ到着した【写真 6-29】。関門は既に無いが、頭関があった場所の長城は 2001 年に全国重点文物に指定されている。賀蘭山の山並みが低くなる南側の稜線と季節河が流れた跡もあるゴビの中に、版築の痕跡がはっきり残る長城が連なっている【写真 6-30】。長城付近から賀蘭山にかけての一带は、これ以上の沙漠化を防ぐために放牧を禁止しているという。

6 銀川南の史跡

銀川から西安へ通じる、あるいは蘭州へ通じる街道沿いにも多くの史跡がある。そのいくつかを訪れたので記しておく。

◆古窯磁村《2003 年 9 月》

北京に帰る合間を利用して、西夏陶磁の窯跡が地名になったのであろうと考え、靈武市郊外に位置する磁窯堡鎮古窯磁村を訪ねてみた。銀川市を後にして黄河を渡り、銀川飛行場を通り過ぎ、陝西省へ続く道を東へ向かう。黄河を渡った先には明代の長城が連なり烽火台が点在している。程なく着いた古窯磁村は露天掘り炭坑で、露天掘りで掘り下げられた中に、窯跡らしきものがある。周囲には陶磁片が散乱し、「西夏古窯址簡介」も建っているが、はげ落ちてほとんど読めない。窯跡のことを知っている人に尋ねると、窯跡と思った場所は西夏の城跡であり【写真 6-31】、窯跡は別と教えてくれた【写真 6-32】。その先に見えるのは明代の長城付属施設である城壁や点将台【写真 6-33】、陶磁片のきらきら光る彼方には烽火台も見える【写真 6-34】。思いがけずに、西夏や明代の史跡を目にして、2003 年の探訪を終了した。なお、2010 年に、最近になって古窯磁址の発掘調査を開始したが、まだ進んでいないとの情報を聞いた。

◆黄河と騰格里沙漠《2009 年 2 月》

銀川から 2 時間余り南下し、中衛市の手前で黄河の右岸沿いの道を走りながら南西に向かう。この付近の黄河は流量も少なく穏やかな流れである。やがてテンゲリ（騰格里）沙漠の南端にある沙坡頭村に到着、ここで黄河は大きくわん曲し、わん曲部分の左岸（北側）にはテンゲリ沙漠の砂丘を利用した沙漠公園があり、砂滑りやラクダに乗った沙漠遊覧が楽しめるようになっている。公園には行かずに黄河河畔の碼頭村付近に行ってみたが、ここには碼頭の名前のとおり小さな船着き場があり、流れがわん曲して砂が沈澱するためであろうか、黄河の水は澄んでいる。しかし水が澄んでいるのは今だけで、やがて黄濁するという。少し上流には陝西省榆臨から寧夏中衛を経て甘肅武威をつなぐ高速 2012 号線とそれが黄河を渡る橋が見えていた【写真 6-35】。この付近もやがて観光地化されるようで、ホテルやレジャー施設などの大きな建物が建っている。

◆高廟保安寺《2009 年 2 月》

黄河とテンゲリ沙漠をのぞいた後に、沙坡頭村を抱える中衛の街へ出向いた。ここは西安と蘭州をつなぐ交通路の要衝に位置していて、街の中心部には近年に再建されたという鼓楼が聳え、鼓楼をはさんで鼓楼東街と鼓楼西街が東西に長く伸び、古は東西交通の街であったことを偲ばせる。この鼓楼の北側に高廟保安寺がある。

高廟保安寺は高廟が保安寺と一緒にあった、儒教、仏教、道教三教が合祀された寺廟である【写真 6-36】。入り口に掲示された説明板には「高廟保安寺は永樂年間の創建、占地 6895 平米に殿堂房舎が 300 余間あり、一番上は 29m 上部に位置し、狭い敷地に多くの建物が重層して建てられていて、今にも空に飛び出そうとしているようである。五百羅漢や 18 層地獄もあり、儒・仏・道が融合した全国でも珍しい仏教寺院である」と記されている。山門には「高廟保安寺」と記されているが、牌楼の先の一階正面にある建物には「保安寺」の扁額が掲げられている。大雄宝殿の裏手にある急で狭い 24 段ある階段を上ると南天門、その後に中楼があり、高廟と呼ばれる部分はこの裏手にある高さ 20m あるという三階建ての建物を指すようである【写真 6-37】。この部分は一階が五岳廟（仏教）、二階は正面が玉皇廟（道教）で、その裏側は大成殿（儒教）、三階は瑶池宮（道教）になっていて、三教を合祀していると記されている⁽¹³⁾。牌楼からここに至る部分の建物は、高廟保安寺の中心線

⁽¹³⁾ 中国国家文物事業管理局編、鈴木博訳、村松伸解説『中国名勝旧跡事典』第 5 卷（ぺりかん社、1989 年）「中衛高廟」の項。また 積圓波主編『高廟保安寺』（内部資料、2006 年）を参照。

に位置している。本殿をなす部分の建物の左右には、多数の廂房（耳殿）がまさに重なりあって建っていて、五観堂、羅漢亭、文昌祠、関公楼などに諸仏諸神が祀られ、それと共に僧房や客殿が配置されている。本殿と耳殿の間は回廊でつながれていて【写真 6-38】、順に参拝できるようになっている。その参拝路にある建物には勸善懲惡を誇示する 18 層地獄図が「油地獄」などのタイトルでおどろおどろしく描かれていた。

高廟保安寺は三教融合といっても仏教が中心であり、よほどの知識と丁寧な観察がなければそれとは判らないであろうが⁽¹⁴⁾、文献史料の上でしばしば目にする三教融合の実態を知るための良い資料を提供してくれる。また、高廟保安寺は明代に創建されてから⁽¹⁵⁾、康熙四十八年（1709）、乾隆三年（1738）の寧夏地震で壊滅、民国三十一年（1942）には火災で全焼とくり返し大災害を受けたが、そのたびに再建されてきた。さらに文革時代には「牛鬼蛇神」の象徴として徹底的に破壊され、今の建物はその後再建されたものであるという⁽¹⁶⁾。すなわち高廟は中国民衆の宗教心を再検討する材料ともなろう。

◆石空大仏寺《2009 年 2 月》

石空大仏寺は、中衛の東隣に位置する中寧県城の西 20km、中寧県余丁郷金沙村、双龍山の山麓に位置する。双龍山の南向きの、岩壁というよりも崩れやすい砂礫壁に石窟を掘り、窟には仏龕を穿ち仏像を安置し、岩壁の前の平地に寺院を造営している。元来は石空大仏寺以外にも睡仏洞、百子観音洞、靈光洞などの石窟があったが、今は石空寺窟をのぞいて流砂に埋もれてしまったという。

石空寺を見せていただいた折りのプリント「寧夏中寧県石空大仏簡介」には、「騰格里沙漠の端にある双龍山（別名は石空山）南麓の断崖に、上中下 3 段に分けて 3 寺と眼光洞、睡仏洞、百子観音洞、孔聖洞、玉皇洞、靈光洞など大小 13 の洞窟があり、その中でも九間没梁寺⁽¹⁷⁾の石窟は最大規模で高さ 25m、幅 13m、奥行き 8m ある。そこには 88 仏に加えて羅漢、菩薩など 360 体の彩色塑像があり、真ん中には石を芯にした泥塑像の石胎大仏を安置している。その他の洞窟には老君、孔氏、玉皇、龍王などを祀っていて、三教合一の寺院である。1963 年に省級文物に指定、1980 年に区文物管理委員会が発掘を開始した」ことなどが記されている。

一段高いところに穿たれた石窟の前に広がる平地に、大雄宝殿を中心とする建物群が建っている【写真 6-39】が、石空寺は目下修理途中で未開放であった【写真 6-40】。幸いなことに金曜日の夕方とあって管理を担当する文化管理局の人は不在、留守を預かっている管理人は、遠来の客人だからと特別に見せてくれた。修理中の建物を見ながら一番奥の九間没梁の石窟までたどり着くと、中には石胎大仏と脇侍が安置され【写真 6-41】、別室には「文革中は村人が持ち出して、沙漠の中に埋めておいて隠しとおした」と話してくれた五百羅漢の一部が修復して展示されていた【写真 6-42】。これ以外の、石窟というよりは砂礫崖あるいは土窟といった感じの洞窟は未修理で、窟の中には仏像が彫られていた痕跡が残っている【写真 6-43】。もろい崖に掘削された修理中の洞窟は、修理の片端から崩れ

(14) 筆者自身は孔子を祀る部分は確認していない。

(15) 高廟の創建は、『旧跡事典』では正統年間（1436～49）、解説では永楽二年（1404）としていて相異があるが、明朝初期に起源があるのであろう。また敷地の広さなどもそれぞれの間で一致しない。

(16) 様々な事情から建物は再建されて新しくなっても、旧来の石碑や梵鐘などに創建当時の面影を知ることが出来る場合が多いが、高廟では古い時代と想定される碑頭は見つけたが、石碑はすべて近年のものばかりであった。

(17) 没梁寺の「没」字はプリントに従うが、無梁寺かも知れない。

てしまうようである。プリントには唐時代に始まり宋、西夏、元、明、清と受け継がれたことを示す塑像、壁画、磚、銅鏡、銅仏像などが発掘されたとあるが、荒涼たる大地に立つ寺院と石窟、隠し通した羅漢、いずれも信仰の厚さを思わせる。

暮れなずむ石窟寺院の見学を最後に、2009年2月の寧夏探訪を終えて、銀川の空港へ向かったのは17時をまわっていた。

おわりに

3回にわたって訪れることができた寧夏回族自治区は、今は漢族文化の中に埋没しつつあるにせよ、イスラム寺院に象徴される回族文化を基盤とした社会であることを感じさせられた。その一方で、一神教であるイスラム教に支えられた回族文化の中に生き延びる漢族文化が、非イスラム世界を合わせた三教融合という形となって現れたのではないか、それが高廟保安寺や石空大仏寺に見いだせるのではと考えた。

また清朝時代に駐防という形で、マジョリティー漢族（文化）に囲まれながら、マイノリティー満族が同じマイノリティー回族を統治する時、どのような問題が生じたのかなど、清朝の寧夏統治は、東北や中原の統治とは相異なるだろうことを考えさせられた旅であった。

（原載：『アジア流域文化研究』Ⅵ、2010年）



写真 6-1 1979 年の王昭君墓



写真 6-2 2003 年の王昭君墓



写真 6-3 城壁の上に建つ角楼

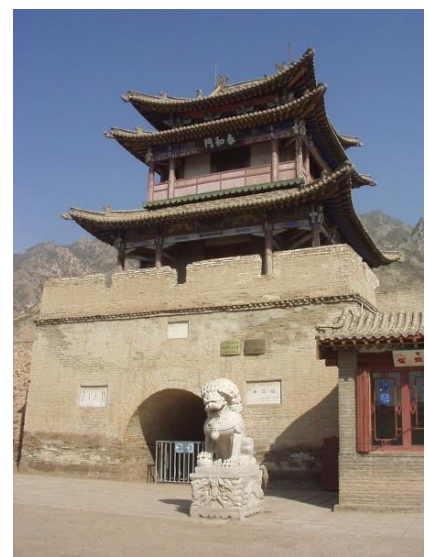


写真 6-4 美岱召正門の泰和門



写真 6-5 馬と駱駝がつながれた五当召の広場



写真 6-6 満漢蒙藏文四体の廣覺寺扁額



写真 6-7 黄河の鉄橋（1979 年）



写真 6-8 磴口の黄河大橋



写真 6-9 漢式建築の旧寧夏博物館



写真 6-10 新装開館した寧夏博物館



写真 6-11 満春郷の道路標示



写真 6-12 満春大隊の家並み



写真 6-13 满城北街の道路標示



写真 6-14 满城南街のバス停留所



写真 6-15 東関清真大寺



写真 6-16 新城清真大寺



写真 6-17 承天寺塔



写真 6-18 基壇の上に聳える海宝塔



写真 6-19 毛沢東の肖像が掲げられた南門



写真 6-20 右側に門洞が見える玉皇閣



写真 6-21 碑亭の上に並ぶ四尊力士像



写真 6-22 陵塔と困障



写真 6-23 賀蘭山の下に建つ拝寺双塔



写真 6-24 岩画の描かれている隘口関門



写真 6-25 万曆三十七年の碑刻



写真 6-26 人面と西夏文字だが、偽刻か？



写真 6-27 映画ロケに使われている清の堡塞



写真 6-28 従来のままと見られる城壁の一部



写真 6-29 頭関址、越えると内蒙古阿拉善左旗



写真 6-30 ゴビの中に彼方まで続く版築の長城



写真 6-31 西夏の城趾跡だという



写真 6-32 西夏窯址



写真 6-33 明の城壁と点将台



写真 6-34 明の烽火台



写真 6-35 碼頭村から遠望した黄河鉄橋



写真 6-36 高廟保安寺の正面

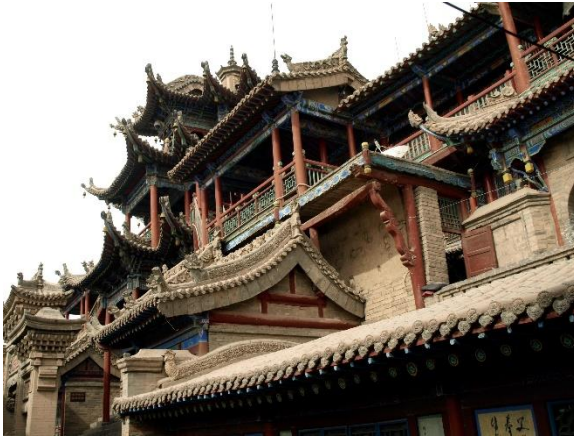


写真 6-37 積み重なるように立ち並ぶ高廟



写真 6-38 本殿と耳殿の間をつなぐ回廊

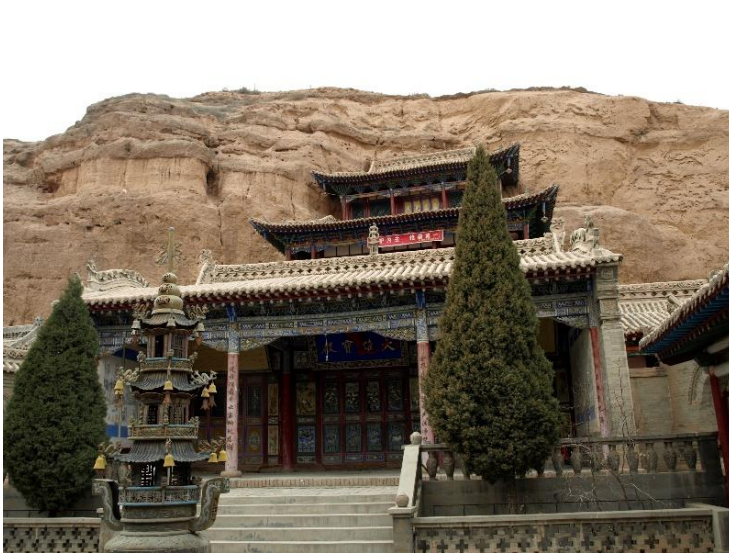


写真 6-39 双龍山の前に広がる石空大仏寺全景

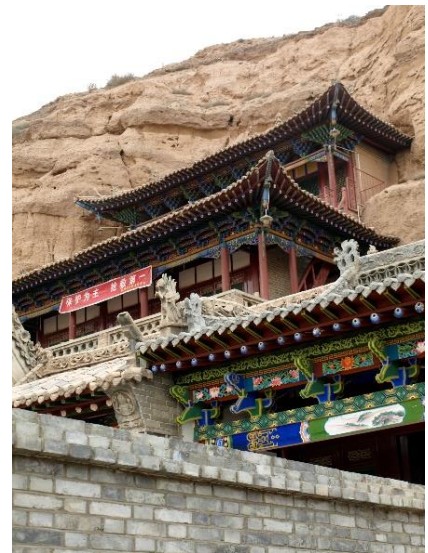


写真 6-40 修理中の大仏寺本殿

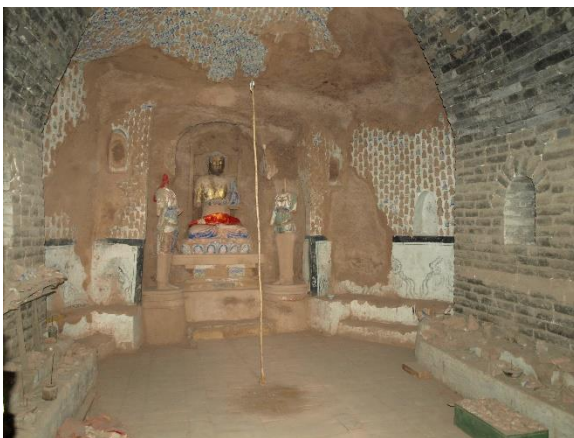


写真 6-41 修復された石窟と石胎大仏と脇侍



写真 6-42 沙漠から出土し修理された羅漢像など



写真 6-43 内部に仏像が彫られている泥壁の石窟

第7章

北京周辺の三藩をめぐる史跡

はじめに

清朝に帰化した尚可喜と三藩（四藩）をめぐる課題を検討すると共に、その史跡探訪を続けている。清朝に反乱した三藩は、政権側からすれば否定すべき存在であるだけに、自ら史跡は乏しい。また近年の経済発展やオリンピック開催にともなう都市整備などから、北京をはじめとする各地の史跡は急激に変容しているので、10年も前に訪ねたわずかな史跡が今も残されているのか疑問ではあるが、それだけに以前の様相を写真と共に記しておくのも無駄ではあるまい。このような観点から、呉三桂の反乱が伝えられると共に処刑された三桂の子供呉応熊の邸宅跡、尚可喜の子供の尚之隆に下嫁した和順公主の墓、和順公主の父である承沢親王の子恵郡王博翁果諾の墓にあったと推定される石五供、耿精忠の兄弟の耿聚忠に下嫁した柔嘉公主の墓、三藩の乱と時を同じくして北京で起きた楊起隆の乱を討伐した正黄旗漢軍都統祖永烈の墓、三藩の乱当時に広東巡撫であった劉秉権の墓、それに加えて公主墓の様相をもっともよく伝えているとされる赤峰市郊外に残る静端公主の墓について記しておきたい。

天聰七年（1633）、後金国・清朝に帰化した孔有徳をはじめとする明朝の部将が、大清建国と共に、都元帥孔有徳は恭順王（順治六年五月、定南王に陞封）に、総兵官耿仲明は懷順王（同じく靖南王）に、同尚可喜は智順王（同じく平南王）に封じられ⁽¹⁾、遅れて順治元年（1644）四月に帰化した平西伯呉三桂は、帰化と共に平西王（康熙元年五月、平西親王に陞封）に封じられ、彼等4人が清朝で異例の「異姓王」として遇されたことは知られている。異姓諸王に対する処遇の一つに、清朝宗室のゲゲ *gege*（格格）を彼等の嗣子に下嫁させる、逆に彼等の娘を宗室に入嫁させ両者の間を婚姻関係で結ぶ政策が行われたが⁽²⁾、同時に彼らの嗣子を朝廷に入れ皇帝の側近として仕えさせる入侍も実施された。婚姻政策が限定的であったのに対して、嗣子を入侍は清朝の支配に屈した漢人官僚に対して広く求められた。すなわち順治四年四月に「三品以上の中央官僚と総督、巡撫、総兵などの地方官僚は、直系の子供一人（それがいない場合は弟あるいは兄弟の子供）を朝廷に入れて侍衛とすることを准す。これは三品以上の大官の子供に、清朝の礼儀を習得させ能力相応の任務を与えるための特恩である」⁽³⁾と、三品以上の中央、地方の漢人官僚に子供を入侍を命じ、それを特恩と称している。しかし順治二年に南明唐王の下から帰化した鄭芝龍は、子供の鄭成功が反清の中心であることから、「墳塋の祭掃も奏明してから行く」など厳しい監視下におかれていたが、この成功に対しても成人した子供を入侍を求めていることからす

(1) 『太宗実録』巻28、崇徳元年四月辛丑の条。

(2) 三藩に対する婚姻政策は、鈴木真「清初におけるアバタイ系宗室」（『歴史人類』第36号、2008年）が明らかにしている。

(3) 『世祖実録』巻31、順治四年三月庚申の条。

れば⁽⁴⁾、入侍は特恩であるよりは漢人大官に対する人質政策と見なしてよい。広く大官を対象に行われた入侍の具体的な様相、それが清朝独自の政策なのかなどは今後検討する必要がある。ここでは異姓諸王に対して、下嫁と入嫁にあわせて入侍も実施されていたことを指摘し、異姓諸王の子供をめぐる入侍について、その年月日と与えられた品級を掲げておく。なお、入侍年月日のある記録『実録』に記載があるものである。

呉三桂の子		
呉応熊	入侍年月不明 ⁽⁵⁾	少傅兼太子太傅 和碩額駙
孔有徳の子		
嗣子は無く娘は孔四貞 ⁽⁶⁾		和碩格格・郡主待遇
耿継茂の子（耿仲明の子）		
耿精忠	順治十一年（1654）十一月甲辰に入侍	靖南王を襲封 和碩額駙
耿昭忠	順治十一年十一月甲辰に 15 歳で入侍	太子少師 和碩額駙
耿聚忠	順治十三年に 11 歳で入侍 ⁽⁷⁾	太子少師 和碩額駙
尚可喜の子		
尚之信	順治十一年三月に入侍 ⁽⁸⁾	平南親王を襲封
尚之隆	順治十四年四月に入侍 ⁽⁹⁾	太子少師 和碩額駙

1 呉応熊の藩邸跡「国立蒙蔵学校旧址」

西城区小石虎胡同 38 号（p.169:C5）⁽¹⁰⁾《2007 年 7 月 13 日》

張永江氏（中国人民大学清史研究所）が、文化遺産の拈花寺から人民大学の印刷工場の移動が決まったこと、西単の 1 千戸余りの商店がある民族大世界商城は、元来は呉応熊の邸宅で、民国時代に国立蒙蔵学校があった場所であり、この商城も移動計画を審議中であることを報じている 2007 年 7 月 12 日『京華時報』を見せてくれた。早速、張氏と共に赴いてみたが、商城の中は蒙蔵学校時代の建築とも見える建物を利用した小店が建ち並び、道が迷路のように走っていて【写真 7-1】、『清史図典』に載せられている「呉応熊駙馬府

⁽⁴⁾ 『世祖実録』巻 66、順治九年七月戊戌の条。

⁽⁵⁾ 呉応熊の入侍は『実録』などに記述が見えないが、『平定三逆方略』「康熙十三年四月丁未。呉応熊等伏誅。」の項に、諸王大臣會議が呉応熊などを「凌遲処死」に処すると議奏したのに対して、康熙帝は「応熊は長い間近侍していたので、凌遲処死とするのは忍びない」と見える。

⁽⁶⁾ 順治九年七月、孫可望軍の包圍攻撃で孔有徳は自縊し一族は全滅、娘の孔四貞のみが残ったが、順治帝は有徳の功績を讃えて四貞に俸禄を給し和碩格格待遇としている。『世祖実録』巻 91、順治十二年四月癸未の条。

⁽⁷⁾ 『八旗通志初集』巻 188、「名臣列伝」48。

⁽⁸⁾ 『元功垂範』巻上。

⁽⁹⁾ 『元功垂範』巻下。

⁽¹⁰⁾ 史跡については『中国文物地図集北京分冊』上下冊（科学出版社、2008 年 7 月、以下で『文物地図集北京』と略）を参照し、下冊にある項目の名称・場所、上冊の地図上にある位置を記しておいた。すなわち呉応熊の藩邸跡は、下冊「文物単位簡介」の「国立蒙蔵学校旧址」の項目に、所在地は西城区小石胡同 38 号と表記され、上冊 169 頁掲載地図の C5 にマークされていることを示している。

原址内院」⁽¹¹⁾を見つけることはできなかった。呉応熊邸宅は、その後に八旗宗学、鎮国公綿德邸宅、国立蒙蔵学校として受け継がれた歴史がある⁽¹²⁾が、その面影は全くない。わずかに清朝時代のものとおぼしき大型の磚を利用して再建された壁【写真 7-2】、すり減った階段石に歴史がしのばれるのみであった。

2 和順公主と尚之隆の墓「和順公主園寝」

豊台区長辛店鎮公主墳北 (p.178:C3) 《2004 年 9 月 4 日》

和順公主は太宗の第 5 子承沢親王碩塞の第 2 女で、宮中で養育され和順公主に封じられた後、順治十七年 (1660) 六月に尚之隆へ下嫁、康熙三十年 (1691) 十一月に没して和順公主墓に葬られた。また額駙尚之隆は康熙五十七年二月に没して公主墓に合葬された。

2004 年 2 月に国家図書館で『平定三逆方略』満文本稿本を調査した時、図書カード「和順公主諭祭碑文拓本」があることを知り閲覧したが、きれいな拓本で満漢文の碑文はほとんどが読める⁽¹³⁾。その後、劉小萌氏 (中国社会科学院近代史研究所) は馮其利氏が和順公主墓を紹介していること⁽¹⁴⁾を見つけ出してくれたので、これを頼りに赴いた。北京市と石家荘市を結ぶ鉄道、京石高速、一般道が平行に走る道を石家荘方面へ、盧溝橋を経て趙辛店鎮を過ぎた南西に和順公主墓がある。今では『文物地図集北京』に所在が記されているが、当時は趙辛店の南西にあるとの情報だけを頼りに近くまで行き、お年寄りに尋ねると、幸い公主墓の近くに住んでいる人で、早速、案内していただいた。樹木の生い茂った小山が、本来は円筒形で磚に覆われていたであろう公主墓宝頂 (墳丘)【写真 7-3】であり、残っているのはこの小山のみである。周辺には小さな住宅が建ち並び、教えられなければこの小山が墳丘であることはわからない【写真 7-4】。

案内のご老人に公主墓の昔を尋ねると、1960 年代末から 70 年代初めまでは公主墓は残っていたが、その後に墓を壊してしまった。墓の材料を自分の家に利用した人がいたが、その人はやがて半身不随になってしまった。公主墓は壊される以前に盗掘されていて、墓を壊した時に墓室の中には何も残されていなかった。ただ、棺はまだ残っていて 3 体分の遺骨があったとのことである。

馮氏によれば、ここは趙辛店大隊朱家墳第八生産隊に属し、「公主墳」、「尚家墳」と称さ

(11) 朱誠如編『清史図典』(紫禁城出版社、2002 年) 第 3 冊「康熙朝上」、191 頁。

(12) 『文物地図集北京』には、ここは明初に「常州会館」が置かれ、清朝になると呉応熊と公主の邸宅「駙馬府」、その後は左右両翼「宗学」、乾隆帝の孫である鎮国公綿德の邸宅「綿德府」であったが、清朝滅亡後の 1913 年に「国立蒙蔵学校」が開設され、モンゴル族に対する共産党運動の拠点であったことから、全国重点文物保護単位に指定されたことが見える。

(13) 図書カードには「北京 10254 尚之隆妻和碩和順公主諭祭碑 正書 漢滿文 清康熙三十一年三月 249×76 一張 又一份一張 豊台区長辛店鎮南公主墳」とある。なお『北京図書館所蔵北京石刻拓片目録』(書目文献出版社、1994 年、以下で『拓片目録』と略)では所在地を「豊台区長郭莊公主墳」と記している。また拓本は『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』(中州古籍出版社、1990 年、以下『拓本匯編』と略) 65 冊 5 頁に収録されている。乾隆五十六年『尚氏宗譜』7 房尚之隆の項には、後掲した「和順公主諭祭文」漢文が、碑を建てたことを記す「康熙三十一年歲次壬申三月 日勒石」を除いて掲載されている。

(14) 馮其利「趙辛店附近尚家墳」『燕都説故』(北京燕山出版社、1996 年)。また氏には『清代王爺墳』(紫禁城出版社、1996 年)などの著作がある。

れていた⁽¹⁵⁾。和順公主が没した時、尚之隆はここ次頭（慈頭）村西に公主墓を設置し、之隆もここに合葬された。東向きの園寝は三つの部分に分かれ、その内の一つが公主墓（別名老宮門）で、公主墓の東側はコノテ柏の林、西側には河北房山特産の白色の大理石でできた馱龍碑が2基建っていて、その西側に墳丘があった。公主墓は鑲藍旗漢軍所属の夏・佟・劉・黄姓の四戸が墓守に当たっていた。尚之隆の子孫は1919年にコノテ柏を広安門にある木廠に売却、1922年に看墳地を趙辛店、北崗窪などの村人に売ってしまった。1928年に公主墓は盗掘されたが、それをやったのは盗掘専門の次頭村に住む某であると云われている。1972年に馱龍碑は打ち壊され埋められてしまい、墓の玄室も掘り返され、遺址はならされて平地となり、北側は養豚場に、東側は第八生産隊の本部と飼育室になったが、幸いに公主墓の三合土でできた墳丘は今も残っていると記されている⁽¹⁶⁾。すなわち幸いに残ったという墳丘が樹木の生い茂った小山であり、文革で壊され埋められてしまった馱龍碑とは、拓本が残る「和順公主諭祭碑」、あるいは和順公主墓碑や尚之隆墓碑などであろう。

以下に、閲覧した国家図書館拓本によって「和順公主諭祭文」原文を示しておく。碑文は満文6行で「hūwangdi」を抬頭、漢文6行で「皇帝」を抬頭していて、満文と漢文はほぼ対応している。ただ漢文最終行に刻された石碑建立の年月日「康熙三十一年歲次壬申三月 日勒石」の1行は満文に見えない。なお、以下では碑文の改行を「／」、抬頭を「△」で示している。

elhe taifin i gūsici šahūn honin aniya jorgon biyai orin sunja de / △ hūwangdi hese šang jy lung de buhe hošoi dahasu gungju de wecere gisun, gurun boo uksun mukūn i jurgan be ujereme ofi, mergen sain de wesihun be isi...⁽¹⁷⁾, kooli dorolon de bisire akū / ohongge de kesi be neigeleme ofi, hesei bithe be dosholome wasimbumbi, hošoi dahasu gunju si, aisin i gargan ci banjifi gui bithede sain tutaha, hūwaliyasun ijishūn banin / hesebufi, nesuken erdemu daci salgabuha nemgiyen, sain durun iletulefi, beyebe dasame dorgi kooli be urebuhe, gaitai akū ojoro jakade, ambula hairame nasame, tuttu wecere kooli be / yabubufi, hanci niyaman be jiramilame gosimbi, ai, sain yabun be gūnime, šeri fejergi de amcame kesi isibumbi, toktoho kooli be baicabufi, wecere jaka be dobofi wecebumbi, fayangga sara / hese oci, gingguleme alime gaisu.

維康熙三十年歲次辛未十二月朔越二十五日／

△△皇帝諭祭尚之隆所配和碩和順公主之靈曰、國家誼重宗支、榮分淑媛、典禮恩均存歿、寵畀綸音。／爾和碩和順公主、誕秀金枝、流芳瑤冊。稟姿婉順、令□由於性成；著範柔嘉、禔躬嫺夫內則。溘／焉長逝、淡切瑜傷、聿頒祭□之儀、以篤懿親之眷。嗚呼！永懷惠質、用追卹於泉臺、載考彝章、爰／薦馨於俎豆、靈其昭格、尚克欽承。／康熙三十一年歲次壬申三月 日勒石

公主墓を見た後に、付近に残ると聞いていた和順公主の父である承沢親王の墓地などの所在を尋ねたが、それは知らないし付近には何も残っていないとのことで断念した。

⁽¹⁵⁾ 乾隆五十六年『尚氏宗譜』7房尚之隆の項には「公主…薨于辛未年十一月三十日丑時、合葬于宛平県朱家村…賜銀五百兩。御祭壇、塋地一坵」と、当時の地名は朱家村で、墓地も賜与されたことが記されている。

⁽¹⁶⁾ 『文物地図集北京』には、元來、大門・圍牆・享殿・墓冢があったが、早い内に何度も盗掘され、文革中に破壊されて、三合土の墓冢が残るのみであると記されている。

⁽¹⁷⁾ 缺部分は isibufi ?

3 石五供「恵郡王博翁果諾園寢」

豊台区侯家峪村東 (p.178:C2) 《2009 年 2 月 22 日》

この日は北京の史跡、特に宗室公主の墳墓に詳しい馮其利氏に豊台区の永定河右岸一帯を案内していただいた。この付近には、石五供の他に前述の和順公主墓、豊台区碑林⁽¹⁸⁾、後述する劉秉権墓などが残されている。この石五供⁽¹⁹⁾は承沢親王碩塞の第2子である恵郡王博翁果諾墓の墳丘の前に置かれていたものであるが、恵郡王園寢は破壊されてしまい、同園寢の唯一の遺品がこれであるという【写真 7-5】。柵の中には「北京市豊台区文物保護単位／石五供／北京市豊台区人民政府 1984 年 5 月公布／北京市豊台区文化委員会立」と記された「文物標示」、祭台＝供卓（幅 4.2m：奥行き 1.25m：高さ 1.15m）、祭台の向こうに、中央に花飾、雲紋、龍紋、獅頭の施された香炉（幅 1.8m：奥行き 1.15m：高さ 2.35m）、その両側に故事や龍紋の施された宝瓶（幅 75 cm：奥行き 75 cm：高さ 2.2m）、宝瓶の外側に宝瓶とほぼ同じサイズの燭台が置かれている【写真 7-6】。香炉、宝瓶、燭台を合わせると幅 5m 余りあり、この石五供から郡王墓の大きさが推し量られる。

4 柔嘉公主と耿聚忠の墓「耿聚忠与柔嘉公主墓」

門頭溝区東辛房街道東龍門西 (p.189: D3) ⁽²⁰⁾ 《2002 年 9 月 15 日》

柔嘉公主は順治帝の従兄安親王岳樂の次女で、宮中で養育されて柔嘉公主に封じられた後、康熙二年（1663）に靖南王耿繼茂の第三子耿聚忠に下嫁、康熙十二年七月に没している。兄耿精忠の処刑にかかわらず額駙の地位を保った耿聚忠は康熙二十六年二月に没すると、祭葬と諡を賜与され柔嘉公主墓に合葬された。

折から北京に滞在中の加藤直人氏（日本大学文理学部）や綿貫哲郎氏（日本大学文理学部）も加わって、数日にわたり北京と通州で清朝、八旗の史跡を訪れた。北京では壊される直前の正白旗満洲都統衙門⁽²¹⁾【写真 7-7、7-8】や、以前に訪れた時とはかなり様相を異にしている鑲紅旗三旗都統衙門と共に、以下に記す柔嘉公主墓や祖永烈墓を訪れた。

北京から西に向かい房山区を過ぎて永定河を渡ると門頭溝区、柔嘉公主墓は門頭溝街道の東龍門村にある門頭溝石油会社の敷地とその付近のリンゴ畑の中にあり、「耿聚忠墓／門頭溝区人民政府 1981 年公布／門頭溝区文化文物局 2001 年立」と記された「文物標示」がある。道路に面した石油会社の建物の脇に、柱頭にあるべき石獸の失われた華表が建ち、対をなすもう 1 本の華表（これは柱頭の石獸が残っている）は花壇の中にある【写真 7-9】。

(18) 嘉慶朝の戸部・吏部尚書の朱珪の墓碑、明朝の張輔・張懋家族墓の墓碑や石人、石獸が保管されている。

(19) 石五供とは、皇帝や宗室などの墳丘の前に置かれる石造の祭具で、祭台 1 基、香炉 1 基、宝瓶一対、燭台一対で構成されている。

(20) 『文物地図集北京』には、墳墓の公称は「耿聚忠墓」で、東向きに設置された墳墓の敷地は約 6,700 m²、参道は 200m 余り、以前に盗掘されたが発掘調査はせず墓室の状況は不明、華表 2 基、石闕一対、順治・康熙・雍正の「諭祭碑」5 本、墳丘が残っていると記している。

(21) 郝志群「京師八旗都統衙門の設置及び現状調査」（『満族史研究』第 2 号、2003 年）で、「2002 年 9 月 15 日…北竹竿胡同はすでに壊されており、101 号院大門及び院の部屋も大半がなくなっていた」と記されているが、我々が訪れたのは前々日の 9 月 13 日で、まだ昔日の面影を残す大門などが残っていた。

敷地内の道路の端に「柔嘉公主誥封碑」と「耿聚忠誥封碑」が建っていて【写真 7-10】、石碑近くのリング畑の中に、頭部に石獣の残る一対の石闕が見える【写真 7-11】⁽²²⁾。

『文物地図集北京』には 5 通とある⁽²³⁾が、『拓本匯編』には以下の 6 通の満漢文による碑文拓本が収録されているが、実見したのは上記の 2 本のみである。

1. 耿聚忠妻和碩柔嘉公主誥封碑 康熙三年（1664）二月十四日制（62-25）
2. 耿聚忠妻和碩柔嘉公主諭祭碑 康熙十二年（1673）八月二十一日祭（63-51）
3. 耿聚忠妻和碩柔嘉公主墓碑 雍正元年（1723）三月二十三日立（68-4）
4. 耿聚忠誥封碑 順治十五年（1658）五月十五日制（61-177）
- 5-A. 耿聚忠諭祭碑 康熙二十六年（1687）四月九日（64-98）
- 5-B. 耿聚忠墓碑 康熙二十六年（1687）五月二十四日刻（64-98）

上記のように、『拓本匯編』には「3. 耿聚忠妻和碩柔嘉公主墓碑」とある⁽²⁴⁾が、柔嘉公主の没年月日は康熙十二年七月己卯、諭祭碑の日付は同年八月二十一日であり、雍正元年日付の墓碑はあり得ない。同碑の冒頭は「和碩柔嘉公主碑文」、末尾は「雍正元年參月貳拾參日立」と記されているので、「3」は雍正元年に柔嘉公主ら 3 人を「立碑致祭」した時⁽²⁵⁾の「致祭碑」であろう。

また「5-A」「5-B」は 1 本の石碑に 2 通の碑文が記されている。A には「皇帝諭祭…」と、B には「太子太保和碩額駙諡愍敏耿聚忠碑文」と見えるので、共に康熙二十六年二月丁卯（十九日）に祭葬と諡を賜与されたことに基づく「諭祭碑」⁽²⁶⁾であり、「5-B」を耿聚忠墓碑とすることには疑問がある⁽²⁷⁾。「3」と「5-B」が墓碑ではなく諭祭碑であるとするならば、この園寝には上述 5 本の石碑の他に「柔嘉公主墓碑」と「耿聚忠墓碑」の 2 本があったことになる。墓碑、諭祭碑、致祭碑の関係が不明のままに、ここでは『拓本匯編』などのタイトルに疑問があることを提示するにとどめる。

5 定南王孔有徳碑《1991 年 8 月 29 日など》

定南王孔有徳碑は北京の五塔寺に併設されている石刻芸術博物館の中に保存されているので、石碑を目にした人も多いことであろう【写真 7-12】。孔有徳は順治九年（1652）七月に広西桂林で孫可望軍に包囲されて自殺、子供の孔廷訓は孫可望に連れ去られ一族は全滅、娘の孔四貞のみが生きながらえた。孔有徳の遺骸は遼陽東京に葬られることとなっていたが、孔四貞は自分の住む京師に葬ることを願い出て、順治十一年六月に孔有徳と夫人

⁽²²⁾ 石闕には、葬られた人の姓名や官職が刻まれているので、これを確認すればこの墓地に埋葬された人の全容が明らかになるのであろうが、確認しないままである。

⁽²³⁾ 碑文拓本の掲載冊と頁を記しておいた。すなわち（62-25）は『拓本匯編』第 62 冊 25 頁に拓本が掲載されていることを示している。

⁽²⁴⁾ 『拓片目錄』では「和碩柔嘉公主碑文」としている。

⁽²⁵⁾ 『世宗実録』巻 4、雍正元年二月庚申の条。

⁽²⁶⁾ 『聖祖実録』巻 129、康熙二十六年二月丁卯の条。

⁽²⁷⁾ なお『清史図典』第 3 冊「康熙朝上」200 頁もまた 5-A・B を「耿聚忠墓碑拓片」と墓碑として紹介している。

の白氏、李氏の墳墓を京師に造営し碑を建てるのが許可された⁽²⁸⁾。この墳墓の場所について、滕紹箴氏は「阜成門（彰義門）関廂路北」現在の阜成門外北営房に設けられたが、阜成門は正紅旗地界で、有徳の部下が正紅旗漢軍であったことと対応するので妥当であると述べている⁽²⁹⁾。しかし順治十一年六月の「造墳立碑」について『会典事例』に「旨に遵い祠を広寧門外に建て、春秋仲月に定南王と妃の白氏と李氏を祀る」⁽³⁰⁾とあり、祠堂は広寧門（現在の広安門）外に設けられたので、墳墓もこの付近にあったのではなかろうか。

『拓本匯編』には「孔有徳墓碑」と題して拓本が収録され、滕氏も著書掲載の写真を「孔有徳墓碑」としているが、1991年当時、同碑につけられた説明板には「孔有徳碑」と記されていた。原碑の額題（碑頭）を見れば明らかになることであろうが、同碑には「順治十二年三月初三日立」とあり、文中に順治帝の言「朕定鼎中原、王身当屢戦、多獲捷功」と見えるので、これは墓碑ではなく順治帝の賜与した致祭碑であろう。

6 祖永烈諭祭碑「祖大寿家族墓」

◆海淀区東升地区馬坊村東（p.183:D6）《2002年9月17日》

納蘭性徳の史跡や明珠墓を訪れるべく北京市街から北に向かう。今の八達嶺高速の東側を通る農道を走らせている時に、道の脇に立っている石碑を見つけ写真記録を行った【写真7-13】。額題は満漢文で「hesei wecere bithe／御祭文」と記されているようであるが判然としない。本文は満文5行、漢文5行で、漢文の冒頭は「康熙十九年閏八月初三日／△△皇帝遣禮部員外郎黃□⁽³¹⁾／諭祭一等精奇尼哈番加三級祖永烈…」と記されている。先を急ぐこともあり丁寧に探したわけではないが、石碑の周辺には「文物標示」の標識も見当たらず、墳墓らしきものも見えなかった。

諭祭碑の当事者である祖永烈は、天聰五年（1631）に大凌河城で祖大寿に従って明朝から後金国へ投じて正黄旗漢軍に編入され、後に三等精奇尼哈番（三等子）に封じられた祖可法の子供である。祖永烈は順治八年（1651）に祖可法が引退すると父の三等子を承襲（後に一等子）、康熙六年三月に正黄旗漢軍都統に任じられ、康熙十二年（1673）十二月に北京で起きた楊起隆の乱の鎮圧に兵部尚書明珠などと共に当たり⁽³²⁾、康熙十九年に没して諭祭を賜与されている⁽³³⁾。

『文物地図集北京』「祖大寿家族墓」の項目には、ここが「祖家墳」と称される祖大寿の家族の墓であること、墓地には石五供や大官の墓前に建つ石翁仲（石像）があったが清末に盗売されてしまったこと、現在は祖大寿の墓室残部と康熙十九年の日付の「祖永烈諭祭

(28) 『世祖実録』巻84、順治十一年六月癸亥、同甲子、同丙寅の条。

(29) 滕紹箴『三藩史略』上下（中国社会科学出版社、2008年）「定南王墓地与祠堂」の項。当時、孔有徳軍は漢軍旗編成ではないので、正紅旗地界と結びつけることはできない。墳墓と祠堂の位置関係は不明であるが、滕氏は墳墓の近くに祠堂があったとみなされている。なお『拓本匯編』は、孔有徳墓碑の所在を「海淀区原孔王墳」と記すが、一般的には西三環中路にある海淀区の公主墳を孔四貞墳とみなし、この近くに孔有徳墳もあったとしているようである。

(30) 『光緒会典事例』巻453礼部164祀11「功臣專祠」。

(31) 1字不明。

(32) 楊起隆の乱については、細谷良夫「三藩の乱をめぐる一呉三桂の反乱と楊起隆・朱三太子事件」『戦争と平和の中近世史』（青木書店、2001年）を参照。

(33) 『聖祖実録』巻91、康熙十九年七月己酉の条。

碑」が残るのみであると記している。唯一残る諭祭碑について、両側に雲龍模様が施され、長さ3mの螭首をもつ亀趺の上に、碑身高さ3.5m、幅1.18m、厚さ42cm(全体の高さ4.76m)、文字は摩滅して不明瞭な部分もあると見える。なお、祖永烈碑拓本は『拓本匯編』に見当たらず、『拓片目録』には以下のようにある。

祖永烈諭祭碑 京 5471 正書 滿漢文 康熙二十三年 216×76 海淀区清河鎮河北村
祖永烈諭祭碑陰記 京 5473 王熙撰 沈奎正書 都甫篆額 康熙二十三年 216×76
海淀区清河鎮河北村

『拓片目録』が記すように、諭祭文の裏側にも文章があつて、これを見れば碑文の由来などが明らかになるのかもしれないが、この時は表側の康熙滿漢文碑文だけに目がいき、裏側にはほとんど注意を払わなかったので不明のままである。

前述したように、『文物地図集北京』は祖永烈諭祭碑の建つこを「祖大寿家族墓」として、祖永烈を祖大寿の一族すなわち祖永烈の父の祖可法と祖大寿は一族であるとみなしている。しかし祖可法と祖大寿が一族であったかどうかは明らかでない。確かに祖大寿が来歸する時に行われた交渉の中で「祖大寿の子の祖可法を送って質とする」⁽³⁴⁾と可法が大寿の子であるとの記録がある。しかし祖可法の事績を記す『清史稿』や『八旗通志初集』の列伝では、可法が祖大寿の子供であることや両者の間に血縁関係があることは記されず、かえって祖大寿の子供には祖沢潤など「沢」字輩の者が挙げられている。また祖大寿と祖可法の関係について『八旗通志初集』には、前述した『実録』の記述に続き「八旗の記録はまちまちなので子孫にただすと、『祖可法は祖大寿の一族ではない。可法の父の名は祖有才であり、その宗族はない』との答えである。また祖沢潤は『実録』に大寿の義子とあり、旗冊では長子とありどうして相異しているのか不明である。沢潤も可法も大寿の部下の副将であったので、彼らは義子として配下に置いたのであろう」⁽³⁵⁾と記している。祖大寿の軍「祖家将」にいた有力武将祖可法と大寿の間は義子の関係であり、祖可法は祖大寿の子供ではないとするならば、祖永烈碑が建つこを「祖大寿家族墓」とすることは再検討されなければならない。また清河街道馬坊「城建一公司機械回收站」内にあると記されている石碑は、現在も見ることができるのであろうか疑問である。

7 劉秉権の墓「劉秉権墓」

豊台区長辛店鎮大溝村 (p.178:B2) 《2009年2月22日》

石五供などと共に馮氏に案内していただいた。墓地は豊台区の北部、永定河を望む小高い台地に位置していて、道路脇の、夏はトウモロコシ畑らしい東側の開けた高台にある。入り口とおぼしきあたりに、文字の刻まれた跡も見えない80cm四方で高さ1mほどの石造りの門柱様のものが2本建っている。そのすこし奥の左右に、柱頭に置かれていた石獸は失われた2本の華表が建ち、華表の中間に墓碑が建っていて【写真7-14】、その奥にコンクリートの囲いで囲まれた墳丘とおぼしき小山⁽³⁶⁾が残っている【写真7-15】。墓碑の近く

⁽³⁴⁾ 順治初纂『太宗実録』卷8、天聰五年十月二十六日。『滿文老檔』天聰42には「dzu i jui dzu k'o fa be benjire」とあり、『旧満洲檔』は『滿文老檔』と同文である。

⁽³⁵⁾ 『八旗通志初集』卷175名臣伝35祖大寿伝。

⁽³⁶⁾ 墳丘には調査の痕跡か盗掘かは不明であるが、掘った穴が見受けられた。

に2004年12月14日付の「文物標示」が建っていて「劉秉権の字は持平、諡は端勤、天聰六年（1632）生まれ。正紅旗漢軍旗人、順治初めに兵部主事、康熙六年（1667）十二月に広東巡撫に任ぜられ、三藩の乱で潮州の劉進忠の乱を鎮圧するなどの活躍によって、兵部左侍郎兼都察院右副都御史に抜擢されたが、康熙十三年に軍中で没したとの略歴、そしてこの墓地を2004年11月に北京市文物局が整理と保護の手を加えた」ことが記されている。

『文物地図集北京』には、劉秉権墓は既に壊され東向きの墓碑が残るのみであり、後ろを振り返った形の螭首をもつ亀趺の上に、高さ2.5m、幅1.03m、厚さ40cmの石碑が建っていて【写真7-16】、康熙帝勅撰の満漢合璧碑文が記されているとある。

石碑は「hesei ilibuha／勅建」と読める額題の下に、満文は官職人名が2行、本文4行、それに建立年月日を記した最終行と合計7行で記されている。漢文は「巡撫広東等處地方提督軍務兼管糧餉鹽法兵部右侍郎兼都察院右副都御史諡端勤劉／秉権碑文／」と官職人名の2行、「稽古建業驅策／」で始まる本文4行と「康熙拾五年陸月初肆日立」の建立年月日の1行が記されている⁽³⁷⁾。

文物標示に記された経歴を補うと、奉天出自の劉秉権は順治帝に従って入関し、順治元年（1644）に兵部主事⁽³⁸⁾、同三年に刑部啓心郎、同十七年に戸部員外郎、康熙三年に国史院学士などを勤めた後、同六年に尚可喜の支配下にあった広東巡撫に任ぜられて三藩の乱に対処した。尚可喜は尚之信の酒におぼれ部下を虐げる性行を疎んじて、平南王位を尚之孝に承襲させようと申し出て、康熙帝もそれを許可した。しかし尚之信の力を恐れた尚之孝は、王位承襲の辞退を申し出たので、それを上奏し許可を得たのが劉秉権であり、以後、之孝と秉権は力を合わせて戦乱に立ち向かっていく。すなわち尚可喜の広東支配を検討する時、劉秉権の広東行政とその動向は看過し得ないものがある。

8 端静公主の墓「公主陵」

内蒙古自治区喀喇沁旗十家満族郷十家村東北約1km《1997年9月12日》《2007年7月11日》2～7に述べた公主墓や八旗漢人官僚の墓は、劉秉権墓を除き華表、石碑、墳丘がばらばらに残存するのみで、石五供などが置かれていたであろう公主墓の規模を知ることはできない。端静公主は内モンゴル喀喇沁王家に下嫁した公主で、北京の公主墓とは趣を異にするのであろうが、杜家驥氏が清代公主陵墓の地域と建築を最もよく残していると紹介していること⁽³⁹⁾、2度の探訪の写真記録と杜家驥氏あるいは赤峰に下嫁した公主の史跡全体を紹介している劉冰・顧業麗氏の写真⁽⁴⁰⁾を比較すると、この10年の間に牌楼などの変容が認められることもあって記しておく次第である。

劉冰氏によれば、端静公主は康熙帝の第5女で康熙三十一年（1692）十月に18歳で喀喇沁杜楞郡王札什の子供の噶爾臧に下嫁したが、額駙噶爾臧との間の夫婦仲は良いものでは

⁽³⁷⁾ 『拓片目録』、『拓本匯編』は共に劉秉権碑文を収録していない。

⁽³⁸⁾ 『欽定八旗通志』巻200人物志80「劉秉権」伝などには、「文物標示」にある「天聰六年生まれ」は記されていない。ただ天聰六年生まれでは、順治元年に兵部主事に任命された時は12歳であるので、標示の生年には疑問がある。

⁽³⁹⁾ 杜家驥『清朝満蒙聯姻研究』（人民出版社、2003年）の「第12章 文物、遺跡及訪査資料対満蒙聯姻史事的補充」。同書口絵「図12」に端静公主墓のカラー写真がある。

⁽⁴⁰⁾ 劉冰・顧業麗『草原姻盟—下嫁赤峰的清公主』（遠方出版社、2007年）「第5章 下嫁喀喇沁右翼旗的清公主」、表紙とp.141に端静公主墓のカラー写真がある。

なかったという。一方、康熙帝は端静公主を慈しんでいたようで、巡幸ではその府第に駐蹕、一方、公主はしばしば北京で「請安」している。公主が康熙四十九年三月に37歳で没すると、康熙帝は致祭を賜与し礼部の奏請に従って「造墳立碑」を許可⁽⁴¹⁾、この結果、現在の十家郷十家村に公主墓が造営され、康熙五十一年に完成し同五十八年に至って遺骸がここに移された。そして公主墓への埋葬にともない、公主に随侍してきた人々は墓守として十家村に住みつき、これが村名の由来となったという。しかし公主がここに葬られていたのは長い間ではない。すなわち康熙六十一年に額駙噶爾臧が没すると、その陵墓が赤峰市錫伯河南岸四十家子郷柳条溝村に造営され、ここに合葬されることとなって、公主は再び移葬されたという。

端静公主墓には2度足を運んだ。1997年には王禹浪氏（現大連大学）と共に、松花江流域の調査に続き遼河上流域の阜新、朝陽の史跡を経て赤峰に至り端静公主墓を訪れた。当時は喀喇沁王府の建物はまだ王爺府学校として使われていて、王府博物館も整備中であったが、ここに展示されていた写真で「満族十家村」の近くに「公主陵」があることを知った。当時は公主陵よりも満族十家村の名称にひかれて地図を頼りに村に行ってみたが、村では何もわからぬままに公主陵へ到り、道路から見える大きな牌楼に目を奪われた。トウモロコシ畑を通り墓地にたどり着き、牌楼、華表、石碑などを見て回る。折からの中秋節のお参りであろうか若者と老人が石碑に供物を捧げに来たので、王氏に聞き取りをしてもらった。

老人は王忠泰（64歳）さん、清朝時代は鑲黄旗所属であった満族で「十家満族郷」（ママ）に住んでいる。村名の満族十家とは、端静公主に随侍してきた白、王、汪、候、潘、李、胡、関、呉姓（聞き漏らして1姓は不明）であり、彼らは公主が没した後に公主墓の墓守となり、今でも墓参りをしている。順天府出身の我々の他に、太監の李老公、張老公の2人がいた⁽⁴²⁾。公主陵の東側には公主の子供の墓が、南の山の向こう側にある柳条溝には公主の夫である額駙の墓があった。牌楼の中央中段には御筆4字の扁額があったが、ひと月ほど前に盗まれてしまった⁽⁴³⁾。道路の南、園寝の前を流れている河（無名）の氾濫で、墓の囲いが壊されてしまったことなどを教えてくれた。劉冰氏によれば、北にある丘から南側の河に向かって広がる一帯が公主陵の園寝で、10余畝あり、石堀で囲まれた中に、3間の門坊、正殿、大庁があり、その奥に墳丘が位置していた。門坊などの建物は1949年と1976年の2度にわたり破壊されてしまい、今は無いが、御筆の扁額が掲げられていた3間の大きな牌楼、その左右に石獸を載せ雲紋のある華表、牌楼中心の奥に石碑が残っていて、石碑は高さ5.13m（碑身高さ2.59m）、幅1.19m、厚さ47cmあるという。

石碑の碑文は額題に満洲語「hesei ilibuha」が中央に、蒙古語は左に、漢語は右に記され、その下は満洲語「hošoi tob nesuken gungju i bei bithe」で始まる本文が中央に、蒙古語は左に、漢語は右に記され、末尾に立碑の日付「elhe taifin i susai emuci aniya nadan biyai juwan emu de ilibuha」と記された満蒙漢3体合璧碑である。牌楼と石碑付近こそ畑になっていないので歩きまわれるが、それ以外の場所は全て丈高く繁ったトウモロコシ畑、畑の仕切り

⁽⁴¹⁾ 『聖祖実録』巻243、康熙四十九年閏七月戊戌の条。

⁽⁴²⁾ 聞き取りでは壮丁10戸と太監2戸であるが、十家の戸数、姓、由来、その後などについて、聞き取り、劉冰氏、杜家驥氏の解説、さらに無署名「喀喇沁旗十家満族の来歴」『赤峰市文史資料選輯：漢文版』第4輯（中国人民政治協商会議赤峰市委員会、1986年）所収の記述の間に相異がある。

⁽⁴³⁾ 盗まれたという扁額について、劉冰氏は『草原姻盟』で、康熙帝親筆の「克昌厥後」と記された扁額であると解説し写真を掲載している。同書には扁額の他に喀喇沁王府博物館蔵として「端静公主墓誌」の写真も掲載しているが、扁額の写真には所蔵先が記されていない。

などに園寝の建物に使われていた磚や石が多数使われているのを見つけたが、周りの探索はできないままに、聞き取りと石碑などを写真に収めて帰路についた。

初めて訪れてから 10 年後の 2007 年 7 月、劉小萌、張永江、下倉渉（東北学院大学）の各氏と共に、承德からすっかり観光地化してしまった囲場や烏蘭布通を経て正藍旗と克什克騰をまわって赤峰へ到着、夜行列車で北京へ帰る合間を利用して再訪した。この 10 年間ですっかり景観の変わってしまった道を、赤峰から 40 km あまり離れた満族十家郷へ。十家郷の中の頭道営子と満族十家村の間で頭道営子の西 3.5 華里の所に、以前と変わらない姿で牌楼と華表が建っているのを見つける。道から 50m ほど先、10m ほど高くなった台地に園寝はあり、以前と同様に藪をかき分けて石碑にたどりつき、牌楼や華表などを写真に収めた。牌楼中央と石碑を結ぶ延長線上の 50m ほど奥の山裾に、墳丘の囲いらしきものが見えるが、藪と雨のために今回も確認せずに終わってしまった。

帰ってから前回と今回の写真、更に劉冰氏の写真と杜家驥氏の写真の 4 種を比較すると、様々な点で相異している。以下に華表と牌楼をめぐり、筆者の 1997 年の写真⁽⁴⁴⁾を A、2007 年の写真を B とし、さらに劉冰氏、杜家驥氏の写真と比較してそれらの間の相異を指摘する。

〔華表〕：【写真 7-17A】では華表柱頭の石獣及び雲紋は 2 本共にそろっている。しかし【写真 7-17B】では石獣は 2 本共々に、左側に建つ華表の雲紋は失われている。劉冰氏の写真では 2 本の華表の石獣、雲紋は全てそろっていて【写真 7-17A】と同じであるが、杜家驥氏の写真（右側華表のみが写っている）では、石獣は失われている。

〔牌楼〕：4 本柱 3 間の牌楼は左側、中央、右側に分かれ、それぞれの上段の飾りは左に雲紋、中央に火炎型紋、右に雲紋の 3 種類で構成されている。【写真 7-18A】では左側の左右の雲紋、中央の左の雲紋、右側の右の雲紋が失われているが、【写真 7-18B】では左側、中央、右側の 6 個の雲紋は全て失われ、中央の火炎型紋のみが残っている。劉冰氏の写真では左側左の雲紋と中央右側の雲紋、右側左右の雲紋が失われている。これらに対して杜家驥氏の写真では、中央・中央の火炎型紋 1 個が残るのみで、それ以外の 6 個の雲紋と左側と右側の 2 個の火炎型紋は失われている。

牌楼 4 本の柱頭に載る石獣は、【写真 7-18A】と【写真 7-18B】、劉冰氏の写真では 4 個共にそろっているが、杜家驥氏の写真では左側柱頭の石獣は失われている（下に置いてある？）。御筆扁額が掲げられていた中段の装飾も、中央右の雲紋は、【写真 7-18A】には残っているが【写真 7-18B】では失われている。なお、この部分については劉冰氏、杜家驥氏の写真では確認できなかった。

劉冰、杜家驥氏の写真は撮影年月が記載されていないが、劉冰氏写真と【写真 7-17A】と【写真 7-18A】は残っている雲紋や火炎型紋がほぼ同じであり、劉冰氏写真は 1997 年と同じ時期に撮られたものであろう。ただ牌楼中央左の雲紋は、【写真 7-18A】では失われているが劉冰氏写真には残っている、牌楼中央の右側雲紋は、【写真 7-18A】では残っているが劉冰氏写真では失われている、右側雲紋は、【写真 7-18A】では右側が残っているが劉冰氏写真では左右共に失われていて、【写真 7-18B】と同じであり、雲紋の紛失すなわち史跡の変容は一樣ではない。このような相異はあるが、おおよその順を記せば、【写真 A】＝劉冰氏写真→【写真 B】→杜家驥氏写真であらう。

⁽⁴⁴⁾ 徐国元主編『草原親王府』（内蒙古人民出版社、2004 年）の「公主下嫁」に掲載されている公主墓の写真は 1997 年【写真 7-18A】とほぼ同じである。

おわりに

史料の記述は、時代すなわち政治体制の変化に伴い書き換えられるのが常であることは周知のことであろう。史跡もまた時代によって様相を異にしてしまう。それは清末、文革などの価値観の変化がもたらすばかりではなく、平常の時でも変容している、そのことを念頭におけば、同じ史跡をくり返し訪れることが必要であることを教えてくれた旅であった。

（原載：『満族史研究』第8号、2009年）



写真 7-1 小店の建ち並ぶ民族大世界商城



写真 7-2 新旧の磚が積まれた壁



写真 7-3 和順公主の墳丘



写真 7-4 木の下に墳丘がある



写真 7-5 石五供の祭台・香炉・宝瓶・燭台



写真 7-6 手前から燭台・宝瓶・香炉



写真 7-7 壊される直前の正白旗衙門



写真 7-8 壊される直前の正白旗衙門



写真 7-9 柱頭に石獣の残る華表



写真 7-10 道路脇の誥封碑



写真 7-11 石闕



写真 7-12 孔有徳石碑（1991 年撮影）



写真 7-13 祖永烈墓碑



写真 7-14 劉秉権墓全景、墓碑の右奥に墳丘がある



写真 7-15 劉秉権墓の墳丘



写真 7-16 劉秉権墓碑



写真 7-17A 1997 年の華表と石碑



写真 7-17B 2007 年の牌楼、華表、石碑



写真 7-18A 1997 年の牌楼



写真 7-18B 2007 年の牌楼

第8章

珠江・西江流域の明末清初の史跡 —平南藩尚可喜と南明永曆帝を中心に—

はじめに

北京で開催された「清代満漢関係史国際学術研究会」出席の機会に、2010年8月30～9月11日の間、中国社会科学院近代史研究所研究員劉小萌氏と共に、広西壮族自治区を珠江・西江流域沿いに歩いた。劉氏とは2001年に山東省の青州八旗駐防の営址や曲阜孔子廟内に残る満洲語石碑を訪ねて以来、毎年、各地に残された満洲族と清朝の史跡を探訪し続けている。出発前の3、4ヶ月、学会を主催し多忙な劉氏との間で、珠江流域の何処を歩くかの打ち合わせを続けた。劉氏も広西地方は初めてで、現地情報を入手できる研究仲間がないこともあって、史料上に出てくる地名を手がかりに、広西の首都南寧市をスタートし、珠江流域の各地を経て広東広州に出て、ここから北京へ戻るとの概要だけを決めて赴いた。事前に準備した史料や現地で入手した情報、各地をつなぐ交通事情などから、結果的には南寧→柳州（武宣、金田村、忻城を往復）→金秀鎮経由で賀州→梧州→肇慶→広州のコースとなった。

満族政権清朝の史跡を探訪するという目的は二人に共通しているが、劉氏は古鎮と古建築、寺廟と祠堂、先住民族＝少数民族とその聚落などを、私は平南藩（尚藩）尚可喜と定南藩孔有徳を中心とする三藩の史跡、広西を転々とした南明永曆政権の史跡を求めることが課題であった。

本章では、三藩と永曆政権の史跡を中心に「3 西江流域をめぐる明末清初の史跡」に記すと共に、この探訪以前に貴州や雲南で目にした永曆帝の史跡を整理して「4 永曆帝をめぐる史跡」に記した。

1 広西壮族自治区と珠江

「桂」と称される広西壮族自治区（以下広西と略称）は、西は雲南省、北は貴州省と湖南省、東は広東省と接し、南西ではベトナム社会主義共和国と国境を接し、南は北部湾（東京湾）^{トンキン}に面している。貴州省や湖南省との境を東西に走る南嶺山脈・雲貴高原から続く山地とその間に広がる平野部にはカルスト地形が広がり、桂林を流れる漓江の景観で知られる突起した山容「カルストタワー」が各地に見える。

広西を西北から東へと貫流するのが、珠江の一大支流である西江である。上流では北盤河、紅水河、紅河、黔江、潯江など呼称される西江には、柳江、邕江、桂江などが合流し、梧州を過ぎると広東省に入って南流し、やがて珠江と称され広東で南海に流れ込んでいる。珠江（以下で西江と称する）の支流と本流は地域によって名称が変わり、我々がたどった南寧では邕江、柳州では柳江、武宣では黔江、梧州では潯江、肇慶では西江と呼ばれるが、広西の各地は全長2,200kmに及ぶ西江・珠江の本支流で繋がれている。

西江流域に広がる広西は、黄河と長江流域が漢族の居住地帯であるのとは相違して、行

政区画名「広西壮族自治区」の名称が示すように、チワン（壮）族をはじめとする、瑤族、苗族、侗族、仡佬族、毛南族、回族、京族、彝族、水族などの少数民族の居住地域であり、少数民族人口 1,898 万人は、広西の人口の 39% を占めている。明清時代には、少数民族統治のシステムとして「土司土官」、「改土帰流」政策が行われていて、現在、それを示す「土司衙門」史跡が各地に残されている。

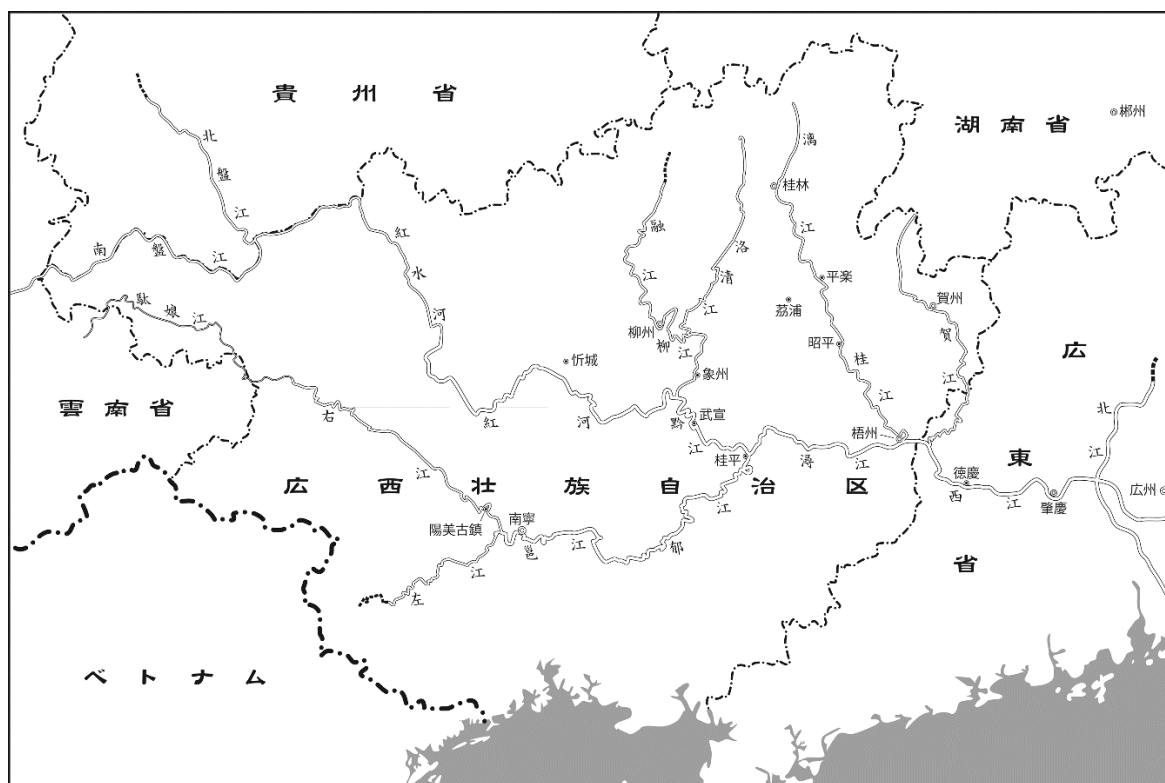


図 8-1 珠江流域図

2 明末清初の広西地方

順治元年（1644）、李自成が北京を攻略し明朝の皇帝崇禎帝が自殺、その直後にドルゴン（多爾袞）に率いられた満洲族を中核とする清朝軍が山海関外から北京に入り、明朝に代わる清朝の中国支配が始まった。崇禎帝没後の中国南部では、明朝の遺臣に擁立された諸王が明朝の後継者として監国や皇帝を称し、南明と呼ばれる短期諸政権が交代していった。すなわち南京で福王が弘光帝を、福州で唐王が隆武帝を、紹興で魯王が監国を、広州で隆武帝の弟朱聿鐸が紹武帝を称し、桂王朱由榔が肇慶で監国を称した後に即位し永暦帝を称した。北京、華北の支配に続き長江を越えた清軍は、やがて華南に進み南明政権を逐って中国本土の支配を完成する。華南支配の一翼を担ったのは、遼東で後金・清朝に帰順した漢人將軍の呉三桂、孔有徳、耿仲明、尚可喜である。彼らは、呉三桂が平西王（雲南・貴州）、孔有徳が定南王（広西）、耿仲明が靖南王（福建）、尚可喜が平南王（広東）に封じられ、各地に藩王として君臨した。康熙十二年（1673）の呉三桂の反乱に始まる「三藩の乱」を経て、4 人の藩王権力は滅亡、解体されて、華南の地も清朝の直接支配下に繰り入れられた。このような清朝初期の動向の中で、広西は永暦政権と定南王孔有徳の興亡した地域である。

桂王朱由榔は、順治三年十月肇慶で監国を称し、朱聿鐸が広州で紹武帝を称すると肇慶から梧州へ遷り、十一月に再び肇慶に戻って帝位に就き、翌順治四年を永暦元年（1647）と定めた。しかし十二月には戦乱を避けて再び肇慶から梧州へ遷り、やがて張献忠の配下であった孫可望や李定国が湖南から広西へ反清の軍を進めると、永暦元年一月には梧州から湖南に近い桂林へ遷った。しかし三月に清朝に帰順した両広提督李成棟が梧州、平楽を占領し桂林へと進撃したので、永暦帝は湖南武岡へ遷る。武岡にも孔有徳軍が逼ったため、十月には柳州へ遷ったが、「柳州は瑤・僮が雑処し、地瘠せ民貧しい」とここを嫌って、十二月には再び桂林へ戻った。しかし翌永暦二年二月、清軍の攻撃を受けて桂林を離れ南寧へ遷ったが、「南寧は蛮夷に近い」ことや復明勢力の拡大もあって、六月には潯州（桂平市）を経て即位の地である肇慶へ遷っている。その後、反清復明の戦力の軸である孫可望と李定国が対立抗争したこと、清軍が攻勢に転じたことから再び広西へ押し戻された。すなわち永暦四年＝順治七年一月に尚可喜軍が湖南から広東に入り南雄を陥すと、二月には肇慶から梧州へ逃れ、十一月には再び南寧へ遷った。更に続く清軍の攻勢で、永暦六年＝順治九年二月に南寧を後に貴州安順に逃れ、安順を安龍と改称して4年余りを過ごした後、順治十三年三月に雲南昆明に居を移し、順治十六年にはミャンマー（緬甸）へ逃げたが、やがて呉三桂の手に渡されて康熙元年（1662）に殺された。

永暦帝を追討した孔有徳は、広西支配の拠点として湖南・長江流域へ通じる桂林に王府を定めたが、順治九年七月、李定国軍に包囲されて没し、子供の廷訓は李定国軍の手に落ち後継男子のないままに定南王位は断絶した。定南王没後の桂林に靖南王耿繼茂を置く動きもあったが、実現せぬままに広東広州に王府を置いた尚可喜がこの地域を支配下に収めた。康熙十二年、雲南・貴州を支配した呉三桂の挙兵で三藩の乱が始まると、三桂は湖南から広西への進出をうかがって桂林から柳州に軍を進め、清軍は広州から梧州、南寧を拠点に反撃している。

以上のように、明末清初の広西の歴史は、永暦帝、孔有徳と尚可喜の動向で彩られているが、永暦帝は肇慶で監国を称した順治三年十月から南寧を後に安順に逃れた順治九年二月までの5年余りの間に、肇慶→梧州→肇慶→梧州→桂林→武岡→柳州→桂林→南寧→潯州→肇慶→梧州→南寧と、居所を転々と遷している。武岡を除いた全ての地は西江流域に位置していて、西江により結ばれた交通路が頻繁な移動を可能にしたものと推測される⁽¹⁾。湖南から桂林へ進撃した清軍の広西支配、定南藩と平南藩の連合、定南藩に代わった平南藩の広西支配を検討する時にも、各地を繋ぐ交通路として西江の存在が大きく浮かび上がってくる。

3 西江流域をめぐる明末清初の史跡

永暦政権、孔有徳や尚可喜など三藩の動向は、広西の歴史全体からすれば一時期の存在に過ぎず、それを冠した史跡は僅かである。今回の探訪では、永暦政権や三藩をめぐる歴史記録を振り返りながら、各地が西江で繋がっていることを確認し、出来れば史跡の断片を求めることが目的であった。以下、旅の行程を軸に、各地の様相を記すこととする。

⁽¹⁾ 順治七年正月七日に清軍が広東の各地を落とすとの報が伝えられると「初九日癸亥永暦登舟、十三日丁卯解維、…二月一日甲申永暦至広西梧州府、自前至是、凡三至、皆以舟為家」（『明季南略』巻13、永暦四年「帝至梧州」の項）とあって、珠江を舟で移動した様子が記されている。また貴州安龍も黔江の上流の紅河・北盤江の支流に位置しているので、西江舟運の便が良いようである。

3.1. 南寧《2010年8月30日～9月2日》

北京を13時10分に飛び立ち南寧には16時20分到着、飛行場から街までは32kmと離れている。南寧を流れる邕江は、南寧の少し上流で、ベトナム（越南）から流下してきた左江と貴州省境から流下してきた右江が合流、ここから上流は左江、右江と呼ばれている。南寧の繁華街、邕江の河辺から遠からぬ所に位置する市場をぶらつくと、河や海の水産物と共に鰐が食材として売られているのに驚かされた【写真8-1】。

◆南寧の博物館

明清時代の歴史と史跡の概要を知りたいと二つの博物館に赴いた。広西民族博物館は邕江の左岸、青秀山風景区の南側にある。館名通りに、広西に居住する諸民族の住居や衣裳など生活文化を示す「広西民族文化陳列」、広西で独特の発展を遂げた銅鼓の変遷と伝播を主軸とした「銅鼓文化」（博物館の外観は銅鼓を模している）【写真8-2】、東南アジアとの交流を主題とした「中国与東盟」の3部門を中心に展示している。民族文化展示の中には、光緒二十三年（1897）「馬胖眾等永定條規」石碑や民国二年（1913）「滴水容洞村禁止偷盜隨便鎖人」石碑、融水苗族の「埋巖古規」、金秀大瑤山瑤族「石碑制度」など、少数民族の自治的規定など興味深いものが多数ある。そして本館の後部には侗族の鼓楼、劇台、風雨橋などをはじめとして、諸民族の家屋や樓閣などを復元して展示している。

青秀山の山上には水の上では龍、陸では象の力が強大であることに因んだ高さ51m余りの、創建は万暦年間という「龍象塔」が再建されている。広い山中には「萬壽觀音禪寺」などもあるが、いずれも近年に再建されたもので史跡ではなかった。

1934年に始まった広西省壮族自治区博物館は南寧市内にあり、中央に出しても遜色のない明清磁器を展示する「館蔵明清磁器特展」と、銅製の燭台、越南との交易に使われた「金餅」などを展示する「考古部門」に大別される。民族博物館、自治区博物館共に見応えのある展示であったが、明清時代の歴史は全くないといってよく、参考になる展示は見当たらなかった。

◆揚美古鎮

揚美古鎮は南寧から北西に36kmほど、左江が右江に合流する地点から左江を少し遡り、河が180度屈折する右岸に位置している。左江に沿った道の両側はサトウキビやバナナ畑、二期（三期？）作であろうか田植えが終わったばかりの水田、トウモロコシや麻畑が続く。揚美鎮は、宋代に始まり、最盛期の明清時代には碼頭（波止場）を8ヶ所備えた左江水運の商品集散地として発展、その繁栄を背景に進士6人、挙人4人、貢生は30人余りを輩出、光緒三十三年（1907）に孫文が起こした鎮南起義に参加した梁烈業の出身地でもあり、歴史的・文化的に名高い土地であることを喧伝している⁽²⁾。

街の入り口から左江に向かって金馬街が伸び、左江沿いに走る一条街と交差している。一条街の別名は臨江街で、臨江街と記された門をくぐると、道光十八年（1838）建設という石版を敷き詰めた幅3.8mの通りが300mほど延びていて、臨江街に沿って古い建築が残っている【写真8-3】。道光八年（1829）に挙人に合格して賜与されたという「挙人」の扁額を門に掲げている「挙人屋」、万暦年間の遺構が残るという「明代民居」や道光年間の「清代民居」、古鎮の旧家で豪農の「黃氏莊園」などが残っている。通りの辻に煉瓦積みの一階に窓のない奇妙な建物「炮樓」が建っていて、これは左江の海賊を見張り、海賊が出ると大砲の音でそれを知らせる設備という。毛主席を讃えるスローガンが消された下から浮かび

⁽²⁾ 詳細な地理記録で知られる明末の旅行家の徐霞客も南寧から船で揚美鎮を訪れ景観を絶賛している。

上がって見えていたが、文革時代は住民を監視していたのであろうか。

河岸の碼頭と一条街は標高差で 20m 以上ありそうだが、臨江門近くの壁には、道路から 2m ほどの高さに、「1937 年農曆 7 月 20 日洪水位」、「2001.7.8」、「1968.8 月」などと記された洪水の水位は左江の氾濫の物凄さを示していた。河岸に龍の頭に似た岩があることから龍潭と呼ばれる場所には古い碼頭があり【写真 8-4】、ここと臨江街の間の斜面の広場に、天界・地界・人界の神仙を祀った明代に始まる「三界廟」が再建されていたが、近くの大樹の根元に三界廟をめぐる碑文断片が残され往時の繁栄を偲ばせていた。金馬街や岸边などには同治八年（1869）「鼎建砌路碑記」、「鼎建梯雲水埠兼兩旁大路記」、光緒五年（1879）「捌巷捐資修路碑記」、道光四年（1824）「道光四年街巷眾議禁約碑」が【写真 8-5】、また近年再建された孔子廟に残る天啓六年（1626）銘の鉄鐘⁽³⁾など、明清時代の揚美古鎮を示す史料も残っている。今も住人が参詣に来る孔子廟、清末に洋風建築の影響を受けた「慕義門」、辛亥革命の前夜に黄興や梁烈業が集った「魁星楼」などを一巡して帰路に就いた。

3.2. 柳州《9 月 2 日～5 日》

T6 次列車の南寧発北京西行きは 8 時 30 分発車、折から始まる大学の新入生や進級生、それに最近多くなったという同伴の父兄で混んでいる。はじめは西に走った後に北上し、平野の中にカルストタワーが見え始めると柳州は近い。ほぼ 3 時間で到着、はじめに柳州博物館へ出向いた。

◆柳州博物館

柳州は中唐の文学者・政治家であった柳宗元の最後の任地として名高いので、全てがそれに関わる展示かと思ったが、カルスト台地であるが故に保存された古生物や石器類から明清に及ぶ「歴史館」、広西を代表する銅鼓などの「青銅館」、満族も居住するとの表示もある少数民族の「民族館」、扇子絵を集めた「扇面書画館」の 4 部門に分かれる展示を行っていた。

歴史館の展示によれば、地名柳州は西江の一支流である柳江に由来すること、三方を柳江に囲まれ現在に伝わる柳州城は、洪武四年（1371）の築城に始まり城門は 5 門あったこと、古くから柳州から貴州、桂林、南寧へ到る交通路が開かれ、康熙乾隆年間には広州と貴州方面への商品集散地として栄えたこと、それを示すのがここに開設された各地の会館であると、福建会館を始め広東、粵東、江西、湖南、廬陵会館の看板が展示されている【写真 8-6】。また永暦帝もここに行宮を設けていたことを示すのであろうが、永暦年号の「廉州府印」の展示もあったが【写真 8-7】、行宮の位置などは不明であった。

◆柳侯祠

博物館の向かいの柳宗元公園内にあり、柳宗元の墓、碑林などがある。ほとんどが新しい修復品だが、碑林の中で柳州知府の記した康熙十一年「柳侯祠祭田記」は康熙六年（1667）に康熙帝の命令で柳侯祠のために祭田を設置したことを記していて、孔有徳亡き後の広西支配についてのヒントになりそうな碑文である。

◆柳州城東門

柳江城にあった 5 門の一つ東門が復元されていた【写真 8-8】。予想より小振りの門であったが、柳江を見下ろし、往来する船を監視する絶好の場所に位置していた。

(3) 天啓が「天启」と簡体字で記されていて、真偽は不明である。

3.3. 柳州から武宣、金田村《9月3日》

9月3日朝、昨日立ち寄った柳州城東門を右に見て、柳宗元にちなむ「文惠」大橋で柳江を左岸から右岸に渡り【写真 8-9】、龍潭公園を通り過ぎると南寧に通じる高速との分岐となり、国道 209 号線には武宣まで 85km の標識がある。途中はカルストタワーが左右に見え、サトウキビやトウモロコシ、水稻などの農耕地、時々白い花の芝麻も見える。石龍鎮で黔江と名を変えた柳江下流を渡り、柳州からほぼ 1 時間半で武宣の城北路北段に到着した。

◆武宣文廟

今は来賓市武宣県であるが、武宣の街の西側を流れる黔江は、上流は柳州に至り下流は桂平を経て梧州に連なる「黄金水道」と呼ばれる重要な水運路である。武宣文廟にほど近い場所に碼頭がある武宣は黄金水道の要衝に位置し、南明、清朝の広西支配、三藩の乱当時は、ここ武宣を経て兵員や軍需物資が上流下流に運ばれている。

三藩の乱の当時、平西藩と平南藩はそれぞれが武宣に軍を進めていたが、広西地方回復の命令を受けた平南親王尚之信は康熙十九年（1680）春に武宣を占領した。尚之信が不在の間の広州では、尚之信に異を唱える者を代表した張永祥らが、之信の不法と謀反を康熙帝に訴え出たことが始まりで、同年八月に總督金光祖、提督哲爾肯、總兵官班際盛、副都統金榜選らが、武宣で之信を捕らえたと記録されている⁽⁴⁾。すなわち武宣は、黔江水運の要衝であり、平南藩尚氏が三藩の乱の一つに数えられる原因となった尚之信が逮捕された場所で、三藩と尚氏の歴史の上では見逃せない場所である。水運の廃れた今となっては、名所旧跡の全くない田舎の街、文廟を除けば史跡も特にない。ただ、文革世代には、武宣は敵を憎むために、「吃人肉」を行った・行わせたおぞましい場所として知られている⁽⁵⁾。

武宣に今も残る地名、城北路・城南路と城東路・城黔路が交差し人民政府もある辺りが旧市街の中心であろう【写真 8-10】。ここから遠くない場所に、赤く塗られたために「紅廟」と呼ばれている武宣文廟が建っている。旧市街の中心地から文廟へ、地元の地理に精通するバイクタクシーに先導してもらい、混雑する市場をすり抜けて出向いた。城黔路の西側、黔江に遠くない場所に、明末に建築された文廟が残されていて、紅廟の通称どおりに大成殿を中心に赤で塗り上げられていた。武宣文廟は広西地方に現存する最も規模の大きい文廟で、2000 年に広西自治区の重点文物に指定されている。大成殿を囲む壁の一部に、今は塗りつぶされてしまったアーチ形の門の上部に「武宣県庫」と彫られている。これを見つけた劉氏は、文革時代に文廟が武宣県の食糧倉庫として使われていたので、「四旧」の一つに数えられる文廟が破壊されずに残り、それが今に受け継がれたのだらうと推定していた。

文廟は修復中であり、廻りは塀で囲まれ修復の終わったとおぼしき大門も閉ざされていて、内部へ入ることは出来なかった。大成殿と記された扁額を遠望し、外観を写真に収め、尚之信をはじめとする平南藩の人々もここ文廟に足を運んだのであろうことを想像して、武宣訪問を終了した【写真 8-11】。

◆金田村＝太平天国起義史跡

広西省桂平市金田村は道光三十年十二月十日（1851 年 1 月 11 日）に、「金田起義」すなわち太平天国運動の勃発した場所であり、武宣からそれほど離れていないので、この機会に探訪しようと足を運んだ。

⁽⁴⁾ 『尚氏宗譜』では、詔を聞いた尚之信が自ら武装解除したと記されている。

⁽⁵⁾ 武宣をインターネットで検索すると、造られた動画をふくめて目にするのが、「武宣吃人肉」である。

武宣から東にほぼ 50km、武宣県県境から標高では 350m ほど登って大瑤山の支脈をなす紫荊山山中に入り、黔江の支流をせき止めた金田水庫を経由して峠を越え、桂平市への分岐をすぎると金田鎮から数km西に位置する金田村に到達した。黔江の流域平原の一角を占める金田鎮付近と広州の間は、黔江舟運による流通が活発であったという。洪秀全と拝上帝会の組織と信者が広州からこの地へ、この地で挙兵した太平天国軍が桂林から湖南へと進んでいった交通路も黔江・柳江の水路に頼ったのであろうか。金田鎮一帯には太平天国をめぐる史跡が多数あるが、時間のないままに、古営盤、練兵場、記念館がまとまっている犀牛嶺山中にある「金田起義地址」（1961 年国務院公布・全国重点文物）を訪れた。

古営盤は拜上帝会に集った人々が築いた兵営の基礎が残っている場所で、起義の日には人々はここで太平天国の旗を拝したと伝えられ、その旗杆石の複製品が記念館に展示されていた。「金田起義地址」と刻された石碑の建つ営盤の前が練兵場、練兵場には洪秀全の巨大な塑像が建っていた【写真 8-12】。練兵場から少し離れた場所に、1980 年に建てられた二階建ての「太平天国金田起義記念館」（旧称は「歴史陳列館」）がある【写真 8-13】。展示は（1）民怨沸騰、（2）創教反清、（3）荊山聚眾、（4）金田起義、（5）定都南京の 5 部門に分け、太平天国の旗、衣類、武器、桂平出身の北王韋昌輝の祖先の墓碑などの実物と史跡を示す写真などで、起義の始まりと発展、南京定都、失敗を説明している。劉氏によればこの展示と説明は、1980 年代の歴史観に基づくものがそのまま残されているという。

記念館の外れに碑廊があり、政治家や著名人の題詞が並べられているのはどこも同じだが、その中に道光元年（1821）「始建三聖宮碑記」、道光二十四年「建造佛□□」碑、咸豐八年（1858）「悟洞三股」碑、咸豐九年「郷約碑記」、民国三十年（1941）謝雄「太平天国起義紀念碑序」や「桂平県地方行政幹部訓練所第一隊第十七期職員暨金田郷集訓甲長等姓名」碑などは、今後の研究の史料となりえるものであろう。

1981 年春に「太平天国起義 130 周年學術討論会」が開催され、日本人も含む国内外 200 人余りの学者が参加し盛会だったことが、展示されている参加者の揮毫からうかがわれる。今は、起義地址の入り口に「愛国主義教育基地」の看板が掛けられているものの、訪れていたのは我々 2 人だけ。記念館の展示も古びたままで、記念品売り場も閉鎖されていたが、起義＝革命に対する国家の姿勢、歴史観の変化が如実に示されている点で興味深いものがあつた。

◆忻城莫氏土司衙門《9 月 4 日》

広西の少数民族を代表する壮族の歴史を垣間見るため忻城莫氏土司衙門を訪れた。忻城莫氏土司衙門は武宣と柳州の間で黔江に合流する紅水河の流域に位置する来賓市忻城県にあり、忻城県は人口の 91% を壮族が占めている壮族の集住地域である。この地域の壮族を支配してきたのが、元末から明清時代を通じて土司に任命された莫氏である。歴代の中央政府は少数民族の有力者を土司職に任命・世襲させ、土司にその地区の統治を行わせてきたが、莫氏は元末に任命されてから、明、清の王朝交代にかかわらず、紆余曲折はあつたものの 14 世紀半ばの至正時代から 20 世紀初頭の光緒末年まで、500 年余りの間、忻城地方の統治者として土司職を世襲してきた。

莫氏の宗祠を含む衙門（役所）が「莫氏土司衙署（衙門）」である。南国の木々が茂る忻城県城に入ると、標高 289m の翠屏山の北麓に、万暦十年（1582）に創建された後、戦火などから何度かの重修を経た土司衙門が保存されていた。広西に残る幾つかの土司衙門の中では最も大規模で、まとまって残っている衙門であり、1963 年に自治区の、1996 年には国家の重点文物に指定されている。また史跡であると同時に、12 代土司莫懷仁をモデルにしたテレビ映画「劉三姐」はここで撮影されていて、テレビや映画の撮影基地としても有名な場所でもあるとのことであつた。

莫氏土司衙門は、東西に長く延びた街路沿いに往年の店舗や住居が残り再現した旧街の東寄り、屏風山を背に位置している。東門を入れて西に進むと、衙門大門に至る前の街路に「慶南要地」「粵西邊隅」と記された二つの過街門がある【写真 8-14】。土司衙門の大門を入ると、道光元（1821）年建築の正堂と二堂、近年に修築された三堂、東西には花庁、長廊、兵舎、監獄などが建っていた。衙門の建物の内部には、今も残る文物や図片を展示する土司博物館、明清時代で服装を描き分けている歴代土司の肖像が飾られていた。衙門の右奥に、土司が毎月 1 日と 15 日に香を捧げて祖宗神霊の加護を禱り、清明節に大祭を行った土司祠堂があり、「宗枝葉茂」の扁額を掲げられ、祭堂には歴代土司の位牌や神像が置いてあった。近くには乾隆二十六年（1761）「皇帝賜封莫景隆文林郎碑」、乾隆三十七年「莫恩輝原配夫人墓碑」、や「功德碑」などを嵌めこんだ碑廊が造られていたが、これらの碑文は莫氏土司研究の好個の史料であろう。

土司衙門を更に東へ進むと、万暦十年創建で光緒十一年（1885）重修という三界廟（元来の名は三清閣）がある。ここは歴代の土司が祭祀を主宰し観劇する場所で、門をくぐると奥に大殿が建ち、それに向かい合って、壁面に「佛」字を大書した戲台がある。大殿には元来は壮族の三界公神像があったが、今は釈迦摩尼と玉皇大帝の神像に置き換えられ、旧時の面影を喪っているという。三界廟の周囲に光緒十一年「鼎建頭門戲臺碑」「慶壽會眾題名碑」、民国二十八年（1939）「忻城県忠烈祠記」などの石碑が保存されていた【写真 8-15】。

三界廟を出て更に東へ向かうと、旧街の西門に対応する東門があり旧街はここで終わる。東門から屏風山の一角をなす麒麟山の高みに、莫氏の菩提寺である通天寺が見えていた。

いかなる史跡も同じであるが、社会体制の大きく変化した現代中国では、特に革命と民族の概念と解釈は、時代によって揺れ動き変化している。革命を象徴する金田村、少数民族を象徴する土司衙門の理解の仕方、史跡に対する取り扱いがどのように変わってきたのか検証しなければ、これらの史跡を理解することは困難であろうことを考えながら、莫氏土司衙門を後にした。

3.4. 柳州から象州・平楽を経由して賀州《9月5日》

柳州から東にある賀州へ大瑤山山中にある金秀瑤族自治县を経由して行くこととした。武宣に赴いた道を穿山鎮までたどり、ここから東に向かい象州鎮へ、象州大橋で柳州に通じる黔江＝柳江を左岸に渡る。この付近の黔江も川幅が広く大河の風格があり、河辺に見える碼頭は黄金水道の名残を思わせる【写真 8-16】。

◆金秀瑤族自治县

羅秀鎮、桐木鎮を経て大瑤山山地に入るとカルストタワーは見えなくなる。標高 800m ほどから金秀瑤族自治县の領域で、山中に瑤族の聚落も見える。大瑤山山地は霧の立ちこめる日が多くお茶の栽培に良い場所とかで、山の斜面にはお茶の木が植えられていた。自治県の中心である金秀鎮は、金秀河が真ん中に流れる解放路の両側に細長く続いている【写真 8-17】。その北端の、金秀鎮全体が展望できる高台に、費孝通氏が名付けた瑤族民族博物館がある。立ち寄ったものの 14 時 30 分までは昼休みで、賀州まで 200km 近くあるため、展示を見ることは諦めて出発した。

金秀鎮から北上して頭排鎮を経由する予定であったが道路工事で不通、往路を戻って頭排鎮へ出た後に北東へ走り荔浦県へ。ここからは国道 323 号線を走って平楽に到着する。荔浦も平楽も三藩の乱では呉三桂軍と尚可喜軍が対峙した場所で、それというのも平楽を流れる西江の支流桂江は、上流に孔有徳の定南王府が置かれた桂林があり、下流の梧州で肇慶を経由して広州に通じる潯江＝西江と合流する桂江水運の要地である。桂江大橋で左

岸に渡り、荔浦付近から再び現れはじめたカルストタワーの中をゆったりと流れる桂江を眺めたが、三藩の乱の最中に平楽へ軍を進めた鎮南將軍莽依図が「その城を囲む。賊は水陸より来援し…」⁽⁶⁾と、河と陸から敵軍が攻めてきたことを記しているのは、この情景であろうか【写真 8-18】。平楽から程なく桂林と梧州をつなぐ高速に乗って、ここからは90kmほどの賀州に到着したのは18時をまわっていた。

3.5. 賀州から黄姚鎮を経て梧州へ《9月6日》

今日は黄姚鎮古街に立ち寄って昼過ぎには梧州へ到着する予定なので、賀州の街を見る時間はなかった。街外れで広東省封開の下流で西江に流入する賀江を渡る。賀江は流程の短い河だが、ゆったりと流れ周囲のカルスト台地とマッチして南部の風情が漂っている。高速78号から65号に入って梧州方面へ、黄姚で高速を降りて西にある黄姚鎮へ向かった。

◆黄姚古鎮

黄姚鎮の名前は、宋代に住み始めた黄姓と姚姓の2姓に由来し、元～明代に次第に人口が増え、清代康熙中葉から清末の間に最も繁栄した村であるという。外側を高い壁で囲まれた黄姚鎮の内部には、桂江の支流を引いた流れや池、順治年間から当地の特産となった石板を99,999個敷き詰めたという8本の街路、その並びに建つ商店街、有力者の家と庭の大院、11座の宗祠、20幾つかを数える寺廟、大小様々な住居など、近代以後は交通が不便なため取り残され、往時のまま使用され続けられてきた建築が多数残っている。近年、各地で「明清古鎮」などと称して再建、喧伝されている中で、最も大規模で歴史的な様相が保存された聚落といわれている⁽⁷⁾。

嘉靖三年（1524）創建で、清代に重修された戯台の旁らに聚落の入り口が設けられ、中に石を積み上げた高い壁に囲まれた古鎮が始まる。鉄壁の守りを意味する「亦孔之固」と記された扁額のある狭い門は9段登った上に入り口があり、二階は銃眼のある見張り所となっていた【写真 8-19】。ここから先、両側は高い石壁、石版で舗装された道は狭く曲がりくねり、所々で枝道が分かれた迷路のような街路が続いていて、外敵の侵入を防いでいる。商店街は通りが少し広く、豆腐や特産の豆豉（乾し納豆の一種）などを売る商店や當舖（質屋）、旅館などが並んでいる【写真 8-20】。商店街に続く壁には、宣統元年（1909）に平楽県正堂王某が出した銀錢換算についての告示が石壁にはめ込まれ、民国時代の宣伝広告も再現されていた。ここの有力者郭氏の庭園である郭家大院と宗廟である郭氏宗祠を訪れたが、宗祠祭壇に並べられた位牌の数が歴史の長さを示している。郭氏宗祠の他に、明代に始まるという壁画の残る呉氏宗祠、勞氏宗祠などを見たが、いずれも同規模のもので近年の再建であることが見て取れた。

中興街梁氏宅には、梁氏の先祖である梁都が広西省遷江県の訓導であった時に、光緒帝が梁都の父を修職佐郎に、母を八品儒人に恩封した満漢文扁額があると記されていた⁽⁸⁾が、離れた場所にある梁氏宗祠には立ち寄らず見ずじまいのままに、万暦年間に造った石橋の帶龍橋、飛び石伝いに渡る石跳橋を通して、急ぎ足の黄姚鎮訪問を終了した。

(6) 『聖祖実録』巻71、康熙17年2月辛未の条。

(7) 黄姚鎮については『夢境黄姚』（広東旅游出版社、2006年）を参照した。

(8) 扁額は、文革中に破壊され新たに作成したものである。

3.6. 梧州《9月6日～8日》

柳州を流れる柳江と貴州省境から流下する紅水河を合わせた黔江と、南寧から流れ下った邕江（郁江）は桂平で合流して潯江と名を変える。梧州ではその潯江に桂林から流れてきた桂江＝鸞江が合流、ここから下流では西江と名を変える。それぞれ河の色が相違する潯江、桂江、西江を一望できるのが鸞江大橋、出向いたものの朝の光で河の色は全く見えなかった。南寧や貴州、桂林や湖南に通じる舟運の拠点である梧州は、成化六年（1470）～乾隆十一年（1746）の間、両広総督府が置かれ広西と広東を統括する政治、軍事の中心であった。両広総督が広州に移って以後も、光緒二十三年（1897）に開港された後、民国に到るまで広州から西江を遡る商船の商埠地として繁栄したが、その旧街は潯江に鸞江が合流する鸞江左岸一帯の、今は騎楼城と呼ばれている一帯に残っている。

◆騎楼城

騎楼は華南、台湾で見かける建物の二階部分が張り出してその下がアーケード通路になっている建築様式で、台湾では亭子脚と呼ばれている。アヘン戦争後に上海が開港されイギリス人が持ち込んだともいわれるだけに、ここでは洋風建築の装いが多い。梧州は「中国騎楼博物城」と称されるほどに騎楼が残っていて、騎楼が建つ道筋は22本、総延長7kmに560棟以上があるという【写真8-21】。茶楼や酒楼などの様々な商店の旧址が残されているが、その中には光緒二十二年（1896）に始まる「基督教堂」、辛亥革命に反対して民国元年（1912）に創刊された『良知報』、同じ年に建てられた「商務印書館」などを見て回った。騎楼城街の一郭にある梧州市博物館では梧州の古名に因んだ「蒼桐春秋」と題する展示を行っていたが、明末清初の展示は全くない。博物館を後にして騎楼城街を北上し龍母廟を訪れた。

◆梧州龍母廟

西江流域には龍母伝説・信仰が広がっている。白族の伝説、漢族の伝説など何通りかあるようであるが、その一つに以下のような伝えがある。龍母の父は梧州から潯江を西に50kmほど遡った藤県の人で姓は温、名は天瑞、母は梧州から西に左江を100km余り下った徳慶県悦城の人で姓は梁といい、二人の間に生まれた娘の温氏は、聡明で薬草や医術に通じ人々のために尽くしていた。温氏が河で洗濯をしている時に、水中から光り輝く大きな卵を拾い、持ち帰って大事にしていたところ、7日後（または27日後）に卵が孵り、5匹のトカゲのようなものが出てきた。これを大事に育て、水を慕うので河に返したところ、龍になった。温氏の養育の恩に報いるため、龍は魚を捕ってきたり、水害、旱害、虫害、干害を克服するのを助けたので、やがて温氏は西江流域の人々から幸福と平安をもたらす龍母として尊崇され、各地に龍母廟が建てられ、ここに温氏＝龍母が祀られたという。我々は梧州龍母廟をはじめとして、悦城龍母祖廟、肇慶白沙龍母廟を訪れたが、いずれの廟にも人々が詣でていた。

梧州龍母廟は北宋代に創建され、明清時代の万暦、康熙、雍正年間に修築されたと歴史を誇っているが、2007年2月に建てられた龍母廟前殿と寝宮、背後の山上に高さ38mという巨大な龍母彫像が聳えていて、明代総兵府衙門の前に建っていた正徳三年（1508）「総府題名碑」⁽⁹⁾とそれの下にある「石壽龜」を除いては、全てが近年に修築したものであった【写真8-22】。

龍母殿に並んで関羽殿と將軍殿が建っていて、將軍殿には軍装の傅弘烈が祀られていた

⁽⁹⁾ 正徳三年（1508）当時における梧州的総督、総鎮、総兵の姓名、籍貫、出身、位などが刻されている。

【写真 8-23】。傅弘烈は江西進賢の人、明末清初に広西韶州同知や甘肅慶陽知府を歴任、康熙七年に呉三桂の叛乱の企てを上奏したが却って事実無根と獄に繋がれ、死を免れて蒼梧＝梧州に流され辺境防備に当てられた。三藩の乱の勃発で傅弘烈の正論が認められ、康熙十六年（1677）五月に広西巡撫、撫夷滅寇將軍に任命された。広西の各地、昭平、藤県、柳州などで戦ったが、康熙十年三月、呉三桂側についた馬承蔭に柳州で捕らえられ、貴陽に送られ三桂に従うことを拒否して殺された。三藩の乱平定後の論功行賞で忠節が讃えられ、康熙二十一年十一月、広西「雙忠祠」に祀られたという経歴の持ち主である。將軍殿の説明には、傅弘烈は梧州の人々の敬愛を受けてここに祀られることとなったと記されていた。広西流域に広く信仰される龍母廟に、関羽と並んで祀られていることに、ここ梧州では傅弘烈が篤い尊崇を受けていることを示しているよう。なお、將軍殿の後、石段との間にある狭い空間には、数枚の石碑が横倒しに保存？されていて【写真 8-24】、あるいは龍母廟や將軍殿にまつわる歴史が記されているのかもしれないがここに行く方法も判らずに見ずじまいであった。

◆蒼梧県粵東会館

龍母廟を後にして梧州の街から南に向かい、潯江を渡って蒼梧県に入り、龍圩鎮忠義街にある粵東会館に赴いた。会館の近くにある大円塘市場は押すな押すなの人出で混み合っていた。会館は明末清初に創建された関羽を祀る「関夫子祠」が、康熙五十三年（1714）に粵東会館となったという歴史がある。会館全体はこじんまりとしているが、両側に門神の画かれた扉のある山門をくぐると、関羽を祀った武聖殿、その奥に媽祖を祀った天后宮があり、軒先には媽祖廟を示す彫像が飾られていた。中庭や壁に多数の古い石碑が残されていたが、重修した乾隆五十三年（1788）「重建粵東会館碑記」に、ここが兩粵（広）水運の重地・要衝であることを記しているが、重建時に捐金した商店が柳州、南寧、佛山、順徳、江門、桂平、横州、慶遠、賀県、武宣、象州、平塘、梧州、三水と広東、広西から湖南にまで広がっていることは、それを示すものであろう。水運が廃れ粵東会館の機能が衰微して以後は、会館に祀られていた関帝廟、媽祖廟として今に到ったものであろう。会館の外、北側は高い堤防と水門のある潯江の右岸、この付近に蒼梧県の碼頭、龍圩碼があったのであろうか【写真 8-25】。

3.7. 梧州から肇慶へ《9月8日》

梧州から国道 321 号を東に走ると右手には西江が見え隠れする。河に停泊している船は、浚渫しているのか河砂を採っているのかは定かではないが、道路脇に河砂の堆積、それを利用しているのであろうかコンクリート製造所があちこちに見受けられた。広西と広東の省境のゲートを通過し、賀江が西江に合流する封開を経て、龍母の故郷とされる徳慶を過ぎる。道路脇に状元、会元、解元に合格する意味の三元塔（広東省保護指定）が建っている。塔は万曆二十七年（1599）の創建で 400 年を経た今でもきれいなまななので「只新不旧」と美称されているようだが、観光名所になってしまっているようなので、立ち寄らずに先を急ぎ悦城龍母祖廟へ向かった。

◆悦城龍母祖廟

西江流域にある龍母廟の本家に当たるのが悦城龍母祖廟、西江左岸に悦城河が合流する地点に近い入り江に位置している。碼頭も設けられていて船で来て参詣したとのことである。訪れた 9 月 8 日は旧暦 8 月 1 日、今日から「龍母得道誕期」大祭が 1 週間続く。大祭日の初日とあってか、鳴らすことで金が貯まるといふ爆竹を大音響で響かせ、喧嘩である

うかラッパを吹き、太鼓と鐘を叩き、道士が祈祷文を唱えている。参詣者は果物、丸焼きの子豚、飾りのついた水牛の頭などの供物を捧げ、線香を焚き、叩頭をする賑やかな祭礼風景に出会った【写真 8-26、8-27】。

『悦城龍母祖廟』⁽¹⁰⁾には、順治十七年（1660）には高雷総鎮都督栗養志が、十八年には知州饒崇秩らが、康熙八年（1669）には両広都御史周有徳が祈願に訪れ、三藩の乱が始まった後の康熙十三年七月には平南藩配下の左鎮左営副総文天寿が広西征討の出陣に当たって参拝、十七年正月には平南藩の沈上達が、十八年八月十七日には平南親王尚（之信）が広西征討にあたって参詣祈願し、之信は広西征討が勝利すると大祭を奉納したことが記されている⁽¹¹⁾。両広を統括する総督や巡撫、尚之信をはじめとする平南藩の支配層は、瑤族などの先住民や地元民が尊崇する龍母信仰を無視できずに、龍母廟や龍母祖廟に詣でいたことがうかがわれる。あるいは梧州龍母廟の將軍廟に傅弘烈が祀られたのもこのような流れの中なのかもしれない。

河辺の牌楼から龍母殿、その脇にある媽祖廟などは何度も改築されているという。近年では光緒三十一年（1905）から七年間にわたり、巨費を費やして両広の工匠の手で精微を尽くした重修が、1985年には西江流域のみならず香港や厦門在住の信者の手で300万元以上を集めて全面整備が行われ、華南の古建築として名高いものの一つという。洪武年紀のある石碑も全てが重修されていて【写真 8-28】、短時間の探訪では歴史を示す具体的な史跡は何も見つけられず、尚之信も肇慶から船で来て、参詣したのであろうことを思いながら肇慶へと向かった。

3.8. 肇慶《9月8日～10日》

肇慶は宋代から繁栄した街であり、その時代の城壁が一部分保存されている。永暦帝はここで即位し、明清交代の時代にしばしば主が代わった街でもある。三藩の乱当時の康熙十四年（1675）、鄭錦と組んだ劉進忠に潮州を、馬雄を引き入れた祖澤清に高州を落とされ、尚可喜が「粵東の十郡はついにその四を失った」と非勢を訴えた時、將軍舒恕と總督金光祖は広西に近い肇慶に退いて防御を固めていることが示すように⁽¹²⁾、肇慶と広州は連動した場所である。

◆ 閱江楼

肇慶の史跡を求めて、西江に面した閱江楼の建築を利用した肇慶市博物館へ出向いた。ここは南宋の隆興年間に建てられた鵲奔亭に始まり、崇禎十四年（1641）に閱江楼と名付けられ、明末清初の戦乱で焼失、順治十四年（1657）に再建され、清代に何度か重修が加えられ、日中戦争時に日本軍の爆撃で破壊され、1959年から重修が始まり今の建物になっ

⁽¹⁰⁾ 『悦城龍母祖廟』（中国文史出版社、2002年）には、程鳴「孝通廟旧志」が引用されている。なお『同書』は「平南親王尚」の「尚」を尚可喜と解しているが、可喜は康熙十八年に没しているのに、「平南親王尚」は尚之信のことである。また沈上達は、「武宣文廟」の項で記したように、尚之信に叛乱の疑いありと訴えた人物である。

⁽¹¹⁾ 文天寿はこの出陣で戦没したようで「贈廣東殉難遊擊侯進學、文天壽、為副將、各予祭葬、廕一子以守備用」（『聖祖実録』巻70、康熙十六年十一月己卯の条）と見える。鎮南將軍莽依図が広西の征討に尚之信の軍を向かわせることを奏言、之信は「頃聞吳三桂已死…今湖南勢如瓦解、取之甚易、臣當進定廣西」（『聖祖実録』巻71、康熙十七年九月丁卯の条）と広西に向かうことを上奏している。沈上達は、尚之信配下で海運に従事した富商である。

⁽¹²⁾ 『聖祖実録』巻58、康熙十四年十二月癸酉の条。

たという。西江を望む高台にあるここは、河を航行する船舶の監視所、指揮所として絶好の位置にあるのであろう、永曆帝政権の軍事基地でもあった。博物館は肇慶で名高い端溪硯を展示した『端溪春秋』陳列館が中心で、康熙帝にちなむ碑文が残っているが、肇慶の史跡展示や案内は全くなかった【写真 8-29】。河面に降りると、対岸の高要麗晶碼頭まで所要時間 10 分、片道 1 元、10 分間隔で往来する渡し船があるので、往復して西江を楽しんだが、自転車を引きいた人など地元の人が便利に利用しているようであった【写真 8-30】。

◆麗譙楼

閱江楼から西へ西江沿いの道を離れて城中路を暫く行くと、紅色に塗られているため通称を紅楼という麗譙楼が建っている。肇慶は北宋の徽宗が即位以前に封じられていた場所、重和元年（1118）に御書楼が築かれ、明代天順六年（1462）に改築されて麗譙楼となり、清朝の初め、隆武二年＝順治三年（1646）十一月、南明の桂王朱由榔がここで皇帝に即位して永明宮と称した場所である。明代の遺構であるという幅 34m・奥行き 14m・高さ 6m の台座の上に、近年重建された楼閣がある【写真 8-31】。「古端名郡」の扁額が掲げられたアーチ形の門をくぐり楼閣に登ると、建物の周囲には「聖旨」と刻された石碑や明代に鼓楼・鐘楼でもあったことにちなむのであろうか、壊れた古い太鼓などが置かれていたが、いずれも近年の複製品のようなものである。内部は万曆十一年（1583）から六年間肇慶に滞在したイエズス会宣教師マテオ・リッチ（Matteo Ricci、利瑪竇）をめぐる展覧会場となっていた⁽¹³⁾。

麗譙楼は宋代の城壁内部に位置し、付近に両広総督衙門、肇慶の文廟「高要学宮」⁽¹⁴⁾【写真 8-32】、「高要県政府佈告」第 97 号の石碑が建ち民国二十年（1931）の扁額が掲げられた「石橋亭」【写真 8-33】、今は使われていないようだがイスラム寺院のミナレットとおぼしき建物【写真 8-34】など、府前路や城南路などの地名と共に、歴史を感じさせる一帯であった。

◆白沙龍母廟

忻城龍母祖廟に尚之信をはじめとする平南藩の人々が詣でていることを見つけたので、あるいは肇慶の龍母廟にも何らかの痕跡があるのではないかと淡い期待を懷いて訪れた。

廟は肇慶端州区の西のはずれ、西江に面して建っていて【写真 8-35】、修理の真っ最中であった。一隅に掲げられた紹介文には、ここは風水の宝地で、13 世紀半ばの宋代咸淳年間に起源があり、西江流域で最大の龍母行宮、龍母の誕生日をはじめとする大祭の時には、肇慶をはじめ南海、番禺、順徳、東莞、中山、広州など西江流域の人々が、陸路や西江の水路によって、ここ白沙龍母廟と悦城龍母祖廟の間を往来し参拝するという。訪れた日は旧曆八月二日で「龍母得道誕期」大祭の 2 日目、参詣する人もちらほらいるが、昨日の忻城龍母祖廟の賑わいとは相違してひっそりしていた。

肇慶知府の紹榮は、ここに参詣し嗣子を授かったという靈驗を光緒帝に奏請、その結果、光緒八年（1882）に白沙龍母廟の勅封と広蔭坊の賜封を得て、広蔭牌坊をはじめ碼頭、牌坊、広場、戲台、正殿、後殿、五龍太子殿、七姐妹殿などを建てたものであるという。ただ今なお当時の建築が残っているのは牌坊のみで、それ以外は最近の建築である。5 間 6 柱

⁽¹³⁾ 閱江楼の東にある明代創建の崇禧塔の近くに、利瑪竇が布教のために建てた僊（仙）花寺遺址がある。

⁽¹⁴⁾ 「文廟」の扁額が掲げられた門には「広東省文物保護単位／1985 年 8 月 27 日公布／高要人民政府」の「高要学宮」の標示と、ここが宋代崇寧年間に建てられ、歴代の改築を経て、現在は明代の屋根が残存する大成殿などが残っていることを記した説明があるが、なぜか両方共に真っ白に塗りつぶされていて、門は閉鎖され見学出来なかった。

の牌坊には西江を向いた正面と後殿を向いた背面に、同じ「聖旨」の字牌がかかっている。正面の字牌の下には「加封広蔭」の四字が大書され、背面の字牌の下には「護国通天惠濟顯德昭顯広蔭龍母娘娘水府元君」と、少し離れた柱には「光緒八年謹奉聖加封建坊」と記されていた【写真 8-36】。

片隅に往時の建築材料などが展示されていて、「万暦元年／端溪書院」と刻された磚があったが、尚氏や平南藩との関わりを示すものは何も見当たらなかった。

◆七星巖（岩）摩崖石刻

カルスト台地特有の石灰岩の突起した7つの岩山が北斗七星の形に配置されていることから昔から七星巖と呼ばれてきた【写真 8-37】。この岩は石材としても珍重されていて、広州を支配した尚可喜と耿繼茂が平南、靖南王府を営造した時、耿繼茂は靖南藩府の大門の前に、広州に運ばせた巨大な白玉のような七星岩を精妙に彫り上げた一对の巨大な石獸を飾ったことが記されている⁽¹⁵⁾。

また七星岩には、唐代の書家李邕の「端州石室記」を最古として、全部で630余りの石刻があるという。文人のみならず広東地方に赴任した官僚もここを訪れ様々な文章を刻んでいるので、読み解けば良い史料となろう。七星岩の中でも330余りの石刻があるという石室岩の洞窟を訪れた。2mほどの高さの洞窟入り口を入ると、中は高さ30mほどのドームになっていて、四方の壁面には元・明・清朝の年紀の石刻が所狭しと彫られていた【写真 8-38】。その多くは刻字に朱を入れるなどして読み取りやすくしてあり、かなり修復の手が入っているようである。明末、泉州を根拠地とした鄭芝龍の「崇禎十年（1637）又四月溫陵鄭芝龍題壁詩」、福王時代の「弘光元年（1645）惠藩⁽¹⁶⁾十六王親古燕心坦賀国泰等題壁詩」や「永暦己丑（永暦三年・1649）閩漳王思沂題壁詩」などを見つけたが、明末の争乱時代にかかわらず、ここに足を運んで刻書した石刻に対する熱意に感心させられた。明清時代の石刻と共に、ここにあると聞いた漢字以外の、特に満洲文字の石刻、あるいは平南・靖南藩に関わる石刻を探したが、短時間の探訪で探し当てることはかなわなかった。

3.9. 肇慶から護龍祖廟と慶雲寺をへて広州へ《9月10日》

肇慶から国道324号線を北東へ10km余り行って鼎湖大道から少し西江の方へ入った護龍祖廟へ立ち寄った後に、鼎湖山風景名勝区の中にある慶雲寺で一時を過ごし、珠江を形成する三江の一つで江西省から流下する北江を渡って広州市内へ向かった。

◆護龍祖廟

二つの龍母廟を訪ねたので、護龍祖廟がどのような廟か不明のまま、龍母と何らかの関係があるのかと思いながら地図上で見つけた名前に惹かれて立ち寄った。ここも目下修理中で、貼り出されていた「重修肇慶護龍祖廟縁起」には、ここが肇慶市端州区黄崗鎮前村であること、この廟は清初に始まること、1984年に肇慶市文物保護建築に指定されたこと、

⁽¹⁵⁾ 「營造靖南平南兩藩府、東西相望。繼茂尤汰侈、廣徵材木採巨石於高要縣之七星巖、工役無限」

（『欽定八旗通志』巻194、大臣伝60耿繼茂伝）とあり、「將軍署、本靖南藩邸、規制宏壯、大門外兩巨石獸、以肇慶七星岩石為之、瑩白如玉、鐫鏤精絶。」（黄弘頤纂『広州城坊志』巻3「將軍前」、広東人民出版社、1994年）と見える。この白石獅子は、現在も府前路にある市府合署門前の緑地に置かれている（『広州市文物志』嶺南美術出版社、1990年）。

⁽¹⁶⁾ 惠藩は崇禎末年に肇慶にいた明の惠王朱由梁のこと。

端州区で最も整った廟の一つであることを記しているが、その由来などは記されていない⁽¹⁷⁾。共に3間の前殿と後殿が残っていて、前殿の大門には、「嘉慶辛未（十六年）孟久吉旦」の年紀の「護龍祖廟」と記された石造の扁額が、門の両側には「同治辛未（十年）重脩聯義堂敬酬」の年紀の対聯が記されている【写真 8-39】。中庭の奥にある後殿の正面の壁には、かなり薄れているが、首は龍、身体は麒麟、蹄は馬と見られる画が青黒い漆喰で描かれているのが見て取れた。あるいはこれが護龍なのであろうか。後殿の柱には、赤字で書かれた「永遠跟着毛主席干革命」のスローガン、軍装の毛沢東半身像などもうっすらと残っていて【写真 8-40】、文革時代にこの廟に紅衛兵が集っていたことを思わせたが、やがてこの痕跡も消されるのであろう。神像とスローガンに時代の変化を覚えながら、慶雲寺へ向かった。

◆鼎湖山慶雲寺

唐代から仏教の聖地として知られ、嶺南四大仏刹の一つに数えられる慶雲寺は、鼎湖山風景区の中にある。景区には唐代開元二十一年（733）に入唐、5回にわたり日本帰国に失敗して、海南島に漂着、当時は端州と呼ばれた肇慶へ来た後、天宝八年（749）に鼎湖山龍興寺（現在の白雲寺）で没した興福寺の栄睿上人を記念した碑亭もある⁽¹⁸⁾。風景区入り口から専用電動バスで慶雲寺に赴いた。バスの乗降所は、山の中腹に地形に従って建てられた慶雲寺伽藍の一番上部、最奥にある観音殿や金剛殿近くに位置している。見学は上から下へと向かい、山門や大雄宝殿へは最後に訪ねることとなっていて、信仰よりは観光であることを思わせた【写真 8-41】。

慶雲寺の前身は崇禎六年（1633）に始まる蓮花庵で、同九年に蓮花庵は慶雲寺となり、明末永曆帝の庇護を受けた。その後は尚可喜の庇護を受け、順治十五年（1658）以後に堂宇の拡張が行われたが、咸豐十年（1860）に太平天国の翼王石達開軍の戦火で被災し再建された後、光緒十九年（1893）に西太后 60 歳の祝賀で「萬壽慶雲寺」と「大蔵経」⁽¹⁹⁾を賜ったという歴史がある。

永曆帝は順治三年（1646）に肇慶で即位した後に、戦乱を避けて梧州などに遷ったが、永曆二年＝順治五年（1648）に肇慶へ戻り、翌永曆三年夏、母と妃と共に慶雲寺を訪ね、住持棲壑の説法を求め⁽²⁰⁾、やがて慶雲寺は永曆帝行宮となった。永曆帝は慶雲寺に田産を賜与しようとしたが、棲壑は出家の身に不要と拒否、この事から慶雲寺は田産を所有しないしきたりとなったという。永曆四年早々に永曆帝は肇慶を離れ梧州へ転じ、以後は肇慶へ戻ることはなかったため、慶雲寺を行宮としたのは僅か一年足らずの間であった。永曆帝が慶雲寺に関わったのが短期間であったことと、やがて広州を支配した尚可喜が慶雲寺を庇護したこともあってか、慶雲寺には永曆政権に由来する史跡は見当たらなかった。

⁽¹⁷⁾ 「祖廟縁起」に「護龍祖廟釋惠忠法師率眾合十。庚寅年四月初八日」とあり、現在は仏教である。

廟内に記された残片などを見た劉氏は、元は道教であったと推定している。なお、『中国文物地図集 広東分冊』（広東省地図出版社、1989 年）に「護龍祖廟」の項はあるが、祭神や祭神については記されていない。

⁽¹⁸⁾ 日本帰国の艱難辛苦は鑑真上人の日本渡航と共に知られていようが、栄睿上人を記念して 1963 年に記念碑が、1980 年に碑亭が建てられている。

⁽¹⁹⁾ 大蔵経は、貝葉靈文、舍利子銅塔と共に慶雲寺寺宝であったが、文革の最中に銅塔以外は失われ、代わりに白茶花樹と千人鍋を加えて新三宝と定めたという。

⁽²⁰⁾ 永曆帝母子は天主教徒とされているが、母といっても生母と父の後があるので、誰のための説教なのか定かではない。

広州を支配下に収めた尚可喜は、広州攻略で殺害した多数の人々を供養するために、順治十四年、棲壑を広州に招き法要を営み、法要の後に丁重な礼を加え、棲壑に「宝座」を賜与した。この宝座＝法座は、大幅に修理されたのであろうが今も法堂に置かれていて、ガラス越しに一見することが出来た【写真 8-42】。棲壑没後の康熙九年（1670）、尚可喜の長子で当時平南藩（尚藩）都統であった尚之孝は、尚藩の手で慶雲寺周囲の道路の整備や齋堂、客館、鐘鼓楼などを建築して⁽²¹⁾、当時の慶雲寺の横額と対聯は尚可喜が記したものであるという⁽²²⁾。尚藩の庇護とは別に、尚可喜と共に広州に居した靖南王耿繼茂もまた、母と太妃の受戒と法名を棲壑に求めたという。慶雲寺でも平南藩・三藩に由来する史跡を見ることが出来た幸運に感謝しながら、ここを後にして広州へ向かった。

◆広州陳氏書院

広州に到着後、広州博物館を再訪しようとしたが既に時間が遅く、劉氏に勧められて広州市中山七路にある陳氏書院を訪れた。広東 72 県の陳姓一族が捐資して、光緒十四年（1888）～光緒二十年にわたって建造された陳氏書院は陳家祠堂とも称される【写真 8-43】。読書・講学の場所であった書院は、科举が廃止されると陳氏実業学堂に、民国時代には広東体育専科学校、文藩範学校、聚賢中学などに、1950 年には広州行政幹部学校になったという歴史があり、1982 年に広東省と全国の重点文物保護単位に指定されている。13,200 m²の敷地に三つの大きな中庭を中軸に左右対称に建てられた主要建築の面積は 6,400 m²に及び、広東省に現存する最大規模の祠廟であるという。屋根や軒には木刻、石刻、磚刻、陶や漆喰の塑像そして彩色画など広東地方の民間芸術を代表する装飾で飾られている【写真 8-44】。ただ現在は大規模な改修工事中で、入り口は後門、建物の中心である聚賢堂がある後部を中心に開放されていた。

陳氏書院を最後に、2 週間にわたる広西から広東西部への史跡探訪を終了、夜は今回たどった邕江から西江へ及ぶ流れの流入する珠江を遊覧、9 月 11 日広州から北京へと戻った。

4 永曆帝をめぐる史跡

すでに記したように、肇慶で即位した永曆帝は、広西の各地を転々とした後に、清軍と呉三桂に追われ順治九年（1652）二月に南寧を後にして貴州安順（安龍）へ、順治十三年三月に安龍から雲南昆明へ、順治十六年に緬甸へ遷り、康熙元年（1662）に昆明で殺された。その間、永曆帝の行宮は広東、広西の各地に置かれたが、即位した肇慶の永曆宮＝麗譙楼を除いて、その史跡はほとんど残されていない。南明に続き三藩を滅亡解体させた後に雲南、貴州、広西、広東、福建を直接統治下に置いた満洲族清朝にとって、明朝の正統と再興を主張する永曆政権は抹消されるべき存在であり、永曆の名称を残すことは困難であったであろう。そして永曆政権が滅亡してから 230 年余り後の辛亥革命の時に、反満・反清＝漢民族再興のシンボルとして再浮上し今に至っている。このようなことを念頭において、過去に瞥見した数少ない永曆政権の史跡⁽²³⁾を整理して以下に記しておく。

(21) この時の建築が慶雲寺の伽藍殿宇配置の基礎となり今に至っている。

(22) 尚可喜が題した対聯「鎮兩粵咽喉、來往同登福地／食十方粥飯、清貧不負名山」は、光緒二十九年（1903）に重刻され、今は客堂にあるという。

(23) 永曆政権の史跡は、台湾・台南（1990 年）、貴州・貴陽と安龍（2000 年）、広西桂林（2002 年）、雲南昆明（2000 年、2007 年）・勐腊（2007 年）に探訪している。この中で 2000 年の探訪については第

4.1. 広西桂林・永曆帝行宮＝靖江王府《2002 年 12 月 18 日》

永曆帝は永曆元＝順治四年（1647）から翌年まで桂林に居した。桂林には洪武帝の甥の子である朱守謙が靖江王に封じられ、明末まで靖江王府＝王城が置かれていた。永曆帝が桂林を去った後、靖江王府は孔有徳の定南王府となったが、李定国に攻められた孔有徳が王府を焼き払って自刎、三藩の乱の後には王府は貢院となって今に至っている【写真 8-45】。広西師範大学のキャンパスとなっている王府の中には、宮殿の基壇や井戸などが残され、王府博物館もある。王城外部の「王城簡介」には「靖江王城であり孔有徳の府第であった」ことが記されるのみであったが、内部の「靖江王府簡介」には、「明清交代の時、永曆帝がここに駐蹕したので、王府は皇城とも呼ばれる」と永曆帝の居城であったことを記していた⁽²⁴⁾。

4.2. 貴州貴陽・甲秀楼《2000 年 1 月 9 日》

広西から貴州に移った永曆帝は安龍に行宮を置いて一帯を支配した。清初と呉三桂の史跡を求めて貴陽に赴き貴州博物館を訪れたが、呉三桂や永曆政権にかかわる展示は皆無であり、甲秀楼に赴いた。甲秀楼は、明代万暦年間に創建された三層の木造建築、今は全国重点文物に指定され貴陽の観光名所となっているが、当時は訪れる人もなくひっそりとしていた。眺望を楽しめる二階に上がると、天井の外れた場所から見える梁には「永曆乙未年孟秋月吉旦 火器營都督??建」と記されているのを見つけた【写真 8-46、A・B】。甲秀楼は天啓元年（1621）に焼失し再建、その後も康熙二十八年（1689）、宣統元年（1909）に重建されたといわれているが、梁に記された文字は、永曆乙未すなわち永曆九年＝順治十二年（1655）に永曆政権下の火器營都督某が、再建・修理にあたったことを物語るもので、安龍における永曆政権の支配範囲を示す史料であろう。

4.3. 貴州省黔西南布依族苗族自治州安龍県《2000 年 1 月 11 日～12 日》

甲秀楼で永曆年号の梁を見つけたこともあって、当初の予定した行程を変更して永曆帝の遺跡が残っているという貴州省安龍県を經由して昆明へ向かうこととした。安龍は貴陽～昆明間の主要道からは南に遠く離れた場所に位置し、悪路も加わってたどり着くのに苦労した。

永曆帝は永曆六年＝順治九年から永曆十年までの五年余りの間、安隆を安龍と改称してここに皇宮を置いた。史跡で名高いのが十八先生墓、行宮跡も残っていると教えられたが、当時の安龍はまともな賓館もタクシーもない田舎町、宿泊した酒店の三輪タクシーの運転手朱さんに案内してもらった。

◆十八先生墓

永曆帝が安龍に居した間、李定国と対立しながら永曆政権の支配権を手にしようとした孫可望は、可望に反対する永曆帝の側近、大学士呉貞毓ら 18 人を、国を誤らせ勝手に詔を記したなどの罪で死に処した⁽²⁵⁾。永曆十年三月、永曆帝は昆明に遷った後に 18 人の死を悼んで石碑と廟を贈ったが、清朝も乾隆六十年（1795）に「十八先生專祠」を建て【写真

1 章に記した。本章では、これに加筆訂正を加え、合わせて写真を載せた。

(24) 桂林市文物管理委員会編『桂林文物』（広西人民出版社、1980 年）にも、永曆帝の史跡の記述は見えず、桂林市文物管理委員会編『桂林石刻』（1981 年）にも永曆年紀の石刻は収録されていない。

(25) 順治十四年（1657）年 11 月、孫可望は清朝に降り義王に封じられている。満洲族清朝に帰した漢族將軍について検討するとき、清朝による孫可望の処遇は再検討する必要がある。

8-47】、光緒九年（1883）に興義府知府余雲煥が「明十八先生成仁之處」と刻した石碑を建てている【写真 8-48】。清朝が滅亡した民国五年（1916）、南籠県知事が石坊を建てたのをはじめ、中央行政院や貴州省政府の保護が加えられ、民国三十一年に中央軍事委員会委員長であった蒋介石により「碧血千秋」碑を建てるなどの整備、保存の手が加えられ、反満興漢のシンボルとなったようである。人民共和国になって 1964 年に省の重点文物となり、1987 年から省政府の資金で全面改修が施され、安龍県順城街に残る墓域には、祠門、敬業堂、流芳亭、懷清亭、享堂、正祠、多節亭など多数の建造物が整備されていた。

◆院試建造物＝永曆行宮？

十八先生墓にある文物管理所では、ここ以外に永曆帝史跡は何も無いという。しかし朱さんは十八先生墓から西に向かった小高い丘の上の広場に連れて行ってくれた。街の人はここを「行宮」と呼んでいて、安龍行宮であるという。昔は立派であったろうが今はかなり破損した大きな建物の前に、「安龍県重点文物／試院」（安龍県人民政府／1985 年）と記された史跡標示が建っていて、清代には安隆の童試試験場であったことを示している【写真 8-49】。試院跡はかなり広々としていて、行宮が置かれていてもおかしくはないがどうであろうか⁽²⁶⁾。付近にある十字架の立つ建物には「天主教安龍教区」と記された看板が掲げられている。あるいは天主教徒として知られる永曆帝一族にちなむものなのかと思ったが、教会が建ったのは中華民国になってからとのことであった。

4.4. 雲南昆明・永曆帝殉国処碑《2000 年 1 月 20 日》《2007 年 3 月 11 日》

昆明の五華山は、永曆帝の皇宮、呉三桂の平西王府が置かれた場所なので一見したいと赴いたが、2000 年 1 月当時は雲南省人民政府の敷地になっていて、外国人は立ち入れず断念した。五華山の西側に位置する翠湖は、呉三桂と孫の呉世璠が府第を造営した場所であり、その近くに永曆帝最後の地がある。2000 年に赴いた時に史跡表示があるとの情報を頼りに歩き回ったが、翠湖周辺も開発が進み始め探し当てられなかった。2007 年 3 月、翠湖の北東に沿う街路に、以前にはなかった「（五華）区級文物 明永曆帝殉国処碑」の案内表示に導かれて、殉国処碑にたどり着いた。永曆帝が死を強制されたことから「逼死坡」と名付けられた石畳の坂の途中に、中華民国元年（1912）に、雲南都督蔡鍔が建てた「明永曆帝殉国處」碑があった。なお、高さは約 2m、幅は 50cm ある今の石碑は、1983 年に再建されたものであるという【写真 8-50】。

4.5. 雲南勐腊・李定国祠堂《2007 年 3 月 18 日》

永曆政権の武力をになった一人が李定国で、彼は桂林で孔有徳を自刎に追い込み、呉三桂と戦いながら雲南に永曆帝を迎え、帝が呉三桂の手で殺された後にも、雲南各地で戦い、康熙二年（1664）に勐腊で病没したと伝えられている。李定国は転戦した各地で住民を保護したことなどから、四川、貴州、雲南には多くの李定国伝説が伝えられ、李晉王祠・李定国祠堂が建てられたという。劉小萌氏は現代史記録の一つとして下放青年とその痕跡を各地で探訪しているが、今回もその一環として雲南景洪市郊外の勐龍に赴いた。勐龍で勐腊に李定国祠堂があると教えられ、景洪からかなり離れているが、ともあれ出向くこととした。景洪を出発、瀾滄江（メコン川）沿いの国道 213 号線は狭く曲がりくねり、雨期に

⁽²⁶⁾ インターネット上の地図には、「十八先生墓」から南西に数 km 行った国道 324 号線の北側に我々が訪れた「安龍県重点文物／試院」とおぼしき場所に「興義府試院」を、そこから北に 3km ほどの地点に「南明故宮」の表記がある。

壊れた道路の修理、加えて道路沿いにある西双版纳植物園、原始森林公園、民族園などの観光地へ向かう大型バスなどで混み合いスピードは出ない。植物園を通過すると車は少なくなるが悪路が続く。両側は切り開かれた斜面にゴムの木が植えられ、パイナップルとバナナが隙間を埋めていて、東北や華北とは全く相違する景観であった。出発して6時間余りで勐腊県に到着、インターネットに記されていた住所を街の人に聞いて、街はずれの小高い丘に建つ李定国祠堂を探しあてた。

永暦帝と同様に清朝滅亡後には反清反満のシンボルともなり、かつては10万円の祠堂維持費が出されていたが、今は全く維持費が無いと荒れ放題、今にも崩れ落ちそうな有様である【写真 8-51】。外には祠堂を飾っていた石材が、内部には線香を立てた跡もあったが、ラオスに突き出たこの一帯は麻薬の三角地帯、荒廃した祠堂は麻薬を使う場所なのだろうか、付近に注射器や薬の包装紙が散らかっていた。

4.6. 台湾・台南 天后宮：五妃廟：義霊君祠《1990年11月20日》

1970～90年代は、中国の史跡探訪は制限されていたこともあって、史料が自由に見られることから台湾故宮博物院文献処にしばしば足を運び、その折に台湾の古都台南を何度か訪れ、赤嵌楼や天后宮へ赴いた。天后宮は航海の神の媽祖廟であるが、台南のここは南明にちなむ廟でもある。すなわち永暦帝を正統とした鄭成功は南京攻略に失敗した後に、順治十八年（1661）台湾に渡りオランダ人を追放、台南を中心に統治した。鄭成功は台湾に逃れた寧靖王を奉じ、永暦年号を使用した。成功の没後を継いだ鄭經は、康熙二十二年（1683）に清朝へ帰順した。これによって明朝再興の望みを絶たれた寧靖王は自決、5人の妃と侍臣が殉死したと伝えられる。清朝時代に寧靖王府は媽祖廟＝天后宮に改築されると共に、5人の妃が「五妃廟」に、侍臣は「義霊君祠」に祀られ今に至っている。あるいは南明の最後の史跡が寧靖王府＝台南天后宮と五妃廟、義霊君祠であろうか。

（原載：『アジア流域文化研究』VII、2011年）



写真 8-1 鰻が食材



写真 8-2 銅鼓を模した広西民族博物館



写真 8-3 石畳の狭い一条街＝臨江街



写真 8-4 古い碼頭から見た濁った左江の流れ



写真 8-5 河辺に建つ「道光四年街巷眾議禁約碑」



写真 8-6 柳州に開設された会館の看板

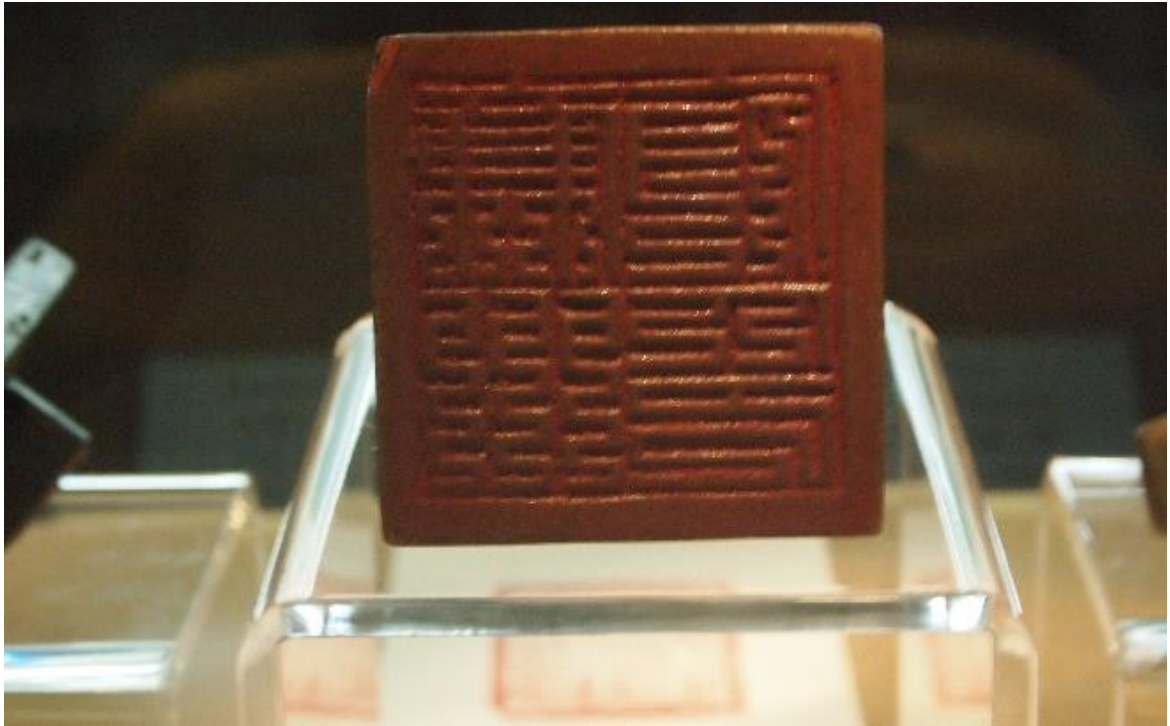


写真 8-7 永曆政権の「廉州府印」



写真 8-8 柳州城東門



写真 8-9 文惠大橋と柳江



写真 8-10 城北路の表示のある武宣の街



写真 8-11 武宣文廟大成殿



写真 8-12 古営盤に建つ洪秀全像



写真 8-13 ひっそりとした太平天国金田起義紀念館



写真 8-14 忻城土司衙門



写真 8-15 三界廟の祠堂



写真 8-16 象山大橋付近の黔江＝柳江



写真 8-17 金秀河が流れる金秀瑶族自治县



写真 8-18 平楽を流れる桂江



写真 8-19 城塞のような黄姚鎮の門



写真 8-20 黄姚鎮の大通り



写真 8-21 梧州騎樓城街



写真 8-22 梧州龍母廟



写真 8-23 傅弘烈を祀る將軍廟

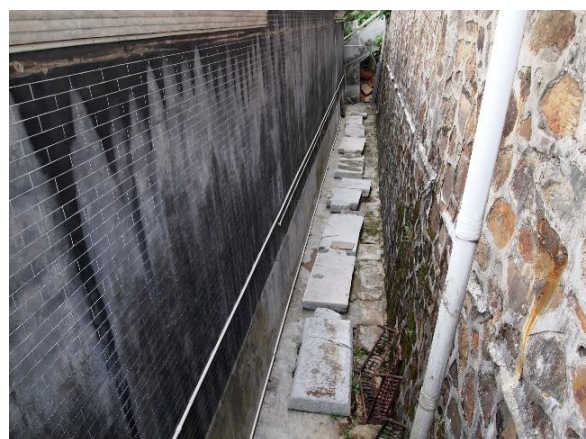


写真 8-24 將軍殿後の隙間に横たえられた石碑



写真 8-25 媽祖廟風の裝飾が施された粵東會館



写真 8-26 お供物の水牛の頭と子豚



写真 8-27 道士もいる祭礼風景

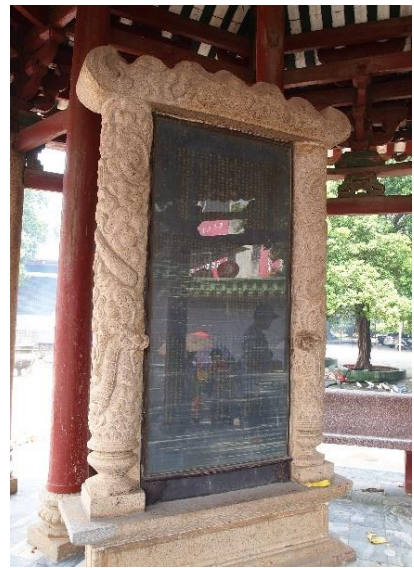


写真 8-28 新装なった石碑



写真 8-29 肇慶市博物館「閩江楼」



写真 8-30 肇慶をゆったりと流れる西江



写真 8-31 永明宮の麗譙楼



写真 8-32 肇慶の文廟「高要学宮」



写真 8-33 碑刻が壁に嵌めこまれた「石橋亭」

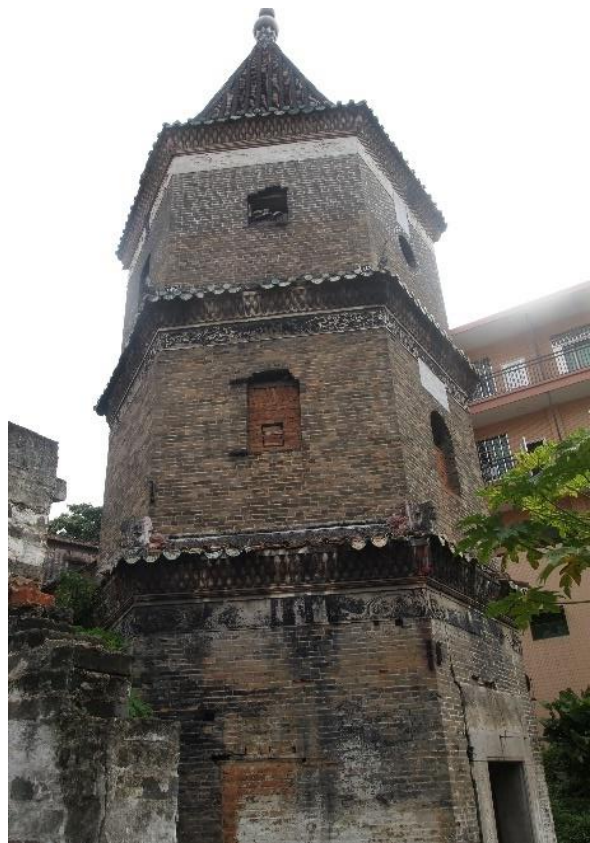


写真 8-34 イスラム寺院のミナレット？



写真 8-35 白沙龍母廟の碼頭と西江

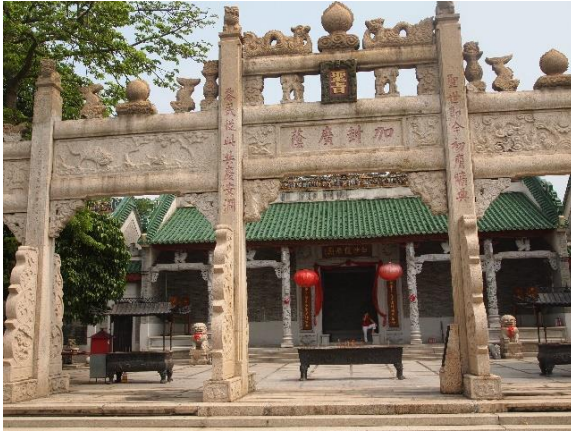


写真 8-36 白沙龍母廟の牌楼



写真 8-37 カルストタワーが聳える七星岩景区



写真 8-38 石刻で埋められた石室岩の洞窟内部



写真 8-39 修理中の護龍祖廟



写真 8-40 柱に文革のスローガン、壁面に護龍の見える後殿



写真 8-41 慶雲寺観音殿



写真 8-42 仏の下の宝座は尚可喜賜与という



写真 8-43 壮大華麗な陳氏書院



写真 8-44 贅を尽くした陳氏書院の装飾



写真 8-45 靖江王府=永暦帝行宮=定南王府の城門

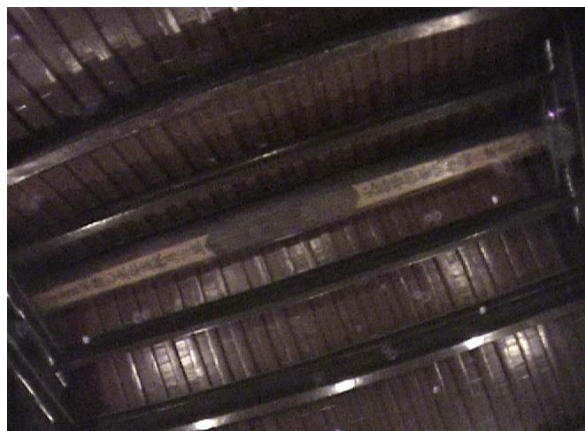


写真 8-46 甲秀樓の梁に記された永暦年号



写真 8-46A 永曆乙未年孟秋月吉旦



写真 8-46B 火器營都督??建



写真 8-47 再建された十八先生專祠全景
碑

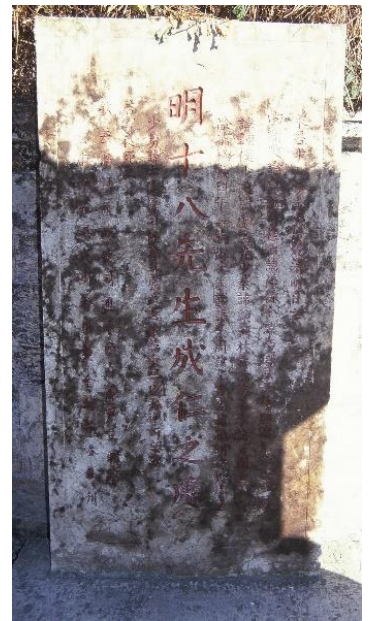


写真 8-48 「明十八先生成仁之處」



写真 8-49 行宮跡だという「試院」の一部



写真 8-50 永曆帝の殉難碑



写真 8-51 荒れ果てた李定国祠堂

第9章

郎世寧をめぐる二つの石碑

はじめに

2010年8月末、北京で開催された「清代満漢関係史国際学術研究会」に出席した折に、早稲田大学柳澤明氏から、かねてよりその存在を気にかけていた郎世寧の旗地典買を記した石碑が、現在も永定河河畔の関帝廟に残されていると教えていただいた。学会終了後は近代史研究所劉小萌氏と共に、尚可喜平南藩の広西支配の史跡などを探るために珠江流域に赴いた⁽¹⁾ので、その旅から戻った後に、関帝廟や郎世寧碑の所在の確認をお願いしておいた人民大学清史研究所張永江氏に同行していただき、永定河河畔へ出向き念願の石碑を実見することが出来た。本章はこの郎世寧の旗地典買碑、それに併せて北京に残る郎世寧の墓碑の探訪を記すものである。

郎世寧（ジュゼッペ・カスティリオーネ、Giuseppe Castiglione）が、イタリアのイエズス会修道士で、1707年にイエズス会に入会した後、1715年（康熙五十四年）到北京に到着、宮廷に出仕し康熙、雍正、乾隆三代の皇帝の寵愛を受けたこと、乾隆帝が円明園に建てた「如意館」で多くの絵画を描いたこと、絵画に併せて円明園の西洋楼建築に尽力したこと、キリスト教厳禁の雍正・乾隆時代に禁教の寛容を請うたこと、生前に三品が、78才で没した時には侍郎待遇や祭葬銀が賜与されたことはよく知られていよう。郎世寧の生涯、特に「百駿図」や「香妃像」などの絵画業績をめぐっては多くの論考があり、その墓碑についても言及されているが、郎世寧の旗地典買を取り上げたものは少ない⁽²⁾。

1 郎世寧旗地典買碑の探訪

郎世寧碑の所在を調べた張氏によれば、それは関帝廟ではなく永定河沿いにある「大王廟」の中にあるようだが、大王廟の正確な場所是不明とのことであった。2010年9月12日、地下鉄1号線の八角遊楽園駅からタクシーに乗り、南五環（北京第五環状道路）を南下し

⁽¹⁾ 広西探訪については、第8章を参照。

⁽²⁾ 本章では石田幹之助「郎世寧小伝稿」（『東亜文化史叢考』（東洋文庫論叢54）東洋文庫、1973年）、矢沢利彦「ジュゼッペ・カスティリオーネ（郎世寧）」（『歴史教育』第6巻第1号、1958年）、同『西洋人の見た中国皇帝』（東方書店、1992年）、呉伯姪「郎世寧」（『清代人物伝稿』上編第9巻、中華書局）などを参照したが、共に旗地典買には言及していない。管見の限りでは、杉村勇造「皇帝と外国」（『乾隆皇帝』二玄社、1961年）の中で、「また十五年十月には郎世寧等が禁止している満洲旗人の土地を購入したので当然に罪とすべきであったが、これは特に許されている。」とあるのみであろう。なお、ホームページ「北京網」中の「宮廷画師郎世寧与老北京」（<http://www.oldbeijing.net/Article/Class81/Class84/9345.html>）に収められる「永定河畔買地惹是非大王廟留証刻聖旨」は、郎世寧の旗地典買を伝えている〔現在はすでにインターネット上から削除〕。

て盧溝橋を過ぎ、京石高速と南五環の交差点⁽³⁾から永定河の左岸を 6 kmほど南下した付近で、五環路から永定河沿いの道に降り、ゴルフ場の入り口を過ぎると大王廟の一郭が見えた。

◆大王廟

大王廟の広場には「北京市豊台区文物保護単位／大王廟／北京市豊台区人民政府 2003 年 10 月公布／北京市豊台区文化委員会立」（／は改行を示す）と記された文物保護標識が建っていて、この名称が大王廟であることを示している【写真 9-1】。帰国してから気付いたことであるが、『中国文物地図集』北京分冊に「大王廟」の項目があり地図にも表示がある。すなわち大王廟の項目には「大王廟は宛平県城地区北天堂村に位置すること、光緒十六年（1890）に永定河の堤防が決壊、その修復と治河に従事した官僚がその成功を記念して廟を建てたこと、建築面積 582 m²で、南向きに前殿 3 間、後殿 3 間が建っていて、2003 年に前殿と後殿を修繕したこと」が記されている⁽⁴⁾。

広場の奥にある大王廟前殿の正面には、主殿である大王殿が建ち、「金堤永固」の扁額が掲げられた殿内には、水の神を統括する下元三品水官解厄大帝が祀られている。その左右の配殿には、右（東側）には文昌帝君を祀った文昌殿、左（西側）に関聖帝君を祀った関帝廟が建っている。大王殿の後に建つ後殿の主殿は「永祐安瀾」の扁額が掲げられた龍王殿で、玉皇上帝、鄒恒大大將軍、五官大帝が祀られ、龍王殿の左右には観音菩薩を祀った慈航殿、福祿寿三星を祀った三星殿が配されている。すなわち大王廟は、扁額の文言や祀られた神々から見てとれるように、永定河の治水を祈念して建立された廟である。

大王廟の左側には 2004 年の日付の「大王廟修理碑」が建ち、その先は「盧溝詩廊」と題され、盧溝橋をめぐる近年の詩・文の石板が嵌めこまれた詩廊となっていて、その奥にある禹門を入った、龍王殿の裏手にあたる草の生い茂った広場に、3 本の石碑⁽⁵⁾が建てられていて、そのうちの 1 本が目指す郎世寧碑であった【写真 9-2】。

◆郎世寧旗地典買碑

『中国文物地図集』北京分冊下には「欽准郎世寧碑」の項目があり⁽⁶⁾、郎世寧が乾隆年間に北天堂一帯の旗地を私買して罪となったが、礼部官僚⁽⁷⁾がやりとりした結果、乾隆帝の赦免を得たので、郎世寧が皇恩に感謝して『欽賜碑』を建てたこと、その石碑は碑高 1.76m、幅 0.8m、厚さ 18 cm で淡青色であることが記されている。

額題に「欽賜」と刻された石碑は、碑座から碑頭まで高さ 180cm に満たず、欽賜の文を記す石碑としては小振りである。石碑は表面に後述する碑文が刻されているだけで裏面には何も記されていない。碑文を記す表面には若干の摩擦傷があるが、碑文は十分に読め、

⁽³⁾ 後述する義和団の乱後に郎世寧墓碑が発見されたという長辛店郷はこの交差点付近にある。

⁽⁴⁾ 『中国文物地図集』（中国大百科全書出版社、2008 年）北京分冊下、「豊台区大王廟」（186 頁）の項。地図は同書北京分冊上、「豊台区文物図」（178 頁）に見える。

⁽⁵⁾ 郎世寧碑以外の 1 本は「北上十二號漫口合龍／將軍顕著靈異紀…光緒十七年吉月？」等と見える永定河修復碑で、その年代から大王廟を建てた時の碑であろう。もう 1 本は「馮検閱使？徳政碑…京兆永定河河務局長孔祿榕？率全河員弁等恭立 中華民國十四年歲在乙丑」と記されていて、共に永定河の治水をめぐる石碑のようである。

⁽⁶⁾ 『中国文物地図集』北京分冊下、「欽准郎世寧碑」（187 頁）、60-D4 老莊子郷北天堂村・清代。また地図では「大王廟」の北側に少しずれたところに示されている。

⁽⁷⁾ 後述の『起居注』に見えるように、礼部ではなく戸部の官僚であろう。

保存状況は悪くない。なお、郎世寧碑の碑文は『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』⁽⁸⁾に拓本が掲載されているが、現存石碑の碑刻と拓本を比較すると、両者は同じものであること、すなわち拓本は大王廟に現存する石碑から写し取ったものであり、現存の石碑は近年の模刻ではなく、乾隆年代に刻され建てられた原碑であると推定される。

大王廟の管理人に尋ねると、元来この石碑は大王廟から五環をはさんだ北側、北天堂村の入り口に建っていたが、近年になってここに移動したものだという⁽⁹⁾。地名「天堂」からすれば、ここに天主堂が置かれていたのであろうが、郎世寧はこの付近に典買した旗地や永定河の河淤地からなる莊園を構え、天主堂を運営していたのであろうか。大王廟を辞去した足で石碑が建っていたと教えられた地点におもむき周辺を探索してみたが、それらしい痕跡は何も見当たらなかった【写真 9-3】。彼の常住した南堂から遥かに離れた場所に位置するこの地の経営は、彼に従う信者などに委託されていたのであろうことなどを考えながら帰路についた。

◆郎世寧の旗地典買

郎世寧旗地典買碑をめぐる若干の考察を行っておこう。はじめに拓本を参考にしながら郎世寧碑の全文を以下に示す（△は抬頭を示す）。

欽賜

奉／△旨。民人私典旂地定例綦嚴。屢經飭禁。但念郎／世寧等係西洋遠人、内地禁令原未經通飭／遵行。且伊等寄寓京師、亦藉此以資生計。所／以定例後價典旂地、着加恩免其撤回治罪。／其定例以前所典之地亦着一例免其回贖。／此係朕加惠遠人恩施格外。欽此／乾隆十五年十二月 日

石碑には、民間人の旗地典買は厳禁であるが、郎世寧は西洋人で旗地典買の規則について熟知していないこと、北京に居住する郎世寧は典買した土地で生計を立てていることから、郎世寧が旗地典買禁止令の後に典買した旗地を返還させず、禁止令前に典買した旗地を回贖（典買者あるいは国家の手で買い戻す）しないという、定例を越えた特恩を乾隆帝が下したことが記されている。すなわち郎世寧は、ここが旗地典買禁止の定例とは相違する特恩が賜与され、所有を許された土地であることを明示するために石碑を建立したものである。

筆者が石碑に記された一文を初めて目にしたのは、『旗地則例』⁽¹⁰⁾巻1「禁西洋人典買旂地」に記された条文であるが、この条文は『欽定八旗通志』（巻64、「土田志」3、「土田規制畿輔規制」、乾隆十五年十二月）、『高宗実録』（巻378、乾隆十五年十二月己卯＝十日）、乾隆『起居注』（乾隆十五年十二月十日）にも見える。各書に記された条文と碑文の間に、異体字「旂」が「旗」に、「所有」が「所以」と記されるなど、字句に若干の出入りがある

⁽⁸⁾ 北京図書館金石組編『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』（中州古籍出版社、1989-1991年）第70冊138頁に『恩施郎世寧等價旂地碑』京10234：清乾隆十五年（1750）十二月刻。碑在北京丰台区盧溝橋北天主堂。拓片碑身高101厘米、寬69厘米；額高23厘米、寬16厘米。高宗弘曆撰、正書、額雙勾題」とある。

⁽⁹⁾ 『中国文物地図集』では、郎世寧碑（老莊子郷北天堂村）と大王廟（宛平県城地区北天堂村）の所在地を別々に記し、地図上でも別に示している。すなわち『中国文物地図集』編纂当時、郎世寧碑は老莊子郷北天堂村に建っていて、その後大王廟に移されたことを示している。

⁽¹⁰⁾ 『旗地則例』は中国国家図書館所蔵抄本であるが、これについては稿を改めて紹介したい。

と共に、条文には碑文に記されていない経緯などを記している。条文の中で最も早い記録であろう乾隆『起居注』に記された文を以下に示す⁽¹¹⁾。

又戸部叅奏。西洋人郎世寧等、於例禁之後。私典旗地一疏。奉諭旨。民人私典旗地。定例綦嚴。屢經飭禁。但念郎世寧等係西洋遠人、內地禁例、原未經通飭遵行。且伊等寄寓京師。亦藉此以資生計。所有定例後價典旗地。著加恩免其徹回治罪。其定例以前所典之地、亦著免其一例回贖。如原典之人、自行用價收贖。仍聽其贖回。此朕加惠遠人。恩施格外。今禁例既經申明。嗣後西洋人于此項地畝之外、再有私行典買旗地者。與受之人。定行照例治罪。并此次恩免徹回之處。從重究治。郎世寧等既經寬免。所有出典之蔡永福等、并失察之該管各官、均從寬免其治罪議處。至河游（淤？）地畝。亦係郎世寧等價典之地。俱免圈徹。但蔡永福於認買公產之外。所有多得河游地畝典價。並非伊分內應得之項。着該部照例查辦。

碑文と対応する部分にアンダーラインを施したが、起居注にはそれを含めて以下の7項目が記されている。

- ①郎世寧の旗地典買を戸部が弾劾上奏、それを乾隆帝が特例を以て罪を許した（この部分が碑文に刻まれている）。
- ②典買した土地を典売した蔡永福らが回贖しようとした場合は回贖を認める。
- ③今後の西洋人の旗地典売買は、典買した西洋人、典売した旗人共々定例に従い罪とし、郎世寧が行った場合はこのたびの特恩を取り消す。
- ④郎世寧の旗地典買の罪を許すと共に、出典（典売）した蔡永福と禁例を適用しなかった官僚の罪を許す。
- ⑤蔡永福の旗地と同様に、郎世寧が典買した河淤地（永定河の氾濫でつくり出された堆積地）の返還も免じる。
- ⑥これ以後に西洋人が旗地を典買した場合は旗地典買禁止の定例に従って罪とする。
- ⑦蔡永福が所有している永定河の堆積地は不法所有なので、戸部が調査し定例に従って処分を定める。

乾隆十五年当時の旗地の典売買について簡単に触れておく。すなわち入関と共に北京内城への居住を命じられた旗人の生活基盤は、北京を中心とする畿輔一帯に与えられた畿輔旗地であった。旗人は民地の購入は認められたが所有地旗地の売却は認められず、旗人相互の売買も同旗内に限られていた。このような民間への売却禁止、旗人間の売却制限に対して行われたのが、典（質入れ）という形式の、回贖（買い戻し）条件の付いた実質的な売却であった。康熙中葉以後になると、生活に困窮した旗人は旗地を抵当に民人から借金をしたり、長期間の典すなわち売却代金に相当する典価を受け取る実質的な売却を行った。八旗制度に多くの改革政策を実施した雍正帝は、旗地典売を改めて禁止すると共に、典売された旗地を内庫銀で回贖し、回贖地を各旗に留めて典売した旗人の買い戻しに備えるなど、旗地を旗人の手元に取り戻す方策を講じた。しかし雍正帝の禁令にかかわらず、乾隆朝に至っても旗地の典売はやまず、旗地典買禁止令が再発され典売旗地の回贖が施行されたが、その趨勢を止めることは出来なかった⁽¹²⁾。

⁽¹¹⁾ 中国第一歴史檔案館編『乾隆帝起居注』（広西師範大学出版社、2002年）、第9冊。

⁽¹²⁾ 当時の旗地典売買については、石橋秀雄「清朝中期の畿輔旗地政策」（『清代史研究』緑陰書房、

このように雍正時代から厳しくなった旗地典売買禁止と回贖の潮流の中で、郎世寧は蔡永福から旗地を典買したのであるが、典売した旗地の所有者蔡永福とは何者であろうか。旗地の所有者である以上、蔡永福が旗人であったと推定し得るが、『欽定八旗通志』には、乾隆六年の正白旗漢軍旗人の武科举合格者、乾隆十年の武進士合格として蔡永福（蔡湘佐領）の名が記録され⁽¹³⁾、さらに乾隆帝が乾隆十年十月二十五日に謁見した武举一甲 3 人、武進士二甲 9 人、三甲 73 人中の武進士二甲に蔡永福の名が見える⁽¹⁴⁾。時代的に見ても、乾隆六年に武举人、乾隆十年に武進士であった蔡永福と郎世寧に旗地を典売した蔡永福と同一人物であろう。そして蔡永福が所属していた蔡湘佐領は正白旗漢軍第 2 参領第 2 ニルに相当するが、このニルは入関前の崇徳年間に編成されているので、蔡永福の祖先は入関して畿輔旗地を撥給され、その旗地が受け継がれて蔡永福に至ったと推定されよう。蔡氏一族は彼らに撥給された旗地を経営すると共に、旗地に隣接して流れる永定河の河淤地を密かに取得していて、蔡永福は自分の所有する旗地に併せて河淤地をも郎世寧に典売していたのであろう。

◆西洋人の土地典買

郎世寧が蔡永福から旗地を典買した経緯や年月、郎世寧所有地の全貌、所有地経営の詳細は全く不明である。ここでは外国人の土地典買が郎世寧にとどまらなかったことを示しておこう。すなわち『宮中檔康熙朝奏摺』には、直隸總督管理巡撫事趙弘燮が康熙五十四年四月二日に上奏した「眞定縣民鄭逢時、因拖欠西洋人高尚徳園地租銀、以致鬥毆控訴事。」⁽¹⁵⁾の一例が見える。

直隸總督趙弘燮が上奏した事件の概要は以下のとおりである。順天府の西に位置する眞定県⁽¹⁶⁾の武科举である鄭逢時は、康熙四十二年に自分の耕作地 8 畝を西洋人高尚徳⁽¹⁷⁾に典価 20 両で典売し、毎月租 4 錢を支払って耕作を続けていた。ところが高尚徳に対する租銭の支払いが滞ったので、康熙五十四年正月二十九日に、高尚徳は下僕周若望と李大忠を鄭逢時の家に派遣して滞納分を請求させた。周若望らが赴いた時に孫逢時は不在であったので、周若望等は悪口雑言を吐いて帰って来た。罵られたことを知った鄭逢時は高尚徳に訴えようと天主堂に向かいかけたが、はからずも周若望と出会って殴り合い、鄭逢時は血を吐いて昏倒した。鄭逢時の子供の鄭允福は、父を助けようとして高尚徳を巻き込んだ喧嘩となって、多くの人々がそれを見ていた。その後、鄭親子は傷害事件として、高尚徳は自鳴鐘などの物品略奪事件として、それぞれが地方官に訴え出たという事件である。訴え出られた地方官は、高尚徳の下僕が鄭逢時を殴打した原因は鄭逢時が租銭を滞納したこと

1989 年）が詳細に論じている。

(13) 『欽定八旗通志』巻 110、選舉志 98、「武举」乾隆六年の項に「蔡永福（蔡湘佐領…以上正白旗六名）、『同』巻 108、選舉志 78、「武進士」乾隆十年「漢軍」の項に「蔡永福（蔡湘佐領：正白旗：一名）」と見える。

(14) 『高宗実録』巻 251、乾隆十年十月癸亥の条。

(15) 『宮中檔奏摺康熙朝』（台湾故宮博物院、1976 年）、第 5 輯、398 頁。

(16) 1723 年（雍正元年）に眞定県は正定県と改称された。

(17) 康熙帝の諭旨に「眞定府堂内有票西洋人」とあるので、高尚徳は「票」すなわち滞在証明書が発行された公許の宣教師であろう。インターネット上の資料「寧波旧影：葯行街天主堂」（http://blog.sina.com.cn/s/blog_4423cedf0100jt4a.html）は康熙 52（1713）年に天主堂を創建したフランス人 Gollet（郭中伝、字懷義）の別名が高尚徳と記しているが、その足跡は不明で眞定の高尚徳と同一人物なのかは明らかでない。また武科举鄭逢時も不明のままである。

あり、鄭逢時の物品略奪は証拠がないとして、滞納した租銭を支払わせて事件の決着を図り、中央には報告しなかった。ところが高尚徳が事件の顛末を欽天監に知らせたことから、この事件が康熙帝の耳に入り、改めて詳細な調査報告が求められた。その結果、上述の顛末が上奏され記録されたものである。

西洋人・宣教師の土地典買はこの一例を見いだしたのみである。康熙帝や乾隆帝に寵愛され天主堂、居宅、墓地などを欽賜されていた宣教師は、天主堂の運営費や布教の費用などを生み出すためであろうが、旗地や民地を典買し荘園を運営していた一例が、永定河河畔の郎世寧、真定県の高尚徳と見てよいであろう。

2 郎世寧墓碑の探訪

現在、郎世寧の墓は北京市西城区車公庄大街 6 号院内の「利瑪竇和外国伝教士墓地」に保存されている【写真 9-4】。郎世寧が乾隆三十一年（1766）に 78 才で没すると、乾隆帝は「進賢」の例にならって加恩し、従来の三品頂帯から二品待遇の侍郎待遇にのぼらせ、祭葬銀 300 両と墓碑文を賜与した。この恩遇は郎世寧の墓碑に刻されているので、その碑文を示そう⁽¹⁸⁾。

中央に「耶穌會士郎公之墓」と大書した右側に漢文で以下のようにみえ、左側には漢文に対応する「DOM」ではじまるラテン文が刻されている。

乾隆三十一年六月初十日奉

／△△ 旨。西洋人郎世寧自康熙年間入值内廷、頗著勤慎。曾賞給三／品頂帯。今患病溘逝。念其行走年久。齒近八旬。着照戴進賢／之例。加恩給予侍郎銜。並賞内府銀三百兩、料理喪事。以示優恤。欽此。

郎世寧墓碑の建つこの墓地は、明代・万暦四十四年（1616）に利瑪竇（マテオ・リッチ）が葬られて以後、清代に湯若望（アダム・シャル）や南懷仁（フェルベースト）をはじめとする多数の宣教師が葬られ、柵欄墓地＝馬尾溝墓地などと称される場所である。清代に、柵欄墓地の周囲には教堂や孤児院など布教のための様々な施設が建てられていたが、墓地が設けられてから今に至るまでおよそ 400 年を経る間に、様々な歴史の波に洗われている。中でも清末光緒二十六年（1900）の義和団の乱と現代 1966 年に始まった文化大革命は、キリスト教を含む宗教全般を否定するものだっただけに、柵欄墓地は運動に加わった大衆の攻撃・破壊を免れる事は出来なかった⁽¹⁹⁾。

義和団の乱では墓が掘り返され墓碑は倒されるなど墓地は徹底的に破壊されたが、乱が終結すると、列強の前に屈した光緒帝は墓地の復旧を命じ、郎世寧の墓碑は盧溝橋近くの趙辛店で発見され元の場所に再建されたという⁽²⁰⁾。日中戦争の時期に墓地一帯は日本軍に

⁽¹⁸⁾ 碑文は『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』（中州古籍出版社、1990 年 6 月）第 72 冊、146 頁に「郎世寧墓碑 京 2002 清乾隆 31（1766）年 6 月 10 日刻」として拓本が見え、「碑在北京西城区北営房北街（馬尾溝）教堂。拓片高 116 厘米、寛 65 厘米。正書、漢文、拉文合璧」とある。また『高宗実録』巻 762、乾隆三十一年六月戊申の条にも記載されている。

⁽¹⁹⁾ 北京の天主堂と柵欄墓地の変遷は、矢沢利彦『北京四天主堂物語』（平河出版社、1987 年）に詳しい。

⁽²⁰⁾ 石田前掲書 453 頁。墓碑の発見された場所からすると、墓碑を郎世寧ゆかりの天堂村に退避させようとしたとも推定されよう。

占拠され、さらに中華人民共和国成立と共に教堂の建物などが中国側に渡されるなど宗教活動は衰退の一途をたどり、宗教そのものを否定した文革では、教堂や墓地は再び破壊され墓碑は埋められてしまった。文革が終息した後に、イタリア政府の要求などもあって、1978年に墓地の修復が開始され、埋められていた墓碑も掘り出されて再建され、今に至ったという。

以上のような変転をたどった柵欄墓地を、1988年7月22日に故神田信夫先生と共に訪れ⁽²¹⁾、当時、墓地周辺の建物にあった北京市社会科学院歴史研究所閻崇年氏の案内と説明で参観した。墓地は利瑪竇・湯若望・南懷仁3人の墓地と、それ以外の宣教師の墓地の二つに区分され、それぞれが柵で囲まれていたが、郎世寧の墓碑は後者の最前列に建っていた。当時の墓地は、1984年5月に公布された北京市文物保護単位であり、墓地には「利瑪竇及明清以来外国伝教士墓地」の表示が掲げられていた。墓地の旁らにあったという教堂の石門はまだ再建されぬままで、墓地の前に石獸や供台などが放置され【写真9-5】、宣教師住居に付設していたという地下のワインセラーが掘り返されていた【写真9-6】⁽²²⁾。

保護と修復による史跡の変貌が著しい中で、宣教師墓地と郎世寧墓碑の現状を見るために、2011年9月9日に再訪した。1988年当時ここにあった北京市社会科学院は朝陽区に移り、その後には中共北京市委党校と行政学院が置かれていて、墓地の管理は党校に委ねられていた。北京市社会科学院満学研究所趙志強氏の紹介で北京市委党校国際交流合作部陳聡氏に墓地の鍵を開け案内していただいた。二つに分かれた墓地の内部は、利瑪竇や郎世寧の墓標をはじめとして、以前と大きな変わりはないようである。ただ史跡は全国重点文物保護単位（2006年5月25日公布）に格上げされ、その名称も「利瑪竇和外国伝教士墓地」に変わっていた。そして以前は墓地前の広場に放置されていた石獸や供台が、修復された石門の門柱の上に飾られすっかり整備されていた【写真9-7】。

また1988年当時は、墓地以外は未修復であり、墓地周囲にある墓地付属の建物は住居などに使用されていたが、今では建物の建つ形式が「口」字型であることから「口字楼」などと名付けられ保存されていた。くわえて「利瑪竇及明清以来外国伝教士墓地簡介」と題したパンフレットも準備されていて、解説と共に利瑪竇以下3名と郎世寧以下60名の宣教師墓碑のそれぞれが建つ位置を番号で示し、番号ごとに埋葬者の氏名（漢文名、欧文名）、国籍、生没年が記されていて、参観の便に供されていた。

おわりに

郎世寧旗地典買碑、宣教師墓地共々にすっかり修復整備され今に至っている。ただその修復が、何に依拠して修復されたのか疑問が残るものもある。2011年の訪問で気付いたことであるが、現在【写真9-7】に見えるように、石門の柱頭に飾られている石獸は、本来、アダム・シャルに賜与された石獸なのかもしれない⁽²³⁾。

(21) 神田先生は、この時に先立つ1986年にも宣教師墓地を訪れられていて、その時撮影された写真が注(19)の矢沢前掲書に載せられている。

(22) 現在のブランド名「龍徽」というワインは、ここのワインセラーに由来するという。

(23) 墓碑に記された湯若望に対する康熙帝の処遇は実録などに記録が見当たらない。矢沢前掲書には、順治十一年（1654）三月二十五日に、マテオ・リッチの墳墓の両側の土地をシャルに賜ったこと、シャルが楊光先により暦法の難を受けたが康熙帝は「通微教師」の号を復活させ、柵欄墓地の敷地を返還させたこと、康熙八年（1669）十月、皇帝はシャルの墳墓建造費、及び墓碑・石獸建立費と

また湯若望の墓標は表裏が逆に建っているのではなかろうか。現在の碑文は、表面が右側から「湯先生諱若望號道未大西洋日爾瑪你亜國人…順治二年清朝特用新法…恩賚有加卒于康熙四年乙巳壽七十有(末尾一字不明)」と略歴が、左側にそのラテン文が刻されている。そして裏面には、中央に「耶穌會⁽²⁴⁾士湯公之墓」と大書された右側に「／△△皇帝諭祭原任通政司通政使加二級又一級掌欽天監印務事。…爾長逝／朕用悼焉。特加恩遣卹大如致祭。嗚呼盡垂大巧之榮。庶亨匪□報尔如有知尚克歆亨。／康熙八年十一月十六日」と、康熙帝の諭祭文と祭葬賜与が、左側には漢語に対応する「hūwangdi... omšon biyai juwan ninggun:」との満文が刻されている⁽²⁵⁾。康熙帝の賜与した満漢諭祭文が墓碑の正文であろうから、「耶穌會士湯公之墓」と大書され満漢文の刻された現在の裏面が表面で、経歴を漢語とラテン語で記した今の表面は裏面ではなかろうか⁽²⁶⁾。さらに、また郎世寧墓碑の建つ墓園の片隅に置かれている、清朝政府が義和団の乱による墓地破壊の復旧を記した光緒二十九年秋月の年紀がある石碑も【写真 9-8】、墓地修復当時は教堂の正面の壁に嵌めこまれていたものであり、今の場所は元来あった場所とは相違するものであろう。

二度の訪問で目にしたことを比較すると、義和団と文化大革命という二度の破壊を経て修復した現状は、修復がいつの時代の、何を基準にして行われたのかを考慮すべきことを改めて考えさせられた。

(原載：『満族史研究』第 10 号、2011 年)

して 524 両を下賜したこと、完成式は康熙八年十一月十六日に行われたこと、この日皇帝は礼部の大官を現地に派遣してシャルの死をいたむ祭文を読ませたことが見える。

⁽²⁴⁾ 1988 年当時から、「會」の右肩に「加」字が刻されているが、これが何を意味するか不明のままである。

⁽²⁵⁾ 満文は不鮮明な部分があり充分な解読は出来ていない。

⁽²⁶⁾ 郎世寧墓碑が「耶穌會士郎公之墓」を表面とするように、多くの墓標は「耶穌會士…之墓」と刻された面を表にして建てられている。なお義和団の乱以後に修復された墓の写真は『舊都文物略』（北京市政府、1935 年）「陵墓略」に利瑪竇墓が掲載されているが、「湯公之墓」は見えない。



写真 9-1 大王廟の広場



写真 9-2 郎世寧旗地典買碑



写真 9-3 大王廟から五環を隔てた北側、天堂村入口付近



写真 9-4 郎世寧墓碑



写真 9-5 倒置された供台と放置された石獣(1988)

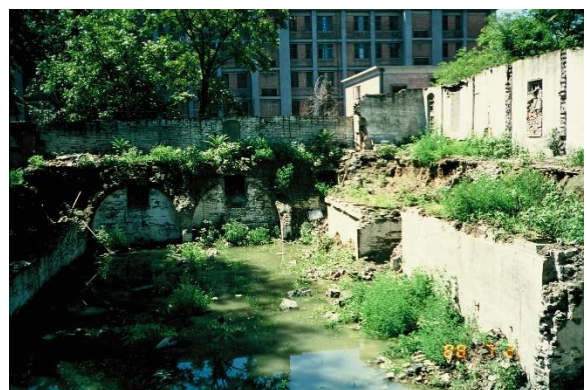


写真 9-6 掘り返された地下のワインセラー(1988)



写真 9-7 修復された石門 門前に供台が、柱頭に石獣が置かれている



写真 9-8 墓地内の壁際に建てられた光緒二十九年の修復を伝える石碑（1988）

第 10 章

新疆ウイグル自治区に残る清代城堡の探訪

はじめに

2011 年 8 月 23 日～9 月 4 日の間、新疆ウイグル（維吾爾）自治区のウルムチ（烏魯木齊）、トルファン（土魯番）、ハミ（哈密）、バリコン（巴里坤）、奇台、古城、カシュガル（喀什）、ヤルカンド（葉爾羌＝莎車）の各地に残された清代の城址を中国社会科学院劉小萌氏、中国人民大学張永江氏と共に訪れた。

漢文化圏から「西域」と呼称された新疆は、漢文化圏とは異質の中央アジア文化圏に属し、ウイグル帝国やモンゴル帝国の支配下で東トルキスタン（テュルク系民族の土地）として独自の世界を築いてきた。ここモンゴリアが中国の領域に組み込まれたのは、満洲族清朝が順治元年（1644）に中国本土支配を開始した後にモンゴリア、青海、チベットへと進み、さらにジュンガル（準噶爾）政権を征服した 18 世紀半ば以後の、清朝の中国支配が始まってから 100 年あまり後のことである。清朝はこの一帯を準部・準疆と回部・回疆（ムスリムの土地）、両者を併せて「新疆」（新しい領土）と呼称し、東部天山山麓の東路、ジュンガリアの北路、盆地周辺の南路に分けて統治した。19 世紀に入るとヤークーブ・ベクに代表されるムスリムの反乱が相継いだ、それを平定した後の光緒十年（1884）に省制を施行、新疆省が成立した。中華民国に入ると、新疆省は中華民国に属しながら半独立的な領域支配が行われる一方で、ムスリムの民族国家「東トルキスタン共和国」の建国がはかられた。国共内戦を経て中華人民共和国が成立すると、その下に繰り入れられて、1955 年に新疆ウイグル自治区が設置され今に至っている。

中国本土・漢族地帯とは相違する文化圏と歴史に併せて、それに影響を与えた地理的環境、すなわち河川の景観にも注目したい。すなわち降雨量が少なく日照時間が長く乾燥気候であることなどから、新疆を流れる河川はイルティッシュ（額爾齊斯）河を除き、全てが草原や砂漠に消える内陸河川である。天山、パミール（帕米爾＝葱嶺）、崑崙などの高山の氷雪を源とする河川の水は、途中で消失する地表河川とは別に地下水脈の利用が行われている。

このような新疆に初めて赴いたのは 1990 年 7 月末、日本大学加藤直人氏と共に、当時、ウルムチに滞在していた筑波大学楠木賢道氏の案内で、イリ（伊犁）とチャプチャル（察布查爾）で、古い面影を残す惠遠城、將軍衙門の圍障、喇嘛廟、関帝廟などを訪れた。チャプチャル地区に入るには入境許可が必要で、イリとチャプチャルの境を流れるイリ河大橋に検査站があった時代である。1995 年 8 月に中央大学梅村坦氏の研究班に加わり、ウズベキスタンとカザフスタンを訪れウルムチに立ち寄った。2007 年 8 月には日本大学加藤直人研究班に加わり、新疆の阿爾泰地区を一周した後にカザフスタンを訪れる機会を得た。

中国の各省と自治区の中で最も広い面積を有する新疆ウイグル自治区（160 万余 km²）は、日本（37 万 8 千弱 km²）の 4.3 倍ほどの広がりがあり、各地に点在する史跡をめぐるだけで相当の日数を要し、短時日の旅では上面を眺めることも出来ない。またジュンガル史・東トルキスタン史の立場から、ウイグル語などの現地語文献を駆使した史跡報告も多々行われているので、この地に疎い筆者が報告することには躊躇を覚える。ただ経済発展と共に

急速に変容しつつある史跡の今を写真で紹介しておくこと、満族史・八旗研究の視点から見えることを記しておくことにも意味があるかと考えて、2011 年の探訪を中心に、2007 年の幾つかの情報を加えて記してみた。また、史跡探訪に併せて目にした河川など水をめぐる景観をも記した次第である。

本章で記す史跡の所在地は以下である。

天山山麓……ウルムチ、トルファン、ハミ、ピジャン（闢展）、バリコン、奇台・古城
 ジュンガリア……アルタイ市、タルバガタイ（塔城）
 タリム盆地周辺……カシュガル、ヤルカンド

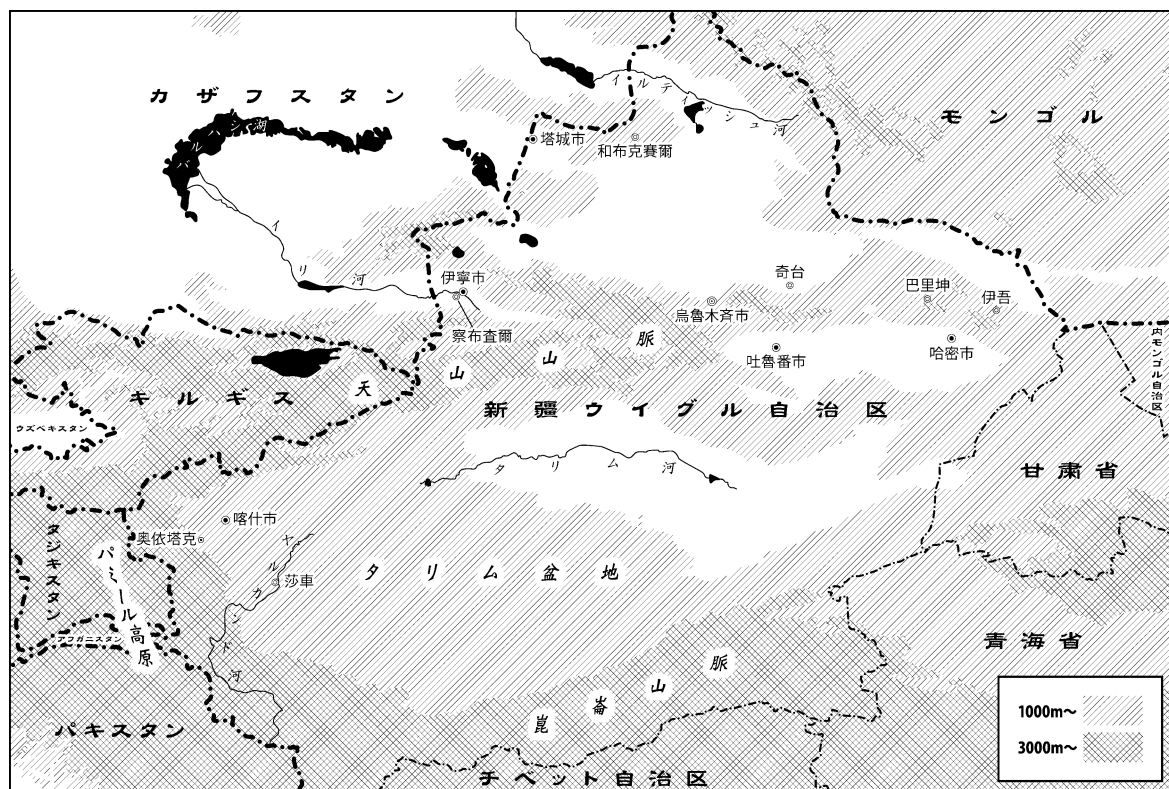


図 10-1 新疆ウイグル自治区地図

1. 天山山麓（ウルムチ、トルファン、ハミ、ピジャン、バリコン、奇台・古城）

1.1. ウルムチ《2011 年 8 月 23 日》

北京からウルムチへ向かう CA1477 便は、7 月末にホタン（和田）とカシュガルで「テロ」事件があったためか、外国人旅行者はほとんどいない。山西付近の山地を過ぎると次第に砂漠が目立ち、ボゴダ（博克達）峰を主峰とする天山山脈北斜面が見え始めるとウルムチである。劉小萌氏、筆者夫妻とは別行動だった張永江氏も内モンゴルから到着。ウルムチでは清朝に縁のある陝西大寺清真寺、文廟と共に鞏寧城城址を探訪した。

◆ウルムチ城《2007 年 8 月 22 日》《2011 年 8 月 28 日》

イリと並んで新疆統治の拠点となったウルムチ城について、『欽定八旗通志』（巻 118、營建志 7、八旗駐防規制 3、「烏嚕木齊駐防」）に、「乾隆三十八年（1773）に、城壁の高さ

2丈2尺5寸8.4m、周囲1,686丈7尺=9里3分13丈6尺5,566m、4門で雍城、角楼、砲台などを備えた鞏寧城を築いた」ことが見える⁽¹⁾。

ウルムチ城の築城と変遷を詳述する白須氏の記述を整理すると以下のようなになる⁽²⁾。

乾隆二十年（1755） 現在の九家湾に土城を築城 「烏魯木齐」名称の起源

乾隆二十三年 烏魯木齐川の東（右）岸に正規の土城を築城

乾隆二十八年 土城を迪化城と称する

乾隆三十年 迪化城の北に迪化新城を築城（漢城）

乾隆三十七年 迪化新城の西北に新城＝満城（鞏寧城）を築城

周9里3分約4.5km 東＝承曦門 西＝宜穡門 南＝軌同門、北＝枢正門
行政の中心地 迪化新城の満洲人が移住 地名「老満城」の淵源

同治三年（1864） 鞏寧城は団練の攻撃で陥落、焼失して廃城

光緒六年（1880） 迪化城の東北に新しい満城を建設

光緒十二年 迪化城を修復・拡大

乾隆三十七年に築城され、八旗が駐屯したので「満城」⁽³⁾と呼ばれ、現在「老満城」の地名が残る鞏寧城址を二度探訪した。2007年には、新疆農業大学職員宿舍の東側にある行知実験学校（南昌路24号）の近くに残る城壁遺址に赴いた。行知実験学校の近くにある遺址に建つウイグル語と漢語の保護表示には以下のように見える。

烏魯木齐市級文物保護単位「鞏寧城城牆遺址」

烏魯木齐市人民政府 2004年12月1日公布 烏魯木齐市人民政府 2006年9月立

〔説明〕鞏寧城建於乾隆三十七年（1772）、遺址現存西牆和南牆2段、各長600余米、夯築而成、殘高4米、基厚6米、每隔100米築1個馬面、現在7個。在2段城牆相夾西南角建實心角楼1座。西城門和南城門均為瓮城門。瓮城門、呈半円形、設左右対称辺門。南北長48米、東西長36米。保護範圍以牆体為準兩側各向外10米。

土を突き固めて築く夯築で造られた高さ2m余りの城壁は修復の手を加えていないようであり【写真10-1】、両側をブロックなどで覆ったり鉄柵で囲んだりして保護している部分もある。行知実験学校西側にあるグラウンドの中にも長く延びて残っていて、保護標示付近には、城壁から外部に突き出る馬面とおぼしき円筒状の城壁も見受けられた【写真10-2】。

2011年には行知実験学校の南側の高台に位置する老満城街に赴き、「老満城街868号」とある場所に立ち、行知実験学校付近から途切れ途切れに延びてきている鞏寧城城壁を上

⁽¹⁾ 「乾隆三十八年設鞏寧城土城一座。長一千六百八十六丈七尺計九里三分零十三丈六尺高二丈二尺五寸正。城樓四座各五間。甕城樓五座各三間。角樓四座各六間。砲樓二十四座各一間。箭樓四座各三間…」とある。以後の『欽定八旗通志』の引用では“「宮建志」駐防名”で記す。また丈と里のメートル換算は、「宮建志」に従い180丈=1里とし、1丈を3.3mで計算した。そのため白須氏や堀氏の数値と合致しない。

⁽²⁾ 白須浄真「清末民初のウルムチ（迪化城）の景観と大谷探検隊の記録」（『東洋史苑』第30・31合併号、1988年）。

⁽³⁾ 「満城」は満洲人の居住する城と理解されようが、「満」は満洲・蒙古・漢軍旗人を指し、満（＝旗人）は、漢（＝緑營・一般漢人）に対置される。すなわち「満城」は「旗城」とすべきであるが、本章では引用書にしたがい満城と記し、筆者の見解で記す場合は旗城とした。

から見た⁽⁴⁾が、以前より荒れているようにも思われた【写真 10-3】。

1.2. トルファン《2011 年 8 月 24 日》

ウルムチから天山の南側に延びる 312 号線を東に、トルファンまで 168km を走る。発電塔が無数に建ち並ぶ達坂風力発電地帯付近から北にボゴダ峰が遠く見える。南下する 314 号線と分かれ東へ、道路と平行に 2014 年開通という北京—ウルムチを 12 時間で結ぶ新幹線の工事中、塩湖などの見える山間地帯を抜けると次第に高度を下げてトルファン盆地に入る。

トルファンは古い時代の交易路の要衝、交河故城やベゼクリク（柏孜克里克）千仏洞等々の史跡が有名であるが、清代の新疆統治の中心はイリ、ウルムチ、カシュガルへ移ったこともあって清代の史跡は影が薄い。ここには、旗城として「乾隆四十五年（1780）に高さ 1.6 丈 5.3m で周囲が 720 丈＝4 里 2,400m 弱の城壁で囲まれた廣安城が築かれていた」（「宮建志」吐魯番駐防）が、その情報は全く無い。地図を見ると吐魯番博物館の前の通りは「老城東路」、近くに「東門村」などの名称も見えるので、この付近に旗城・漢城・回城などいずれかの城の東門があったのであろう。

◆吐魯番博物館

清朝がこの地方を支配すると「吐魯番、辟展、魯克泌、色更木、哈喇和卓の 6 城を設置し吐魯番郡王が管理」したこと、「1762 年（乾隆二十七年）から伊犁將軍が天山南北路の軍政を総括し、吐魯番もその支配下に入ったこと」を記すのみで、清代トルファン城についての展示は全く無かった。史料としては蘇公塔に建つ漢回文で記された「報恩碑」の拓本（かなり傷がついていて読み取れない部分が多い）と漢回文の光緒年間の「田産置売契約書」が展示されているのみであった。

◆蘇公塔（額敏塔）

蘇公塔＝額敏塔と礼拝堂で構成され、蘇公塔は全国重点文物で、以下の標示がある。

1988 年 全国重点文物「蘇公塔」

1999 年 8 月 18 日 吐魯蕃地区文物管理局

蘇公塔は乾隆四十二年（1777）一月、吐魯番郡王エミン・ホージャ（額敏和卓）が 83 歳の時に子の札薩克公スレイマン（蘇賚滿）などを率いて建築したもので、清朝の恩寵に感謝の意を示すための建築と言われている。塔は円筒状で高さ 37m、円塔底部の径 10m、塔の内部に 72 段の螺旋階段があり塔頂に出られる。塔は青灰（黒い石灰）色の磚を積み、四弁花紋、水波紋、菱格紋などの模様がほどこされた磚が外側に貼り付けられているとの説明がある【写真 10-4】。

塔と礼拝堂の裏手は墓地で、たくさんの墓が並んでいた。蘇公塔の近くに「魯克泌王府」^{ルークチミン}と称する建物があるが、これは最近建ったものと知らされていたので立ち寄らなかった。

◆坎儿井博物館

新疆考察には欠かせない地下水脈利用を示すカレーズ（坎儿井）の博物館である。カレ

⁽⁴⁾ グーグルマップで、鞏寧城と関係する地名に「行知実験学校」（東経 43.80892：北緯 87.5739）、「鞏寧城城牆遺址」（東経 43.807333：北緯 87.565075）、「老滿城」（東経 43.812513：北緯 87.581291）が見えるが、三者の関係は不明である。

ーズは「暗渠」、「豎井」、「出水口」、「明渠」、「畜水池」に分かれること、新疆にはカレーズが1,784条あるが、有水カレーズは2003年に614条、2009年に427条で残りは水が涸れてしまったこと、トルファンとハミを中心に、ウルムチ、木壘、アトウシュ（阿図什）に有水カレーズが残り、カシュガル、クチャ（庫車）、古城などでは水が涸れてしまったことなどを説明している。タテ井戸掘りや暗渠を維持するための作業、灯油を点すカンテラや鋤などの工具の陳列と共に、実際にタテ井戸を降り地下の暗渠を見学できるようになっている。このタテ井戸の深さは地下10mで暗渠の始まりは深さ75m、このカレーズのタテ井戸の総数は440本あり、新疆全体ではタテ井戸が172,367本掘削されているとの説明があった。水の少ないトルファンで、公園の名称が「水韻広場」、ここで噴水ショウをやっていたのが印象的であった。

◆艾丁湖

アイディン（艾丁）湖は、表流水が流れ込む流入河のみで流出河のない新疆の湖＝内陸湖の一つで、トルファン低湿地帯の真ん中、市街地から南に3.5km離れた所に位置する。湖は東西40km南北8.5kmの広がりがあり、標高は海面より低い-154.3m、世界の内陸湖で最も標高が低いという。昔は淡水湖であったが今は塩湖になってしまい、白鶴、黒鶴、大白鳥、野生駱駝、黄羊などが生息する保護区でもある。

入り口から2kmほど離れた、おそらく満水期に水際となるであろう所に、巨大な地球をかたどり世界の内陸湖で標高が最低地であることを刻んだ記念塔が建っている。記念塔の周囲は砂礫と砂の混じったゴビ、南の遙か彼方に一部光って水が見えるのが、今の湖の水面であろう【写真 10-5】。艾丁湖公園に至る手前に、カレーズのタテ井戸の土を盛ったと思しき穴と土盛りが20m余りの間隔で続いていたが、これは史跡なのかそれとも今使っているのか不明のままである【写真 10-6】。

1.3. ルクチュン《2011年8月25日》

トルファンから東へ312号線をハミに向かう。途中にヒダの入った赤い山肌、西遊記で知られる「火焰山」を柵越しに眺めた後に、高速から少し南下して鄯善県ルクチュン（魯克沁）鎮に立ち寄る。ここは漢代に柳城、唐代に柳中城が置かれ、玄奘三蔵が立ち寄ったとも伝えられる要衝であるが、観光化の波に乗り遅れたのか手近に砂漠が見られる「沙山公園」とハミ瓜の本場以外は全く喧伝されていない。蘇公塔の建築主である魯克沁王の出自の地であり、清代モンゴル王公の動向をテーマにしている張氏には見逃せない場所である。

◆柳中城城壁遺址

ピジャンンに入って王府跡を探していると、漢代柳中城城壁に出合った。城壁の傍らに以下の史跡標示があるが説明は全くない。

1999年7月29日公布新疆維吾爾自治区級文物「柳中城遺址」

吐魯蕃地区文物管理局 1999年9月9日

また、「魯克沁歷史文化名鎮保護区」⁽⁵⁾と記された標示も建っていて【写真 10-7】、城壁

⁽⁵⁾ 「中国歴史文化名鎮」は、建設部と国家文物局制定の「文化遺産保護制度」の中で、「国家級歴史文化地区」に対する名称。2010年現在で181件が指定されている。大きな城壁が長く続いて残っている。

一帯は保護区であろうが、城壁を民家の壁に利用しているなど保護されている気配は感じられない。城壁がえぐられている部分は城門の門洞跡なのであろうか【写真 10-8】。曲がりくねり長く残っている城壁を見ると、魯克泌王の時代には城としての機能は全く無かったのであろうかとの疑問も生じる。

◆ハニル^ク・マド^ラサ^ス（双塔清真寺）

柳中城址から東に 200～300m 離れた場所に新しいミナレットが見えるので訪れて見た。塔の下に建つ標示には、

ハニ力克・買迪熱斯（双塔清真寺）面積 4,934 m²
 県級文物保護 2007 年 8 月

との標示がある。文物指定を受ける以上、歴史のある清真寺であろうが、魯克泌王との関係は不明である【写真 10-9】。

◆魯克泌王府＝達^ダ浪^{ラン}坎^カ爾^リ沙^ズ郡王夏府

教えられた魯克泌王府の場所に赴くと、柵で囲まれた中にながらんとした建物の一部が残存している。そのそばには以下のように、ここは魯克泌郡王の夏の王府と王府、新旧二つの標示がある⁽⁶⁾。

県級文物保護単位「達浪坎爾沙郡王夏府」
 民国時期 面積 570 平方米
 鄯善県人民政府 1999 年 月 日
 新疆維吾爾自治区人民政府 2003 年 2 月 9 日公布

「魯克泌王府」新疆維吾爾自治区級文物保護単位
 鄯善県文物管理局立 2009 年 9 月 9 日

標示によるならば、ここが魯克泌王府であり、郡王が本拠をトルファンに移した後は夏の別荘であったことになろう。以前は学校にでも使われていたのだろうか、あまり王府らしくはない建物であった【写真 10-10】。

1.4. ハミ《2011 年 8 月 25～26 日》

魯克泌王府の探訪の後に 312 号線へ戻ってここから 360km 余りあるハミを目指す。途中は砂丘やゴビが続き、ハミに近づくと左手に雪をいただいた天山山脈東端の山脈が見え始め、オアシスがあるのだろうか緑が多くなり始める。ハミには、「雍正五年（1727）、高さが 2.46 丈 8m 弱で周圍 1.1 里 600m の城壁と 3 城門を有する漢城が築かれた」（「營建志」哈密綠營駐防）とある。八旗と綠營が同居していたと推定されるこの漢城は、回城の東側にあったとされている⁽⁷⁾が、その場所は不明であり、回城内のハミ王景区周辺の史跡を訪ねた。

⁽⁶⁾ 柵の外側にも文物標示が建っているが全く読めない。

⁽⁷⁾ 哈密城の位置については林恩顕『清朝在新疆的漢回隔離政策』（台湾商務印書館、1990 年）の地図を参照した。

◆哈密王宮

哈密王宮と王陵を総称する王景区はハミ市街の南西に位置している。西側高台に回王府大殿王宮が建ち、王宮高台から東側に王陵が見下ろせる。王宮には、円いドームと塔のあるイスラーム風モスクと瓦屋根の漢式清真寺が並び、王宮内部には王座と共に「和碩親王」「郡王品級」「多羅貝勒」などと書かれた行列用の標識、康熙三十六年（1697）に冊封されたウバイドゥッラー（額貝都拉）に始まる清朝時代の歴代回王の略歴と肖像が掲げられていた。高台下部の広場には、牌坊をはさんだ東側に軍官議事庁や点兵台などの護衛官兵の施設が附属していて、その裏（東）に王陵が位置している。王府は民国二十年（1931）の動乱で全て焼失、現存の建物は2003年に再建されたものであり、史跡保護の対象にはなっていない【写真10-11】。

◆哈密王陵

バリコンまでは150kmほどなので、26日午前中はハミの探訪に当てる。王陵は王宮とは相違して全国重点文物であり以下のような標示がある。

全国重点文物「哈密回王墓」國務院2006年6月公布
新疆維吾爾自治區人民政府2006年7月

王墓入り口近くに「哈密7世回王墓围墙」が残っている【写真10-12】。王陵を囲む围墙は、同治七年（1868）に夯築で築かれ、北向きに門があったが、現在では王陵の西北角に相当する部分が残存している。今残る围墙は、下部の厚さが2.6m、上部は1m、高さ4.5mの壁が60m残存していると説明されている。

王陵の中心は7世回王とその夫人米里巴農、及び8世回王とその一王妃の墓廟【写真10-13】で、嘉慶十八年（1813）から二十七年を費やして道光二十年（1840）に完成した廟内には彼らの棺が並べられていた。なお、この廟と残っている围墙の位置関係は不明瞭のままである。

◆^{ヘイトガール}艾提尕爾清真寺

哈密王陵の近くに規模の大きい清真寺が見えるので立ち寄ってみた。全面修復中で名称も標示されていなかったが、ここはヘイトガール・モスク（艾提尕爾清真寺）である。康熙・乾隆・嘉慶年間に建築修復された殿堂式建築で、祭礼時には1,800人が一度に礼拝することが出来るという大きな空間＝広間があり、カシュガルにある同名モスクに匹敵する規模である⁽⁸⁾。改めてハミがイスラーム都市であることを実感させられた【写真10-14】。

◆哈密博物館

哈密博物館は哈密王陵から環状路をはさんだ向かい側にある。ペルシャ風の陶磁器、バリコンの満城と漢城の写真と説明、石造りの満漢全席など清朝の歴史にも触れた展示が行われている。なお説明に「丁丑（康熙三十六、1697）年、清朝は維吾爾伯克額貝都拉を哈密回部『一等札薩克達爾汗』に冊封、『蒙古鑲紅回旗』に編成した」と記されていたが、蒙古鑲紅回旗」とは何を指すのであろうか。

哈密王陵と王宮で4分の1を占めたという哈密回城の模型が展示されていたが、哈密回城の東に位置していた漢城については、展示、模型共々言及は見当たらなかった【写真10-15】。

⁽⁸⁾ 『哈密文物志』（新疆人民出版社、1993年）「第3章古代建築 第2節清真寺」の項。

◆哈密回城城壁

哈密王陵や博物館の建つ環状路に沿った、哈密地区第一中学の付近に「回城城壁」が残存している。平地から 2m ほどの台地の上に柵が巡らされ、その中に小さな入り口(門洞?)の穿たれた高さ 5m 余りで長さ 20m ほどの城壁が建っている【写真 10-16】。柵の前の史跡標示「回城城牆(城壁)」に以下が記されている。

哈密回城城壁

所在地 哈密市回城郷九龍樹村 回城城

壁は環城路路北と路南、居民院内の 7ヶ所に残るのみ。路北の城壁は南北長さ 26m、東西幅 5m、高さ 9m が、路南の城壁は南北長さ 30m、東西幅 0.2~1.5m が残っている。2003 年 2 月 9 日に新疆ウイグル自治区第 5 批自治区級文物保護單位に指定された。

回城は明清時代の哈密王の居住地。永楽年間哈密蒙古王の王宮で第 1 代哈密回王額貝都拉が清朝に帰順し康熙五十六年(1717)に回城を重建、『大清一統志』に「城居平川、周四里、東・北二門、人民数百戸、皆居土屋。城東有溪水、西南流、北面大山、三面平曠。為大臣住扎之所、今則回人居之」と記されている。同治年間の戦乱で破壊され、沙木胡索特(末代回王)の時代に修復、民衆に多くの負担をかけて王府を回復したが、哈密王没後一年で回城と王府は軍隊に破壊された。

この城壁から環状路を更に東へ進み、環状路が左折して北へ向かう角に(環状路はやがて建国路と名が変わる)、最前よりは高く長い城壁が残っていて、漆喰の剥がれた下に日干し煉瓦・磚を積んだ様子がうかがえる【写真 10-17】。修復保存中のようなのであるが、何の標示も見当たらず、先ほどの標示にあった路南の回城城壁かもしれないが不明のままである。

1.5. バリコン《2011 年 8 月 26~27 日》

ハミから 5203 号線を北に進み、天山山脈東端の比較的低い鞍部を目指して進む。右前方に見える雪山を水源にするのであろう大きな川を渡るが水はなく、荒涼たるゴビの中を、次第に高度を上げて進んでいく。標高 2,000m を越える峠付近で、雪解け水の流れる谷間を走り 2,200m 付近から北側斜面を降り始めると白石頭郷、路はここで東の伊吾県に向かう 5203 号線と分かれ、明日たどる古城を経てウルムチまで続いている 5303 号線を西にたどる。山脈の北側(バリコン側)は南側(ハミ側)と相違して、上部は針葉樹林が、下部は草原が広がっている【写真 10-18】。このような景観の中にカザフ(哈薩克)族の冬営地らしき建物も点在している。バリコン湖を遠望しながら巴里坤哈薩克自治県の街はずれに到着したのは 15 時 30 分を回っていた。

◆巴里坤城をめぐって

現地の史跡標示に「鎮西城」と記される巴里坤滿城と漢城は、天山北路の城趾の中で最も良く城壁を残した城といわれ、我々の旅行目的の一つでもあった。

「営建志」巴里坤駐防には「巴里坤城は乾隆三十八年(1773)に、西と南城壁の高さは 1.6 丈 5.5m、東と北城壁は 1.8 丈 9.9m で周囲 1,134 丈=6 里 3 分 3,750m 弱、城門 4 の城を築き、会寧城と称し、ここに西安と寧夏の滿洲兵 2 千名が移動してきて駐屯した。乾隆四十年に 1 千名が古城に移動した。」とある。これを基に「鎮西庁郷土志」⁽⁹⁾と『哈密文物志』で補うと、巴里坤城の始まりは康熙末年に遡り、以下のような変遷を経ている。

⁽⁹⁾ 中国辺疆史地史料叢刊新疆卷『新疆郷土志稿』(全国図書館文献館縮微複製中心、1988 年)所収の鎮迪道「鎮西庁郷土志」の項。以下同書の引用は「鎮西庁郷土志」と略称する。

バリコンが清朝の支配下に入ったのは、康熙五十四年（1715）にジュンガルのツェワン・ラプタンのハミ侵入に対応して、翌々年の五十六年に靖逆將軍富寧安がバリコンに駐屯したことに始まる。ついでジュンガル軍征討のため寧遠將軍岳鍾琪が雍正七年（1729）に駐屯し雍正九年に築城が完成した。当初は周囲 14～15 里、兵丁 3 万余を収容する綠營兵城を築く予定であったが、時間が無く小型の城となったので、それを補うため城の東と西それぞれ 5 里の所に、主城を補完する 2 城を築いた（現在残る東破城子と西破城子）。乾隆三十七年（1772）、西安駐防の滿洲兵 2 千をバリコンに駐屯させた時、富寧安の築いた城にいた綠旗兵を「東城」に移動させ、それまで綠旗兵の居した「西城」に滿洲兵を駐屯させた。しかし滿漢官兵、商人、民人が同居して狭いので、東門外半里に滿洲官兵の居する滿城を築いたという⁽¹⁰⁾。以上のような経過をたどり、バリコンの東側が滿城＝会寧城、西側すなわち旧来の巴里坤城が漢城となったようである。そして東西 2 城（滿城と漢城）の規模については、共に夯築の土城であり、滿城（会寧城）は東に宣沢門、西に導豊門、南に光被門、北に威暢門の 4 門を備えた高さ 1 丈 6 尺、周囲 6 里 3 分の城壁をめぐらし、漢城は東に承恩門、西に得勝門、南に沛沢門、北に拱極門の 4 門を備え、高さ 1 丈 9 尺 6.3m、周囲 8 里 2 分 4,870m の城壁で囲まれていた⁽¹¹⁾。

乾隆三十八年、バリコンに鎮西府を設置し東に位置する宜禾県（伊吾地方）と西の奇台县を統轄、乾隆四十一年にバリコンから領隊大臣をはじめとする馬・歩甲、養育兵など 1 千名余りが奇台に移駐、道光二十二年（1842）には大地震と大雨で多大な被害を受けた。同治三年（1864）の回民の乱でイリ城が陥落した時にもバリコン城は持ちこたえたが、清末綠營の改編にともなう裁兵と光緒十四年（1888）の駐屯兵の奇台・古城移動で城は寂れたという。このような経過からすると今残る城趾は清末民初のものであろう。

◆巴里坤滿城城壁

バリコンの街に入るとまもなく、街の南外れを走る 5303 号線（天山路）に街を東西に走る團結南路が交差する角に城壁が残っていて、史跡標示がある。なお、次頁図 10-2「バリコン漢滿城平面図」を参照されたい。

巴里坤県重点旅游区

自治区重点文物保護単位「清代鎮西滿城」

標示の建つ天山路と團結南路交差点は滿城城壁の南東角に相当する。巴里坤滿城城壁は漢城と接する西側城壁以外の、南・北・東側城壁三面がほぼ残っているようであるが、南東角に立ってみると、ここから北に走る東側城壁【写真 10-19】、西に天山路沿いに走る南側城壁は所々失われた部分があるものの、夯築で築かれた高さは 4～5m ほどあろう城壁が続いている【写真 10-20】。團結路沿いに西へ漢城へと向かったが、東南角から 700～800m

⁽¹⁰⁾ 『欽定八旗通志』卷 162、大臣伝 28、「舒赫徳」伝。

⁽¹¹⁾ 天山北麓に残る城趾を調査した堀氏は、堀直「天山北麓の故城跡」（『国立民族学博物館研究報告』20 号、1999 年）の「I 哈密地区 b 巴里坤哈薩克自治県」の項目に以下のように記している。

4 巴里坤県滿城（E.93°1'20"-2'22" N.43°35'40"-36'6"）A.S.1642m 県城東部 新都市のため西壁は消滅 S. 正方形 南・北・東郭良好に残る 一辺約 900m 高さ約 6m 清代 * 会寧城（乾隆三十七年＝1772 年）

5 巴里坤県漢城（E.93°0'4"-1'7" N.43°35'39"-36'6"）A.S.1665m 県城西部 新都市のため南・東壁は消滅 S. 正方形 西・北郭や西馬面など残存 新疆で最も良好 清代（雍正九年＝1731 年）しばしば改修 以下に記す古城などについても、「堀報告」として各城趾の現状、規模や位置などを引用した。

ほど西の付近で満城南側城壁は消滅する【写真 10-21】。ここから 100m ほど西に行った付近、現在の新市路の通りが満城の西端すなわち西城壁のあった場所ようである。

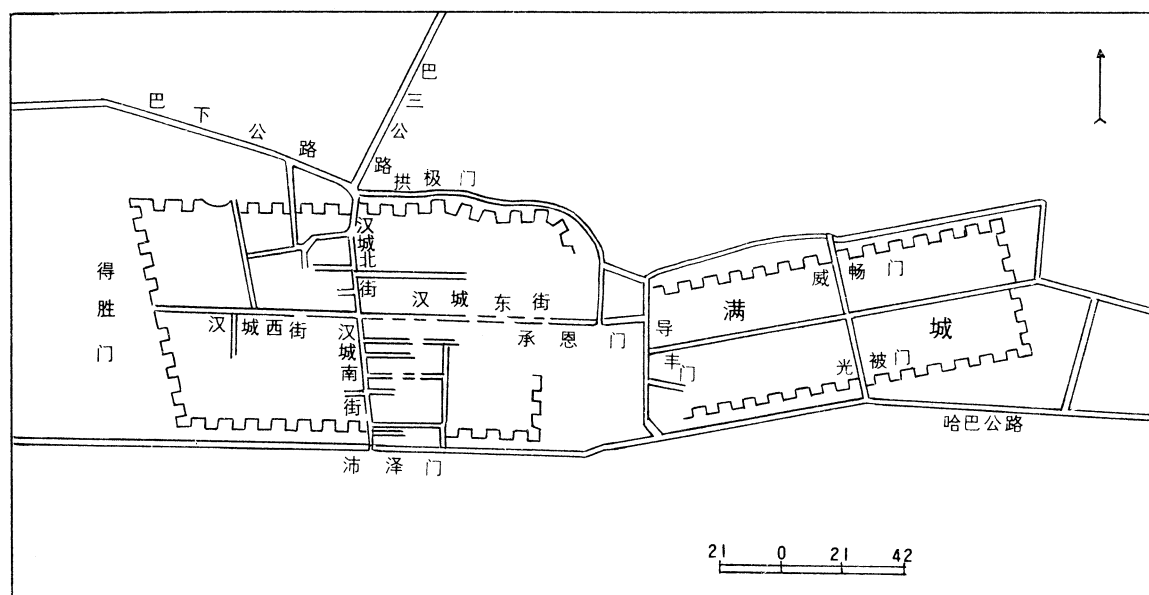


図 10-2 バリコン漢満城平面図（『哈密文物志』76 頁）

◆巴里坤漢城城壁

新市路から 200m ほど西の、古城路と天山路の交差点が漢城の南東角のようで【写真 10-22】、ここに以下の標示が建っている。

新疆維吾爾自治區重點文物保護單位
「漢城城牆」 1999 年 8 月自治區人民政府公布

ここから天山路沿いに漢城南城壁が西に延びていて、城壁の中ほどに、漢城を南北に貫く街路があり、漢城南街がある。今は何の面影もないが、漢城南街が天山路に交わる場所に漢城の南門「沛沢門」があったのであろう。この位置から南に聳える巴里坤山とその山麓に至る道が延びている【写真 10-23】。

◆得勝門

漢城西門に当たる得勝門には門を囲む雍城が残存している。得勝門に建てられた観光用の説明は次のようなことを記していた。

漢城の西に位置し、岳飛の 21 代孫陝甘總督・寧遠大將軍岳鍾琪が修建したもので、岳鍾琪が雍正九年（1731）に勝利して帰って来たことに因んで名称が定まった。当時軍隊は城南の山に駐屯していたので、そこを「岳公台」と称する。……二百年余り軍事的に重要な役割を果たしてきたが、新中国建国後は「天下太平」で、城は軍事的役割を終えた。

旧城門は城壁、門洞、門楼、城壁に登る階段と馬道が修復され、門洞の上には「得勝門」の扁額が掲げられている【写真 10-24】。修復された階段は既に崩れていて使用できず、土

がむき出しの馬道をたどって城門楼へ登った。磚を貼り付けて修復した城壁の上に新築された門楼には、城外すなわち西に向かって模造品であろう数門の紅衣砲が置かれていた。門洞の外側は未修復の雍城壁が残っていて【写真 10-25】、得勝門を中心に南北に西城壁が長く続いていた。

バリコンから奇台に向かう途中に立ち寄った「大墩烽燧」からは、東に得勝門を中心に南北に続く西城壁が遠望できた【写真 10-26】。

◆地蔵寺と仙姑寺⁽¹²⁾

新たに巴里坤漢城と満城を築いたためであろうが、巴里坤城内には、官署や兵房の他に本土の満城などと同様に、関帝廟、文廟、文昌宮、三皇廟、娘娘廟、山西会館等々多数の廟宇が建てられていたようである⁽¹³⁾。その名残であろう地蔵寺と仙姑寺に立ち寄った。

漢城南街の天山路をはさんだ山側に、東側に地蔵寺が、西側に仙姑寺が並んで建っていて、以下の標示がある。

新疆維吾爾自治区重点文物保護單位「地蔵寺」1999年8月自治区人民政府公布
新疆維吾爾自治区重点文物保護單位「仙姑寺」1999年8月自治区人民政府公布

地蔵王菩薩寺は嘉慶二年（1797）の修建、大雄宝殿には地蔵菩薩の両脇に十大閻魔王が並び、冥地府と十層地獄で地獄に墜ちた人々の姿を人形で復元している。

大殿の隣に10本余りの石碑が集められている。漢語とロシア語で記された「七六年四月廿？ 哈薩克自治県革命…唐代古城地自治…県代営文物古…于国家所有任…個人都不得了任…私自掘破壊應…其現状（以下露文）」や「大清 道光十年…皇清故陣亡？ 軍經制外委馬君…」などの文字が見え、バリコンの近現代史の史料になりそうなものも保存されていた【写真 10-27】。

仙姑寺は嘉慶五年（1800）に甘肅張掖出自の人々の手で修建したという。仙姑すなわち「口寄せをする巫女」の道観であろうが、「普渡萬方」の扁額が掲げられた堂内に祀られているのは娘娘観音であろうか。山門、日光楼と月光楼、鐘楼などが建ち並んでいたが、鐘楼の鐘も2006年鑄造と全てが新しい。一郭に関羽を祀った「武聖堂」、陝西終南山の人である戴公明＝趙玄壇を祀った「財神殿」が建ち、バリコンの客商が参詣した寺廟であることを想わせる。

◆漢城南街古民居街

漢城南門のあった場所から南街に入るとまもなく、右手にある小路の両側に数軒の古民居が建ち並んでいた。古民居といってもバリコンの歴史からすると清末民初のものであるか【写真 10-28】。そのうちの一軒には以下のような標示が掲げられていた。

巴里坤哈薩克自治県重点文物保護單位「王光英家古門楼」
2003年5月巴里坤哈薩克自治県人民政府公布

◆清代粮倉

古民居街を少し北に向かった場所にあり、「清代粮倉」と看板が掲げられた門をくぐると、左右に4棟ずつの8棟、正面には「厥神廟」が建っている。

⁽¹²⁾ 『哈密文物志』196頁に「1952年に鎮西県中学となり、現在はただ日光楼・月光楼・龍鳳壁の一部を残すのみとなった」とある。

⁽¹³⁾ 「鎮西片郷土志」廟宇の項。

倉庫の説明は剥げ落ち読み取れない部分が多いが、乾隆三十八年（1773）、すなわちバリコンに鎮西府が置かれ、満城を築城した後の漢城の南街に 8 倉を建築、1 棟は奥行 6.5 丈 21.5m、間口 3.4 丈 11.2m、高さ 1.8 丈 5m で、6 千石の貯蔵が可能である。夯築の壁は厚く、地面に板を敷き、屋根に通風口が設置されているので、湿気を防ぎ貯蔵穀物の変質を防ぐことが出来る。新中国になっても使用されていたと記されている。おそらく八旗に因んで 8 棟建てられたのであろうが、今は清代の徴税風景を示す人形、農具などが展示されていた【写真 10-29】。

糧倉の正面に建つ廩神廟は初めて目にしたが、糧倉に置かれた廟である以上、農神の一つ倉神の類であろう⁽¹⁴⁾。廟の中には、兜をかぶり軍刀をついて傲然と座る武人が祀られていて倉神に相応しくない。供台には穀物が供えられていた【写真 10-30】。

◆岳公台

バリコンの街の南側には、天山山脈の一角をなす 3,000～4,000m はあろう山並みが東西に連なり、その支脈に、2,325m の巴里坤山がある。頂上が平らな円錐形の山から北に向かう斜面が、ジュンガル遠征の時に岳鍾琪が兵丁の操練を行い、軍馬を飼養し屯田を行った場所とされ、バリコンを統治した岳鍾琪の徳に因んで岳公台と称されている【写真 10-31】。岳公台一帯には、はじめてバリコンに駐屯しその後の繁栄の基礎を築いた富寧安を讃えて康熙五十八年（1719）に建立した「富寧安碑」、バリコンで最も早く建てられた道観である「南山廟」跡、同治初年に始まるイギリスとロシアの新疆侵入に対抗して、光緒二年（1876）に清朝がバリコンに派兵し反乱軍を撃滅し祖国を守ったことを讃えて民国七年（1918）に建立された「保安碑」などがある。岳公台はバリコンの街を一望する景勝地であるためか【写真 10-32】、今はあちらこちらに五輪・七輪塔や円墳状の墓が造られていた。

◆大墩烽燧

西に向かう 5303 号線でバリコンの街を出発しまもなく、道路の北側に烽火台が建っていて、以下のような史跡標示と説明がある【写真 10-33】。

自治区級文物保護単位「大墩烽燧」巴里坤県文物管理所・旅遊局 2002 年 7 月 28 日

巴里坤には烽燧が 29 座あり、大墩烽燧は西路第 1 座。これは軍の情報伝達のための施設で、昼は煙を夜は燈火を用いた。

清代に「延安堡」と呼ばれたこの烽火台は、周囲 65.7m、高さ 8.7m ある夯築で築かれている。ここから東に得勝門と西城壁が、北の彼方にはバリコン草原を潤しバリコン城の水源地でもあるバリコン湖が見える。バリコン県内だけで 29 座あるという烽火台の一つを、奇台に向かう 5303 号線沿いでも目にした。

1.6. 奇台・古城《2011 年 8 月 27 日》

天山北麓に広がる標高 2,000m 前後の台地をひたすら西に向かう。高度が少しずつ下り始め、ボグド山脈に近くなった付近に木壘の街が位置する。清代にはここにも城堡が置かれていたが、今は何も残っていないとのことで小休止した後に奇台・古城まで 80km 余りの道を急ぐ。街の入り口で当地の案内者と合流し、奇台县に残る靖遠城や孚遠城の城壁などを探訪した。

(14) 「營建志」によれば、巴里坤駐防以外では英吉沙爾駐防と哈密綠營に廩神廟が建てられていた。

◆古城の孚遠城（漢城）と奇台の靖遠城（滿城）⁽¹⁵⁾

古城は「乾隆四十年（1775）に、高さ1丈6尺5.3m、周囲720丈＝4里380m城門4を有する孚遠城」（「營建志」古城駐防）がその始まりであろう。さらに「鎮西庁郷土志」には、乾隆三十八年にバリコン鎮西府下に奇台县を設置、四十一年に旧堡を拡充した奇台靖遠城が築かれ、四十年には靖遠城の東側に隣り合った古城に古城孚遠城が築かれた。靖遠城には乾隆四十一年にバリコン滿營から領隊大臣を筆頭に佐領・防禦・驍騎校各8員をはじめ前鋒・馬甲・歩甲などの兵丁1千名余りが移駐し、乾隆末年からバリコンに代わって八旗の駐屯する東路の要衝となった。同治初めの回民の乱で城堡は焼失、その後に修復が行われ、光緒十年（1884）に古城の西に築城、同十一年には孚遠城も修復された。城は方形で高さ1.8丈6m、周囲803丈2,650m、東門「升曦」、西門「挹清」、南門「景福」、北門「拱辰」の4門を備えていた。同二十一年に城垣の破損が激しくなったので、靖遠城（滿城）を孚遠城（漢城）の西と南の城壁に包含して一繋りの城堡にして重修、内部で区分されているが、孚遠（漢城）と靖遠（滿城）が繋がった周囲1,458丈4,810m、6門を備える城となった。城内には東門から流入し北門に流出する水磨河が流れているなどに見える。

◆靖遠城

靖遠城の南城門があったと推定される團結南路と健康西路の交差点を起点に、西に向かって城壁が延びているが、これは靖遠城南城壁であろう【写真10-34】。城壁の外側は丈の高いひまわり畑で城壁の内側沿いの小路を西へたどってみたが、城壁を利用して建ち並ぶ住居や再開発工事で道はふさがれてしまう。交差点に戻り、健康西路の北側に残る南城壁に沿って東に向かって進んでみる。健康西路に平行して残る南城壁の周辺も再開発中で、城壁の一部がコンクリートで造り直されている部分もある【写真10-35】。團結路から東に400mほど行った付近が靖遠城と孚遠城を接合した部分であろうが、靖遠城の旧東城壁と推定される城壁が、北に延びて続いていた⁽¹⁶⁾。

先ほど行く手を阻まれた南城壁の西側を目指して、村の中の道をたどり畑の中を大きく迂回して、畑の中に残されている孚遠城の南城壁と西城壁が交わる南西角を目指してたどり着いた【写真10-36】。西城壁は北に延び、雍城らしきものも見えるので【写真10-37】、城壁から離れて続いている畑の中の道を北側城壁との角を目指してたどった。しかし畑の中の道は途切れてしまい先に進めず、加えて風が吹き雨も降り始め、17時近くと遅くなったので北側城壁に出ることを断念、團結路へ戻り、雨の中を180km余りあるウルムチを目指した。

◆奇台县三清宮法聖寺

城堡以外の清代遺址として滿城から南東1kmほどの東關街にある三清宮法聖寺を案内してもらおう。下に「三清宮遺址」の石碑が建つ上の台地に、法聖寺の天王殿が建ち【写真10-38】、仏教と言ってもモンゴル人信者が多いのだろうか、チベット仏教の梵文を記したハタが結びつけられている。この寺は、元来は道觀三清宮があったこの場所に、滿城城内

⁽¹⁵⁾ 注11の「堀報告」に次のようにある。

1 老奇台鎮城跡（E89°53'35" N43°48'29"）老奇台鎮西北部 S.約18万㎡ 清代（綏靖城－乾隆四十年＝1775年）

10 老滿城遺跡（E.89°35'07" N.44°00'42"）県城西北部 S.約39.6万㎡ ほぼ正方形 清代

⁽¹⁶⁾ この東南角から更に健康路沿いに東に、靖遠城+孚遠城の南城壁が古城路南街まで続いていたと推定されるが、確認していない。

にあった仏・道混淆の三清宮が移ってきて、今は仏寺法聖寺となったとの経緯がある。

天王殿の近くに立つ法聖寺「聖地記銘」には、奇台大乗仏教法聖寺は、創建当時は奇台満城内を流れる水磨河北岸にあり、光緒二十七年（1901）、すなわち孚遠城と靖遠城が併合されて以後に李士生など3人の提唱で仏・道混淆の寺として始まった。清末民国時代に仏道は廃れ三清宮は純粋な道観となったが、解放後に廃れ文革で壊滅状態になった。2000年に李士生など創始者に縁のある信徒30余名が、満城内にあった仏寺を三清宮のあったこの場所に移築することを開始、2002年に天王殿を建てて、寺名を法聖寺と名付け、和尚一人を置いて今に至ったという由来が記されている。一方、天王殿の脇に掲げられた「三清宮法聖寺の歴史淵源」には、奇台三清宮は光緒二十七年の創建で、当時は山門が高く聳え、泉水に水をたたえ、民国三十三年（1944）に今も残る榆樹などを植栽、前殿と後殿に分かれた小さな天王殿が建てられた。1949年の三母殿竣工の時が、僧侶13人を擁した最盛期であった。解放後は1962年に政協の政治学校となり、当時は壁画なども保護されていたが、文革の時に全て破壊され、三清宮は製薬工場、文工隊や政協のオフィスなどになった。2000年に至って奇台县仏教堂の活動拠点として法聖寺が認可されたなどと記されている。

清朝の支配拠点として築かれた孚遠城と靖遠城に居所を構えた旗人や漢人の信仰の一端を示すのであろうが、現代の変動はそれを窺わせるものはないままに三清宮法聖寺を後にした。

2 ジュンガリア（アルタイ、フブクサル、タルバガタイ）《2007年8月》

2.1. アルタイ《2007年8月23日》

ウルムチからアルタイ市まで、眼下に荒涼としたジュンガル盆地を見ながら北へ、ほぼ40分でウルング（烏倫古）湖が見えるとアルタイ市である。アルタイ市博物館⁽¹⁷⁾が閉まっている間に樺林公園別名都統島に行く。この公園はモンゴルとの間に聳えるアルタイ山脈を源流にした大・小克蘭河が合流し、河に仕切られて6つの小島が形成されていることを売り物にしている。中国ではほとんど見かけない、河原の中を清流が流れている。克蘭河はやがてイルティッシュ河・オビ河となって北極海に至る、新疆では唯一の海に流れる河である【写真10-39】。

2.2. フブクサルを経て塔城へ《2007年8月25日》

アルタイ市を出発して南下、途中でイルティッシュ河を渡るが、まだ小さく穏やかな河流である【写真10-40】。やがてウルング湖が見えるが、湖面はかなり小さくなっているように感じられる。やがてフブクサル（和布克賽爾）蒙古族自治県の領域に入るが、県境にはオボが築かれていた。西に走り北側に雪を頂くフブクサルが見え始め、フブクサルの街へ到着した。ここには喇嘛廟や王爺廟などがあり、和布克賽爾蒙古族自治县展覽館には、上部は虎をかたどった、「乾隆肆拾年玖月／禮部造」と見える満蒙文合璧「盟長印」が展示されていた。その後、学芸員に案内されてジュンガル古城を訪れた。

◆ジュンガル古城《2007年8月25日》

先ほどフブクサルへ来た道を10kmほど戻って莫特格郷から南に700～800mほど行った草原の中に立派な城壁が残っていた【写真10-41】。城壁の手前に「準噶爾古城遺址簡介」（和

⁽¹⁷⁾ アルタイ市博物館は岩絵、石人、民族が中心で、清朝史跡の展示は見当たらなかった。

布克賽爾蒙古自治県人民政府、2006年9月11日)が建っていて、次のように記されている。

和布克賽爾蒙古族自治県城の東南5km、北緯46°46′、東経86°48′、公路318の莫特格郷の南数百mの草原の中にある。1辺が414mの正方形、北側城壁がよく残っている。その中ほどに幅20mほどの欠けた部分は城門の可能性がある。東側城壁には城門がなく、保存状態の良い南側城壁の中央に門洞10mの城門が残っている。現在、城内に北側の割れ目から始まる「人」字形の河床が残っている。城壁の高さは5.2m、厚さは下部が8m、上部が7m、夯築で固められ、外側を43cm×25cm、厚さ11cmの磚で覆われている。四隅には半円形の見張り所がある。

城内中程北寄りに建築遺址が残り、垣・土台などの建築遺址、模様のある筒瓦や軒瓦が残っている。城の西北角に西藏式仏塔があり、城内から経文、土造り仏塔、銅製の念珠などが発掘された。1970年以前は10mの高さがあったが、落雷で壊れ、現在は高さ3mの塔基盤が残っている。

城の周囲は水草が豊かで、歴史資料によれば1636～43年に建造されたジュンガル部の政治・経済・文化の中心であり、「ドルベン・オイラト・ソム(道爾本厄魯特蘇木)」＝四衛拉特古城である。この遺跡はフブクサル県の文物保護単位である。

ドルベン
四 オイラトの根拠地だったのであろうか、四周は立派な城壁が残り【写真10-42】、豊かな草が茂る城内には、寺院跡と宮殿跡であろう基壇も見え【写真10-43】、模様のある瓦などが散乱している【写真10-44】。記された築城年代が確かならば、1636年(崇徳元年＝崇禎九年)すなわち大清建国当時の、いまだ清朝の勢力が当地には及ばない時期の築城であり、当時の満洲族の葉赫部や烏拉部の城に比して、より大きく立派に見える。今まで数多くの城趾を見てきたが、遊牧をする人々の城趾は初めてであり、どのように使われたのか興味深い⁽¹⁸⁾。

ジュンガル古城を探訪した後に塔城への道を急いだ。ジュンガル草原の西に位置する額敏の街を過ぎると、道路は高速道路なみに良くなったが、それでも塔城に着いたのは20時を回っていた。

◆タルバガタイ綏靖城《2007年8月26日》

「乾隆二十九年(1764)に、ヤール(雅爾)⁽¹⁹⁾に肇豊城を建て、この地域を治めることとしたが、ヤールは雪が多い極寒の地であることから、乾隆三十二年にタルバガタイ山南麓の水草の豊かなこの地に、高さ1.7丈5.6m、周囲2.7里1,230m、東・西・南門の3門を有する城を築き、乾隆帝は綏靖城と名付けた」(「営建志」塔爾巴哈台駐防)と見える。

綏靖城は同治初めのムスリムの反乱で破壊され、光緒十五年(1889)から光緒十七年にかけて、駐防兵丁の労力をも費やし高さ7.3m、周長2.5kmの城牆を有する城堡が再建された。民国初年に塔爾巴哈台参贊大臣が廃止となると共に塔城道が設置され、塔城と呼称されて今に至っている。

タルバガタイはジュンガリア西部を統轄する地であると共に、光緒十年(1884)「中俄勘分西北界約記」によって、清朝はタルバガタイから西のカザフスタンにあった領土を喪失、咸豊元年(1851)「中俄伊犁塔爾巴哈臺通商章程」を締結してこの地がロシアとの商埠地と

(18) この点については、小沼孝博「遊牧国家の資源利用—ジュンガルにおける農業と交易—」(窪田順平監修、承志編『中央ユーラシア環境史2 国境の出現』臨川書店、2012年)が参考になる。

(19) 塔城から西に100kmほどにあるカザフ共和国のUrdzharが相当すると推定される。

なり、ロシア人居留地も設置されていた。近年では 1990 年に「塔城地区巴克図口岸」が設置され、カザフスタンとの国境が開かれている。このような歴史があることから塔城市の西 10km ほどにあるカザフスタン共和国との国境に位置する「巴克図口岸」に赴いてみた。国境は閑散とし中哈商品超市があるなど緊張感が感じられない。

塔城市光明路に残る綏靖城城址に出向いた。光明路が南北に走り、通りの東側に「塔城地区広播電視台」が位置し、電視台に向かい合って西側に残存していた。高さ 5m、厚さも 5m ほどの城壁が光明路に沿って南北に 50m 余り残っている【写真 10-45】。城壁の中程に保護標示が建っている。

塔城市重点文物保護単位 塔爾巴哈台綏靖城 塔城市人民政府 1986 年 5 月 1 日公布

この城壁は綏靖城の西城壁とのことなので⁽²⁰⁾、残っている城壁の北端にある角の部分は、城堡の西北角にあたると推定されるが確かではない【写真 10-46】。

3 タリム盆地周辺（カシュガル、ヤルカンド、ヤカ・エリクカ倫）

3.1. カシュガル《2011 年 8 月 30～31 日》

先月末に「テロ」事件がカシュガル市内であったためか、ウルムチ空港はターミナルビル・搭乗手続き・搭乗口などで厳重な検査が行われていたが、それでもカシュガル行き H U7747 便は満席であった。遥かに雪の崑崙山脈を見ながらカシュガル空港へ到着、ウルムチから外国人であることを告げて予約したホテルはなぜか宿泊拒否されてしまった。市内は来月 1 日から始まるラマダンに備える買い物で賑わうバザールなどは普通に見えるのだが、防弾服を着てライフルを抱えた武装警察がトラックでひっきりなしにパトロールを行い、要所要所に盾を構えて駐屯し、通行人に目を光らせている。こんな雰囲気の中で、カシュガル城やヤルカンドを探訪した。

◆カシュガル城

「乾隆二十七年（1762）に、高さ 1 丈 4 尺 4.6m、東西 105 丈 347m で南北 120 丈 396m の周囲 2 里 5 分 1,485m、4 城門のある城を築き、乾隆三十六年に徠寧城と名付けた。城内には参贊大臣をはじめとする官署や住居があった。」（『営建志』喀什噶爾駐防）。また堀氏はカシュガル城の変遷を以下のように述べている⁽²¹⁾。

清朝以前のカシュガル城は「周囲約 3 里 7 分余りで、東西南北に 4 つの門のある周囲約 1,850m の囲郭があった。清朝はこの旧城の西南に、駐屯兵のための現地人などは居住を認めない周囲 2 里 5 分の徠寧城（旧漢城）を築いた。1828 年（道光八年）に徠寧城は守備に不適として、徠寧城の東南 24 里（約 12km）に、周囲 8 里 2 分の恢武城（新城）を築いて統治機構を移した。1838 年にカシュガル旧城と徠寧城、その間にあった店舗や住宅を取り込んだ城壁を建築、1898 年（光緒二十四年）に西南部の城外にあった官舎保護のため月城を築いたので、新カシュガル城の囲郭は 12 里 7 分約 6km となった。

⁽²⁰⁾ 光緒十七年修築の城壁は一部を除き 1960 年代まで残っていたとの情報もある。

⁽²¹⁾ 堀直「カシュガル旧城居住区の点描—Kona Orda Kocha にいたるまで—」（『環境と文化』〈甲南大学総合文化研究所叢書 26〉、1992 年）。

以上を参考に、市内色満路を東に進み、色満路が朮木拉克協海爾路と交差する手前、道路に平行して残っている城壁を見つけた。表通りから 10m ほど奥の建物の裏手に、高さ 5m はある立派な城壁が続いている【写真 10-47】。色満路の先の、再開発のため既存の建物が取り壊されている工事現場からアーチ型の門洞のある城壁が見えた【写真 10-48】。工事現場に掲げられた再開発の後を示す看板には「徠寧城時尚購物街区」、「徠寧城旅游文化休閒広場」と記されていて、この城壁を徠寧城と称している。城壁一帯はあちこちが開発工事中、どこまで史跡としての保存が行われるのであろうか。なお、この城壁について現地で見ると、老城＝回城の城壁とのことであったが、帰国後に小沼氏から、これは「月城」の城壁であるとのこと教示を得た。

◆ブラック・ベシ（布拉克貝西）

汗王宮があった旧城の一部は観光地となっていたが、地下に掘り込んだ家、日干し煉瓦を積んだ家、モスクなどが迷路のような小路で繋がれている。この旧城の水資源の一つがブラック・ベシである。小沼氏から旧城住宅街の中と教えられたが、旧城東側に走る吐曼路から崖際まで道路沿いの建物がすべて取り壊され、泉で潤された草地の広がりが見える。ブラック・ベシは水道となって今でも使われていて【写真 10-49】、次のような説明が記されていた。

ブラック・ベシ（九龍泉）はウイグル語「泉の原頭」。九つに分かれた泉源から水が湧き出ていたが、今は枯れて五泉源のみとなった。ここは歴代王朝の貴族の娯楽場所、カラハン王宮の花園、ウイグル人の聖泉。そして治病や祈祷を行い、工芸品を造る場所である。

涼しそうな木陰にある泉は、人々が集まって一時を過ごす場所なのであろう。

◆耿恭祠跡

ブラック・ベシの近くの崖につけられた階段の途中にあり、現在では祠堂はなくなってしまい、古い写真と以下の説明があった。

耿恭祠は、耿恭が匈奴軍に囲まれ井戸を掘っても水が出ず、危機に陥った時に耿恭が井戸に祈りを捧げ奇跡的に水が出て、匈奴軍は耿恭に神助があると包囲を解いた「耿恭疏勒拜泉退匈奴」の故事に因んで、1880 年代に左宗棠配下の劉錦が建てたが、文革で破壊され、無くなってしまった。

徠寧城の情報を求めて喀什地区博物館に出向いてみたが、展示は乏しく参考になるものは全く無かった。

3.2. ヤルカンド《2011 年 8 月 31 日》

カシュガルからヤルカンドへ向かうが、市外に出ると車の検問があちこちで行われている。今回のテロに関わりがあるとみなされたパキスタン方面にも通じる道がある故の厳戒なのだろうか。時には軽機関銃を抱えた武警のいる検問所で、バスの乗客は一度降りて身分証明書をチェックされ、我々の車は旅行社の証明書で通過する。315 号線をたどって 1 時間ほどでイェンギサル（英吉沙爾）の街に到着、ここにも「乾隆二十七年（1762）に高さ 1 丈 7 尺 5.6m、周囲 2 里 5 分 1,485m で 2 城門」（「營建志」英吉沙爾駐防）の旗城が築かれていたが、大通りをたどるだけでは何も見当たらない。今は「英吉沙爾小刀」と称

されるウイグル・ナイフの名産地として名高いが、観光客が少ないのであろうか、どの店もひっそりとしていた。

イェンギサルを離れ南西に向かう 315 号線の周囲は荒漠たるゴビ、それでもパミール高原などからの流水を集めるダムも見える。南に黒雲、雨が降っているのかと思う間もなくゴビの中を水が流れ始め、タリム盆地周辺の自然を垣間見た【写真 10-50】。緑が見える一帯はこのような水やカレーズで潤ったオアシスなのであろう。こんな風景を見ながらヤルカンドの莎車賓館に到着した。ヤルカンド所在の清朝史跡は既に小沼氏による報告が行われているので⁽²²⁾、我々はこれを頼りにヤルカンド城、マンジュ・キョル、ヤカ・エリク^{カレン}を探訪した。

◆ヤルカンド城

「乾隆二十四年（1759）に、旧有の土築の回城、高さ 2 丈 3 尺 7.6m、周囲 2,142 丈＝11 里 9 分 7,069m で 5 城門がある城に、旗人緑營の官兵が居住した」（「營建志」葉爾羌駐防）とあるが、小沼氏は以下のような歴史を明らかにされている。

満城は 1759 年に回城内の西南一隅に建てられたという。この一帯はヤルカンド＝ハン国時代の王宮跡地で現在の人民公園の敷地である。1828 年（道光八年）のジャハンギールの反乱後、清朝は回城外の西南約 2km の地に新たに城塞を建設、衙門の人員・機能をすべてそちらに移し、旧満城跡地をハーキム・ベクの居所とした。新たな満城を「新城」、回城を「旧城」と呼ぶようになり、「新城」と「旧城」の名称は現在も通用している。莎車県の中心市街に現存する満城の城壁は、「新城」の北壁と西壁の一部である。人民解放軍の公署の敷地内で、全体としてどれほど残されているのか分からない。

これらを参考に莎車賓館前の大通り新城路を西に行き右折して文化路に入ると、ほどなく解放軍 6 師の正門が見える。人民路で右折し更に其乃巴格路で右折して新城街へ戻り、この一帯を一周した。其乃巴格路の中ほど、通りに面して北城壁が断ち切れ断面を見せ⁽²³⁾ていて【写真 10-51】、ここには以下の史跡標示が建っている。

重点文物保護単位「新城城牆」莎車県人民政府（199224）号文件交付

この城壁が道光八年以後に築かれたヤルカンドの満城＝新城の北城壁であろう⁽²³⁾。写真を撮っていると、解放軍が軍内部を撮っていないかと画像チェックに来る。このような場合、以前はフィルム没収であったが、デジタル時代の今は撮した画像の確認ですみ、思わぬ恩恵に与った。

◆マンジュ・キョル

小沼氏は、水は水路で都市・農村に引き込まれ、キョル（溜池）に蓄えられたが、ヤルカンドには 76 のキョルがあり、最大のキョルは清朝時代に造られたと想定されるマンジュ・キョル（満洲遼渠）であり、2002 年当時の人民公園前門からマンジュ・キョルに至る道筋を詳述している。莎車賓館でもらった「莎車導游図」を頼りに人民公園に出向いたが、地図記載の場所が相違していたようで、探し出せなかった。

⁽²²⁾ 小沼孝博「調査報告ヤルカンド＝オアシスに残る清朝支配期の史跡」（『日本中央アジア学会報』2 号、2006 年）。

⁽²³⁾ なお小沼氏が記す「貫道の穿たれている箇所」は見えていない。

◆ヤカ・エリク（亜喀艾日克）卡倫《2011年9月1日》

ヤカ・エリク卡倫について小沼氏は以下を明らかにされている。

卡倫は清代に辺疆地帯に設置された警備処で、カシュガリアでは各オアシスと清朝の勢力圏外を結ぶ路線上の要衝に設置され、各卡倫に侍衛1名、兵丁5～20名、一般ムスリム2～19名、通訳1名が駐留していた。ウイグル族の郷土史家アディル＝ムハメト＝トゥラン氏によれば、ヤカ＝エリク卡倫の位置は北緯 76°58'17"、東経 38°13'50"、海拔 1,365m、オタン＝コルワト渠の西側、タシクルガン県とアクト県に通じる小路上にあり、南、北卡倫の間隔は 260m、形状はピラミッド型、内部は空洞。北卡倫は東西 16.9m、南北 7.8m、高さ約 10m、東側の尖塔（物見・烽火台？）は崩壊。南卡倫は東西 17.8m、南北 16.1m、高さ約 9.61m、北側の尖塔は現存。共に粗い土レンガ（46×23×7cm）を積み重ね、外壁は漆喰が塗られている。

また「宮建志」葉爾羌駐防には「管理台卡侍衛公所七間」と見えるので、ヤカ・エリク卡倫を管理した侍衛は葉爾羌駐防に所属していたのであろう。「莎車導游図」には「亜喀艾熱克烽火台」と題して南卡倫の写真を掲載しているが、それ以外の情報は記載せず、莎車賓館で尋ねても不明であった。ヤカ・エリク卡倫のある亜喀艾日克村を目指しヤルカンドから南西に進む。市街地を出ると道が洪水で決壊し遠回りさせられたり、途中の村では丸太のゲートを造り警備していて入境登記をさせられたりと、2 時間ほどを要してヤカ・エリク郷に入り、地元では烽火台と称している卡倫に到着した。豊かな水の流れるコルワト渠の西側に南卡倫と北卡倫が建っている【写真 10-52】。二つの卡倫の間には、タシクルガン（塔什庫爾干）県とアクト（阿克図）県に通じるという小路が確認できる。両卡倫共に下部が広く上部が狭いピラミッド型、上部にあったと言う尖塔は崩れてしまったようで、南卡倫の上部はほぼ平坦、北卡倫には凹凸はあるものの尖塔には見えない【写真 10-53】。南卡倫の崩れかけた階段を登って見たが【写真 10-54】、内部は空洞で外側から入り込む通路は見当たらず、上と下をつなぐ階段もない【写真 10-55】。

南・北卡倫の間に、文字が見えないので不確かであるが史跡標示らしきものが倒れ半ば埋もれていた。また南卡倫の近くにはナンを焼く竈が残っていたが、何時のものであろうか。これまで卡倫のあった黒龍江省の村を訪れたことはあるが、卡倫の構造物は初めて見た。東北に残る烽火台は円筒状が多いようであるが、ピラミッド型の南・北卡倫の復元図、卡倫の付帯設備などを知りたいものである。

卡倫の上から、コルワト渠の東側は畑が連なる中に村が点在する、西側は起伏のあるゴビが果てしなく連なるという対照的な景観を見ながら一時を過ごした。黄色や赤色の花をつけ実の開きかけた綿畑や桃とリンゴの果樹園、それとは対照的に荒涼たる大地に広がる唐辛子干し、新疆ならではの景色を見ながら帰路についた。

◆森林公園

カシュガルに戻り、パミールの一端を見るため、カシュガルとパキスタンとの通商路につくられたカラコルム・ハイウェイ（中巴公路、314 号線）をたどり国境のタシクルガンに出向くことを考えたが、「テロ」事件と洪水で道路状況がきわめて悪いとのこと、運転手に勧められ奥依塔克森林公園に出向いた。森林公園はカシュガルから 314 号線をガイズ（盖孜）河沿いに南に 100km 余り走り、鎮で 314 号線から分かれ、西にオイタクアイズ（奥依塔克艾孜）河沿いの道を 15km ほど入った海拔 2,600～2,700m に位置する。主峰である 6,684m のアイラニシ（阿依拉尼什）峰、5,753m のオイタク峰から流れ出す氷河を見る展望

台がある。氷河から下の、水が行き渡る地帯は針葉樹や柏などの樹林と草原であるが、広い河原を好き勝手に流れる下流では、広い河原の両岸に聳える山々には河辺から山頂まで木一本見当たらないという【写真 10-56】、パミールの河岸風景を眺めながら探訪の旅を終えた。

おわりに

中国に残る満洲族清朝の史跡を訪ねる旅の一環として新疆ウイグル自治区を訪れたが、これまで訪ねた満洲族の本拠地東北を含めて、本土とは全く相違する歴史世界であり戸惑いを覚えた。筆者にとっては、清朝の完成形を象徴する『五体清文鑑』の満・蔵・蒙・回・漢の順序の意味するものが不明であることをはじめとして、満洲族清朝のモンゴル、チベット、東トルキスタン支配はわかりづらい。満洲・少数民族による漢・多数民族支配とは相違すると想定される、少数民族である満（マンジュ）と同様に、少数民族である蔵（チベット）・モンゴル（蒙古）、回（ウイグル）支配の全体像を展望することはなしえていない。また支配理念はともあれ、残された史跡から形式を見ることは出来ないかとの期待もかなえられていない。

ただ一つ言えそうなことは旗城の相違である。カシュガルやヤルカンドでは、成都や荊州で見られる、従来の漢城の中を区分して満城＝旗城を築いたと同様に、回城の中に漢城を築いている。ただし回城の中の漢城には満・蒙・漢旗人と緑営・漢人が同居していて、中国本土の旗城が一般の漢人から満・蒙・漢旗人を区分し囲い込むものであったことは相違する。これは被支配者のウイグル族に対して、旗人と緑営・漢人を含む人々が支配者として君臨したことを象徴するのであろうか。一方、ウイグル族が居住していない、回城のなかった地に築城したバリコン、おそらく古城でも、旗人の居住する満城と緑営の居住する漢城は截然と区分されていて、ここでは旗人と緑営・漢人の間には本土同様の区別と相違があったと推定される。このような相違を考える時、バリコンをハミなどと共に東路として一括するためには、ウルムチやトルファンを併せて、回城に対する旗城や漢城の築城を比較検討する必要がある。

今まで多くの旗城・満城を探訪してきたが、バリコンの満・漢城ほどよく保存されている城を知らない。史跡保存と観光地化による修復の手が入る以前に調査が行われることを熱望しておきたい。

末尾となったが、2011 年の探訪は北京市社会科学院満学研究所趙志強氏から多大の便宜を図っていただいた。探訪旅行を共にした劉小萌氏と張永江氏には、例年同様にさまざまな助力をしていただいた。また旅の前後と本章の作成には東北学院大学小沼孝博氏から資料や論文の提供、ウイグル語文献の解釈など多くの助言を得たことを記し、諸氏に謝意を表する次第である。

【補記】フィールドノートから

筆者の調査地の一つ黒龍江省で、清朝時代にイチェ・マンジュ（新満洲）と呼ばれた満洲族に類縁のオロチョン（鄂倫春）族の人々から、彼等の新疆にまつわる伝承を聞き取りしている。すなわち 1992 年 8 月、加藤直人氏と共に松花江支流の嫩江上流に赴いた時、甘河流域にある大楊樹鎮居住のオロチョン族は、彼らの人口がきわめて少ない理由の一つに「清朝はオロチョン人を多数徴兵して八旗親軍に編成、新疆やビルマ（緬甸）に派遣し多

数の人々が死傷した」ことを挙げていた。また古里河流域にある古里郷のオロチョン族は、「老人に聞いたことだが、1600 何年頃か太祖ヌルハチ時代に、オロチョン人が戦争のため新疆に連れて行かれ、大部分はそこで死んでしまった。その数は2~3万人で、新疆に連れて行かれたのは呼瑪地方の人が多かった。」との言い伝えをしてくれた。二つの話の下敷きには、乾隆時代、イリにシベ（錫伯）族が遷住した歴史があるのであろうが、嫩江流域のオロチョン族に、清朝時代、新疆へ出征したという伝承が残っていることは確かである。

（原載：『アジア流域文化研究』Ⅷ、2012 年）



写真 10-1 夯築のままの城壁



写真 10-2 ブロックで覆われた馬面部分



写真 10-3 校庭に延びた城壁



写真 10-4 蘇公塔（額敏塔）と礼拝堂



写真 10-5 ゴビの彼方に光る水面



写真 10-6 一直線に列ぶカレズの土盛り



写真 10-7 大きな城壁が長く続いて残っている



写真 10-8 門洞とも見える部分



写真 10-9 今も使われているモスク



写真 10-10 王宮なのか夏王府なのか



写真 10-11 再建された王宮（左はモスク）



写真 10-12 王陵内に残る王陵围墙



写真 10-13 修復された王廟



写真 10-14 修復中のエティガール・モスク



写真 10-15 右側角の高台が王景区の場所



写真 10-16 左側の穴は門洞にしては小さすぎる



写真 10-17 高く長大な城壁が残っていた



写真 10-18 天山北麓の景観



写真 10-19 頑丈そうな満城東城壁



写真 10-20 城壁の間に商店が建っていた



写真 10-21 築城時の面影を残す漢城壁の南東角、人物は劉氏



写真 10-22 高く長い漢城南城壁



写真 10-23 天山路沿いに延びる漢城南城壁



写真 10-24 門額も掲げられた得勝門



写真 10-25 門楼右側に雍城城壁、遠望は巴里坤山



写真 10-26 得勝門と漢城西城壁を遠望する



写真 10-27 地藏寺の小さな碑林



写真 10-28 漢城南街の古民居街



写真 10-29 左右に4棟ずつ並ぶ清代粮倉



写真 10-30 厥神廟の中の武人神像



写真 10-31 巴里坤山と墳墓が見える岳公台



写真 10-32 平原の一角を占めるバリコンの街



写真 10-33 大墩烽燧



写真 10-34 外側は畑、内側は住居の南城壁



写真 10-35 城壁の一部が修復されている南城壁



写真 10-36 角楼があったであろう靖遠城西南角



写真 10-37 雍城の見える西城壁



写真 10-38 三清宮跡に建つ法聖寺



写真 10-39 緑の岸を流れる克蘭河の清流



写真 10-40 イルティッシュ河上流



写真 10-41 磚で覆われた大きな城壁



写真 10-42 長く続く北城壁



写真 10-43 高さ数mある建築遺址



写真 10-44 様々な模様のある瓦



写真 10-45 光明路沿いに残る綏靖城城壁



写真 10-46 綏靖城の西北角か？



写真 10-47 住宅の裏手に残る城壁



写真 10-48 遠くに門洞の見える城壁が続く



写真 10-49 水道に代わった泉



写真 10-50 水が流れ始め川が出来る



写真 10-51 莎車新城城壁



写真 10-52 コルワト渠と北卡倫



写真 10-53 階段が見える南卡倫



写真 10-54 左に階段の見える南卡倫

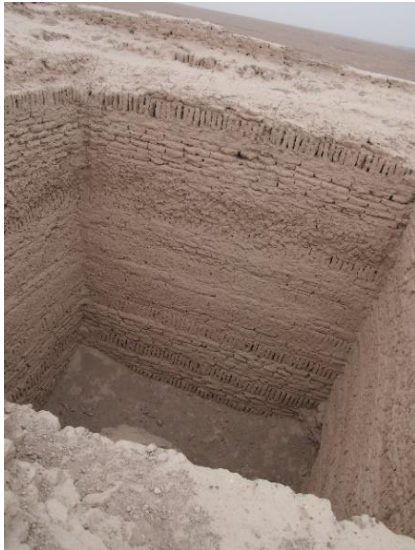


写真 10-55 卡倫内部の空洞



写真 10-56 河原の両岸は緑のない山が聳える

第 11 章

長江上流・大渡河流域の旅 —瀘定橋・打箭爐・雅州—

はじめに

2012 年 8 月 27 日から 9 月 4 日までの間、成都を起点に四川省のガンゼ・チベット甘孜藏族自治州と自治州の中心の康定（打箭爐）、康定への入り口であった雅安市（雅州）に残された史跡を、中国社会科学院の劉小萌、中国人民大学の張永江両氏と共に探訪した。四川省西部、長江の上流域に位置する康定一帯は、藏族や彝族の文化圏であり、東部の漢文化圏とは様相を全く異にする。はじめに長江上流域と康定の位置を記しておこう。

康定は長江の上流域を流れる金沙江の支流岷江、その支流である大渡河の流域に位置している。中国を代表する全長 6,300 km に及ぶ長江は、四川省成都の南に位置する宜賓を境に、下流＝東側は長江、上流＝西側は金沙江と呼称が変わるが、呼称のみならず河の様相も一変する。宜賓より下流の長江は、四川盆地を始めとする平原を流下し船運も行われるのに対して、上流の金沙江は、青海省南部の唐古拉山脈の水源から宜賓に至るまでの流程は 2,300 km、この間、メコン河（瀾滄江）と、サルウィン河（怒江）と並流する本流、雅礮江⁽¹⁾、大渡河⁽²⁾などの支流共々標高数千メートルに達する横断山脈の間の深い峡谷を北から南に流下し、本・支流共々渡河すら容易ではない激流を形成している。

金沙江の狭い谷間は、本流の右岸＝西側は藏族の、金沙江左岸＝東側と雅礮江、大渡河の流域は、藏族に加えて彝族、羌族などの居住地帯であり、この一帯は、古くからチベット東部を示すカム（喀木＝康）に由来するカムパ（康巴、康区）などと呼ばれている。

カムパは雍正三年（1725）以後、四川省に繰り入れられ、ここに住む藏族、彝族、羌族などは土司制度に編成され清朝の支配下に置かれた。中華民国・中華人民共和国の形成過程で、民国二十八年（1939）に西蔵省（チベット）に対する西康省（カムパ）が設置されたが、1955 年に西康省は廃止され四川省に繰り入れられ、現在はカムパの北側に四川省阿壩藏族羌族（アバ＝チベット族・チャン族）自治州が、南側に四川省甘孜藏族自治州が設置され、漢族地帯とは相違する行政区画を形成している。

筆者は 2005 年に「平定大金川碑」を求めて大渡河上流に位置する丹巴へ⁽³⁾、2008 年に沐氏土司史跡の探訪で麗江へ赴いた機会に、大渡河や金沙江の深い峡谷とその谷間に点在する聚落や藏族・彝族などの文化を垣間見る機会もあり、満洲族・蒙古族の黒龍江や漢族の黄河・長江流域とは全く相違する景観のこの地域を訪れたいと考えていた。しかし古くから成都とラサ（拉薩）を結ぶ交通路はあっても、それは深い谷間に孤立し散在する点を繋

(1) 雅礮江は流程 1,637 km、攀枝花市で金沙江に流れ込む。

(2) 大渡河は、青海省玉樹藏族自治州南部の山を水源に、甘孜藏族自治州では大雪山脈と邛崃山脈の間を流下し、樂山で岷江（岷江は宜賓で金沙江に合流する）に合流する 1,155 km の大河で、本流とされる岷江より流程は長く水量も多い。なお大渡河は丹巴付近から上流で大金川と名称が変わる。日本で一番流程の長い信濃川 367 km と比較すれば、金沙江本支流の長大さが理解できよう。

(3) 大金川流域の探訪は、第 4 章に記した。

いで一本の線にしたものであり、今はそれを基盤に整備した 2 本の幹線道路、すなわち康定を経由する川蔵南路 G318 号線と阿壩藏族羌族自治州を経由する北路 G317 号線が完成しているが、これらの道路も谷間から峠まで 2,000～3,000m の高度差を上下する峠道を幾つも越えなければならず、これらの地域に足を運ぶことは容易ではない⁽⁴⁾。幸い今回もまた、成都に居住する劉氏の「知識青年」仲間から助言と援助を得て大渡河流域の旅が出来た。

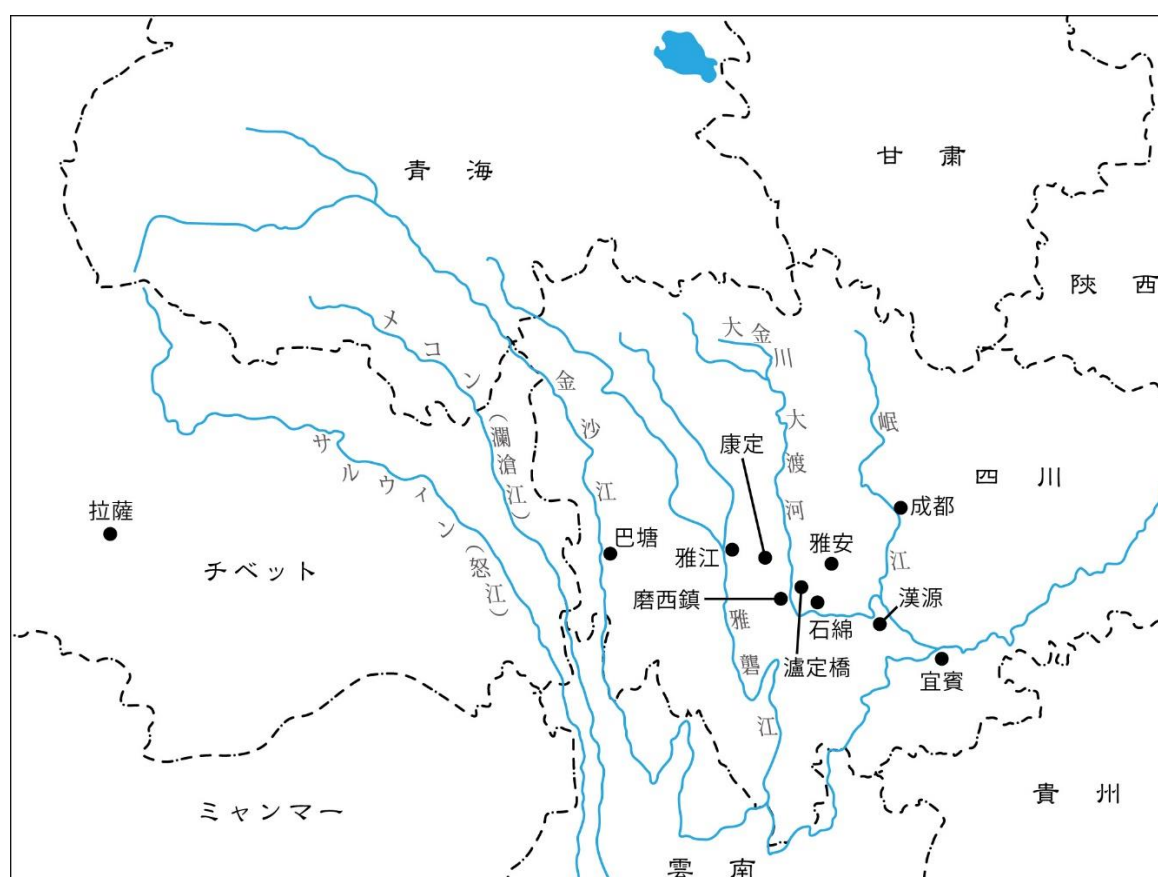


図 11-1 長江上流域

1 成都から磨西鎮へ《8月27日》

2012 年 8 月 26 日に成都へ到着、2005 年大金川探訪でもお世話になった呉栄輝さんと川蔵南路の状況を基にした探訪コースの相談をするが、今年は雨が多く当初予定していた金沙江流域や雅礮江流域の道路は崖崩れがあり危険と出鼻を挫かれる。成都では情報が乏しいので、ともあれ大渡河を北上して康定へ、康定で得た情報を基に、雅礮江や金沙江方面へ行くか、大渡河を北上して大金川流域へ至るかを決めることとした。

⁽⁴⁾ 訪れることが容易ではないカムパの様相を全体にわたって記す記録は少ない。筆者が最も参考にしたのは、1990 年から 2011 年まで 21 年間にわたり横断山脈の山域を踏査された中村保氏の一連の労作、『ヒマラヤの東』（山と溪谷社、1996 年）、『深い侵食の国』（山と溪谷社、2000 年）、『チベットのアルプス』（山と溪谷社、2005 年）、『最後の辺境』（東京新聞社、2012 年）である。本書には多くの地図と写真によるこの地域の様相と共に、探検史とキリスト教布教史が記されている。

8月27日8時半過ぎに出発、朝のラッシュの成都市内を南にほぼ1時間走って北京と雲南の昆明をつなぐG5号高速に入る。成都の南、平野を過ぎ山地に入ると沿道に茶の木が目立ち始め、ほどなく四川茶の名産地で茶馬古道の出発地とされる名山鎮、ここに立ち寄って見た。高速出口から始まる蒙山大道には、茶商店がずらりと並び、西に聳える蒙頂山から流れる名山河の河畔広場には、「蒙頂山茶文化宣言」（第8回国際茶文化研討会：2004年9月20日）、蒙頂山茶を讃える「蒙頂山茶賦」、1958年の毛沢東の指示「蒙山茶要発展；要和群衆見面；要和国際有人見面」碑が建ち並んでいて、ここが四川銘茶蒙頂山茶の発祥地・生産地であることを誇示していた⁽⁵⁾。

再びG5線に戻り雅安を過ぎると再び山地に入り、標高も1,500mを越えトンネルが多くなる。次第に高度を下げ漢源で高速を降りG108路に入る。漢源は大渡河の流域に位置していて、大渡河をせき止めたコンガ（貢嘎）湖が広がっていた。

◆漢源から磨西鎮へ

漢源からダム沿いのG108路をたどり、石綿が採れることに由来する石綿鎮へ、G108路は石綿鎮から南下して雲南へ向かうので、我々は大渡河左岸沿いのS211路をたどる。ここから上流の大渡河は今までもまして兩岸は狭まり、岩山が聳え立つ谷間にダム工事が続いていた【写真11-1】。

石綿から10km余り上流の右岸に位置する安順場は、大渡河には数少ない渡し場のひとつで、同治二年（1863）に太平天国の翼王石達開は渡河に失敗して清軍へ投降、民国二十四年（1935）に長征途上の労農紅軍は国民党軍に追われながらも渡河に成功した場所と伝えられているが、我々は左岸の道をたどったので史跡の確認をしないままである⁽⁶⁾。相変わらず狭い谷間の左岸に続く道を北上、幸福坪の手前でS211路を離れ、右岸に渡って海螺溝・磨西鎮への道をたどる。

磨西鎮は、後述する瀘定橋が康熙四十五年（1706）に架橋されるまでは四川や雲南と西藏をつなぐ交通の要衝であったが、瀘定橋の架橋以後は主要街道から外れてしまい、磨西鎮へと至る吊り橋も寂れてしまったようである。1932年にミニヤコンカ登山のため雅州から二郎峠越えて大渡河左岸に出たアメリカ隊は「有名な鉄鎖の橋で大渡河の西岸」に渡って西岸を北上して康定に至り⁽⁷⁾、1981年の北海道山岳連盟隊は「地元の人民政府が通行禁止にした幸福坪の吊り橋」を事故が起きた場合は登山隊が全責任を負うことを確約して橋を渡っている⁽⁸⁾。我々が渡った橋の少し下流に見えた、半ば壊れた吊り橋が旧来の橋であろうか【写真11-2】。

大渡河を渡り急な道をしばらく登ると、忽然とチベット風に飾られた賓館と土産店が建ち並ぶ磨西鎮の大通りに到着した。昔は交易で賑わった磨西鎮は、今は大雪山脈の主峰貢嘎山7,556mをめぐる「貢嘎山旅游区」の拠点、氷河観光のロープウェイも架けられ、山々

⁽⁵⁾ 2005年に成都から上里古鎮へ赴く途中に名山鎮の東に位置する蒙頂山麓の公園に立ち寄ったが、名山河広場の石碑は見えていない。

⁽⁶⁾ 史跡については、国家文物局編『中国文物地図集 四川分冊』上＝文物地図、中・下＝史跡解説（文物出版社、2009年）を参考にした。以下、本章に関連する記載を含む下冊を『地図集下』と略記して解説頁を記した。「翼王史跡」、「紅軍渡河史跡」は共に石綿県安順彝族郷『地図集下』1023頁にある。

⁽⁷⁾ バードソルなど著、山本健一郎訳『ミニヤコンカ初登頂』（ナカニシヤ出版、1998年）参照。本書は登山基地となった打箭爐の当時の様相を伝えている。

⁽⁸⁾ 阿部幹雄『生と死のミニヤ・コンガ』（山と溪谷社、2000年）17頁を参照。本書には、当時の磨西鎮の写真が掲載されている。

の見える乾期には観光客で賑わっているようであるが、今はひっそりとしていた。

28日、小雨の降る中を氷河観光バスやロープウェイを利用して2、3、4号営地を経由して貢噶山水河を一望する標高4,000m付近の展望台付近迄登って散策したが、ブーゲンビリアやバナナの木などの亜熱帯植物が繁る下部から、針葉樹林の中に生い茂るシャクナゲ林など上部まで続く豊かな植物相にカムパ地域の生態系の一端を垣間見た。

◆磨西鎮《8月28、29日》

観光客の往還する表通りの東側に、昔の街道＝茶馬古道とされる石畳の道が走り、一階がヤクの角細工などの小店、二階が住居の家並みが続く古街が残っていた。近年建てられた表通りと対照的にひっそりとした古街の一郭に磨西天主教堂が建っている【写真11-3】。

◆天主教堂⁽⁹⁾

カムパ地方のフランスカソリック教会の布教拠点の一つであった磨西天主教堂は、民国七年（1918）に建造を開始し二十二年に神父房が、二十六年に鐘楼と経堂などが完成したゴシック風の建物である。現在、この天主堂は布教拠点の遺跡としてより、磨西に至った長征中の労農紅軍・毛沢東が神父房に宿営し、毛沢東、周恩来、朱徳などが招集し陳雲、鄧小平などが参加した「磨西会議⁽¹⁰⁾」を開催した場所として知られている。

天主堂前には「毛沢東同志住地旧址」（2005年「省級文物保護単位」）標示が建てられ、神父房の二階の粗末な机とベッドの置かれた一室が毛沢東の宿営室、一階が磨西会議旧址で、ここには「紅軍が甘孜州を経由した路線図」、「波巴人民共和国の中央政府成立」、「紅軍第一：第二：第四方面軍の活動」などが掲示されていた【写真11-4】。

◆金花寺

古街と商店街の間に改築された金花寺が建っている。脇門に掲げられた、簡介（2004年5月14日記）には、金花寺の由来が次のように記されていた。

この付近の住民は貢嘎山の蛟龍の起こす洪水に苦しんでいたが、羌族の金花將軍⁽¹¹⁾が観音に授けられた五顆神針で蛟龍を退治、さらに二郎神⁽¹²⁾の力を借りて摩崗嶺を切り開いて水を大渡河に流して洪水を治めた。これに由来して金花將軍と観音を祀ったもので、小廟ではあるが千年の古寺で、同治四年（1865）に修理、2003年に地方政府の許可を得て修建して今に至っている。

簡介の記された壁の逆側には、磨西会議の様子を描いたものであろうか、天主堂を背景に毛沢東を中心とする絵が記されていたが、長征の重大事であった瀘定橋奪取の成功は金

⁽⁹⁾ 『地図集下』1102頁に「磨西天主教堂毛沢東同志住地旧址」がある。

⁽¹⁰⁾ 食糧補給の困難な康定に向かわず、瀘定橋を渡り大渡河左岸を北上するなどの長征の方針を決定したとされている。

⁽¹¹⁾ 金花將軍は貢嘎山の護法神である多吉洛珠の化身と伝えられているが、どのような伝承か不明である。なお、『地図集下』に磨西金花寺の記載はないが、大渡河左岸の支流瀘定県興隆鎮化林村に道光二十九年重建「金花廟大殿」（『地図集下』1102頁）が見え、この付近に金花將軍信仰があったと考えられる。

⁽¹²⁾ 二郎神は民間神で諸説あるが、その一つに秦代蜀の太守李冰の第2子で成都の北東に位置する灌県を流れる岷江の治水に功績があり、都江堰に祀られたとの説がある。

花寺の神護によるとの言い伝えを示したものであろうか。

本殿の金花神殿には、金花將軍を主神に、二郎神と観音が祀られていた。また金花寺は漢伝仏教と蔵伝仏教の融合に道教が加わったと言われているが、本殿の中には蔵伝仏教のタルチョ五色の祈祷旗が飾られると共に、金花寺外側に建つ壁面にはストゥーパ仏塔＝靈塔が描かれ、ここにもタルチョが飾られていた【写真 11-5】。

2 磨西鎮から瀘定鎮へ《8月29日》

磨西鎮を後にして大渡河本流沿いの S211 路に戻り、上流に位置する瀘定橋と瀘定の街へ赴いた。道は時に河岸から 700m ほど高巻きしながら続くが、S211 路はやがて右手の山腹につけられた雅安から康定へ至る国道 G318 路と合流する。G318 路は次第に高度を下げ大渡河に沿った道となるが、ほどなくして「康巴東大門」⁽¹³⁾と記された牌楼が現れた。この先で G318 路は大渡河を右岸に渡り康定へ、左岸には瀘定鎮へ至る道が続いている。我々は瀘定鎮をめざし、瀘定鎮の中心に架けられた瀘定橋へ赴いた。

◆瀘定橋

瀘定橋の左岸、橋の正面には「康熙御碑」⁽¹⁴⁾と記された石碑が建てられていた。この碑文によれば、西藏からの入貢、茶貿易のため打箭爐へ至る道は大渡河沿いにある沈村、烹壩、子牛で河を渡らなければならないが、これらの渡河地点は兩岸が聳え立ち急流で船では渡れず、太い縄を頼りに渡っていたが非常に危険であった。康熙三十九年（1700）、この道を経由して西藏に出兵したが、その後、四川巡撫能泰が「地形の良い安樂に鉄索の橋を架ける」奏言したことから、東西の長さ「三十一丈一尺」、幅「九尺」で九條の鉄鎖を用いて架橋したと由来が記されている⁽¹⁵⁾。

橋の東側のたもとは、「康熙四十五年（1706）告竣。13本の鉄鎖で兩岸をつなぐ：長さ101.67m、幅3m。1935年5月29日に行われた中国工農紅軍第一方面軍の「飛奪瀘定橋」で知られている。1961年3月4日、全国重点保護單位指定」などと記された簡介が掲げられていた。また橋を渡った西＝カムパ側には、手に剣付鉄砲、背中に騎兵の持つ刀、腰に手榴弾を提げ渡河に成功した22勇士の名前を記した簡介が掲げられ、広場には「瀘定橋」記念碑と「飛奪瀘定橋炮兵陣地遺址」の標示などが建てられている⁽¹⁶⁾。

今の橋は、手すりに左右2本ずつ、下に9本の鉄鎖が張られているようであるが、鉄鎖

⁽¹³⁾ 2001年9月竣工の牌楼には、瀘定が「康巴蔵区第一門戸」である事、瀘定橋の渡河など紅軍長征の事蹟を讀えて建てられた事などが記されていたが、史跡ではなさそうである。

⁽¹⁴⁾ 現在、御碑は橋の東側たもとに西（右岸）を向いて建てられているが、『雅州府志』（乾隆四年刊、光緒十三年補刊本）巻1「瀘定橋輿図」には、御碑は橋の東側たもとに南（下流）向きに描かれている。「康熙御碑」の原文「御製聖祖仁皇帝御製瀘定橋碑記」は、『四川通志』巻39、芸文志に掲載されている。『地図集下』1102頁には、「飛奪瀘定橋」を中心とした記述がある。

⁽¹⁵⁾ 『雅州府志』巻2、関隘「瀘定橋」に、「府治の南にある。河は深く急流で、兩岸は切り立っている。鉄鎖で橋を架けた。辺境との間にある險隘である。」と見える。

⁽¹⁶⁾ ユン・チアン『マオー誰も知らなかった毛沢東』（講談社、2005年）は、「この橋を主役にして、毛沢東は長征神話を作り上げた」と、毛沢東から聞いたエドガー・スノー『長征』の記述を「全くの虚構、…瀘定橋での戦闘は、いっさいおこなわれなかった。おそらく、この橋のたたずまい自体が伝説を生む背景となったのだろう」と記し、「飛奪瀘定橋」を否定している。

そのものとはともあれ、兩岸で鉄鎖を抑える「土台石」と龍あるいは蛟龍をあしらった「鉄杭」は旧来の物であろうか【写真 11-6】。

橋の裏手に逼った山腹には、観音・文殊・普賢・地藏王を祀る観音閣⁽¹⁷⁾、乾隆大藏經を所蔵し、釈迦・薬師如来・阿弥陀仏を祀る大仏殿、千手菩薩・薬師七仏を祀る大悲殿が狭い場所に建てられていた【写真 11-7】。大仏殿からは大渡河と瀘定橋、河の東岸に広がる瀘定県城がよく見えた【写真 11-8】。

3 瀘定から康定へ《8月29日～9月2日》

瀘定鎮から康巴東大門付近まで戻って大渡河右岸に渡り、河沿いの G318 路をたどり康定へ向かう。道は瓦斯溝で、大渡河に沿って北上して丹巴へ向かう S211 路と康定河（雅拉河）に沿って西へ、康定に至る G318 路に分岐する。我々は山間に延びる G318 路をたどり、夕刻、康定の街に到着した。

成都でははっきりしなかった周辺の道路状況を確認したが、やはり雅礮江周辺とその先は不通の箇所が多い、また大渡河沿いに丹巴へ至る道も悪路とのこと、天候を見ながら康定の街と康定から往復が可能な塔公草原や新都橋周辺で喇嘛寺などを訪れ、康定から雅安を経由して成都へ戻ることとした。

◆康定《8月29、31日》

康定の旧名は蔵語「ダー・ルツェ・ムドー」（ダー河とルツェ河の合流点）を漢語表記した「打箭爐 da-jian-lu」に由来して諸葛孔明がここで矢を製造したとの伝承もある⁽¹⁸⁾。蔵語名のとおりに、康定の街は北から流れてくる雅拉河と南から流れてくる折多河の合流点に位置し、河の兩岸に連なる筆架山など 4,000～5,000m の山並みに夾まれた谷間に、南北に延びている⁽¹⁹⁾。建物のほとんどが近年に建てかえられていて、折多河の兩岸の通りにはビルが建ち並んでいた【写真 11-9】。

雍正七年（1729）に打箭爐庁が設置されて以後は四川辺境の中心地として栄え、乾隆二十年（1755）に蔵族の石碉建築⁽²⁰⁾の手法を使用した周囲 6 里余＝1140 丈、高さ 7～8 尺の城壁を有する県城が築かれたが、乾隆四十一年に海子山からの大洪水と土砂崩れで、南門

(17) 簡介には、康熙四十一年に観音堂を創建とあり、瀘定橋の架橋と共に建てられたと推定されるが、康熙四十五年に関音閣と改名、文革で破壊されたが 1997 年に原状に復したと記されている。

(18) 康定県志編纂委員会編『康定県志』（四川辞書出版社、1995 年）に、打箭爐の名称は明代に始まり、当時は打「煎」爐と記されていたが、康熙十九年（1680）の刑部奏疏では打「箭」爐と記され今に至っていること、雍正十年（1732）王世睿の「諸葛武侯が征蕃の時にここで箭を造った」という伝承があることを記している。

(19) 『中国省別全誌 第 5 卷 四川省』（東亜同文会、1917 年；台湾南天書局、1989 年復刊）第 53 章打箭爐の項の「打箭爐」地図に、川の兩岸に沿って街が記されている。なお、『同書』には安覺寺をはじめとする寺廟などの記載はない。『康定県志』の写真「民国時期の県城」は、折多河の兩岸にあった当時の街を撮している。『雅州府志』巻 2、形勢「打箭爐」には「険しく高い嶺々が連なり、河に逼る絶壁は空高く聳え立ち、瀘河が蕃蔵の要道を隔てている」とある。

(20) 石碉は、石と木材を組み合わせ四角、五角…十二角、十三角など様々な形の、下が広く上が狭い、平均して高さ 20m（高いものは 70m）の角張った塔で、戦闘、防禦、通信などに使用されたと言われている。大金川流域の丹巴は「石碉の郷」と称され、多数の石碉が建っている。第 4 章を参照。

は倒壊し官衙や兵舎が流失する壊滅的な被害を受け、さらに乾隆五十一年には大地震に遭って倒壊、光緒三十四年（1908）に打箭爐庁が康定府に改められたなどの歴史がある。

打箭爐は康熙中葉から清末まで、辺茶交易「川蔵茶馬古道」（雅州→打箭爐→昌都→拉薩）の中心地となって繁栄した街であり、茶交易に伴う漢蔵間の文化接触、それと共にイスラム（教）文化、キリスト（教）文化なども、ここを中心にカムパー帯へ広がったと言われているが、短期間の逗留では漢族文化の中に藏族文化が色濃く残る街と見えるのみであった。藏族風の商品を置く店では、当地産はヤクの肉と骨製品、それに付近で産出する玉石のみで、藏族風の衣服や装飾品はネパールやインドから持ち込まれたものであるとのこと、広域交易の街であることが感じられた。このような風情の康定で幾つかの史跡を訪ねた。

◆甘孜州非物質文化遺産博物館

街の東側に聳える跑馬山 4,338m の中腹に広場があり、一帯にはストゥーパと観音像が建立されていた⁽²¹⁾。その山麓に、雲杉木（エゾマツ）の巨木を使用した木造三階建ての甘孜州非物質文化遺産博物館がある。同館には藏族の台所用品、家具、衣服などの生活用具などが展示されているが、その中に牛皮を貼った箱に並んで虎皮を貼った箱が並んでいたのには驚かされた。ヤク利用の鞍や農耕用具、経文や呪いの文言を刻した摩尼石、古びた伝承品から「15,600 元」の値札のついた商品まで多種多様のタンカ仏画、多くの仏像と教典、動物、植物や鉱物を原料とした薬品類や骨格、臓器を示した人体図などのチベット医学のコーナーなど、この地域の生活文化と無形文化財をめぐる多彩な展示が行われていた【写真 11-10】。

◆安覚寺

中心街を二分する折多河の西側（左岸）、藏族の服装をした数体の塑像が置かれた將軍橋の広場近くに、ゲルク派（黄教）の安覚寺がある。順治九年（1652）に五世ダライマ（達頼喇嘛）が打箭爐に立ち寄って、当地の喇嘛の求めに応じて寺の場所を定め開基したと伝えられている。初名は安雀寺と称したが、民国二十八年（1939）に再建され、安覚寺に改められた⁽²²⁾。清末の大火、文革時の破壊（商業施設への転用）を経て、近年に黄教の開祖ツォンカパ（宗喀巴）を祀った正殿をはじめ護法殿や僧房など全てが一新されていて、古寺の面影は仏伝を刻した石塔のみであった。今の法主は 50 代目であり 30 人の喇嘛がいるとのことであった【写真 11-11】。

◆清真寺

折多河右岸の裏通り、この一帯だけは古い建物が残る通りに建っていた。清真寺簡介（1990 年記）によれば、昔はこの付近が右岸の中心街であり、乾隆四十年（1775）の創建、道光十年（1830）に大火で消失、道光十三年に再建されたが、文革でほとんどが破壊され、今残るのは創建当時に植えられた柏樹、花が彫られた基礎石などだけである。文革後に再建された円いドームのある礼拝殿、二階建ての講經堂などアラブ式と漢式の入り混じった建物が狭い敷地に建っていた。門の前には清真寺門前の常である「清真牛羊專供店」が店を開いていたが、特に回民街のおもむきは感じられない通りである【写真 11-12、11-13】。

(21) 『地図集下』1100 頁に、跑馬山中腹にある平坦地では清代から仏教活動が行われ、現在でも浴仏節（灌仏会）、競馬、舞踏会など数万人が集まるとある。

(22) 『地図集下』1100 頁に、乾隆年間に始建、1932 年の大火で大部分が焼失、翌年から募金を集め再建とある。なお、『地図集下』には康定の清真寺、天主教堂は記載されていない。

◆天主教堂

清末にローマカソリックは康定教区を設置、フランスの伝教士が中心となり布教に努めたという。河沿いに建つゴシック風の教会を目にしたが、確認しないままである。

4 塔公高原と塔公寺《8月30日》

久し振りの晴天、康定の街から雅拉河沿いに北上、谷の上部は次第になだらかな高原状となる。高原の中の小さな峠を幾つか越えて高度を上げ、オボの積まれた標高 4,000m 余りの峠から下り始めて、新都橋から来る S215 路に合流すると、標高が高いことで有名な康定飛行場があった。S215 路をたどって塔公草原を北上、この道路は塔公草原を経由した後に S303 路となってやがて丹巴へと通じる道路である。S215 路に入ると、途中の江巴村などの聚落では、建築中の宿泊設備や新築された喇嘛寺院を見かけたが、これらは塔公草原を訪れる旅游客用であろうか。ヤクが放牧され、あちこちにタルチョのはためく丘が続く草原の中を走り、塔公寺廟のある塔公郷に到着した【写真 11-14】。

◆塔公寺

簡介によれば、塔公寺の正式名称は「円満極喜現見解脱如意寺」（一見解脱如意寺）、吐蕃国王ソントゥン・ガンポが修建した 108 の寺廟のうちの最後の一つで、それに由来するのか文成公主が拉薩に嫁する時にここを経由し、持っていた釈迦像を模刻して収めたという伝説もある。そして初期にカギュ派、後にサキャ派に属した寺廟である⁽²³⁾。

このような伝承を表現したものであろうか、釈迦や千手観音が祀られた大殿の後には 108 のストゥーパが建ち、背後の神山とされる三つの山には、三角形に立てられたタルチョが風にはためいていた【写真 11-15】。

大門の前の広場の周囲に、参詣人や旅游客のための土産物屋が建ち並ぶのはどこも同じ光景であるが、「塔公寺院超市（スーパーマーケット）」があり、店内で電動マニ車が売られていることにはいささか驚かされた。

雅拉神山の主峰 5,820m はとうとう顔を見せてくれなかったが、雄大な山並みを眺めながら往路をたどって康定の街へ戻った。

5 瓦沢橋と居里寺《9月1日》

G318 路で康定の街を南下、G318 路はやがて北に進路を変え折多河沿いに高度を上げていく。氣息奄々と走る大型トラックに混じって、拉薩を目指す多数のマウンテンバイクやツーリングオートバイが登っていた。標高 4,300m 近くある折多山峠に到着、霧で周辺の展望はほとんどない。折多峠を越えた西側を流れる河は、もう大渡河ではなく雅礮江の流域である。峠から少し降ったところに康定飛行場まで 7 km の分岐があるが、この路は、一昨日訪ねた塔公草原を経て丹巴に通じる路である。標高 3,000m 付近から藏族の聚落が散在し始め、聚落のそばには、ストゥーパ、ヤクの放牧、刈り取りの終わった青稞（ハダカムギ）の畑が見えた【写真 11-16】。

瓦沢中橋に到着、この一帯は藏族郷、道ばたに建つ 2 基のストゥーパを女性 3 人がマニ

⁽²³⁾ 『地図集下』1009 頁に、塔公郷塔公村にある明清時代の文物、省文物保護単位とある。

車を片手に、祈りを捧げながら回っていた【写真 11-17】。ここから西に走れば雅礮江流域の街の雅江まで 80 km、南下すれば丹巴とは相違する石彫が建っている朋布西の聚落がある。是非行ってみたかったが、共に道路が崩壊していて断念させられた。

◆居里寺

国道 318 路にある瓦沢橋から立啓河沿いに南へ数km入った居里村にある。ゲルク派の木雅 5 学者の 1 人馬色登巴が燃梯崗に建てた燃梯寺が始まりで、康熙元年（1662）に至り居里村に建てられて居里寺と称されることとなったというが、山門には「朶麦熱崗木雅居里寺顕密宗講修禅院」の扁額が掲げられていた【写真 11-18】。

居里寺には拝観券や簡介もなく喇嘛が付き添って説明をしてくれた。多くの宗教施設が完膚なきまで破壊された文革中は、国务院の重要文化財指定を受け、かつ「監獄」に転用されたことで破壊を免れた。現在、修行中のものも含め 100 人以上の喇嘛がいる⁽²⁴⁾、住持は既に 47 代を数え、居里活仏（西康法海活仏）をはじめとする 3 代の活仏も名を残している。建ち並ぶ僧坊、喇嘛の食事を調理する台所、本堂の脇にある遺体安置廟、本堂の側や後の山には高僧が没した時に建立する全てで 400 基余りあるというストゥーパなどを拝観して回ったが、山奥にあるとは思えない大寺院であった。

本堂の外面の壁に「地獄図」、内部の壁に「護法神」を描いた古い絵があり、絵は板囲いで保護されているが、特に開けて見せていただいた（写真撮影は禁止）。また本寺以外には拉薩のジョカン大昭寺と青海のタール塔爾寺にあるのみの、数百年前の古抄本「大蔵経」を所蔵していると誇らしげであった。折から読経の時間となり、喇嘛の吹く法螺貝の音を聞いて、たくさんの喇嘛が本堂に集まってきていた【写真 11-19、11-20】。

居里寺の特徴の一つは、現在も鳥葬＝天葬を行っていることであり、昨日もそれが行われたとのこと、鳥葬場は居里寺の上手、三方を山で囲まれた谷の奥にあった。ここで行われる鳥葬は、全てを居里寺の喇嘛が取り仕切り、一端に石柱を立てた 8 m² の石板に遺骸を置き、読経の斉唱と音楽が鳴り響く中に遺骸が解体され、その後、鷲に啄まれるという⁽²⁵⁾【写真 11-21】。

居里寺を訪ねた後に、この付近の中心地である新都橋まで出向いてみたが、特に探訪すべき史跡も見当たらず、康定へ戻るべく雲の切れた折多山を見ながら峠に向かうと、藏族だろうか、ヤク放牧のテントがたち、こどもが遊んでいた【写真 11-22】。

6 康定から雅安へ《9月2日～4日》

9月2日、康定と周辺の探訪を終了し雅安へ向かう。往路と同じ G318 路を東へ引き返す。途中、康定河右岸の山際などに崩壊しかけた旧道が見えるが、これが茶馬古道なのであろうか。道は高巻きで河を離れるので、康定川と大渡河の合流点は確認しないままに通過、大渡河左岸に渡って「康巴東大門」を経ると、大渡河の左岸の山腹を何度も折り返す山道、往路の S211 路と別れ G318 路をたどるが、高みに登ると大渡河沿いに走る S211 路や山腹につけられた道が展望できた【写真 11-23】。

道は往時の難所であった標高 4,000m 余りの二郎山峠方面に向かうが、今は標高 2,200m

(24) 『康定県志』には、民国二十八年（1939）には 210 人の喇嘛がいたとある。なお、『地図集』には居里寺の記載はない。

(25) 『康定県志』による。

付近に造られた二郎山トンネルを経由するので、あっという間に越えてしまう【写真 11-24】。

トンネルを越えた雅安側は、青衣江の上流にあたる支流に沿った曲がりくねった道路で、落石や土砂崩れがあったとかで片側通行となり長時間待たされた。待たされることが多いのであろう、軽トラックに薪を燃やす窯を積んだ焼き芋屋さんが商売をしていた。天全県を過ぎると平野が多くなるが、暮れ始め周囲も見えぬままに雅安市へと急ぎ、翌日から雅安市内と周辺の史跡を探訪した。

◆上里古鎮《9月3日》

パンダの飼育で知られる碧峰山公園で熱帯雨林の様相を見た後に、雨城区に属する上里古鎮を訪れた。同古鎮には 2005 年 3 月に訪れている⁽²⁶⁾ので、目についたその時との相違を記しておこう。

乾隆十四年（1749）に築かれたという「高橋」を渡って古鎮街に入ったが、橋の下・河沿いの路には「紅軍石刻標語」（雅安市文物保護単位）の標識が建ち、切石を積んだ堤には「打倒賣國賊蔣介石」などの文字が刻されている。ただ刻字や刻字された切石が新しく見え、近年に修復した史跡と思われる。古鎮の中心となる「韓家大院」の正堂は以前と変わらぬ佇まいを見せていたが、「衛守府」扁額を掲げた「大院大門」は大きく造り替えられている【写真 11-25A、11-25B】。鎮内の通りに建つ家並みは古鎮風の商店に改築され、以前はなかった「戲台」などの建物が新しく公開されていた⁽²⁷⁾【写真 11-26A、11-26B】。

上里鎮の代表的な史跡「二仙橋」は変わっていなかったが、橋のたもとに建つ二人の神仙を祀った宝塔は積み直されたようである。あちこちに掲示された古鎮の簡介は、漢語、英語、日本語と韓国語で併記されていて、史跡というよりは観光地としての色彩が濃くなっていた。

◆雅安市《9月4日》

明代に雅州、清代に雅州府が置かれた雅安市は、打箭爐を中心とするカム地方の、チベットラサラ薩へ向かう交易路の出発点であり、一時は西康省の省都でもあった。現在の雅安市街は青衣江を挟んで南北兩岸に広がっているが、古の雅州府城は青衣江の南岸に位置していて、現在の青衣江南側の大通り勝利路に並行する「県前街」が、昔の名残をとどめた道路である⁽²⁸⁾。この道路に沿って残る史跡の探訪を試みた。

◆基督教堂

勝利路の中心をなす中大街と、それに平行している県前街を繋ぐ大南街を南に向かった右側に位置している⁽²⁹⁾。礼拝堂の前に建つ「雅安基督教礼拝堂碑記」には、以下が記されている。場所は雅安市雨城区大南街六号。民国五年（1916）にアメリカの牧師候維康、中国牧師劉強開などが雅安浸礼会と礼拝堂を建てた。礼拝堂はイタリア式とアメリカ式が融合した建築で、ここを中心に分堂が 16 ヶ所、中学、神学校、幼稚園、孤児園、医院、青年会がそれぞれ 1 ヶ所、小学校が 2 ヶ所設置された。その後は壊れてしまったが、2001 年に

⁽²⁶⁾ 本書第 4 章を参照。

⁽²⁷⁾ 『地図集下』994-996 頁に、高橋、二仙橋、韓家大院などと共に紅軍標語が記されている。

⁽²⁸⁾ 『中国省別全誌 第 5 卷 四川省』第 47 章、雅州府城の項の「雅州府城」地図に、勝利路と県前街に相当すると推定される道路と天主堂は記されているが、本章で取り上げたそれ以外の寺廟などは記載されていない。

⁽²⁹⁾ 『地図集下』997 頁に「大南街浸礼会」1916 年とある。

再建を開始し2003年6月16日に800人が参加できる礼拝堂などを落成した。礼拝堂前の掲示板には、昔の教堂や落成式の写真などをまじえて雅安基督教の歴史を説明していた【写真11-27】。

◆ 樞星門

基督教礼拝堂の建つ大南街を直進すると県前街と交わる。県前街を北へ向かった、通りの右側で、3間の門を発掘中であつた。現場に入ってみると、1.5mほど埋まった門の中央に「樞星門」と刻されているのが読み取れるので、この門は孔子廟の廟門である。まだ発掘中のためであろうが、門の説明は全く無い。近くの掲示板に「2008年5月12日の四川大地震で被害を受けた中医医院がここに建築される」と見えるので、中医医院建設に伴い青衣江の氾濫で埋没していた門を発掘していると思われる⁽³⁰⁾が、この門は道光年間に建てられた県衙門文廟の廟門と推定しておきたい⁽³¹⁾【写真11-28】。

◆ 清真寺

樞星門のある場所から更に北へ向かうと、県前街と西大街を繋ぐ解放路と交叉するが、解放路の角に小さなドームのある二階建ての清真寺があつた。

アホン（阿訇）の説明によれば、この清真寺は民国元年（1912）創建で、当時は回民が600人ぐらいいた。雅安洋火廠（マッチ工場）の経理支配人趙友山が30畝の土地を寄進、これを基金に清真寺を運営してきた。解放後は政府の保護を受け現在1,000人ぐらいの信者がいるとのことであつた。精進齋をするラマダンが終わったのであろうか、壁に「歓迎開齋節」と記した幕が掲げられていた。付近に青い建物の清真用の肉屋さんがあるのは、何処も変わらぬ光景である【写真11-29】。

◆ 観音閣

清真寺のある解放路から県前街を北に向かうと武安街がある。県前街と武安街が交差するあたりには、瓦葺きの古い建物が多数残り、市場があつた。武安街の突き当たりに観音閣が建っていて、入り口には、1985年7月1日に雅安市文物保護単位としたことを示す「保護標示」が建てられていた⁽³²⁾。

敷地の中に入ると、石の回廊をめぐるせた大殿が建っている。大殿はすっかり荒れ果て、建物の柱を突っかい棒で支えやっとなっている状態、中には到底入れない。参詣人のためであろうが、大殿の外に観音を安置し、「有求必応」の幕と香炉などを配置した礼拝所がしつらえられていた。

劉氏が管理人に話を聞き、小冊子『雅安考古』⁽³³⁾を借用する。冊子には現状より破壊さ

(30) 『雅安県志』（民国十二年修）巻4、災祥志第十には、道光二十五年（1845）、民国五年（1916）に大水があり、北門が水没、観音閣が崩壊したことが記されている。

(31) 『雅州府志』巻2、祠祀志第四「県学文廟」の項に「署前に南向して建ち、道光二十五年の建築、光緒十九年（1893）に知県祝士芬が修建。大成殿や両廡、戟門、泮池、樞星門を備えた聖域である。」と記されている。

(32) 『地図集下』994頁に、県前街93号、清代・市文物保護単位、明代の始建、康熙年間重建、大殿＝観音殿が現存とある。

(33) 趙彤『雅安考古』（雅安市文物管理所、2000年）。本章では『雅安考古』に掲載されている「観音閣随想」をはじめとする記事を総合して記した。『雅州府志』巻3、寺観、雅州府「観音寺」の項に、月心山の麓にあり月心閣とも称する。康熙四十四年（1705）に僧了悞が重修、知州劉啓和が重修碑を

れていない大殿の写真が載せられ、簡単な歴史が記されている。これによれば観音閣は蒼坪山の麓に位置していて、旧名は観音寺（廟）であり蒼坪山の別名月心山に因んで月心閣とも称された。洪武十七年（1384）に創建、天順元年（1457）に住持妙能が補修を開始し正徳九年（1514）に落成、当時は観音塑像や十二円覚、十八羅漢などが安置され、大殿の左右に鐘楼と鼓楼が、青衣江に面し左に西行台、右に関帝廟が建てられた。康熙年間には僧了悟が修建、創建以来拡張を続け総面積 5 千余㎡に及ぶ川蔵宗教の重点寺廟であった。1954 年 9 月には西康省重点文物保護單位に指定された。

しかし 1974 年に雅安地区商業局儲運公司車隊の占用が始まってから、第一、第二殿と付属施設の取り壊しと改築が行われ、車隊の倉庫や宿舎に使用された大殿が残った。1981 年に全ての撤去が企てられ雅安人民政府が保護に乗り出したが、車隊や商業局が保護に反対、その後も 1985、87 年に市と省政府が保護を開始したが、保存修理は充分でないと見える。

雅安で唯一残る清代の建築である観音閣が、経済成長と史跡保護の間で揺れている現状を示している【写真 11-30、11-31】。

観音閣から武安街を北に向か西大街を越えて文定街へ入ると、その北端の青衣江を望む高台に雅安博物館が建っている。文定街が大衆路に変わった付近に天主教堂が建っている。

◆天主教堂

回廊をめぐるせた礼拝堂の前には 2002 年 6 月 29 日「雅安天主教堂碑記」が建っていて、これによれば天主教堂は雅安市大衆路 35 号に位置し、光緒二十六年（1900）にパリの遠東伝教会に属する何理柏神父の創建で 2001 年に修建された⁽³⁴⁾。教堂を中心とする建物はゴシック式と漢式が融合したもので、礼拝堂は 400 人のミサと祈祷ができる広さがあること、初代の何理柏神父を筆頭に歴代の神父と主教の名前が刻されていた【写真 11-32】。

◆雅安博物館

この地域に残る墳墓、墳墓を飾る石刻、石人、石獸と石碑と拓本などと共に、漢源地域に広がる大渡河文化が成都や三星堆文化とは相違すること、それを示す石器、青銅器、陶器などを展示している。また雅州が打箭爐を経由して拉薩に至る辺茶交易の出発点であることも展示の柱であり、「雅安南路辺茶主要大事記」年表には、康熙三十五年（1696）から「打箭爐で蕃人と茶の貿易が開始され、雅州から打箭爐に多量の茶葉が人夫に背負われて運ばれたこと、雍正八年（1730）に雅州の辺茶交易額は 104,424 引＝10,442,400 斤（1 斤約 500g）つまり 5,221,200 kg に達したこと、やがて茶馬交易は衰退して「茶土（精製前のアヘン）」交易に代わり、光緒十六年（1890）の「印蔵条約」以後はイギリスがインド茶を西藏に売りさばいたので雅州茶の貿易量は 40%減少したことなどが記されていた。

「茶馬古道遺跡地図」の展示コーナーでは、唐宋～民国時期の「川蔵茶馬古道」の地図や街道と聚落の写真、交易に使用された茶葉を包装する「包」、包を担う天秤棒、多量の包を担ぐ人夫の塑像など、古道出発点ならではの展示が行われていた⁽³⁵⁾。

建てたことが記されている。

⁽³⁴⁾ 『地図集下』997 頁に、大衆路 124 号、光緒二十九年（1903）とある。

⁽³⁵⁾ なお、バードソル（注 7 参照）は、当時見た茶葉の運搬を具体的に記しているので紹介しておく。

乾かした茶葉は、長さ 30 cm 重さ 2.7 kg の煉瓦状のかたまりに押し固められ、これを縦に四つ並べ、葦か竹で編んだ容れ物「バオ包」と呼ばれる包みに入れ、一包み 18 斤 10.8 kg、人夫の賃金は担った重量に応じて支払われる。普通は 7～11 個の包を運ぶが、中には 15 個 162kg を背負う人夫もいる。鉄の石突きのある T 字形の杖を持ち、その上に荷物を載せて休み、雅州から打箭爐まで 24 日

以上の雅安博物館ならではの展示とは別に、特に解説なしに、清朝が順治三年（1646）に雅州支配を開始した事を示す、満文と漢文が併記された「雅州印」に目を引かれた⁽³⁶⁾。

◆金鳳寺

雅安市内の史跡を探訪した後に、青衣江を渡り、青衣江の北側標高 700m ほどの山並みの一郭にある金鳳寺へ赴いた。寺の入り口には、金鳳寺が雅安市文物保護単位であることを示す 2003 年 12 月 26 日「保護標示」が建っている⁽³⁷⁾。

狛犬一対が置かれた入り口を入ると正殿・大雄殿で、その右に観音殿が位置し、観音殿の前には石に刻まれた「金鳳寺續記」（1983 年里人高秉鑫撰文、1992 年住持慧貞が建立）が置かれていた。「續記」によれば、金鳳寺は永樂九年（1411）に僧正宗壽が大雄宝殿を建立して始まり、初名は石龍寺、続いて蓮花寺と称し後に金鳳寺となったこと、清末に衰退してしまったことなどが見え、前述の観音閣と同様に明代初めから雅州の歴史と共に始まった寺であることが見てとれた【写真 11-33、11-34】。

大雄殿の左側に羅漢堂があり、そこには「金鳳寺羅漢堂建造碑記」（1991 年）が置かれていて、羅漢堂が唐代に始まり宋代に重建され、明清時代へと受け継がれた後に廃れ、近年の旅游開放で募金して修建した事が記されていた。羅漢堂の奥には山の斜面を利用した回廊式の池も備えた庭園があり、陶器などの展示も行われていたが史跡として特記するものは見当たらなかった。

寺の入り口近くの展望台からは、青衣江と蒼坪山の麓に広がる雅安の街並みがよく見え、10 日余りの探訪の締めくくりとなった。

おわりに

わずか 9 日間の探訪では、面積が日本の三分の一ほどもある広いカムパの一隅を瞥見したに過ぎない。ただ打箭爐＝康定と雅州＝雅安の対比から、大渡河を夾む左岸と右岸では全く相違する生態環境であることが見てとれて、右岸カムパが左岸四川の漢文化・宗教とは相違する世界を形成してきたことを感じさせられた。あるいは清代の土司制度は隔絶する文化を認識した結果の統治制度なのかもしれない。

カムパは、「打箭爐」が「康定」に改められたことに象徴される、近代以後の漢文化上位の中華意識、その延長線上にある中華民族意識では括り得ない世界と思われる。この事を確認するためには、カムパの中での相違、すなわち溪谷流域地帯とその上流＝高原地帯との相違、甘孜藏族自治州と阿壩藏族自治州との対比などを行う必要があり、探訪したい課題と地域が多数あることを考えさせられた旅であった。

（原載：『アジア流域文化研究』IX、2013 年）

かかる。多くの人夫はアヘンで苦労を紛らわせていて、この街道でもアヘン栽培がおこなわれ吸引させる店があり、人夫は日に 3 度アヘンを吸引し、賃金の五分の一をアヘンに使ってしまう。雅州から運ばれてきた包は、打箭爐でチベットの奥地への長く厳しい旅に耐えるように、毛を内側にしたヤクの生皮に縫い込まれ、1 枚の皮に六つの塊（重さ 33kg）に包装し直される。1 頭のヤクが包み二つずつを運ぶ。

⁽³⁶⁾ 「満漢文雅州印」については、本書第 12 章を参照。

⁽³⁷⁾ 『地図集下』994 頁に、姚橋鎮金鳳村、明・清の市文物保護単位とある。



写真 11-1 ダム工事の道が見える大渡河



写真 11-2 大渡河の古い吊り橋



写真 11-3 磨西古街



写真 11-4 磨西天主教堂



写真 11-5 タルチヨの飾られた金花神殿

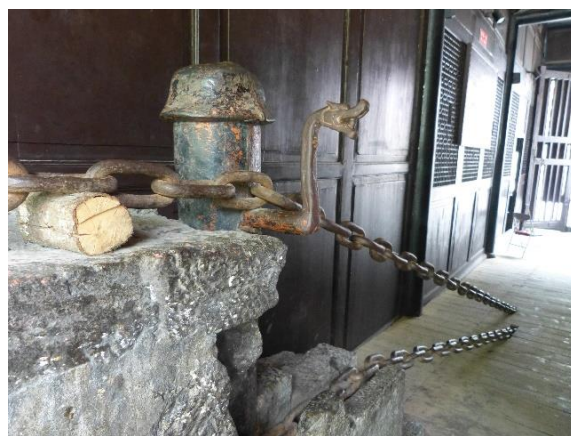


写真 11-6 鉄鎖を支える龍の鉄杭と土台石

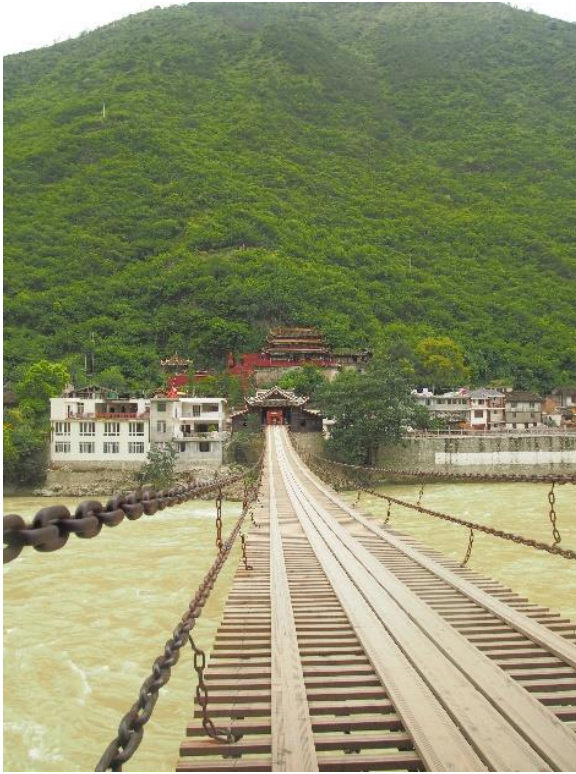


写真 11-7 瀘定橋東側から観音閣・大仏殿を望む



写真 11-8 瀘定橋と瀘定鎮



写真 11-9 折多河の両側に広がる康定の街



写真 11-10 雲杉木の柱の博物館



写真 11-11 改築された安覚寺



写真 11-12 ドームのある清真寺



写真 11-13 清真寺の見える古街



写真 11-14 タルチヨの建つ峠のオボ



写真 11-15 蔵式漢式混淆の大殿と神山のタルチヨ



写真 11-16 仏塔のある蔵族集落



写真 11-17 瓦沢中橋の仏塔



写真 11-18 居里寺山門



写真 11-19 寺内に建ち並ぶ霊塔



写真 11-20 読経時間を知らせる喇嘛



写真 11-21 石柱と石版の見える天葬場



写真 11-22 折多山西側のヤク放牧キャンプ



写真 11-23 大渡河沿いの道路と右岸の山肌に刻まれた道路

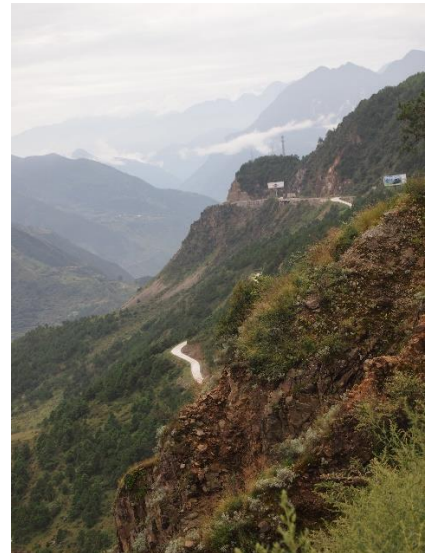


写真 11-24 二郎山トンネル付近



写真 11-25A 2005年の韓家大院大門



写真 11-25B 2012年の韓家大院大門



写真 11-26A 2005 年の古鎮街



写真 11-26B 2012 年の古鎮街



写真 11-27 雅安基督教礼拜堂



写真 11-28 発掘中の樗星門



写真 11-29 二階建ての清真寺



写真 11-30 大殿の前の観音像と供台



写真 11-31 崩れかけた大殿



写真 11-32 雅安天主教堂



写真 11-33 金鳳寺大雄殿



写真 11-34 石に刻まれた「金鳳寺續記」

第 12 章

満漢合璧「雅州印」について

はじめに

2012 年 8 月末から中国社会科学院近代史研究所劉小萌氏、中国人民大学清史研究所張永江氏と共に、四川省西部に位置する康定＝打箭爐に赴き、康定とその周辺に残る清朝史跡を探訪した⁽¹⁾。康定から成都への帰路に雅安市＝雅州を經由し、市内の史跡探訪と共に雅安博物館を訪れた。青衣河の河畔に建つ瀟洒な雅安博物館は、2010 年に一般展示を開始、巴蜀文化と雅州を起点にチベットへ向かう茶葉交易の展示が中心であったが、その一郭に特別な説明や関連する展示なしに、満漢合璧の「雅州印」が陳列されていた。

皇帝、中央官庁や八旗の満漢合璧印は北京などで目にする機会はあるが、地方官印を見る機会は少ない。官印については疎いままに、片岡一忠氏の大著⁽²⁾を参考に、紹介の筆を執った次第である。

1 「雅州印」の概要

幸い、フラッシュを使用しなければ写真撮影が可であったので、メモに合わせて写真に記録した。

展示の説明プレートには、以下のように記されていた。

“雅州印”印章

清

雅安市文物管理所

Copper seal with “Yazhouyin” inscription

Qing Dynasty

Cultural Relic Management Department of Ya'an

印背と印側には、次のように刻字（陰刻）されている⁽³⁾【写真 12-1】。

(1) 第 11 章を参照。

(2) 片岡一忠『中国官印制度研究』（東方書店、2008 年）は、中国の官印制度と共に清朝の満漢文官印を詳細に検討していて、本章はそれに導かれたものである。

(3) 印の各部の呼称は、片岡前掲書 12 頁の「図 I-1 印の部分名称」による。なお、印背・印側の刻字について「刻款の印文も満漢併記（ともに楷書体）であった。」（268 頁）と見えるが、雅州印の場合、印背には満文が刻されていない。雅州印漢文の判読などに、順治元年 6 月 22 日付けの咨文に捺された満漢文「jin yi wei cooha be kadalara dzi hui sy i doron 錦衣衛都掌指揮史使司印」を参考にしたが、同印の印背と印側は不明である。

印背（右から左に）

雅 州 印

禮部（楕円形の握り）造

順治三年正月 日

ijishūn dasan i ilaci aniya aniya biya:

印側右側 刻字無し

印側左側 順字二千三百三十四號⁽⁴⁾

印側上部 刻字無し

印側下部 刻字の有無は不明

印面には以下のように刻字（陽刻）されている【写真 12-2】。

左側 ya jeo i /doron : (満文楷書体)

右側 雅州印 (漢文篆書体)

上掲の満漢合璧「雅州印」は、銅で鑄造され、握りの部分は楕円形の直鈕式、印の大きさは「方2寸2分」（おおよそ7.06cmの正方形）、印面は満文が「楷書体」、漢文が「九疊篆」の陽刻⁽⁵⁾で、礼部が順治三年（1646）正月に鑄造した2,334個目の官印とまとめられよう。以下に若干の考察を行ってこよう。



写真 12-1 「雅州印」印背



写真 12-2 「雅州印」印面（写真を左右反転）

⁽⁴⁾ 「號」は異体字である。

⁽⁵⁾ 片岡前掲書 269 頁、「表Ⅱ-1 順治初年の官印規定」参照。印の大きさは、小泉袈裟勝『単位の起源事典』（東京書籍、1982 年）を参考に、明清の营造尺「尺寸」1 尺=32.1 cm と仮定した。

2 満漢合璧官印の撥給

清朝が中国本土で満漢合璧印を使用した経緯について、片岡氏は、順治元（1644）年五月二日にドルゴンの清軍が北京入城、崇禎帝への服喪などを行った後、六月二十九日に「ドルゴンは内外の各官衙（役所）の印を満漢合璧文に改めることを命令した（『世祖実録』巻5、順治元年六月乙酉の条）」と述べ、また以後の官印は全て合璧印に改めさせ、これより後、順治三年七月までの約二年間に3,658個の官印が造られたことを指摘されている⁽⁶⁾。

順治元年の官印撥給を伝える史料に「禮曹章奏日録」（以下で「日録」と略記）がある⁽⁷⁾。「日録」原本は未見で不明なことも多いが、記述された内容は礼部の上奏とそれに対する順治帝の決裁を要約し日付ごとに記録したもので、「六科史書」と類似の簿冊と推定される。「日録」は順治元年十二月四日～二十八日までの間の、飛び飛びの十七日分に記録が見え、記録された十七日の中の十二月六、七、十一、十三、二十、二十二、二十三、二十八日の条には、礼部尚書郎丘 Langkio が、吏部あるいは兵部の咨文に基づき、様々な官職に対して「記」、「印」、「関防」の撥給を上奏、これに対する順治帝の裁決が記されている。

一例を挙げれば六日に吏部の咨に基づいて「萬全左衛儒學記、豊濟倉記」など20個の記、「山東按察司經歷司印、眞定府司獄司印」など24個の印、「保定府通判駐懷來李異品」などへの8個の関防の撥給を奏請し、奏請された52個の印・記・関防のうち「長陵祠祭署印」など明朝皇帝陵の祠祭署印については「十二陵不必造」と撥給が許可されなかったが、それ以外の40個の官印については「鑄給」を命じたことが記されている。「日録」には、十二月六日から二十八日までの間に、記42個、印72個、関防21個の合計140個の官印撥給が奏請され、うち43個は不許可、97個の鑄給を命じたことが記録されている。

撥給が承認された官印は、「准鑄給」と記していることから、順治元年六月二十九日に定められた、満漢文併記の清朝官印を鑄造し撥給したと推定される。「日録」に記された官印撥給の奏請された地域は、万全衛、眞定府、保定府、山東省など順治元年五月の北京占領と共に清朝に帰順した河北や山東など北京周辺地域であるが、官印の撥給は官職の任命に伴うものであり、これらの地域が清朝の支配下に入ったことを示している。

3 四川の官印撥給

清朝は北京とその周辺の支配と共に、順治元年十一月には南明勢力を逐う南征軍と李自成軍を逐う西征軍を編成し二手に分けて全土に軍を進めるが、河南に向かった定国大將軍親王ドド Dodo（多鐸）は、「速やかに各官印信を鑄給して詐偽を防ぐ必要がある」と明朝の官印に換わる清朝の官印の撥給を奏請すると、ただちに「礼部に鑄造撥給させる」としている（『世祖実録』巻15、順治二年三月壬子の条）。そして、鑄造された官印の撥給については、「文武各官の印信は、それぞれの官職に任命する『文冊』の到着と共に頒発する」（『世祖実録』巻17、順治二年六月丙寅の条）とあり、官職任命辞令の交付と共に撥給することとしている。

⁽⁶⁾ 雅州印は順治三年正月に順字2,334号なので、順治元年六月末から三年正月までに2,334個（1ヶ月平均130個）、三年正月から七月までに1,324個（1ヶ月平均190個）が鑄造されたことになる。片岡前掲書272頁などを参照。

⁽⁷⁾ 「禮曹章奏日録」は羅振玉校録『史料叢刊初編』（文海出版社景印、1964年）による。なお、内閣大庫檔案中には順治二年正月分「禮曹章奏」などが見えるが、未見である。

清朝の成立によって支配者は明朝から満洲族清朝へ代わったが、清朝は明朝の支配組織を踏襲、すなわち官職は踏襲され、加えて明朝の官僚の多くが新たな支配者の清朝に帰順し、以前と同様の官位に登用されることも少なくなかった。したがって、支配者が清朝に代わっても、旧明朝の官僚が続いて清朝に登用された証拠としても、明朝の漢文「官印」から清朝の満漢合璧「官印」へ換給されることが必要であったであろう⁽⁸⁾。

以上のような動向の中で、雅州印はどのように位置づけられるであろうか。順治元年十一月、成都で大西国を建て帝位に就いた張献忠の勢力下にあった四川に対して、清朝は順治三年正月己巳に、和碩肅親王ホーゲ Hooge（豪格）を靖遠大將軍に任命して討伐を命じるが、この時、「四川巡撫以下の官員の印記・関防三百四顆を靖遠大將軍肅親王に給付する」（『世祖実録』卷23）と、四川平定に備えて巡撫以下に撥給する304個の官印を豪格に所持させている。ホーゲは順治三年十一月二十七日に、成都の東に位置する西充で張献忠を斬り、四川を平定したことを報じている（『世祖実録』卷29、順治三年十二月甲申の条）が、張献忠を陣斬した後も、その残党などの反清勢力が残存し、四川支配の目途が付いたのは、豪格配下の総兵官・正紅旗漢軍旗人李国英が四川巡撫に任命された順治五年閏四月癸卯（『世祖実録』卷38）以降のこととみなされる。

おわりに

以上の経緯からすると、満漢合璧「雅州印」は、順治三年正月に鑄造し、正月二十一日に靖遠大將軍肅親王ホーゲに渡された四川の官印304個の中の一つであるが、雅州は三年十一月まで張献忠の支配下にあったので、雅州印は撥給されることなくホーゲの手元に置かれ、李国英が四川巡撫に任命された順治五年閏四月頃に至って、雅州知州に撥給されたものと推定しておきたい。

（原載：『満族史研究』第11号、2012年）

⁽⁸⁾ 招撫雲貴右侍郎丁之龍「條陳滇黔事宜」（『世祖実録』卷18、順治二年閏六月己酉の条）には、帰順した官僚の任用と共に、「一、換給印信」すなわち明の官印を清の官印に交換することが見える。

第 13 章

再訪の海城・鉄嶺・開原・四平・葉赫 —1986・88・96・2004・13 年—

はじめに

2013 年 8 月 25 日～9 月 7 日の間、中国を訪れ、北京で開催された「王鍾翰先生百年誕辰暨清史民族史国際学術研討会」出席の後に、大連・海城・瀋陽・鉄嶺・開原・四平・葉赫⁽¹⁾の清朝史跡を訪れた。1986 年に初めて遼寧省、瀋陽市の瀋陽故宮と新賓満族自治県、吉林省四平市と葉赫満族郷などを訪れて以後、2001 年までの 16 年間にわたり東北各地に残る満族と清朝の史跡を探訪し続けた。2001 年以後は、駐防八旗や三藩の史跡を訪ねて杭州、福建、広東、洛陽、荊州、成都、四川東部の大金川・大渡河流域、内モンゴル自治区、寧夏回族自治区、広西チワン族自治区、新疆ウイグル自治区、チベット自治区などに赴き東北を訪れる機会は少なかった。

1986 年から 2013 年までの間に、中国は高度成長の時代を迎え、観光旅游が盛んになったこともあって史跡の変貌が著しい。本章では、今年訪れた史跡の様相を記すと共に、過去の記録⁽²⁾を併記しながら、史跡変容の一端をも垣間見ることとした。

1 大長山島 《2013 年 8 月 28～29 日》

遼東半島沖に浮かぶ長山群島の中の広鹿島は、明朝の武将であった尚可喜が、天聰七年（1633）に後金国＝清朝へ来帰するまで拠点としていたことから、2004 年に赴き、島の岬で明清時代と推定される石碑碑頭を見つけた。長山群島の中で最も大きい大長山島にも清朝史跡が遺されているかと期待して赴いた。8 月 28 日、大連から長距離バスで皮口へ向かう。皮口からは、大長山島を始めとして小長山島、海洋島、獐子島、広鹿島などへの船便があり、ここが遼東半島と長山群島をつなぐ場所であることを示している⁽³⁾。午前 11 時 50 分、皮口発長山島鴛鴦港行き定期船に乗る。南に広鹿島を眺めながら 1 時間余りの船旅である。到着後に長山島旅游局へ出向き史跡の有無を尋ねたが、新石器時代の遺跡はあっても明清の史跡は全くないとのこと⁽⁴⁾。近年の史跡は日露戦争時に日本海軍が島を根拠地としたことから東郷平八郎揮毫「長山列島海軍根拠地」碑が建てられ、中華人民共和国成立

(1) 「葉赫」は簡体字「叶赫」であるが、本章では、引用史料を含め日本漢字で表記している。

(2) 主要な記録は以下である。細谷良夫『中国東北部における清朝の史跡—1986～1990 年—』（東洋文庫・中央アジアイスラム研究室、1991 年）、細谷良夫「海城の尚可喜の史跡と尚氏一族」（『歴史と地理』第 417 号、1990 年）、細谷良夫「尚可喜をめぐる史跡—金州・広鹿島・海城」（『満族史研究』第 4 号、2005 年）。

(3) 皮口の別名「紅水嘴」は尚可喜の遼東半島上陸地点、「洪水堡」と推定している。

(4) 『中国文物地図集 遼寧分冊』（国家文物局主編、2009 年、以下『地図集遼寧』）「長海県」の長山島の史跡は、新石器・青銅器時代遺跡のみである。

後に国恥として石碑を取り壊した「西大山碑遺址」があるのみとのことであった。

島の高台に位置する、明末創始と称している天官・地官・水官を祀る「三元宮」(三官廟)へ赴いてみたが、ここも近年に修復・再建されたようで、拝殿や祀られている観音・関帝などの神像は全てが新しい。眼下に広がる海帯湾を眺めているうちに風雨が激しくなり宿へ逃げ帰った。夜半まで続いた風雨は翌朝におさまったが、訪れるべき史跡もないので島の南側の岬に位置する金蟾港へ。埠頭近くの高台に、島の特産のナマコにちなむ「海參娘」像が建てられているが、これもやがて史跡になるのであろうか。

金蟾港から午前 9 時 30 分発皮口行きに乗船。皮口から普蘭店に出て、ここから列車で海城へ向かった。車窓から見える田園風景も、昔の一面の玉蜀黍^{とうもろこし}と高粱の畑から野菜と果樹の多い田園風景に一変している。

2 海城・尚可喜史跡《1986 年 8 月 25～26 日》《1996 年 9 月 11 日》《2004 年 8 月 27～28 日》《2013 年 8 月 29～31 日》

海城は筆者の研究課題である尚可喜の故郷⁽⁵⁾であり、可喜は康熙十五年(1676)に広東で没した後、康熙二十年海城に葬られている。初めてここを訪れたのは 1986 年、当時の外国人旅行者は、瀋陽などの開放都市は自由に訪れることができたが、未開放である地方都市は事前許可を得なければ赴くことはできなかった。大連で開催された 1986 年「清史国際学術討論会」出席の機会に、海城尚氏と関係の深い孫文良氏(当時遼寧大学)に海城訪問の可否を尋ねた結果、孫氏と李治亭氏(当時吉林社会科学院)の案内で訪問が可能になり、加藤直人氏(日本大学)と共に訪れた。海城では尚世白氏(当時海城文化局、尚可喜の子供・21 房尚之琅の 11 世孫)を中心に、尚九齡氏(32 房尚之珩の 10 代孫)、尚世謂氏(21 房の 11 代孫)から、尚氏の現状などをうかがい、尚氏一族の所有する「尚氏宗譜」を借覧、墓園の痕跡が全くない尚氏陵園、家廟の跡、半ば焼け落ちた三学寺などを案内していただいた。その後は、何度か海城市を通過したことはあったが、尚氏一族と尚氏陵園を再訪したのは 2004 年、すっかり修復された尚氏陵園に感嘆した。

2013 年は 10 年ぶりの訪問、前回もお世話になった尚世海氏(鞍山師範大学、32 房の 14 代孫)をはじめとする尚氏の皆さんに歓待され、前回は確認できなかった「尚可喜神道碑」の再確認、尚氏荘園の設置された地名の探索などを行った。

尚氏一族から歓待されると共に、『尚氏家族文化研究』(第 1 期〈2005 年〉～8 期)、『尚氏宗譜六修補編(之一)』⁽⁶⁾『尚王陵園』(尚氏宗親理事会、2011 年)、DVD「尋訪尚王世家」「海城尚王祠」などを頂いた。尚世海氏は、尚氏宗族にとって宗譜編纂、陵園整備、記念館造営の三つが最も重要だといわれていたが、多くの出版物の刊行や清明節大典、尚氏宗親理事会、尚可喜研究会などの開催に、尚氏一族の宗族に対する熱意が感じられる。

2.1. 尚王陵園

尚可喜の墳墓は、はじめ県城 18 里に位置する東陵風翔山に造られ、後に東南 10 里の大新屯村西南の文安山に移葬されたと記されている⁽⁷⁾が、尚世海氏は東陵の「陵」字が朝廷

(5) 順治十年(1653)十一月に海州は海城と改名されたが、本章では全て海城と記す。

(6) 『第 6 次続修尚氏宗譜 1675～1994』(六修理事会編審、1994 年)の補編で、『尚氏宗譜六修補遺』(六修理事会編審、1994 年)と『同(之二)』(六修理事会編審、2002 年)が発行されている。

(7) 宣統元年『海城県志』巻 1、古蹟「尚平南王墓」。民国十三年『海城県志』巻 3、石碑「尚王神道

の忌諱にふれ、2年後に現在の八里小新村文安山に移葬されたという。海城市に近い劉堡で農村調査を行った聶氏は、農民からの聞き取りで、尚可喜墓は盗掘を恐れ三つ造られたこと、墓は文化大革命（文革）で破壊されたが、それ以前に盗掘されていたことなどを記している⁽⁸⁾。

《1986年》：海城市から楊柳河を渡り岫岩への道をたどって小新屯の文安山山麓にある尚可喜墓のある尚王陵園に案内していただいた。陵園は文革で破壊され墓は暴かれたというが、現場一帯は玉蜀黍などが植えられた畑で、墓を破壊した跡という穴があるのみで、石碑や墓碑などは全く見当たらず、ここが陵園と教えられてもそれをうかがわせるものは全くなかった【写真13-1】。

《2004年》：1995年に墳墓の修復に着手、1997年に再建を開始、再建の中心であった尚徳新氏（32房の15代孫）は100万元以上を要したという。神道碑と満漢合璧諭祭碑、尚可喜夫妻の墳墓、碑林、尚可喜記念館と佐領居などからなる尚王陵園が整備されている【写真13-2】。また尚王陵園とは別に馬風鎮夾嶺村の山中に建てられた尚可喜の第3子・3房始祖尚之廉の墓を訪れたが、このような形式が一般的な陵墓であろうか【写真13-3】。

《2013年》：文安山山麓の尚王陵園は2004年と比して大きな変化は見受けられなかった。太子河に流れ込む海城河橋を渡り、最初に尚可喜墓が造営されたという馬風東陵村後溝（6房尚之典の後裔が居住）に赴き、村から林檎や玉蜀黍の植えられた畑の間の山道を登り、墓があったという鳳翔山の頂上稜線から張り出した尾根の一角を遠望した【写真13-4】。

◆神道碑と満漢合璧諭祭碑

尚王陵園の入り口に神道碑、陵園内の碑亭に康熙帝賜与の満漢合璧諭祭碑が建っている。なお、神道碑は、最初に陵園の設置された東陵にも建っていたことが伝えられている⁽⁹⁾が、2004年に「神道碑、諭祭碑共に鳳翔山東陵に建てられ、後に文安山に移動」との説明がある一方で、2013年には「東陵に今も神道碑が残っている」との話、どちらが正しいのかは不明のままである。

《1986年》：陵園や家廟にあった石碑の行方を尋ねると、「破壊されてなくなった」、「豚小屋の基礎になった」などの返答であった。尚九齡氏は「平南親王尚可喜之碑」の文章を記憶していて、それを朗々と口唱されたことに驚かされた。

《1996年》：9月11日に加藤直人、王禹浪氏（当時哈爾濱市社会科学院）と海城市から岫岩満族自治县へ向かう途中の食堂で、尚可喜墓の場所などを尋ねた時に、1人の子供から「楊家園子（当時は楊家委員会）に半分埋まった大きな老碑がある」と教えられた。早速、楊家園子に向かい、村人から教えてもらった場所を探して、玉蜀黍畑の片隅に横転している石碑と亀趺を発見した【写真13-5】。石碑に絡まっている蔦を切り払い、下向きの石碑面を覗くと「平南親王」などの文字が読み取れたので、雑草を取り除き写真撮影と寸

碑」の項には、墳墓に建てられた神道碑の場所を「城南十里鐘家台村北及城東二十里東靈村」と記している。最初の墓所は東靈村＝東陵村、後の墓所は鐘家台村＝大新屯＝小新屯と地名が相違するが、相違については不明のままである。なお、『尚王陵園』には、「所在地は海城市八里鎮小新屯文安山山麓、康熙二十年（1681）に海城市馬風鎮東陵村に造営、康熙二十四年に移葬」と記されている。

⁽⁸⁾ 聶莉莉『劉堡』（東京大学出版会、1992年）。

⁽⁹⁾ 康徳四年『海城県志』巻1、古蹟「尚王碑」に「県城南十里、鐘家台村北有清康熙年勅建平南親王尚可喜神道碑。又城東南十八里東陵村東亦有尚王神道碑。」とある。鐘家台村は現在の小新屯と推定されるが、鐘家台村・大新屯・小新屯の関係（注7参照）は定かでない。また神道碑は諭祭神に伴うものであり、東陵に諭祭碑も建てられたであろうが、現在どうなっているのかは不明のままである。

法などを記録した。

石碑石材は花崗岩、石碑と亀趺は一体で、両者を併せた碑高は 256 cm、石碑の厚さ 30 cm、碑幅 108 cm、亀趺は亀頭から亀尾まで 3m、高さ 81 cm である⁽¹⁰⁾。碑面には幅 17 cm の遊龍文図案があり、中央に「皇清冊封平南親王諡敬諱可喜尚公神道」と刻されている。石碑は文革期の破壊、石碑で鎌などの農具を磨いたとのことで、石碑台座の角は丸く削られ、表側になった石碑背面に字のような痕跡があるが、刻字されているのかどうか判然としない。

《2004 年》：陵園の入り口に、「平南親王諡敬諱可喜尚公神道」と刻された神道碑が【写真 13-6】、陵園内の碑亭に「滿漢合璧諭祭碑」が収められている【写真 13-7】。この神道碑が 1996 年に楊家園子で見たものかどうか尋ねないままで、確認しなかった。

《2013 年》：『尚王陵園』「神道碑」の説明に「高 2.58 米、寛 1.06 米、厚 0.31 米」とあり、楊家園子で実測した寸法と合致している⁽¹¹⁾。尚世海氏は、東陵に建っていた神道碑は放置し文安山に新しく建てた、それが文革時に楊家園子に放置され、現存の神道碑は楊家園子の石碑を再建したものという。楊家園子で見た時は、碑面の「平南親王…」などの文字がはっきり読み取れたが、現存のそれはほとんど読み取れないことが気にかかる。

「諭祭碑」には、康熙二十年十二月に康熙帝賜与の滿漢文「諭祭文」が刻されているのであろうが、今は碑面の滿漢文を判読することは困難で、模刻が碑亭壁面にはめ込まれている。

◆尚可喜墓⁽¹²⁾

《2004 年》：参道の奥の高台に墳丘が造営され、2001 年に建てられた尚可喜と夫人の墓碑「清平南敬親王尚公諡敬諱可喜／王妃舒太君／夫人胡太君」⁽¹³⁾が建ち【写真 13-8】、尚可喜墓に隣接して尚可喜の祖父尚繼官の墳丘と「清誥贈平南王顯祖孝諱繼官府墓」の墓碑が建っている。

《2013 年》：尚可喜と尚繼官の墓に変わりはないが、その一段下に尚可喜の 9 人の夫人を合葬した墓標「奠諸封智順王夫人劉太君…／賜封馬太宣人馬太君之墓」が建ち、その近くに長房尚之忠の墓標「大長房祖尚之忠靈位」に続き、三藩の乱で処刑された尚之信の墓標「襲封平南親王／長房祖尚公之信靈位」を筆頭に、尚可喜の 32 人の子供、尚氏 32 房房祖の墓標が設置されている【写真 13-9】。

◆碑林

尚氏陵園の一隅に尚氏をめぐる石碑や石獸を集めた碑林が設けられている。

《2004 年》：家畜小屋に埋まっていたもの、橋の土台石になっていたもの、菜園の囲い石になっていたものなどを探し出し買い戻した石碑、中には壊れた石碑片をつなぎ合わせたものなど 10 本余りの石碑、亀趺や螭首、石獸が置かれ碑林となっている。

⁽¹⁰⁾ 1987 年『海城縣志』「文化編・文物古跡」第 4 節古墓に、「平南親王諡敬尚可喜之碑、以下即碑文…（碑已無存）」と、当該『海城縣志』の編集当時、神道碑や諭祭碑が現存しなかったことが記されている。

⁽¹¹⁾ 細谷前掲論文「尚可喜をめぐる史跡」で、神道碑の「全体の高さが 450cm」と記したが、筆者の誤りで、『尚王陵園』にある「高 2.58 米」が正しい。

⁽¹²⁾ 『地図集遼寧』105 頁の「尚可喜墓」（八里鎮小新村北 200 米・尚王陵・清代）に、「為清皇封平南敬親王尚可喜之墓。尚可喜生于明万曆三十二年（1604）、卒于清康熙十五年（1676）、後歸葬于海州故里、当地称“尚王陵”。文革期間墓被毀、僅存墓誌一合。」とある。

⁽¹³⁾ 以下、「／」は改行を示す。

《2013年》：石碑も数本増え、石獸なども配列され整備が進んだようである【写真 13-10】。

◆尚可喜記念館・佐領居

「尚可喜記念館」には尚可喜の治績、その中の一室「佐領居」には海城・遼寧省のみならず、北京や広州など、更に台湾や海外にも広がる尚氏宗族会とその活動を展示している。尚氏の歴史研究とは別に、宗族研究の立場からも興味深いものがある。

《2004年》：部屋の中央に肖像画を背景にした原寸大に近い辮髪姿の木造尚可喜像が置かれ、周囲の壁面には、尚可喜の戦績、広東の治績、寺廟の建立や梵鐘の寄進、清朝の厚遇など清朝の功臣としての一生を、写真・碑文拓本・解説で表示している。文革時に掘り出されたという1m四方ほどの「皇清冊封／平南敬親／王尚公墓／誌銘」（光祿大夫・戸兵禮刑四部尚書梁清標撰文、資政大夫内翰林院国史編修沈荃書丹）と刻された尚可喜の墓誌、尚可喜王妃の墓誌「皇清冊封／平南敬親／王妃舒氏墓／誌銘」も展示されている⁽¹⁴⁾。

《2013年》：尚可喜像の配置は2004年と相違し、供桌には尚可喜と共に舒大君と胡大君の牌位が置かれている【写真 13-11】。2004年には気付かなかったが、壁面に表示された尚可喜の事績に続いて、「？（1字不明）清尚之信叛清問題」と題された一角があり、10項に分けて尚之信は呉三桂軍に囲まれ、兵力を温存するため偽りの投降を行ったが、戦況の好転と共に帰正して平南親王に襲封され、失地を回復したことを記し「盖棺論定。尚之信有功無罪」と記していて、呉三桂、耿精忠、尚之信を三藩と数える通説を否定している。

◆「閑散佐領」印⁽¹⁵⁾

尚氏一族は、各種の『尚氏宗譜』尚可喜肖像など様々な資料を収集・保管しているが、その一つに「閑散佐領」印がある。康熙十九年（1680）九月、尚可喜を海城に葬ることに伴い、和碩額駙尚之隆は尚可喜荘地の撥給と閑散佐領二員の賜給を奏請、康熙帝は奏請を認め康熙二十年二月に、海城に尚可喜の看墳荘地撥給を認め、これと共に海城居住の尚氏と配下の壮丁を統括する2牛录ニルの編成が行われた。このニルは「閑散牛录」、ニルを統括する佐領は「閑散佐領」と称され、北京や駐防八旗の枠外に置かれた、他に類例を見ないニル・佐領であり、尚氏閑散佐領職に伴う佐領印に類似する印はない。なお、この印が、内務府あるいは八旗都統などから公的に賜給されたものか、檔案＝公文書に捺印されたのかなどは不明のままである。

《2004年》：尚氏閑散佐領が使用した「閑散佐領」印を見せていただいた。佐領印は玉製、印面は6cm四方、高さ11cm、上部に獅子が彫られ【写真 13-12】、印面には「世管／佐領／公用／圖記」と刻されている【写真 13-13】。

◆尚氏荘地

《2013年》：康熙十九年に賜与された尚可喜荘地は、清末に荘屯11座、配下の壮丁、和尚などを合わせて合計で5,858日、1日6畝計算で352頃余の膨大な土地を所有していた⁽¹⁶⁾。

⁽¹⁴⁾ 墓誌の説明に「借展」とあり、記念館所蔵ではないようである。1986年に墓誌は三学寺にあると聞いたが、墓誌はどのような流転をたどったのであろうか。

⁽¹⁵⁾ 閑散佐領印については、細谷前掲論文「尚可喜をめぐる史跡」を参照。本章では前稿に掲載しなかった佐領印の写真を紹介する。

⁽¹⁶⁾ 尚宗一の書簡稿の末尾に「光緒二年八月十五日、在祠堂内看、于八月十七日抄完」と記されている。細谷良夫「清末の漢軍旗人一尚氏一族をめぐる」（細谷良夫編『清朝史研究の新たな地平』山川出版社、2002年）を参照。

莊屯の所在地のうち、牌楼屯、廟後、八里堡、丁家峪、西甲村、頭道溝、尚可喜の生誕地と考えられている大新屯をめぐり、32 房尚之珪が西門を修復した茅庵寺（今の名称は茅寺、文革で破壊され今は何もない）を遠望した。これらの土地は海城市街地の東側一帯に広がっていて、尚氏が海城一帯を支配する豪族であったことがうかがわせる。

◆家廟跡

宣統元年（1909）『海城県志』には、城内県公署西南にあり、尚王祠の俗称は「尚家廟」、康熙年間勅建の平南親王尚可喜專祀であり、「家廟碑」も建っていたと記されている⁽¹⁷⁾。尚宗一が光緒二年（1876）に、北京尚氏 5 佐領に宛てた書簡もここで記されたのであろう⁽¹⁸⁾。

《1986 年》：一帯は既に住宅街、家廟前の通りには商店が、奥には住居が建ち、うっそうと茂った古木が昔を偲ばせるのみであった。

《2013 年》：近くの住居表示は「海城市勝利中街」、唯一残る古木に、「2011 年 9 月 1 日 国家 3 級古樹 樹齡 260 年 旱柳（河柳、ペキンヤナギ）」の標示が付いている【写真 13-14】。

2.2. 三学寺＝三官廟＝三学堂⁽¹⁹⁾＝海城市博物館

海城で最も由緒ある建築とされている。

《1986 年》：三学寺山門に「海城市博物館・同図書館」の標示が掲げられている。山門を入ると、参禅堂、藏経楼、大雄宝殿などが建っているが、一部は 1982 年 9 月 3 日の火災で焼け落ちたままである【写真 13-15】。境内に集められた石碑に刻された年代は、「宣徳十年重修三学寺碑記」、「萬曆甲寅歲四月三学寺新建禅堂碑記」、「萬曆四十二年十二月皇図？永固」、「…年世襲佐領尚維嘉銀二十七両、世襲佐領尚維濱銀三十両…」などとあって、三学寺の歴史が窺われる。孫文良氏は崇徳二年（1637）尚可喜配下の「三官廟重修石碑」、崇徳六年尚可喜の「三官廟重修石碑」、更に「尚可喜墓蓋（墓誌）？」もここにあると言うが、所在は確認できなかった【写真 13-16】。

《2004 年》：三学寺の一帯は寺廟街となり、「三義街」の牌楼もある。三学寺山門前には、史跡標示「三学寺／省級文物物保護単位／遼寧省人民政府／1988 年 12 月 20 日公布／鞍山市人民成立」が建っているが、まだ修復中のように門前に石碑や石獸が多数置かれている【写真 13-17】。

《2013 年》：三学寺の修復は終わり、門前には「如来八宝塔」が建ち、詣でる人もいる【写

⁽¹⁷⁾ 宣統元年『海城県志』巻 1「歴代加封関岳考」の項。また康德四年（1937）『海城県志』巻 6 碑記「海城重修尚氏家廟碑記」（清嘉慶十二年桂月立）には、方式善の碑文が記されている。なお、1991 年 9 月 16 日に遼寧社会科学院歴史研究所で王革生氏（当時遼寧社会科学院）から、氏の調査作成した草稿「遼寧省碑文所在目録」を見せていただいた中に「95 海城重修尚氏家廟碑記」とあり、王氏は「現在の海城市図書館に残置」と言われた。あるいは現在の関帝廟、三学寺に保存されているのかもしれないが確認していない。

⁽¹⁸⁾ 細谷前掲論文「清末の漢軍旗人」を参照。

⁽¹⁹⁾ 『地図集遼寧』5 頁の「三学寺」（興海街道西南隅・明代・省文物保護単位）に「坐北南朝、南北長 92 米、東西寛 46 米、現存山門、前殿、東西配房、藏経楼及焼毀の大殿遺址。…寺内存有明宣徳、崇禎、清乾隆、光緒年間の“重修三学寺碑記”和明萬曆年間“三学寺新修禅堂碑記”的碑数通。」とある。なお、民国十三年『海城県志』巻 3、壇廟「三学寺」には、唐代の古刹と伝えられるが、光緒二十三年に寺僧某が廟を基督教会に売與し仏像を毀したが、後に地方官が買い戻し、光緒三十一年に師範学堂に改建、その後県立中学になったことが記されている。また『同』巻 3、石碑「三学寺碑」には唐・明代の碑があるが、唐碑は既に毀れ、明碑は存していると見える。

真13-18】。天王殿の前に尚氏寄進の来歴を記した石碑が建ち、藏経楼の後ろには、下半分を補修した、表面に「智順王尚可喜、崇徳元年季春三月」、裏面に「光緒元年」と刻された石碑が保管されている。

2.3. 関帝廟（山西会館）＝海城市博物館

《2004年》：1986年当時、三学寺に併設されていた海城市博物館は、関帝廟（山西会館）⁽²⁰⁾に移されていた。三学寺にあった多くの石碑が関帝廟の碑林に修復されたようで、その中に「重修茅児寺碑記／嘉慶元年／漢軍佐領尚玉耀」「繡嶺徐泉書院碑／康熙六十年」と刻された石碑もある【写真13-19】。

《2013年》：海城尚氏史跡の探訪後に、8月31日午後瀋陽へ列車で赴き、9月1日は趙曉剛氏（瀋陽市文物考古研究所）の案内で、北中街の瀋陽城北門の城壁址と城壁内側10mほどに位置する「汗王宮」発掘現場を訪れ、そこから瀋陽故宮近くに位置する発掘中の豫親王府址を遠望した。再建なった実勝寺を一見した後に、新楽遺跡近くにある考古研究所の発掘品保管場所で、元末明初染付「思格徳里の骨壺」、嘉靖青花「達海骨壺」などを特別に見せていただくなど、充実した1日を過ごし、夕刻、車で開原へ、開原に宿泊して鉄嶺と開原の史跡を訪ねた。

3 鉄嶺と開原《1988年9月5～10日》《2013年9月1～3日》

鉄嶺と開原は、1988年9月5～10日の間、科研費「国際共同研究」の共同研究パートナー謝肇華氏（当時遼寧社会科学院）などと共に探訪して以来26年ぶりの訪問である。開原、鉄嶺共に新市街を建設、都市機能は新市に移っているようである。

3.1. 鉄嶺

《1988年》：鉄嶺では賀虎（当時鉄嶺市政府）・裴耀軍（当時鉄嶺市博物館）・戴瑞華（当時鉄嶺市文化局）の3氏にご案内いただいた。鉄嶺城の城壁・城門・鼓楼などの遺構は全く残存しないこと、柴河街周辺が鉄嶺城の北東角に当たり、この付近では城内が城外より2～3m高いことに城壁址の名残がうかがわれた。なお、城の南側では、城内と城外の高低差はなくなることであった。

《2013年》：城壁があったことをうかがわせるものは全くないようである。

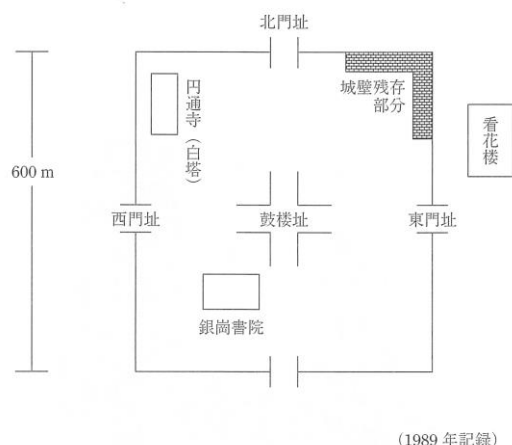


図13-1 鉄嶺城概略図 細谷作成

◆邊牆《1988年8月21日》《2013年9月2日》

邊牆には、明代の漢族地帯を女真族から隔てる「遼東邊牆」、清代の満洲（女真）族地帯

(20) 『地図集遼寧』5頁の「山西会館」（興海街道・清代・省文物保護単位）に「原為関帝廟。康熙二十一年（1682）建、同治十一年（1872）晋商捐資修葺、作為山西会館。会館坐北朝南、東西寛28米、南北長40米…山門、鐘楼、大殿、後殿等組成。」とある。

に漢族の侵入（開墾）を防ぐ「柳条邊牆」がある。鉄嶺、開原付近では両者は区別なしに考えられているようであるが、鉄嶺付近の遺址は遼東邊牆であろう。

《1988年》：開原周辺の明の烽火台遺跡「単楼台＝達連台址」、邊牆遺跡の「古城堡址」「新安関址＝双楼台」、開原から葉赫に至る交通の関門であると共に、柳条邊牆の辺門があった威遠堡などを訪れた。

《2013年》：鉄嶺付近の邊牆を探して鉄嶺から法庫への道 S106 号をたどり、遼東邊牆にちなんだ「鎮西堡」を通過、法庫へ 31 km の標識のある付近から左に畑の中の未舗装路をたどったが、この道はやがて西に延々と続く農道となっている。高さ 3m、幅 5m 余りあるこの農道は邊牆の高さと幅を利用して造られたものであり、道の下の両側は玉蜀黍畑、畑の中に農家が点在している【写真 13-20】。邊牆跡の農道は S106 号と交差して更に北へ続いているが、交差した付近から舗装された道路となって利用されていた。平野の中に東西に走る邊牆は、北と南、非農耕と農耕、夷と華の境であろうが、実際に機能し得たとは思えない境界である⁽²¹⁾。なお、開原老城の西方でも邊牆址を探したがこの付近には残存していないとのことであった。

◆円通寺大塔＝鉄嶺塔⁽²²⁾

俗称「白塔」は鉄嶺城の北西角に位置し、内藤湖南『満洲写真帖』に、明治三十九年（1906）の写真が掲載されている⁽²³⁾【写真 13-21】。

《1988年》：白塔の西側を走る道路、すなわち城外から城内を見ると、北東角と同様に城外より城内が 2～3m 高くなっていて、その断面には版築を行った跡が見いだされる。白塔下部を修復中で、塔に貼られている遼代造という線刻のある磚を外して、旧来の磚を模した新造の磚をはめ込んでいる。旧来の磚の外側に新しい磚を貼り付けている部分もあるので、修復が終わった塔の直径は以前より大きくなりそうである。周辺には取り外された遼・金代のものといわれる磚が散乱している。

白塔の南側にある円通寺山門は明治三十九年と変わらぬ佇まいを見せているが、山門は住居として使われている様子であった【写真 13-22】。山門と白塔の間に民家があり、民家の庭先に「万曆二十三年太子太保寧遠伯李成梁」と刻された石碑や亀趺が放置されている【写真 13-23】が、この石碑は、白塔が注 22 に見えるように「遼東總兵李成梁夫人維修」であることからすれば、万曆二十三年（1595）「重修円通寺記碑」であると推定される⁽²⁴⁾。

《2013年》：白塔の西側は広裕街、北側は北市路の街路名であるが、広裕街は西城壁、北

⁽²¹⁾ 『地図集遼寧』323 頁の「明長城遺址鉄嶺県段」（鉄嶺西部和東部山区・明代）に「明長城在鉄嶺兩段、一是從瀋陽市瀋北新区過遼河、經法庫到鉄嶺県腰堡、凡河、蔡牛、鎮西堡過遼河進入開原市。一段是從開原市靠山鎮進入鉄嶺大甸子、…」とある。

⁽²²⁾ 『地図集遼寧』313 頁の「鉄嶺白塔」（銅鐘街道・遼代・省文物保護単位）に「又称圓通觀白塔。為八角十三級密檐式磚塔、1975 年地震時將塔刹震落、斜插三級磚上。該塔明代由遼東總兵李成梁夫人維修一次、現塔座上“風調雨順、国泰民安”八字就是明代維修增添的。」とある。

⁽²³⁾ 内藤湖南編『増補満洲写真帖』（京都・小林写真出版部、1935 年；『内藤湖南全集』第 6 卷、筑摩書房、1972 年、所収）、「No.138 鉄嶺仏塔ノ二」に「圓通寺ノ大塔…鉄嶺城内西北ニ在リ…八角十三層ヨリ成ル…遼金ノ交創建サレ明末修理ヲ加ヘシモノノ如シ」とある。細谷良夫『『満洲写真帖』の史跡—鉄嶺と開原の旅から』（『湖南』第 10 号、1989 年）を参照。

⁽²⁴⁾ 『地図集遼寧』313 頁の「重修円通寺記碑」（円通寺内・明代）に「円通寺已毀、僅余碑 1 通。碑高 3 米、寛 0.92 米、厚 0.28 米、透龍碑額、亀趺座。碑立于万曆二十三（1595）年。碑文由高崇文撰文。記載円通寺の始修年代、重修原因及修繕後寺院規模等。碑陰陰捐資者姓名及銀兩数目。」とある。

市路は北城壁のあった場所であろう。付近に大きなビルはなく昔ながらの商店街で賑わっている。白塔は毎月1日と15日のみが入場可能で、この日は門が閉じられていた。したがって、外側から八角十三楼の白塔を遠望したにすぎず【写真13-24】、1988年に見た「万曆二十三年太子太保寧遠伯李成梁」碑がどうなったのか確かめることは出来なかった。現在、白塔は道教とかかわりがあるとのことであったが、そのためか山門周辺には多数の占い師が店を開いている。

◆銀岡書院

《1988年》：銀岡書院は呉三桂を弾劾して流された巡按御史郝浴が、順治十五年（1658）に創建したと伝えられるが、今は周恩来元総理が1910年、12歳の時に半年学んだ「周恩来同志少年読書旧址」の史跡として名高い【写真13-25】。また銀岡書院は鉄嶺市博物館を兼ねていた。

《2013年》：月曜日で休館、書院の門は1988年と変わっていなかったが、「周恩来旧址」の標示は「鉄嶺市周恩来同志少年読書旧址記念館」となっている【写真13-26】。また、併設されていた鉄嶺博物館は通りを挟んだ場所に新築されている。

◆龍首山

《1988年》：鉄嶺市の東に位置する標高200mほどの山で、東に柴河、西に鉄嶺市街を望み、山上には空心塔と秀峰塔の二塔と慈清寺が建っている。内藤湖南も訪れ『満洲写真帖』に写真が掲載されている。

《2013年》

龍首山は全山が「健身区域」となっていて、車は山麓ゲートから中に入れない。ここから山頂に建つ空心塔や秀峰塔までかなりの距離があり、時間に追われて断念、鉄嶺市北側市場の近くにある天主教堂に立ち寄って開原へ戻った。

3.2. 開原《1988年9月5～10日》《2013年9月2日》

1988年は開原城の城壁東門址、南側城壁址、鼓楼跡をめぐった⁽²⁵⁾。2013年には南門から鼓楼へ、鼓楼から西へ、その後に鼓楼から東へ向かい基督教会、東門址付近、清真寺を訪れた。

◆東側城壁址＝東門址

《1988年》：東門址には史跡標示「県級文物保護単位／老城城牆／開原県人民政府／1984年7月22日」が建ち、高さ4～5mほどの城壁が東南角へ延びて残存している。城壁の上に民家が建ち、畑もつくられている【写真13-27】。東側の城壁沿いに幅3mほどの護城河があるが、南側は開原旧城近くで清河に合流する冠河が護城河の役割を果たしているようである。

《2013年》：鼓楼から東に東門址へ赴いたが、城壁は以前と変わらぬ様子、城壁上の民家

(25) 『地図集遼寧』317頁の「開原老城城址」（老城街道内・遼・金・元・明代・県文物保護単位）に「明代城址。始建洪武二十五年（1392）、青磚結構。高3丈5尺、周長13里20歩、有4門、4角楼。護城河深1丈闊4丈。乾隆四十三年（1778）、道光三年（1823）兩次維修。1952年牆磚全部扒掉僅余土堆、東牆基被鏟平。1988年南牆土楞尚存450米、東門北側1処存高5.5米」とある。また『満洲写真帖』No.143「開原城」に「大サ約方1哩、四方各1門ヲ開キ月城ヲ備ヘ」とあり、写真には城壁と城門が見える。

は取り払われたようである。以前あった史跡標示は見当たらなかった【写真 13-28】。

◆ 南側城壁址・南城門

《1988年》：南門から西側の南側城壁と西側城壁は、磚は無くなっているが、土手状になって残存し【写真 13-29】、南側城壁の間には、城内からの「排水溝」が残存している【写真 13-30】。

《2013年》：新しい開原市から開原老城へ赴くと、清河大橋付近から新築された開原城南門「迎恩門」が見える【写真 13-31】。歴史的復元とは思えない南門をくぐり城内に入ると、南北に延びた通りは老城を模したのであろう商店街が立ち並ぶ。ただ、ほとんどの店のシャッターが閉まっている。

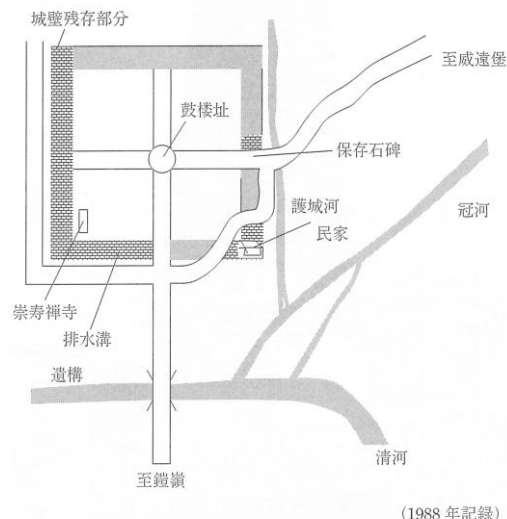


図 13-2 開原城概略図 細谷作成

◆ 城内と鼓楼

《1988年》：鼓楼は無くなってしまい、鼓楼跡を中心に東西南北に街路が通じ【写真 13-32】、旧鼓楼付近には鼓楼商店が建っている【写真 13-33】。

《2013年》：鼓楼が新築されている【写真 13-34】が、鼓楼の周囲には以前と余り変わらない家並みも見える【写真 13-35】。

◆ 崇寿禅寺塔⁽²⁶⁾

開原城の南西にあり、八角13層・高さ45.8mの仏塔で、寺院はなくなり塔のみが残存している。塔は金の大定三年（1163）の創建、何度かの修復、文革時の仏龕と仏像の破壊を経て、近年修復されている。

《1988年》：塔の保存状況はよい。ただ仏龕の中の仏像は文革中の破壊というが、全て無くなっている⁽²⁷⁾【写真 13-36】。

《2013年》：鼓楼から西に進むと南側に崇寿寺塔がよく見える。崇寿寺塔を訪れる人もいないようで門は閉まっているが、裏側に回り中に入る。修復が行われたようで、塔は塗り替えられ、仏龕には仏像が安置されている【写真 13-37】。

◆ 清真寺

《2013年》：鼓楼から東門へ向かう道路の左側にあり、大殿＝礼拝堂と三層の漢式尖塔ミ

⁽²⁶⁾ 『地図集遼寧』320頁の「崇寿寺塔」（老城街道内西南：遼代・省文物保護単位）に「八角十三級密檐式磚塔、通高45.82米。塔身每面正中辟仏龕。仏像已不存。」とあり、更に塔の北に、明代正統年間には宝仏殿・大悲殿・観音殿・地藏殿・山門からなる崇寿寺があったが、今は全て無くなったとある。

⁽²⁷⁾ 中国国家文物事業管理局編『中国名勝旧跡事典』第1巻（ぺりかん社、1986年）、遼寧省、214頁の「崇寿寺塔」に「塔身の各面には坐仏のある仏龕があり、両側に珠玉造りの天蓋…上には仏名の題額…題額の上に天蓋…その下に蓮花…左右に姿態を異にする飛天」とある。

ナレットを備えている【写真13-38】。最近修復されたようで、周囲には以前の建物飾りなどが置かれている⁽²⁸⁾。大殿には、人名は判然としないが鑲白旗防禦と正白旗驍騎校の二人の署名がある、道光壬辰（十二）年（1832）「真主獨一」と記された漢字扁額が掲げられている。また近くに康徳二年（1935）の教徒人名を刻した石碑も建っている。なお1988年には閉鎖されていたのか清真寺のあることを知らなかった。

鉄嶺と開原の慌ただししい探訪を終了、9月3日に四平市にある吉林師範大学へ向かう。四平市も様変わりしていて、多くの建物が建築中。市街地の近くに火力発電所が稼働している。豊かになれば次は健康を追い求めるだろうが、大気汚染の解決策はあるのだろうか。

4 吉林師範大学《1986年8月27～29日》《1988年8月20日～22日》《2013年9月3～5日》

1986年の葉赫満族郷訪問は、四平師範学院明清史研究室の王松齡氏の援助により実現できたのであるが、当初の四平師範学院は設立されてから日も浅かったようで、こぢんまりとした校舎で講演会を行い歓待された。四平師範学院は、2003年に校名を吉林師範大学へ変更すると共に拡充拡大され、今では22学部27研究所を有する吉林省の重点大学となっている。明清史研究の分野も、2研究室・5展覧室（博物館）【写真13-39】・1資料室を備え、16人の専任研究員を擁する満族歴史語言研究所に発展し、研究所は、修士・博士の教育と共に多彩な研究活動を展開している。

劉小萌氏が満族歴史語言研究所の指導に当たっていることから、張永江氏と筆者にも研究所への協力を要請され、研究所で講演を行うと共に吉林師範大学兼職教授の辞令を楊景海校長から頂くなど歓待された日々を過ごした。研究所の許淑傑・聶有財・吳忠良氏などには、研究所・博物館・資料室、葉赫満族鎮の案内等々、大変お世話になった。

5 吉林省梨樹県葉赫満族自治郷・葉赫満族鎮・四平市鉄東区葉赫満族鎮《1986年8月28日》《1988年8月21日》《2013年9月4日》

葉赫満族郷は、建州女直に対抗した海西女直葉赫族の根拠地であると共に、1986年当時、筆者の勤務していた弘前大学に近い青森県中津軽郡西目屋村と1985年4月に友好村関係を締結していたので、訪れたいと考えていた。

1986年「清史国際学術討論会」で筆者の所属した部会の議長であった薛虹氏（当時東北師範大学）にお願いした結果、薛虹氏と王松齡氏に案内されて、1986年8月28日に加藤直人氏と共に訪れることができた。

1988年8月21日には、前記「国際共同研究」に伴う「清入関前史学術討論会」の史跡参観として、神田信夫氏（明治大学）・松村潤氏（日本大学）、薛虹氏・王松齡氏など日中

(28) 『地図集遼寧』321頁の「老城清真寺」（老城街道内・清代・省文物保護単位）に、大殿と東側的大庁があり、「大殿座西朝東坐落在用条石砌成的基上。硬山式磚木結構。…後有1933年建起的三層樓閣式建築望月樓、亦称遥殿、頂端裝有象征伊斯蘭教月牙和星星。現保存完好。」とある。また、「重修清真寺碑」（老城街道清真寺内、1935年）に、「碑高1.2米、寬0.41米、厚0.17米、記載重修清真寺的起因、維修經過和重修後的規模等。碑陰刻教会人員姓名。」とある。

の清史研究者と共に、張雲樵氏（当時四平師範学院）・趙殿坤氏（当時四平博物館）の案内で探訪した。2013 年 9 月 4 日には、満族歴史語言研究所の許氏、呉氏などの案内で訪れた。

《1986 年》：四平市から南西へ、四平市と葉赫満族郷を隔てる峠の登り口にある邊牆の辺門があったことに因む山門と山門水庫を過ぎ、峠から下ると河幅 20m ほどの浅い葉赫河に出る。梨樹県葉赫満族自治郷は葉赫河左岸にあり、こぢんまりとした庁舎には満漢文「li šu giyan / yehe manju gašan i / žin min jeng fu 梨樹県／叶赫満族郷／人民政府」の表札が見える【写真 13-40】。満族那拉姓を称する李青田村長から、村は平地が少なく、山林で日本に輸出する山菜、林檎、山査子の栽培と畜産を、平地で玉蜀黍、高粱、大豆を中心に水稻も耕作しているなどの村の概況と西目屋村との友好村締結について聞いた。

《1988 年》：1986 年当時の村名は「梨樹県葉赫満族自治郷」であったが、88 年には「自治」がなくなり「郷」は「鎮」に変わり「梨樹県葉赫満族鎮」となっている。村長は李村長から宮村長へ交代、庁舎（鎮政府）には梨樹県の概況を示した地形模型が飾られている。

《2013 年》：「梨樹県葉赫満族鎮」の行政区が梨樹県から四平市鉄東区に変わり、鎮名は「四平市鉄東区葉赫満族鎮」に改められ、庁舎も以前とは相違した四階建てとなっている【写真 13-41】。また西太后の祖籍＝葉赫那ラの根拠地を掲げた「葉赫古城観光区」と「転山湖観光地区」を設けた観光事業が推進されているようで、葉赫鎮には商店街が建ち並び、転山湖一帯には鑲黄旗房など八旗にちなむ食堂名のある転山湖賓館、遊楽園、湖岸一周道路などが設けられ、旅游基地に様変わりしている【写真 13-42、13-43】。

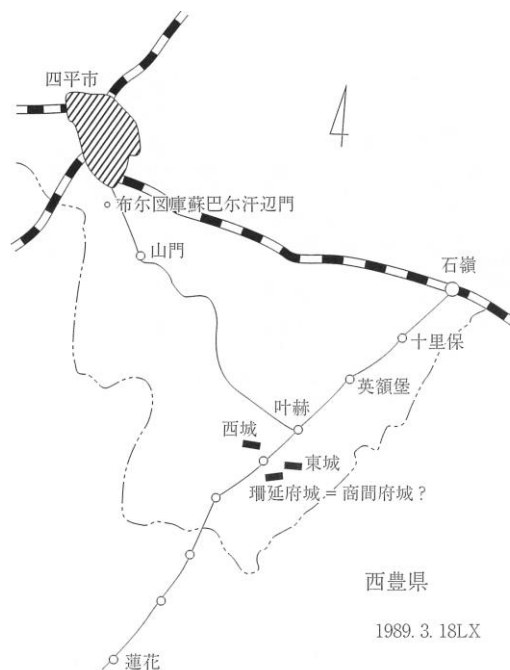


図 13-3 葉赫満族自治郷・葉赫東城西城
位置図 張雲樵氏作成

6 葉赫城

17 世紀初頭に葉赫族の拠点であった葉赫城は、西南に流れる葉赫河に沿って、左岸に平城の東城、右岸に山城の西城があり、葉赫東城・西城共に、天命四年（1619）八月、清太祖ヌルハチによる攻撃によって攻め滅ぼされた。ヌルハチの葉赫攻撃を伝える『満洲実録』と『満文老檔』では、東城と西城の記述が逆になっている。すなわち、『満洲実録』では東城が山城、西城が平城のように記述されているが、『満文老檔』では東城が平城、西城が山城のように記されている。両書の記述が逆であることは既に指摘されていて⁽²⁹⁾、現地に立ってみるならば、東城が平坦地の台地にある平城で、西城が葉赫河の河原から高距 120～30m ある山の一郭を占めた山城であることは明らかであり、筆者も『満文老檔』の記述に従ってよいと考えている。

⁽²⁹⁾ 松浦茂『清の太祖ヌルハチ』（白帝社、1995 年）「イエへの系譜」「イエへの滅亡」の項。

6.1. 東城

葉赫鎮の南東、葉赫河の左岸にある平城⁽³⁰⁾。

《1986年》：当時は人民公社名が地名に使われており、「葉赫公社葉赫大隊河西屯」の南西 500m の畑の中に位置するとの説明であった。開原への県道に「葉赫東城」の標識が建ち、道路から 50m ほど入った地点が「西門跡」、それに続いて高さ 10m ほどの、磚の残存する内城壁があり、付近に瓦や磚が散乱している。史跡標示に「周長六百九十米」とある四周は、ほぼ残存しているようである。調査によれば、内城は東西に長く南北に狭い楕円形で、周囲 900m、南東方向に 2 つの馬面が、内城壁の馬面近くに点将台と烽火台があり、建築物遺構も残るとのことである。何処の城址も同じであるが、内城壁の内側＝内城台地と外城壁に続く外側は、一面に丈の高い玉蜀黍が植えられ、遺構を観察することは困難である【写真 13-44】。内城壁外の畑の中に外城壁があるとのことであったが、外城壁遺址は全く確認できない⁽³¹⁾。

《1988年》：1986 年と同様に西門付近から内城台地へ、内城壁を南門と推定される切り開き付近まで足を伸ばしてみたが、86 年同様に玉蜀黍が生い茂り、内城壁の全容と内城内部の様子は不明のままである。

《2013年》：城壁そばに史跡表示の建つ南側城壁から内城台地へ入った。内城台地は以前の玉蜀黍に代わり、染料の原料となる万寿菊（アフリカンマリーゴールド）が一面に植えられている。花丈は高くないので、台地内部、内城壁の様相が確認できる【写真 13-45】。内城のほぼ中央を南から北に通る抜け、北西角近くの城門跡とも思われる切り開き（ここが 86, 88 年に訪れた西門かもしれないが確認していない）から城外へ出たが、北側城壁近くには 2m ほど掘って断念した盗掘跡があるという。

同行した満族歴史語言研究所の 1 人は、「内城東側城壁近くにある小高い丘が、ヌルハチに攻められた東城城主のギンタイシが火を放った八角形の望楼“八角明楼”の遺址」と、東城について『満洲実録』の記述に従って考えている⁽³²⁾。

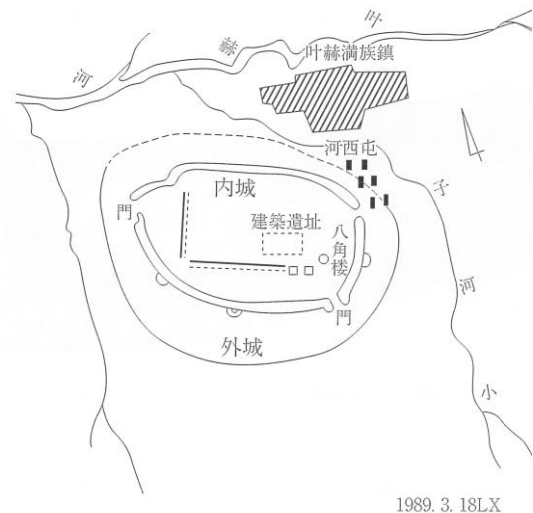


図 13-4 葉赫東城概略図 張雲樵氏作成

(30) 『中国文物地図集 吉林分冊』（国家文物局、1993 年、以下『地図集吉林』）89 頁の「葉赫古城（東城）」（葉赫鎮葉赫村河西屯南 500 米・明・省級文物保護單位）に「平面呈楕円形、周長 900 米、城牆系土石混築、基寬 18 米、上寬 3 米、高 2.5 米左右、東・北・西各開 1 門并有瓮城、牆垣上有 3 個凸出的土台似為城樓遺跡、城内偏東有建築台基 4 处、最大的長 40 米、寬 20 米、城内採集有雕琢花紋的八角形礎石…魚紋泥質陶片等。破壞嚴重。」とある。

(31) 吉林師大展示室「満族民俗館」に、採集釉器片を「葉赫東城内城」と「葉赫東城外城」に分けて展示しているので、採集当時は外城＝外城壁が存在していたと推定される。

(32) 東城＝山城、西城＝平城と考えているならば、前注に記した「釉器片」の採集地「東城」と「西城」は再確認する必要がある。

6.2. 西城

葉赫鎮の南西、葉赫河右岸の、河岸から高距 120m ほどの台地上の自然地形を利用した山城⁽³³⁾。

《1986 年》：「葉赫公社張家大隊大高堡屯」西南 1.5 km、東城から直線距離で西南 2～3 km に位置するとの説明である。なお、史跡標示には東城と西城が「五華里」離れていると記している。葉赫満族郷から開原に通じる道路を南西に、途中で右折して北東へ向かい、橋がないので大水の時には車は通行できないという葉赫河の浅瀬を渡り、西城のある台地の下へ【写真 13-46】、葉赫河に流れ込む季節河に沿ってつけられた小道をたどり台地の上へ出る。山城の南側は 70～80m の崖となって葉赫河に落ち、西側も小さな谷を抱きながら季節河に落ちている。山上の台地の平坦地に建築遺構があり【写真 13-47】、それを巡って高さ 3m ほどの、部分的には 2 重 3 重の内城壁が残存している。全体が南側に低くなった台地の上は松林で見通しがきかず、内城壁の連なりを見通すことはできない。

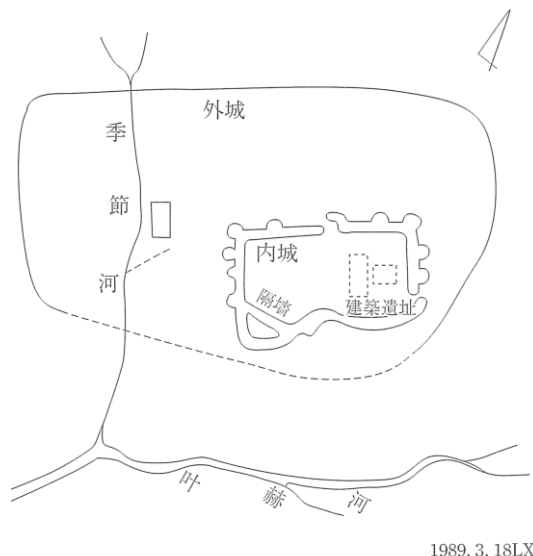


図 13-5 葉赫西城概略図 張雲樵氏作成

調査によれば、内城の城壁総延長は 850m、城門は 3（発門を備えた西門、西北角、西南角）、外城壁は破壊が甚だしく東、北、西の一部分に 1,300m 残存しているとのことである⁽³⁴⁾。台地や西側の山裾に柱の礎石【写真 13-48】が、東城と同様に西城の台地にも陶磁片や磚の欠片が落ちている【写真 13-49】。満族歴史語言研究所ではこのような陶磁片などを採集・整理していて、展示室に東城・西城採集の陶磁片などが展示されている【写真 13-50】。

《1988 年》：車は増水している葉赫河を渡れないので、予約しておいた馬車で渡り【写真 13-51】、時々雨の降る中を、1986 年と同様に内城壁、内城台地と台地上の外城壁をたどって西城を一周しながら規模を推定する。前回と同様に内城などで陶磁片や磚欠片を目にした。

《2013 年》：葉赫河を 2005 年 8 月竣工の文順橋で渡り、西城台地の北側につけられた張家村へ至る道路を車で登ると、ここが「天然酸素と旅游の景勝地であることを謳った“葉赫部王城（西城）遺址公園”」の看板が建っている。さらに玉蜀黍畑の中の農道を走り、北側から台地上部の外城壁付近に到着した。城壁址の残る一帯は松林で【写真 13-52】、遺址公園として整備したのであろうか下草は刈られ、茸狩り、羊や牛に草を食ませる人などが見受けられた。台地上の城内を歩き回ると、礎石や陶磁片などが見受けられたが、史跡標示

⁽³³⁾ 『地図集吉林』89 頁の「葉赫古城（西城）」（葉赫鎮張家村大窩堡屯東南 1.5 米（千米、公里の誤記？）・明・省級文物保護單位）に「建于山丘之上、分内、外二城。内城平面呈不規則橢圓形、周長 850 米、土石混築、有門址 3 処、有瓮城、城垣基寬 5-10 米、上寬 2-5 米、殘高 1-1.5 米左右、南有 1 牆端將城一分為二、北部有長 50 米、寬 30 米、高 2 米建築基址一処。外城呈不規則長方形、依山勢土石混築、周長約 2.8 千米、多殘毀。城内發現有泥質灰陶片、磁片、瓦礫、石臼等。有人考此城為明中葉女真葉赫部所築、曾兩度遭兵燹。現破壞嚴重。」とある。

⁽³⁴⁾ 外城壁は山の下、葉赫河河畔にも築かれていたと推定されるが、その存在を今まで確認していない。

は全く見当たらない。86、88年当時と様変わりしていることや筆者の記憶が定かでないことなどから、以前の状況と照合して考えることはできなかった。城壁沿いに南に歩き台地の端に出ると、東北に葉赫河と葉赫東城の台地を見ることができた【写真13-53】。

7 商間府城

葉赫河左岸にある葉赫～開原の要衝に位置する小城堡で、北に葉赫西城を間近に望むことができる。

《2013年》葉赫西城の帰路に訪れたが、葉赫満族鎮から開原へ通じる道路を南へ、葉赫西城へ文順橋へと右折する道の少し開原寄り、道路の山側、左手に100mほど入った場所にある。道路に史跡標示などはないので、案内されなければ城址を訪ねることは難しいであろう。城址は葉赫河左岸に続く傾斜地に位置していて、玉蜀黍畑の中に城壁址が残っているが、丈の高い玉蜀黍に阻まれ、全体像ははっきりしなかった【写真13-54】。近くに建つ1990年の史跡標示に「内城の周囲450m、外城の周囲624m、内外城壁共に1門、内城に角楼1」と記され、小規模の城堡である。小さいとはいえ葉赫西城にも近く【写真13-55】、葉赫（女真）と開原（漢族）を結ぶ交通の要路を押さえる城堡であろう⁽³⁵⁾。

8 布爾図庫辺門

四平の南に位置する柳条邊牆の辺門である⁽³⁶⁾。

《1986年》：四平から葉赫満族郷へ行く途中に山門鎮を通過した時に、ここに辺門があったとの説明であったが、史跡があったのかどうかは不明である。

《1988年》：葉赫城から四平への帰り道に、辺門の兵舎を修復復元した「布爾図庫辺門遺址」を訪れた。辺門の建物は陳列館となっていて【写真13-56】、史跡標示には康熙九年

⁽³⁵⁾ 「史跡標示」には以下のように記されている。「商間府城。明代海西女真葉赫部修築の城堡。城牆為土石混築、分？（1字不明）内外兩重、兩牆間距二十四米、内城周長四百五十米、外城周長六百二十四米。内外城現各季一門址、内城西南有一角楼、高四米。商間府城是葉赫部控制明朝与女真各部貿易交通的重要城。方趙東撰、田子馥書。一九九零年五月」。また、「清先史学会」（1990年8月28～30日：吉林市東関賓館）で張雲樵は「関于葉赫古城」という題で発表し、「1988年の調査で発見した珊延府城は塔魯木衛女真人が南遷して葉赫河流域に築いた根拠地であり、葉赫東・西兩城より小規模な平城で、外城が東西124m・南北188m（計629m）、内城が東西80m・南北145m（計450m）、城壁下底10m・上幅3m」と述べている。規模と位置から、商間府城は珊延府城に相当するとも推定し得るが、詳細は不明である。『地図集吉林』には、「珊延府城」と「商間府城」は共に記載されていない。

⁽³⁶⁾ 『地図集吉林』79頁の「布爾図庫蘇巴爾汗辺門衙門」（鉄東区山門鎮内・清・省級文物保護單位）に、「漢名“半拉山塔子山”、清康熙年間修築的“柳城辺”辺門之一、原有吊橋・大門・兵丁房・官員府和大堂等建築。房舍均硬山頂磚瓦結構、四合院式布局。建築物多拆除、防禦官員府已改為民宅。唯兵丁房尚好。面積67平米。1986年修結後、已辟為“柳条辺文物陳列館”。」とある。また、『同書』四平市、79頁の「柳条辺牆遺址」（南自山門鎮二台村西北甸子屯入境、北至長髮郷小塔子村前洼塘溝屯出境・清）に「清康熙年間所築“新辺”之一段。系一道由堤・堀組成的土垣、上植柳樹、故名。在本市内綿延22千米、延辺有辺台2個、辺門1处。保存較好段土垣基寬3-4米、殘高1.5米左右。深1.5-2米。大部破壞嚴重。」とある。なお、辺門の漢語名“半拉山”は山門鎮の西南に位置している。

(1670) から光緒二十年(1894)まで230年近く使用されていたと記されている⁽³⁷⁾。「建築形成図」には、邊牆の中に兵丁房・大老爺府(防禦衙門)・二老爺府(筆帖式衙門)・関帝廟が図示され【写真13-57】、陳列館内の邊牆図には、柳条邊牆の由来などが記されている⁽³⁸⁾。

《2013年》: 葉赫から四平への歸路に立ち寄る。建物はあるものの、史跡標示「布爾図庫辺門遺址」は汚れてしまい、説明も併せてほとんど読むことができない。建物は閉じられていて陳列館があるのかどうかは不明、1988年当時の面影を見出すことは出来ない【写真13-58】。全ての民族を中華民族として統合する現在、華と夷を隔てる象徴である邊牆や辺門は、否定されるべき史跡なのであろうか。写真撮影をしていると、近くに60年余り住んでいるという人が、辺門の脇の南北に延びる道路に邊牆が走っていた、辺門は道路のここにあった、遺址となっている建物は役人の詰所だったなどと教えてくれた。布爾図庫辺門から南へ延びる邊牆は1988年に訪れた開原北方に位置する威遠堡辺門へと続いていたのであろう⁽³⁹⁾。

⁽³⁷⁾ 1988年当時の「史跡標示」に、「布爾図庫辺門始建于康熙九年(1670)、康熙二十年(1681)設五品防禦官、率兵駐守。光緒二十年(1894)廢棄、滿語全稱「布爾図庫蘇巴爾漢」門、漢語為「半拉山塔子」門、原設有門樓・兵丁房・防禦衙門・筆帖式官邸等建築、這是新老柳辺二十座辺門唯一保存下來的一座古建築、1986年四平市政府撥款」と記されていた。

⁽³⁸⁾ 陳列館「柳条辺」の説明に「前言: 柳条辺、又称柳辺或条子辺、是橫跨遼寧・吉林兩省的清代重要歷史遺跡。由于修築的時間和所在地域不同、分為老辺(盛京辺牆)和新辺(吉林辺牆)兩部分。老辺南起遼寧綏中県永安堡郷康家房子村北側、与明代遼東長城相接。北經綏中・興城・錦州・義県・北鎮・黒山・新民・法庫至開原南折、經清原・新賓・寛甸・鳳城至東溝県十字街郷大老房村南至海。全長一千九百余華里。建于順治元年至十八年(1644-1661)、設鳴水塘・白石嘴・梨樹溝・松嶺子・新台子・九官台・白土場・彰武・法庫・威遠堡・興京・旺清・碱廠・饒陽・鳳凰城十六座辺門。其中明代遼東長城至清河門之間、曾于康熙十四年、二十五年和三十六年三次向外擴展。新辺、南起遼寧省開原県老城鎮大楊堡村西北三里黄龍岡、北經昌図・四平・梨樹・公主嶺・長春・九台至舒蘭県法特哈郷辺頭村東亮子山、全長六百九十余華里。建于康熙九年至二十年(1670-1681)、設布爾図庫、赫爾蘇、伊通河和巴顔俄仏羅(即法特哈)四座辺門。柳条辺の修築方法、在辺外掘壕、辺里築牆、牆上植樹、柳上結繩、似中原的竹籬笆。清王朝修築柳条辺的目的、是防止辺外蒙古和漢人到辺里打獵、放牧、開荒種地和掘人參、以保護遼西走廊入関通道和長白山区的自然資源。所以說柳条辺是清代地域封禁標示和行政区劃線。清末、随蒙荒放墾柳辺漸廢。本館系布爾図庫辺門的付屬建築「兵丁房」。一九八六年市政府撥款修復、它是柳辺(新老辺牆)二十座辺門、唯一保留完整的辺門衙門建築。為了讓廣大的觀衆了解柳辺的歷史、一九八七年將這一古建築群『柳辺文物陳列館』。陳列有関柳辺的文獻和文物。歡迎廣大觀衆和專家學者參觀指導。」と記されていた。また、「柳条辺地図」の説明に「柳条辺、清代地方行政区劃標示、其修築方法、大部地段在辺外掘壕、辺里築牆、牆上插柳、柳上結繩、以限人畜跨越。故曰『插柳結繩、以限内外』。在主要通道上設辺門派官兵駐守。辺門早辟晚開。進出辺者均需從辺門通過、入辺者交錢四百文、出辺者交錢二百文。辺門設有衙門、有五品防禦和七品筆帖式職官、均系滿洲旗人。防禦缺出從驍騎校中選用、筆帖式缺出從被甲兵中選用。又沿辺置辺台、駐台丁春秋兩季修壕補柳。故今沿辺多有「頭台子」「二台子」「三台子」等村落。」と記されていた。

⁽³⁹⁾ 威遠堡には1988年9月9日に赴いた。当時の開原県威遠中学校庭に「威遠堡城」の史跡標示「県級文物保護單位/威遠堡城/開原県人民政府/1984年7月22日」が、門の北側の威遠堡門衙門を再利用したという食堂の前に「威遠堡辺門」の史跡標示「県級文物保護單位/威遠堡辺門/開原県人民政府/1984年7月22日」が建っていた。また『満洲写真帖』No.146「威遠堡門」に「開原ノ北方ニ在リ明代辺牆(ママ)ノ要地トシテ知ラレ…」とあり、No.149~152に開原の北、威遠堡付近の辺牆の写真が掲載されている。

ここ10日足らずの間に見た多くの史跡、その最後に眼にした史跡の変貌、史跡を含めた史料理解の難しさを考えながら、吉林師範大学への帰路についた。

おわりに

2013年8月28日、皮口から始まった今年の史跡探訪は、9月5日に四平から長春経由で北京に到着して終了した。9日間で皮口・長山島、海城・瀋陽、開原・鉄嶺、四平・葉赫満族の5ヶ所、主要な史跡だけでも20余りという駆け足の旅で、史跡の一端を垣間見たに過ぎないが、その多くが1986・88年以来の、28～26年ぶりの再訪であった。

28年前、当時の北京空港は小さく、発着する飛行機の数もそれほど多くはなかった。今や同空港は、国際線と国内線に分かれ、巨大なターミナルの中を搭乗ゲートに行き着くまでかなりの時間を移動しなくてはならぬほど発展した。このような中国の発展は、地方にも都市化、観光地化などの流れをもたらし、否が応でも各地の史跡を変貌させることになった。今回は、文献・史料と同様に史跡もまた時代と共に変容することを改めて実感させられた旅でもあった。

史跡探訪がままならなかった時代、未開放都市の立ち入り許可を取り、史跡関係者と連絡し、史跡を案内して下さった孫文良、薛虹、王松齡先生などは、既に幽明境を異にされた。また筆者と共に広く東北の史跡を訪ね歩いた神田信夫先生も今は亡い。

中国の史跡は、大きく変容し、現在も変容しつつある。したがって、諸先生と共に訪れた史跡の過去の写真・史跡標示・史跡図・パンフレットなどやフィールドノートは、今や大変貴重なものとなった。本章では、2013年の再調査を踏まえて1986年、88年の調査時との違いを示すことにつとめた。いまや失われた、いや失われつつある貴重な文化遺産の過去の記録を提示することが、当時ご援助をいただいた諸先生の学恩に少しでも報いることになれば幸いである。

2013年の旅も、中国社会科学院近代史研究所劉小萌氏と中国人民大学清史研究所張永江氏と共にしたが、各地への事前連絡や折衝、飛行機や列車などのチケット入手をはじめとして多くの面で両氏にお世話になったことをここに記し、感謝するものである。

(原載：『アジア流域文化研究』X、2014年)



写真 13-1 尚氏陵园跡一玉蜀黍畑（1986年）



写真 13-2 尚氏陵园一尚可喜墓への参道（2004年）



写真 13-3 馬風鎮山中の尚之廉墓（2004年）



写真 13-4 東陵村尚氏陵园跡一尾根の一角（2013年）



写真 13-5 楊家園子の神道碑（1996年）



写真 13-6 再建された神道碑と碑亭（2004年）



写真 13-7 満漢合璧碑（2004年） 写真 13-8 尚可喜・王妃・夫人墓（2004年）



写真 13-9 尚之信墓碑（2013年）



写真 13-10 尚氏陵園内の碑林（2013年）



写真 13-11 記念館内の尚可喜像（2013年）



写真 13-12 閑散佐領印（2004年）



写真 13-13 閑散佐領印の印面（2004年）



写真 13-14 尚氏家廟跡の旱柳（2013年）



写真 13-15 焼けた三学寺（1986年）



写真 13-16 三学寺境内の石碑（1986年）



写真 13-17 修復中の三学寺山門付近（2004年）



写真 13-18 三学寺山門と如来八宝塔（2013年）



写真 13-19 関帝廟の碑林（2004年）



写真 13-20 鉄嶺南西の辺牆を利用した農道（2013年）



写真 13-21 鉄嶺門通寺白塔（1906年）

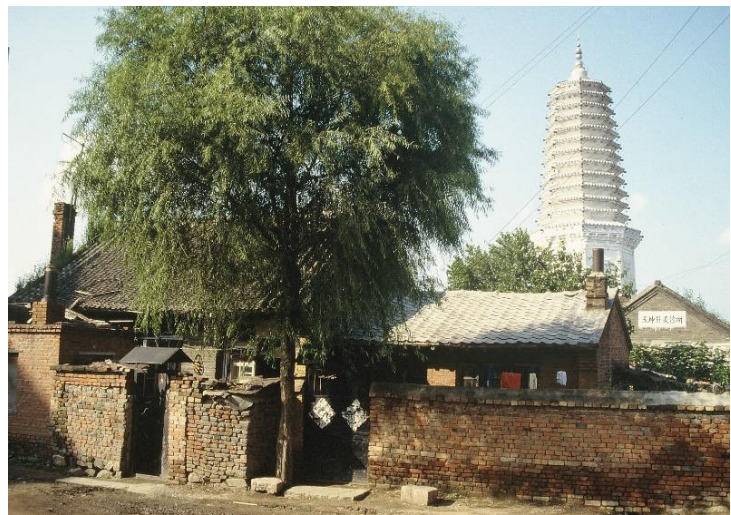


写真 13-22 鉄嶺門通寺白塔（1988年）



写真 13-23 鉄嶺門通寺白塔の石碑（1988年）



写真 13-24 鉄嶺門通寺白塔（2013年）



写真 13-25 鉄嶺銀岡書院（1988年）



写真 13-26 鉄嶺銀岡書院（2013年）



写真 13-27 開原老城東門付近の城壁
(1988年)



写真 13-28 開原老城東門付近の城壁 (2013年)



写真 13-29 開原老城南側城壁址 (1988年)



写真 13-30 開原老城南側城壁の排水溝遺址 (1988年)



写真 13-31 開原老城 再建された南門 (2013年)



写真 13-32 開原老城内の街路 (1988年)



写真 13-33 開原老城 鼓楼付近 (1988年)



写真 13-34 開原老城 再建された鼓楼 (2013年)



写真 13-35 開原老城 鼓楼付近の古い家並み (2013年)



写真 13-36 開原老城 崇寿寺（1988年）

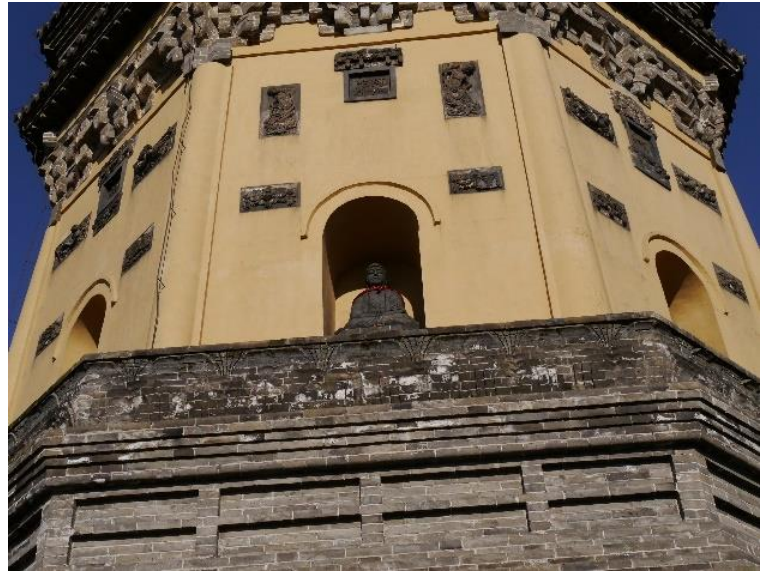


写真 13-37 開原老城 崇寿寺（2013年）



写真 13-38 開原老城 清真寺（2013年）



写真 13-39 吉林師大滿族民俗館の展示（2013年）



写真 13-40 葉赫滿族郷人民政府（1986年）



写真 13-41 葉赫滿族郷人民政府（2013年）



写真 13-42 農業用水庫の転山湖（1986年）



写真 13-43 観光地と化した転山湖（2013年）



写真 13-44 葉赫東城 内城壁址（1986年）

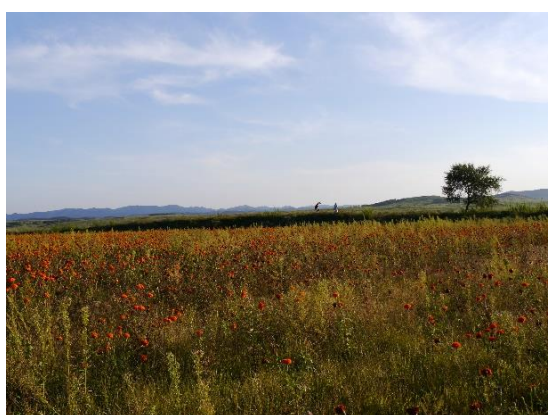


写真 13-45 葉赫東城 内城台地（2013年）



写真 13-46 葉赫河と葉赫西城全景（1988年）



写真 13-47 葉赫西城 内城台地(1988年)

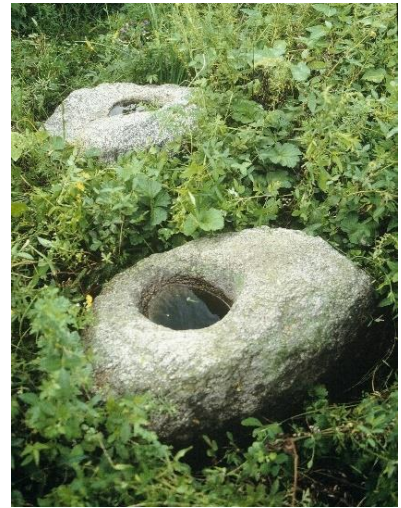


写真 13-48 葉赫西城 柱礎石(1988年)



写真 13-49 葉赫西城 陶磁片(1988年)



写真 13-50 葉赫東城出土陶磁片 吉林師大滿族民俗館(2013年)



写真 13-51 葉赫河を渡って葉赫西城へ(1988年)



写真 13-52 葉赫西城の城壁址(2013年)

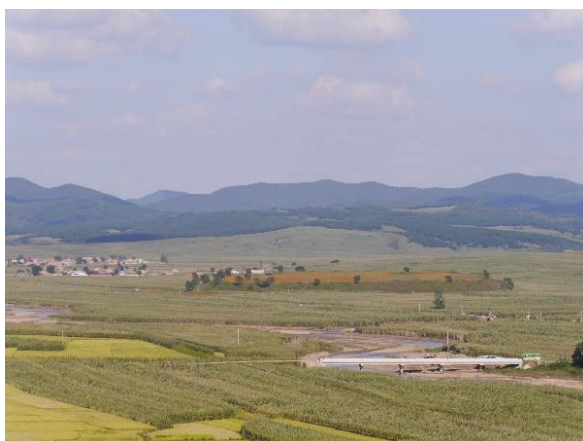


写真 13-53 葉赫河と葉赫東城の眺望（2013年）



写真 13-54 玉蜀黍畑の商間府城城址（2013年）



写真 13-55 商間府城付近からの葉赫西城（2013年）



写真 13-56 布爾圖庫邊門 史跡展示館（1988年）



写真 13-57 布爾圖庫邊門建物配置図（1988年）



写真 13-58 荒れ果てた布爾圖庫邊門（2013年）

第 14 章

嫩江・松花江流域の清朝史跡 —再訪の烏拉街 1987・88・94・2014 年—

はじめに

2014 年 9 月 1 日から 15 日まで中国を訪れ、その間に黒龍江省肇源県で尚可喜の子孫を訪ね、その後に塔虎城や伯都城、烏拉街など、嫩江と松花江流域に残る金・清王朝の史跡を探訪した。

旅の概要は以下のとおりである。9 月 3 日、中国人民大学清史研究所張永江氏と共に列車で四平へ赴き、中国社会科学院近代史研究所劉小萌氏、前年葉赫古城を案内して頂いた吉林師範大学満族文化研究所の吳忠良氏などに出迎えられ、翌 4 日、吉林師範大学満族文化研究所の皆さんと共に、四平市から長春、松原を経由し、三江口で折れ曲がって西から東へと流れる松花江⁽¹⁾を渡って黒龍江省肇源県へ、ここで清朝時代肇源に設置された駅をめぐり座談会に出席、その後、尚之節の後裔を肇源県三站と福興郷に訪ねた。

6～7 日の間は、松原市を拠点に嫩江右岸流域から松花江左岸流域に広がる前郭爾羅斯蒙古族自治県にある塔虎城、查干湖、孝莊祖陵満蒙碑、泥林、扶余市の伯都古城などを訪れ、8 日に松花江右岸を西へ向かい松原市から吉林市へ移動、その途中で郷族村、鎮王府屯村に立ち寄った。

9～10 日の間は、吉林市を拠点に松花江左岸に位置する舒蘭市の完顔希尹墓地、烏拉街満族鎮を訪れ、9 月 11 日に張永江氏と共に長春・嘉龍空港から北京に戻るという、多忙ではあるが充実した日程であった。

なお、筆者は孝莊祖陵満蒙碑へは 2001 年に、伯都古城へは 1987 年に、烏拉街へは 1987 年、1988 年、1994 年に訪れている。また、烏拉街へは満族史・清朝史研究に携わる松浦茂氏が 1993 年、後藤智子氏が 1994 年、承志氏と杉山清彦氏が 2005 年に訪れているので⁽²⁾、今年訪れた史跡の様相と共に、筆者の過去の記録、諸氏の記録を参照しながら史跡の現状を記しておきたい。

⁽¹⁾ 松花江に嫩江が合流する三江口で、東から西へ向かって流れてきた松花江は、流れる方向を 180 度変え、ここから東に向かって流れる。以前は三江口より上流の松花江を第一松花江、下流を第二松花江と呼んでいたが、現在は使われていないようである。三江口には、1987、88 年に前郭から船で松花江を下って訪れ、松花江の果たす役割を知った。濁色の松花江に澄んだ嫩江が合流する事から、三江口付近の第二松花江を混同江と称すると教えられた。松花江、嫩江共に舟運が盛行していて、歴史上、両河川が果たした交通路としての役割を考慮する必要がある。

⁽²⁾ 細谷良夫『中国東北部における清朝の史跡—1986～1990 年—』（東洋文庫・中央アジアイスラム研究室、1991 年、以下〔細谷 1991〕）、松浦茂『清の太祖ヌルハチ』（白帝社、1995 年）「ウラの系譜とウラ城」の項、後藤智子「烏拉街探訪」（『満族史研究通信』第 4 号、1994 年、以下〔後藤 1994〕）、承志・杉山清彦「明末清初期マンジュ・フルン史跡調査報告—2005 年遼寧・吉林踏査行—」（『満族史研究』第 5 号、2006 年、以下〔承志・杉山 2006〕）。



図 14-1 嫩江・松花江流域の探訪史跡図

1 北京→四平→肇源県

9月3日早朝、張永江氏と共に北京駅へ赴き、北京7時20分発長春行きD21次列車に乗り込む。この列車は北京駅を発車すると北戴河、葫蘆島、瀋陽北駅に停車するだけで、北京から880km余りを走って四平東站到13時3分に到着する。普通車であるが乗客は7割ほどでゆっくり過ごせる。北戴河を過ぎると間もなく山海関、長城が見えるかと目を凝らしたが、峨々たる山稜を目にするのみで長城は確認出来なかった。

山海関から錦州までの間は、遼東湾に面した海岸線と遼東辺牆の走る燕山や努魯儿虎山脈に挟まれた「遼西回廊」、1988年国際共同研究「清代東北地域の総合的研究」の一環として、遼寧社会科学院歴史研究所の案内で、錦州から山海関までの間に残る寧遠城(興城)、前所城、沙後所、威遠堡等を訪れたが、これらの史跡は、今はどうなっているのだろうか。列車は山沿いを走るため海岸線に位置する街々は全く確認出来ず、寧遠城に近い首山⁽³⁾が見えるのみであった。

瀋陽北駅を出発するとほどなく四平東站、駅には劉小萌氏、呉忠良氏、聶有財氏などが出迎えてくれた。昨年は列車を利用せず四平東站を知らなかったのが、20数年ぶりに見る四平駅の変容に驚嘆させられた。

翌4日早朝に学生食堂で朝食を済ませた後に、このたびの調査旅行に参加される許淑杰

⁽³⁾ 1988年8月24日に「中国興城国際袁崇煥學術討論会」の史跡参観で、首山の頂上に残る遼西回廊に設置された烽火台を訪ねた。

氏を始めとする吉林師範大学満族文化研究所の一行と劉小萌夫妻、張永江氏、筆者夫妻は準備されたマイクロバスに乗って肇源県へ向かった。肇源は黒龍江省大慶市所属で第二松花江の北に位置する街であり、四平から長春へ赴いた後に北上、第一松花江河畔の松原市を経て西流する第一松花江を渡り、続いて東流する第二松花江を渡った北にある。

2 肇源県

小雨の肇源には13時過ぎに到着、G45路の肇源出口には肇源站人文化研究学会の方々が出迎えてくれた。肇源に到着して程なく、肇源賓館の一郭で肇源站人文化研究学会主催「吉林師大来肇源考察座談会」が開催された。

◆吉林師範大学来肇源考察座談会《2014年9月4日》

清代康熙年間に設置が開始されたこの地方の駅路は、吉林或いは呼蘭から齊齊哈爾を経て墨爾根に至った後、黒龍江城（愛琿）或いは漠河を繋ぐ連絡網として機能し、吉林將軍或いは黒龍江將軍の管轄下に置かれた各駅には、領催などの官員の下に30名ほどの站丁が配置されていた。肇源県は呼蘭或いは吉林と墨爾根を繋ぐ結節点に位置していて、県の東西を貫く駅路が走り、西の古龍站、東の三站などの間に6ヶ所の駅が設置されていた。このため、肇源県には駅の壯丁である站丁の子孫が多く、彼らは1990年代から駅と站丁の歴史と文化を探求してきた。2010年5月に、吉林師範大学歴史学院の指導と肇源県政府の賛同を得て「肇源站人文化研究学会」が発足、駅と站丁をめぐる史料の収集と整理を行い、本年春には肇源文史資料叢書『肇源駅史略』（陳樹彪主編、2014年）を刊行している。

座談会は、吉林師範大学満族文化研究所員の来県を機会に開かれたもので、県政協副主席・站人後裔の陳樹彪学会長の挨拶、出席者の紹介に続き、站人文化研究会の会員から、站丁は何処から発遣されたのか、站丁の戸籍は八旗戸籍か民間戸籍か、站丁家譜の史料価値などをめぐって、問題点の提起と質疑応答が行われた。また、筆者の出席を配慮して頂いたようで、站丁の後裔でもある尚之節の子孫の尚広杰氏が、家廟は光復時期（1945年）に破壊された事などを「肇源尚氏の出自と族譜編纂」と題して報告された。尚広杰氏の報告が行われた事もあってか、「尚氏宗親会総族長」の尚世海氏、「肇源尚氏宗親会族長」の尚大安氏等が出席されていた【写真14-1】。

清朝の駅制度をめぐる諸問題は未解明の分野であろうが、筆者が特に注目しているのは、康熙十二年（1673）に勃発した三藩の乱の中心人物で雲南、貴州を支配した呉三桂の配下や呉三桂に呼応したとされる広東の尚可喜の第4子尚之節の後裔が、どのような経緯を経たのかは明らかではないが、当地の站丁に充当され、今に続いている事である⁽⁴⁾。

◆肇源博物館《2014年9月4日》

座談会終了後に、「肇源博物館」を見学した【写真14-2】。博物館には「白金宝」文化に属する出土物などの他に、站丁の祖先が守備に任命された割付の写真、『頭臺楊氏族譜』、『茂興楊氏族譜』、『茂興李氏家族譜』、『徐氏族譜』、肇源『尚氏宗譜』などの站丁の後裔を

⁽⁴⁾ 呉三桂の配下が雲南から東北地方に送られたことについて、1988年8月22日に、吉林社会科学院歴史研究所李治亭氏から、呉三桂や呉世璠の年号を鑄した「昭武通寶」と「洪化通寶」を見せて頂き、彼らの配下が黒龍江に流され、その子孫がまだ現存するとの事を教えて頂いた。

伝える宗譜が展示されていた。中でも三站在住・尚広江氏所蔵「家堂図」の写真である「尚氏宗譜画像」に目を奪われた【写真 14-3】。

3 肇源尚氏・尚之節後裔所有の家譜

筆者は三藩の乱をめぐって、尚可喜一族の諸問題を中心に検討してきたが、その一つに三藩の乱が終結した後の康熙十九年（1680）八月甲申二十八日になって、尚可喜の長子＝大房尚之信を始めとする4人が反乱に加担した事を理由に処刑された事がある。大房尚之信、4房尚之節、12房尚之璜、14房尚之瑛の4人は処刑され、彼らの妻子は「籍没入官」すなわち準宗室とも見なされる平南王一族の身分が剥奪され、内務府管轄下にある奴隸身分に落とされた。しかし康熙四十一年（1702）に至って、功臣の子孫である事を理由に罪が許され、四人の子孫は「給回歸宗完聚」すなわち尚氏一族に復籍する事が認められた。具体的な表れとしては「尚氏宗譜」の中に、尚之信を始めとして、処刑された4人の子孫の、氏名や官職と子孫の系譜、及び墓所が記録される事となった。ただ、尚之節の子孫だけは「尚氏宗譜」に全く記述が無く、之節の子孫の消息は不明であった⁽⁵⁾。

尚之節の子孫が肇源に残っている事を知ったのは、昨年9月、吉林師範大学満族文化研究所の「八旗譜牒館」資料室で、肇源『尚氏宗譜』（肇源尚氏宗親理事会、2006年12月）を見た時で、早速、肇源『尚氏宗譜』を複写して頂くと同時に、肇源に出向き尚之節の後裔と会い、所有する家譜を見せて頂く事を希望して、今年の探訪旅行を設定して頂いた次第である。なお、尚之節の子孫が肇源に残る事を伝えている肇源『尚氏宗譜』は今後、更に検討を加えたい。

站丁をめぐる座談会を終了した翌5日朝、劉小萌氏など吉林師範大学満族文化研究所の一行は肇源県各地に残る駅舎の史跡踏査、筆者夫妻は尚大安氏や尚世陽氏などの案内と聶有財氏と張永江氏に伴われて、尚広江氏などが所有する家譜を見るために三站鎮に向かった。第二松花江左岸に広がるトゥモロコシ畑と所々で石油を汲み上げている叩頭機を見ながら、二站鎮を経由してほぼ1時間で三站鎮にある尚広江氏（58歳）のお宅に到着した。

◆尚広江氏所有の宗譜《2014年9月5日》

尚広江氏所有の宗譜を見せて頂いたが、期待に反して全く新しいものであった。氏によれば、尚氏宗譜の中でも一番古いものを持っていたが、ひどく傷んでしまったので、3、4年前に新しい宗譜を買って新調したとの事、古い宗譜は、「祖先発祥」を記した部分のみを切り取って新しい宗譜の裏に貼り付け、それ以外の部分は捨てたとの事である。いささかがっかりしたが、ともあれ新調された宗譜と古い宗譜から切り取った部分を見せて頂き、写真に記録させて頂いた。

新調された宗譜は、右から左に横書きで「祖業千秋」と大書された下部の中央上部に「尚氏宗譜」と記し、その右側に「高祖公」、左側に「高祖母」と記された人物像を描く。右側の祖先名記入欄には、尚之節の五代孫の世代である尚浜を祖として十一代孫の尚広林に至る系譜が記されている【写真 14-4】。

古い宗譜の「祖先発祥」部分は2枚に分かれ、その1枚には「原籍前明雲南大理／太和県北距城二十五里／尚家集分支由發福生／財四大枝本支生子後裔／嗣？遷移山西太原」、

⁽⁵⁾ 尚之節の子孫について、乾隆五十六年『尚氏宗譜』と康德『尚氏宗譜』は、之信の曾孫8世「維字輩」以後は記していない。第6次続修『尚氏宗譜』は、尚之節以後を全く記していない。

もう1枚には「??曾祖／??県生／?継官生二／?喜誥贈平／????」(?は不明の字を、／は改行を示す)等の文字が読み取れる【写真14-5】。

尚広江氏所有の家譜を見終わると、尚大安氏は三站鎮の北に位置する福興郷の尚大学氏宅へ案内してくれた。

◆尚大学氏所有の宗譜《2014年9月5日》

尚大学氏は三種類の家譜を所有されていて、見せて頂くと共に写真に記録させて頂いた。以下、古いと想定される順に「宗譜1」、「宗譜2」、「宗譜3」と仮称して記す。

(1)「宗譜1」(幅110cm×長さ155cm)

中央上部に「尚氏同宗三代宗親之位」の位牌を描き、その右側に「高祖公」、左側に「高祖母」と記された人物像を描く。高祖公の右側に「原籍前明雲南大理／太和県北距城二十五里／尚家集分支由發福生財四大枝本支生子後裔」の文言が、「高祖母」の左側に「嗣後遷移山西太原府洪洞県經曾宗公／生遷移眞定府衡水県生二子長繼芳繼官生二子長學／書次即先公學禮三世皆以王貴贈平南王」の文言が記されている。

系譜は右側のみ記され、左側は空白である。右側には、尚可喜を四世とする系譜が、「一世 生／王氏」、「二世 繼官／焦氏／田氏」、「三世 學禮／王氏／劉氏／馬氏」、がそれぞれ「誥贈平南王／夫人」と共に記される。続いて「四世 可喜／劉氏」・「誥贈平南親王・智順王夫人」と共に尚可喜の「胡氏」や「楊氏」をはじめとする多数の夫人が記され、その下に「五世 之節」・「祖 汪／張／?氏」、「六世 國輔」／「祖 張／王氏」、以下「十五世」までは墨書され、「十六世」は赤紙に記され貼り付けられている【写真14-6、14-7】。

なお、「宗譜1」と「尚姓宗譜画像」(【写真14-3】肇源博物館の展示写真)、『家堂図』(肇源『尚氏宗譜』所収の写真、「三站尚広江家が300年余り恭奉してきた重要史料」の説明がある)の3点を比較すると、この三点は同じ物と推定される。ただ肇源『尚氏宗譜』には、「家堂図」の所有者を、先ほど訪れた三站鎮尚広江としているが、筆者が見せて頂いたのは福興郷尚大学氏宅であり、所有者の相違する理由は不明のままである。

(2)「宗譜2」(幅78cm×長さ110cm)

各処が剥落していて、つり下げる事が出来ないほどに傷んでいる【写真14-8】。中央上部に「尚氏門宗三代之宗親」、その右側に「高祖公」、左側に「高祖母」と記された位牌と「高祖公」と「高祖母」であろう人物像を描いている。「宗譜1」と同様の形式だったようであるが、右側は「五世尚之節」から始まっている。「宗譜1」と同様に尚之節＝国輔としながら、国輔を六世に数えている。左側に七世登挙から始まる系譜が記入されているようであるが、剥落して読み取れない【写真14-9】。

(3)「宗譜3」(幅78cm×長さ103cm)

十世を始祖とする新しい宗譜であり、中央上部に「供奉尚門三代宗親之位」、その右側に「考尚守策」、左側に「叱羅氏」⁽⁶⁾と記された位牌と、「尚守策」と「羅氏」であろう人物像を描いている【写真14-10】。

以上に記した尚之信を祖とする肇東尚氏の宗譜については、肇東『尚氏宗譜』と共に、別に検討する事として、ここでは三站鎮と福興郷で四種類の尚氏宗譜を見る事が出来た事とその概要を報じるにとどめる。

⁽⁶⁾ よく見えないが、「妣」(亡母)の同音異字である「叱」と推定した。

福興郷の尚大学氏宅を辞去した後に、福興郷の北西に位置する肇州へ向かった。「肇州」は金の太祖アグダ（阿骨打）が遼軍を破って金朝の基礎を築いた事に由来する場所であるが、ここには肇東県各地に住む尚氏 10 人余りが集まっていて、尚氏宗親会総族長の尚世海氏共々筆者も歓迎宴に招かれ一時を過ごした。

肇州を後にして劉小萌氏一行と合流すべく、松花江と嫩江の合流地点である三江口へ向かったが、船がなく三江口へは行けないとの連絡があり、肇源賓館で合流する事となった。劉氏一行と合流した後に、2 日間にわたってお世話になった肇源県政協の諸氏や瀋陽から駆けつけてくれた尚世海氏等に別れを告げ、第二松花江、第一松花江を渡って吉林省松原市に投宿した。

4 前郭爾羅斯蒙古族自治県の史跡

肇源県の探訪は筆者の希望した肇源尚氏の訪問が中心であり、許淑杰氏を始めとする吉林師範大学満族文化研究所の皆さんにとっては、今日からが探訪旅行の始まりである。

9 月 6 日朝、出発準備をしていると、折から中秋節の連休でホテルを会場に結婚式が始まったが、道路脇のクレーンに吊したお祝いの爆竹を鳴り響かせていて、様々な時に爆竹禁止令が出されるのも肯ける光景であった【写真 14-11】。

連休のため博物館は休館で、松花江河畔にある「松原規画展覽館」に行き、扶余市から 1992 年に松原市に改変されるまでの概要を見たが、ここは大慶油田に連なる石油の街、発展と変貌が著しく 1987、8 年に訪れた当時の面影が全く無いのは当然と認識させられた【写真 14-12】。

展覽館を後にして松原市の北西 60 km ほどにある塔虎城へ向かった。

◆塔虎城⁽⁷⁾《2014 年 9 月 6 日》

松原市から大安市に通じる松花江左岸の G302 路を北上、やがて嫩江右岸の流域となり、周囲は小さな湖「泡」が点在する平野、所々に叩頭機が見える。このような平野の中に塔虎城が位置していた。城名の「塔虎」は、頭部の大きい魚「胖頭魚」（クロタナゴ）に由来し、遼朝の長春州、金朝の新泰州に比定されている。

南側城壁の下部に、左側に蒙古文字、右側に漢字で記された史跡標示「吉林省重点文物／保護単位／塔虎城／吉林省人民委員会／一九六七年二月一三日公布／前郭爾羅斯蒙古族自治鎮政府…tahu hoton」が建っている【写真 14-13】。

城の平面はほぼ正方形、城の周囲は 5,213m、高さが 5～6.5m、基部の幅は 20～25m、上部の幅は 1.5～2m ある版築で築かれた城壁は、現在、ほぼ全部が残存している。東・西・南・北にそれぞれ 1 門を備えた城門は、南・北 2 門は破壊され、東・西 2 門が残っているという。

古城のほぼ中央を G302 路が南北に貫いて古城を東西に分断している。南門の近くに停車し南城壁の東側に登ってみると、周囲 5,200m ほどの城壁全体がほぼ見渡せた。城内は全てがトウモロコシ畑、畑に降りてみると土中に磚や瓦片が散らばっていた【写真 14-14、14-15】。

⁽⁷⁾ 唐秀琴主編『白城地区文物志簡編』（吉林人民出版社、1992 年、以下『白城文物志』）154 頁の「塔虎古城址」、および『中国文物地図集吉林分冊』（国家文物局、1993 年、以下『地図集吉林』）185 頁の「塔虎城」。

◆査干湖《2014年9月6日》

塔虎城を探訪した後、塔虎の城名に因んで魚料理を楽しみ、遊覧船に乗ってチャガンノール（査干湖）に遊んだ【写真14-16】。

査干湖はホリソゴル（霍林河）の末端の湖で、水深は4mと浅いが、湖の幅は東西38kmで南北14km、周囲は100kmを超えるという巨大な淡水湖、内蒙古に隣接する牧畜地帯の中にあるが、冬の漁撈が盛んである。前郭爾羅斯蒙古自治県は、松花江に嫩江が合流、両河川の流域には査干湖に代表される湖が多数点在していて、これらの河川や湖では漁業が盛んであり、牧畜を生業とする蒙古族も、古くから漁業に勤しんだようである⁽⁸⁾。

査干湖の周囲には観光をあてこんだのであろう「郭爾羅斯博物館」、植物園を併設した「チンギス・ハン（成吉思汗）廟」や蔵漢結合様式を謳う「妙音寺」などがあつた。査干湖を後にして査干湖の北東、長安鎮にある「孝荘祖陵満蒙碑」を訪れた。

◆孝荘祖陵満蒙碑⁽⁹⁾《2001年8月7日》《2014年9月6日》

コルチン（科爾沁）部ジャイサン・ベイレ（寨桑貝勒）の娘ブンブタイ（布木布泰）は、清朝の太宗ホンタイジの妃となり「荘妃」に封じられ、その子フリン（福臨）が順治帝に即位した。そのためブンブタイは「皇后」と、更に康熙帝の即位後は「皇太后」と呼ばれた。石碑は順治十一年（1654）五月壬辰に、荘妃ブンブタイの父親の寨桑貝勒に「和碩忠親王」が、母親に「賢妃」が追贈された事を記念して、子孫が満文（7行182字）と蒙文（8行201字）で記した石碑「漢語訳『追封忠親王暨忠親王賢妃碑』（順治十二年五月初七日立）」を建立した。

墓前に建てられていた事から「グリ（庫里）碑」（墳墓碑）と俗称されていた石碑は文化大革命時に破壊されたが、1983年に破片をつなぎ合わせて修復され、現在では碑額（高さ145cm、幅130cm、厚さ40cm）、碑身（高さ292cm、幅125cm、厚さ34cm）、亀趺（全長310cm、高さ145cm、幅132cm）を合わせて全高582cmの石碑が碑亭の中に納められている。

《2014年》：石碑は2004年に国家A級旅游風景区となった「長山明珠園」＝「孝荘祖陵風景区」の中にあり、「孝荘祖陵陳列館」（2003年造営）の中に置かれているので、自由に見る事はできない。明珠園入口で陳列館入場の手続きをとらなかったため、石碑まで行けずに門の隙間から石碑を撮影、池の対岸に建つ墓地を遠望した【写真14-17、14-18】。

《2001年》：大興安嶺の東西を探訪したいと、哈爾濱市社会科学院王禹浪氏の案内で、ダライノール（呼倫湖）とベイルノール（貝爾湖）を訪れた後に、ノモンハン・ソム（諾門汗徳日蘇木）から大興安嶺の西麓を登って稜線を越え東へ、阿爾山を經由して烏蘭浩特、白城を経て松原市に出る途中に石碑を訪れた。

当時の説明では、石碑の元あつた場所は、現在の場所から200mほど離れた、今は池と

(8) 吳忠良氏は郭爾羅斯前・後旗と站台をめぐる漁業と魚租を考察されている。吳忠良「乾隆中期のモンゴル旗における魚租利権—嫩江—松花江流域のモンゴル旗を中心に」（『東洋学報』第96巻第3号、2014年）。

(9) 『白城文物志』307頁の「満蒙文石碑」、および『地図集吉林』187頁の「追封忠親王碑（満蒙文碑）」。

「追封忠親王暨忠親王賢妃碑」

帝王恭賢尊功、必崇封宏世、憲前而存后、廣開親親之道銘于鐵石、宜究本以示意。聖母明聖仁上恭
 恂皇太后：王考妣育吾者也、思稽其本、祖獲福而子來端、祖母榮貴而福生焉。爾子后濟此封王、授
 以洪恩、今理祖母遺體、念德崇恩、并立冊文、追封祖父為忠親王、祖母為忠親王賢妃、立碑于墓、
 永存后世、仁親荐恩。 大清國順治十二年五月初七日立。

なってしまった所であり、1997年にここへ移動、碑亭を建てて鍵を掛けて管理しているとの事であった。碑面を見ると、刻された満蒙文字は、部分的ではあるが文字をたどる事が可能であった【写真 14-19、14-20】。

2014年9月7日朝、松原市から西へ80km余りに位置する乾安県の「泥林」を見に行く。省道301号をたどり、西へ行くにつれアルカリの浮き出た白っぽい土地が目につき始める。泥林の近くでは、叩頭機が多数見え風力発電塔も並んでいた【写真 14-21】。松原からほぼ2時間で、「南の石林、北の泥林」と称される「乾安泥林国家地質公園」入り口に到着した。

◆乾安泥林

乾安泥林は黄土カルスト地形で、砂泥が堆積した台地を雪や雨が浸食して出来た泥林、泥柱、泥峪、泥穴等々の特異な地形が連なる地帯で、東側の塩湖・大布蘇湖に連なっている。観光客は少なかったが、泥林や泥峪を見るための、台地を上下する吊り橋や遊歩道が設置されている。遊歩道伝いに松花江、嫩江流域に広がる低湿地帯が作り出した特異な景観を楽しんだ【写真 14-22】。

泥林見学の後に松原市へ戻り、松花江を渡って北へ30km余りの松原市寧江区伯都郷にある伯都古城へ赴いた。

◆伯都古城⁽¹⁰⁾《1987年9月22日》《1988年8月16日》《2014年9月7日》

遼金時代の城である城址は、ほぼ正方形で周囲3,132mに及び、基部の幅は14～16m、上部の幅は3～4m、高さ3m余り版築で築かれた城壁が残っている。現存、東・西・南・北の4門址が残っていて、雍城や馬面、角楼址も認められるという。

《2014年》：伯都郷の南側、郷道144号沿いにある伯都中学の近くの村道を東に入り、農道をたどって古城の西門址と推定される場所に赴いた。古城は吉林省重点文物保护单位であるが、ここには史跡標示「伯都古城」が建っているのみで、他には史跡保護などの表示は見当たらない【写真 14-23】。

一帯はトウモロコシ畑であり、畑の中に土手のようになった低い城壁址が長く延びていた。この付近に伯都訥衙門址などがあるのかと探すが、不明で終わった【写真 14-24】。

伯都城が錫伯族に由来する城なのであろうか、チャプチャル・シベ（察布查爾錫伯）族自治県⁽¹¹⁾から吉林師範大学に來たシベ（錫伯）族の鋒暉氏は、城壁で紙銭と香を焚き、酒をそそぎ、叩頭して先祖の祀りと祭天を行っていた。

近くに、唐代に起源のあるという永善寺（原名は觀音堂）があり、文化大革命で破壊されたという堂宇を修復、再建中であった【写真 14-25】。

《1987年》：東北師範大学明清史研究所薛虹氏の案内で、加藤直人氏と共に列車で長春から前郭へ、前郭からはジープで松花江を渡り扶余県（現扶余市）に赴き、「扶余古城」と「扶余新城」の城址を訪れた。

「古城」の城壁址の土塁以外は、城趾の内側も外側もトウモロコシや粟が植えられた耕作地であり、西門付近には城壁址を切り開いた道もつけられていた【写真 14-26、14-27】。

⁽¹⁰⁾ 『地図集吉林』149頁の「伯都城趾」。

⁽¹¹⁾ 大興安嶺一帯が本拠地であった錫伯族は、清初にヌルハチ（奴爾哈赤）の支配下に入り、嫩江と松花江流域をはじめ遼東一帯に居住、その一部が乾隆朝半ば（18世紀半ば）に新疆に派兵され、現在の新疆ウイグル自治区伊犁哈薩克自治州察布查爾錫伯自治縣の由来となっていることはよく知られている。

西門から入り東門への道をたどったが、高さ 1.5m ほどの版築の城壁址が残存していて、城壁に埋もれている遼、金時代のものという磚片や瓦片が見受けられる。東門址には「雍城」の跡が明瞭であった。城壁西北角には「角楼」があったというが、角楼を認める事は出来なかった。

「新城」は古城の東側にあり、古城よりかなり小型で、城壁址の土塁はほぼ正方形に残存している。新城は清代の城址であるとの説明であったが、新城と「伯都訥駐防」或いは「伯都訥庁」との関係は不明のままである。

《1988年》：「清入関前史学術討論会」の史跡参観の一環として、扶余城（＝伯都古城？）へ赴く予定で前郭を経て扶余県に入ったが、当日になって討論会開催責任者薛虹氏から、参観予定の「伯都訥古城」は道路条件の悪化と盗掘があったため、外国人の立ち入り許可が取り消されたと伝えられ、伯都訥古城へ行く事は出来なかった。このため前年訪れた扶余古城と伯都城の関係、新城と伯都訥城との関係などは確認出来なかった。

本章では、1987年に探訪した扶余古城が2014年探訪の伯都城にあたるとする。

9月8日朝、松原市に別れを告げ、長春を経由して吉林へ移動する。その途中で前郭県吉拉吐郷錫伯屯村と前郭県哈拉毛都鎮王府屯村に立ち寄った。松原市を出発して、松花江右岸沿いのG302号路を東南へ向かうが、この道路は松花江が近いめか、途中で片側三車線の道路が一面冠水している場所もあった。

◆吉拉吐郷錫伯屯村《2014年9月8日》

満洲文字と漢字で書かれた「吉拉吐郷錫伯屯村村民委員会」の表札の掲げられた役所に到着、吉拉吐郷錫伯屯村は、乾隆年間に北京から移動させられたシベ族の住む村であり、新疆シベ族の鋒暉氏は、当地のシベ族の女性から聞き取りを行っていた【写真14-28】。

錫伯屯の総人口は4,000人余りで、その内、モンゴル族は500～600人、シベ族300人、満洲族100人ほどで、残りは漢族である。当地のシベ族は、チャプチャル・シベ自治県とは相異して、シベ語（満洲語？）ではなくモンゴル語を話しているという。

◆哈拉毛都鎮王府屯村《2014年9月8日》

吉拉吐郷錫伯屯村を後にしてG302号路を南下して鉄道の長春白城線「王府站」付近にある前郭県哈拉毛都鎮王府屯村に立ち寄った。ここは清の太祖ヌルハチに帰属、崇徳元年（1636）に世襲罔替の扎薩克輔国公に封じられた部の子孫で、最後の扎薩克輔国公となったジモトサンペイル（齊莫特散帔勒）の王府があった場所である。齊莫特散帔勒は、清末に盟長としてコルチン旗、ジャライト旗、ドルベト旗、ゴルロス旗を総括し、日本の「満洲国」時代には蒙政部大臣、興安総省省長を勤め、1942年に病死した。中華人民共和国成立以後の土地改革等の中で扎薩克王府は破壊され、現在では齊莫特散帔勒の伯父の邸宅「祥大爺府」と叔父の邸宅「七大爺府」が残っている。

◆祥大爺府⁽¹²⁾《2014年9月8日》

祥大爺府はG302号路から王府站鎮を右手に望む先で左折して132郷道をたどって前郭県哈拉毛都鎮王府屯村へ、ここから少し西へ入った先に位置していた。「前郭県哈拉毛都原種場／基本農田保護区」の看板がある付近で王府前の道路は工事中、「県級重点文物」に指定されているが特に史跡保護の標示もなく、監視する人もいない。敷地は2,500㎡、建築

(12) 『地図集吉林』187頁の「祥大爺府」。

面積 300 m²の正房と左右の廂房を長い回廊で繋いでいる建物を見て回った。前庭に、大きな松が日本の盆栽風に植え込まれているのは、日本時代の名残なのであろうか【写真 14-29、14-30】。

◆七大爺府⁽¹³⁾《2014 年 9 月 8 日》

王府屯村の中の「前郭県哈拉毛都鎮王府屯村村務監察委員会」の近くにあった。高い塼がめぐらされ、門は閉じられていて建物は見えるが中には入れなかった。どう交渉したのか、敷地に隣接する公安の建物の中を歩いて塼の内側に入れてもらった。塼の中に入ったが、敷地が 2,500 m²あるという七大爺府の建物にも塼がめぐらされていて、門が閉まっていた建物の内部を見る事は出来なかった【写真 14-31、14-32】。

王府屯村から、革命と共に徹底的に破壊されたと伝えられる扎薩克王府のあった場所を遠望するが、それらしい物は何も認められなかった。

王府屯村に別れを告げて、G302 号路へ戻り高速道路を使って長春へ、所用のため今日北京へ帰るといふ劉小萌夫人と長春駅で別れ、平地は稲、丘陵地帯はトウモロコシ畑が延々と続く平野の中を吉林市へ向かった。吉林市は 1987 年に初めて訪れて以後何度か来ているが、最後に訪れたのは 1995 年 9 月⁽¹⁴⁾、当然の事であろうが、この 20 年間の歳月ですっかり変貌している。市内中心を貫く松花江の両岸はネオンサインで飾られたビル街が続いていた。

5 舒蘭市の史跡

9 月 9 日、舒蘭の郊外にある完顔希尹墓地へ向かう。松花江を渡って G202 号路を北上すると明日赴く予定の烏拉街への分岐が見える。更に北上して舒蘭方面に向かい 10 時 30 分舒蘭の街に到着、ビルの建ち並ぶ通りに驢馬の牽く馬車が走るといふ昔の面影が残る街の中に、「完顔希尹博物館」が「舒蘭市図書館」に併設されている【写真 14-33】。

◆完顔希尹博物館《2014 年 9 月 9 日》

完顔希尹は天輔三年（1119）に金の太祖阿骨打の命によって、契丹文字や漢字を参考に女真大字を作成したとされている。博物館には、金の歴史を伝える磁器、頭飾り、銅鏡、農具、馬具や女真の風俗の展示と共に、舒蘭郊外の小城镇にある完顔希尹を始めとする完顔氏の墓を、模造を含む出土品、写真などで紹介している【写真 14-34】。墓は以下の五区に分かれているという。

- 第一墓区 馬路村代松樹屯の東北 400m（小城から柳樹河村へ行く郷道の脇）にある。
- 第二墓区 第一区の西北 250m にある。金の世宗が大定二十二年（1182）に建てた「大金故尚書左丞相金源郡貞憲王完顔公神道碑」があることから、完顔希尹の墓と推定される。

⁽¹³⁾ 『地図集吉林』187 頁の「七大爺府」。

⁽¹⁴⁾ 王禹浪氏の案内で加藤直人氏、江夏由樹氏と共に、哈爾濱から松花江沿いに東へ、松花江が黒龍江と合流する同江、黒龍江に烏蘇里江が合流する撫遠を経て、烏蘇里江を遡り、興凱湖經由で鶏西市へ、更に老爺嶺を越えて琿春へ、吉林を経由して哈爾濱へ戻る旅の途中であった。細谷良夫「琿春の満族」（『満族史研究通信』第 5 号、1995 年）を参照。

第三墓区 第二区の西北1 km、南北に走る谷の中にある完顔守道の墓。

第四墓区 第三区の南1.5 km、谷の中にある。

第五墓区 第四区の西南2 km、谷間の傾斜地にある。

完顔希尹博物館の館員に案内されて完顔希尹家族墓地へ向かう。舒蘭の街から南へ30分余り走って小城鎮人民政府の前を通過、そこから山裾を20分余りの山麓に第一墓区が、そのすぐ近くに第二墓区がある。

◆完顔希尹第一墓区⁽¹⁵⁾《2014年9月9日》

ここは「完顔希尹の父歆都の墓」と推定されている。山道を少し登ると「全国重点文物保护单位／完顔希尹家族墓地／中華人民共和国国务院／二〇〇一年六月二十日公布／舒蘭市人民政府立」が建ち、その先の道ばたに顔の失われた文官とおぼしき石像が建てられていた【写真14-35、14-36】。

◆完顔希尹第二墓区⁽¹⁶⁾《2014年9月9日》

第一墓区にほど近い場所に位置していて、入り口に破れた布看板が残っていた。山の斜面の中段にある平坦地に、文化大革命中に破壊され石碑断片と亀趺のみが残ったと伝えられる「神道碑」が再建されている。神道碑の周囲には文武官の石人、石羊なども並べられ、「全国重点文物保护单位／完顔希尹家族墓地／中華人民共和国国务院／二〇〇一年九月二十五日公布／舒蘭市人民政府立」の標示がある【写真14-37】。

墓室などがあつたと推定される奥の林の中には、元来の物と思われる石人や石羊、石柱が転がっていて、石碑も残っていた【写真14-38、14-39】。

第一墓区と第二墓区を訪れて完顔墓地の見学を終了、往路を舒蘭に戻った後に吉林駅へ、駅は修復中で車の乗り入れは不可、今から四平へ戻る許淑杰、聶有財、孫守朋氏と慌ただしく別れてホテルへ戻った。

6 烏拉街満族鎮の史跡

9月10日、午前中、劉小萌氏らは吉林市内の博物館などに出向いたが、私は同行せずに休養、昼過ぎに昨日通ったG202号路を北上、金珠村を過ぎてから県道32号路を西へ、続いて郷道108号路を北上、烏拉街満族中学の前を通過して吉林市龍潭区烏拉街満族鎮人民政府に到着した。烏拉街は大きなビルこそ目につかないものの、様相を一新していて、清代建築の邸宅などが史跡として整備されていた。

烏拉街には吉林師範大学満族文化研究所の現地基地があり、劉小萌氏と呉忠良氏は人民政府へ出向く。政府の女性職員2人が史跡案内をつとめ、帰路には「烏拉街鎮国家級重点文物保护单位情况簡介」（以下「烏拉街文物簡介」と略称）と題した史跡解説のプリントを頂いた。

既に述べたように、烏拉街満族鎮には1987、88年、94年と三度訪れているが、1987、

(15) 『地図集吉林』140頁の「完顔希尹家族墓地」、および76頁の「完顔希尹家族墓地」・「完顔希尹神道碑」。

(16) 同上。

88 年は薛虹教授の案内によるいわば公式訪問で、鎮長の説明など詳細な情報を得た⁽¹⁷⁾。当時の史跡は打牲烏拉総管衙門と烏拉古城のみであり、94 年に初めて「魁府」と「保寧宮」を参観した。

◆烏拉街満族鎮人民政府《1987 年 9 月 24 日》《1988 年 8 月 19 日》《1994 年 8 月 24 日》
《2014 年 9 月 10 日》

以前は永吉県に所属する満族鎮で、政府の建物も小さかったが、今では吉林市龍潭区に編入され、大きなビルに代わっている。満族鎮であるため、人民政府に掲げられた表札は満漢文で記されている。他の満族鎮でも同様の場合が多々あるが、満文表記は一定せず、年によって相違している【写真 14-40、14-41、14-42】。

◆薩府建築址⁽¹⁸⁾《2014 年 9 月 10 日》

吉林市第三中学の校庭内にあり、史跡標示「吉林省文物保護単位／薩府建築址／吉林市人民政府／二〇〇一年一二月五日公布／二〇〇三年九月二十三日立」が建っている。

「烏拉街文物簡介」に、ここは打牲烏拉総管衙門第 13 代総管であった索柱の私邸で、乾隆二十年（1755）に創建され、後に転売されて「薩大人」の所有となった事から「薩府」と呼ばれる。「二進四合院」形式の建築で「門房三間、正房三間、東、西廂房各六間」を備えている。文化大革命の破壊後に修復され、1955 年から永吉第三中学の教員室などに利用されて来た事が記されている。

修復のためか、邸宅の周囲は全て塀で囲まれていて、邸宅の中を見る事は出来なかった【写真 14-43、14-44】。

◆後府建築址⁽¹⁹⁾《2014 年 9 月 10 日》

人民政府から少し東に離れた永康路の畑の中に位置し、史跡標示「吉林省文物保護単位／后府建築址／吉林市人民政府／二〇〇一年一二月五日公布／二〇〇三年九月二十三日立」が建っている。

「烏拉街文物簡介」に、この建物は打牲烏拉総管衙門第 31 代総管であった趙雲生の私邸で、光緒六年（1880）～光緒二十四年（1898）に建造された。鎮内に「東府」と「前府」があることから、「後府」と称される。「二進四合院」形式の建築で、満族民居の代表的な建物である。解放後は、永吉県政府の辦公室、文物展覽館、師範学校教師や幹部住宅、県衛生学校などに利用され、その間に様々な改修が施され、1978 年 10 月には火災で東廂房が焼失、現在は正房と西廂房が残るのみであると記されている。

現存する正房と西廂房は修復中のようで、庭には取り外された磚や新築用の磚が積まれていた【写真 14-45、14-46】。

⁽¹⁷⁾ 1987・88 年当時は、吉林市などの都市は外国人に開放されていたが、烏拉街など地方の郷や鎮は未開放で、訪れるためには事前に申請し許可を得、現地では滞在届が必要で、許可が出た場合は地方政府が対応してくれた。烏拉街の場合は薛虹教授の手で許可を得たようで、両年共に鎮長の説明と烏拉部研究者である永吉県文物管理处・尹郁山氏の案内と説明を得た。

⁽¹⁸⁾ 『地図集吉林』71 頁の「吉録府邸」には、「吉録府邸は乾隆末年から嘉慶 2 年に打牲烏拉総管であった吉録の私邸で「南府」とも呼ばれた。文化街第三中学内にあり、現在第三中学の教員弁公室となっている」と記されていて、所在地から「吉録府邸」は「薩府」に相当すると推定される。

⁽¹⁹⁾ 『地図集吉林』71 頁の「趙雲生府邸（後府）」。

◆魁府建築址⁽²⁰⁾《1994年8月24日》《2014年9月10日》

「烏拉街文物簡介」に、この建物は光緒年間に伊犁に出征して重傷を負い、光緒帝に表彰され副都統に任ぜられ、金銀衣錦を賜与されて故郷に帰った「王大人」すなわち王魁福の邸宅であったことから「魁府」と呼ばれ、解放後は永吉県の前身である永北県政府所在地、永吉県農業展覽館、烏拉街人民公社、烏拉街満族鎮招待所などに使用され、現在は龍潭区文化館が使用しているとある。

《2014年》：烏拉街の中心・十字街にあり、門前に史跡標示「全国重点文物保护单位／烏拉街清代建築群—魁府／中華人民共和國國務院／二〇一三年一月二日公布／吉林省人民政府立」と「吉林省文物保护单位／魁府建築址／吉林省人民政府／二〇〇一年一月二日公布／二〇〇三年九月二十三日立」の二つが並んで建っていて、ここが前年から全国重点文物保护单位となった事を示している【写真 14-47】。

現在も規模の大きな「二進四合院」形式の建築がほぼ残っていて、建物の壁に軍用であったの名残であろう「☆」印や満洲文字もどきが見えた。また吉林師範大学満族文化研究所の「烏拉街基地」である事を示す標示も掲げられ、土産と骨董を売る店の看板は満漢文で「ebsi boobai asari 奇珍閣」と記されている【写真 14-48、14-49】。

《1994年》：烏拉満族鎮人民政府の左隣にあり、副都統の私宅」と紹介された。門の上には「☆」印が掲げられ、「永吉県／烏拉街満族鎮政府／招待所」の看板がある【写真 14-50】。中に「烏拉街鎮平面図」「由鎮内至各村里程表」「魁府簡介」「烏拉古城簡介」が掲示されていた【写真 14-51】。

◆保寧宮《1994年8月24日》

烏拉城中城壁の北右側に在る保寧宮（王爺廟）を参観した。民家の一室を保寧宮に当てていて、中央に閔帝が置かれている。保寧宮は康熙二十四年（1685）創建、文化大革命で破壊され、1993年6月から修復計画が始まったという。地域住民の信仰を集めているようで、建て替え予定の完成模型が置いてあった。

◆打牲烏拉総管衙門⁽²¹⁾《1987年9月24日》《1988年8月19日》《1994年8月24日》《2014年9月10日》

打牲烏拉総管衙門は既に無くなったとの事で、「烏拉街文物簡介」にも記述がない。

《2014年》：人民政府から東に行った、表通りから少し奥まった場所が打牲烏拉総管衙門の建物が建っていた場所であると案内された。庭や畑も無くなり建物は一新され、以前に訪れた場所かどうかは確認できない。今の建物には「農機管理服務／一類站／吉林省農業機械管理局」の表札が掲げられていたが、1987年に訪れた時から、農業機械に関する機構が置かれていたので、掲げられている表札からすると、案内された場所が打牲烏拉総管衙門のあった場所と考えられる【写真 14-52】。

なお、[承志・杉山 2006] 掲載のブトハ・ウラ総管衙門の写真を、筆者の1987年撮影写真と比べると、オンドル煙突の位置や形から同じ建物と推定される。ただ[承志・杉山 2006]では「奥まったところにあるため『後府』と通称されており」とあるが、既に述べたように、現在では「後府」は「後府建築址」を指している。

(20) 『地図集吉林』71頁の「王魁福府邸」。

(21) 『地図集吉林』70頁の「打牲烏拉総管衙門」には、所在地が「烏拉街鎮内農機站址」と記されている。また趙勤・呉広孝編『烏拉古鎮』（吉林出版集団、2011年）には、打牲烏拉総管衙門は烏拉街鎮の東側にあり、以前は烏拉街公社農機站が置かれていて、2008年にはまだ一部の建物が残っていたとある。

《1987年》：康熙四十二年（1703）改築の打牲烏拉総管衙門を引き継いだ建築が残っていて、「永吉農機具部品工場」の敷地の中にある。門の左手奥に棟の高い1棟が残存しているが、人が居住しているので内部を見る事は出来なかった。家の構造や外壁の飾り、柱などに清代の建築が偲ばれる。近年中に修復する計画があるとの事であった【写真 14-53、14-54】。

《1988年》：打牲烏拉総管衙門であった建物は前年同様であるが、工場名は「永吉県酶制剤廠」に変わっている【写真 14-55】。

《1994年》：打牲烏拉総管衙門の建物は、使用中であり外国人には見せられないと参観を断られ、建物のある場所に赴かなかった。

◆烏拉故城⁽²²⁾ 《1987年9月24日》《1988年8月19日》《1994年8月24日》《2014年9月10日》

烏拉街の少し北側に位置する烏拉城は、海西女直の部貝勒の本拠であった。万曆四十年（1612）から翌年正月にかけて、奴爾哈赤は布占泰の拠る烏拉城を攻撃、烏拉城は陥落し布占泰は部に逃亡、烏拉部は滅亡したという歴史がある。

「烏拉街文物簡介」に以下のように見える。烏拉部故城の所在地は吉林省吉林市龍潭区烏拉街鎮旧街村。1961年に吉林省級重点文物保護単位となり、1962年9月に吉林省博物館と吉林市博物館が調査を行い、報告書『明代扈倫四部烏拉部故址—烏拉古城調査』を刊行、1985～2008年の第三回全国文物一斉調査も行われた。文革（1966年5月～77年10月）中の破壊、開墾、住居の建築、墓地の埋葬、水路と道路の掘削などによる破壊もある。

城の規模は、総面積約90万㎡、内城、中城、外城の城垣と護城河がある。内城はほぼ台形で城壁総延長786m（東城壁201m、西城壁250m、南城壁171.5m、北城壁163.5m）、城壁高3～4m、上部の幅1～3.5m、基礎の幅10～12.4m。正南に幅3mの門、城の四隅に角楼とおぼしき建築址がある。内城中央の北寄りに、版築で築いた東西50m、南北25m、楕円形で亀の背のように真ん中が高く四隅が低い大型の建築基礎があり、「白花公主点将台」と俗称されている。内城外側の護城河遺構は殆ど認められない。中城壁は不規則な四辺形で、城壁総延長3,521.3m（東城壁879.4m、西城壁1,409m、南城壁584.7m、北城壁648.2m）。外城壁は不規則な四辺形で、東城壁と北城壁は比較的よく保存されているが、南城壁と西城壁の破壊は激しい。特に西城壁は松花江に水没している事などが記されている。

《2014年》：烏拉城内城の入り口、内城壁に連なる門に「龍潭区満族学校」と大書されているが、門内の両側の建物は廃屋のようであり、付近に学校らしき建物は見当たらない。以前見た小学校が満族学校であったのであろうか、それとも小学校が満族学校小学校に代わったのであろうか【写真 14-56】。

門の外側の塀に「烏拉古城跡」として烏拉故城の説明と共に、烏拉街に残る「後府」「府」「関帝廟」「葉王廟」「三霄殿＝娘々廟」「円通楼」の説明と絵が掲示されているが、「癸未年孟秋」2003年に記したようで剥げ落ちていた。

この門を直進すると、「点将台」と称されている内城台地が見え、その上に登る階段は以前と変わりが無い【写真 14-57、14-58】。

以前はバスケットボールのボードが置かれていた校庭は草原となっていて、牛が草を食んでいる。台地の下に、烏拉古城の史跡標示は見当たらず、「県級愛国主義教育基地」の標示が建っている。内城台地の上に建つ「革命烈士記念塔」は以前と同様であるが、その北側は農地となり家が建っているようであった【写真 14-59】。

⁽²²⁾ 『地図集吉林』69頁の「烏拉古城」。

帰路、すぐ近くで内城壁東側の一部と思われる城壁が残っているのを見つける。ここに「全国重点文物保护单位／烏拉部故城／中華人民共和国国务院／二〇一三年三月五日公布／吉林省人民政府立」（裏面に「ここが烏拉部都城所在地で内・中・外城の総面積は八十万㎡ 金代に始まり明代に加強されたが、1613年に烏拉部は奴爾哈赤に滅ぼされた。康熙時代に新城を築いたのでこの城は廃棄された」との説明）が建ち、城壁には「吉林省文物保护单位／烏拉古城遺址／一九六一年四月十三日」の看板が建てられていて、付近の農家の庭から高さ3～4mほどの城壁が続いているのが見えた【写真14-60】。

《1987年》：尹郁山氏の案内で、古城の南側から入ったが、南側は外城壁を含めて町並みの中に吸収されて殆ど不明であった。

小学校の脇から階段を上ると点将台＝宮殿台地の上に出る。点将台には「革命烈士記念塔」が建ち、それほど広くはない。岡の北側は小学校の校庭で、岡から70～80m北側に、内側からみると高さ3～4m（外側から見ると高さは7～8m）の内城壁が残存している。内城壁は東、西、北側は明瞭に判る。内城壁上には太い榆の古木がある【写真14-61、14-62】。

内城壁の北側の外側＝中城壁との間は白菜などの畑、内城壁から300～400m離れて高さ7～8mの城壁が残存、北門であると言う切り開きがある。外城壁→内城壁→城址と、中に向かって次第に高くなっている。

《1988年》：午前中に松花江河岸に位置する富爾哈古城を探訪、午後に烏拉古城と打牲烏拉総管衙門の探訪と言う慌ただしい日程であった。前年は確認出来なかった南側内城壁を見つける。小学校の校庭は白菜畑に変わっている【写真14-63、14-64、14-65】。

《1994年》：烏拉古城内城へ赴く途中で、南側の中城壁と内城壁を見て、点将台が内城壁に囲まれている事を確認、宮殿台地にしては狭い点将台から中城壁、その向こうに外城壁を遠望する。内城壁内部の小学校の建物は以前より拡張されたようである。内城壁の内部は、1988年と同様に畑で小学生が耕している。布占泰の時からあったと言う榆の木を見た後に中城壁へ行き、城壁に上ってみるが以前と大きな変わりはない。ただ、烏拉古城の揭示板がさび付いてしまっている【写真14-66、14-67、14-68】。

◆内城内の学校の位置

学校の位置が[細谷1991]と[承志・杉山2006]では南北が逆になっている。すなわち、[細谷1991]122頁の「烏拉城概略図」では、記念塔＝点将台の北側に小学校があるとしているが、[承志・杉山2006]では「小中学校（龍潭区満族学校）は内城南半分に建っており、北半分はポプラと下草に覆われていた」、「校舎の南側にも内城壁が東西それぞれから連なって延びていた」とあり、1987年から2005年の間に、学校が南から北へ移ったのかとの疑問を呈している。

[後藤1994]には「点将台南面の40数段の石段を登ると記念碑が立っている。…点将台北の方角を眺めると、内城のすぐ外は小学校付属のものであろうか、畑になっていた」とあり、[細谷1991]と同じ方角で記している。ただ、[後藤1994]は[細谷1991]に基づいた記述である事も考えられる。

2014年の探訪では、迂闊な事にこの相違を確認してこなかった。今後の確認が必要、別にはいえば細谷作図「烏拉城概略図」の南北の確認が必要であるが、本章には、尹郁山氏のご教示に基づいた[細谷1991]122頁の「烏拉城概略図」を載せておく。

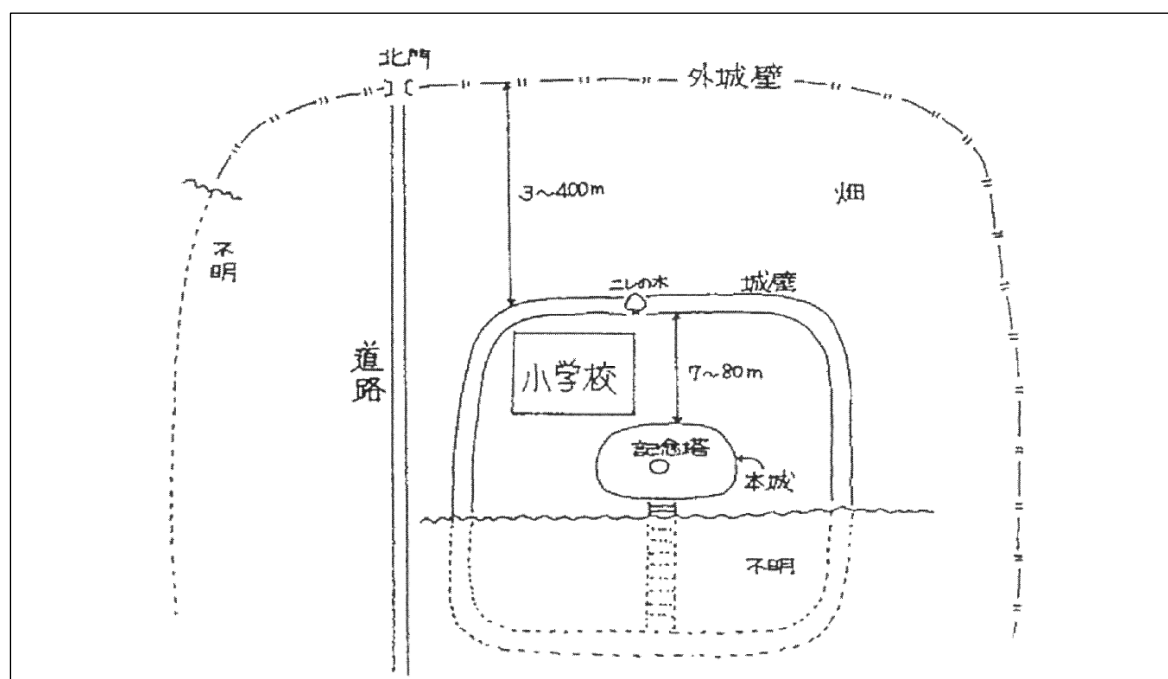


図 14-2 烏拉城概略図 (1987 年作図)

◆烏拉部の部族意識

1987 年と 88 年に烏拉街を案内して頂いた永吉県文物管理处の尹郁山氏は烏拉部の後裔で、烏拉城内に居住していた事もあるという。尹氏は、烏拉部が海西女直の中心的存在である事を主張し、満族統一の中心となった建州女直に対抗する意識が極めて濃厚であった。当時、奴爾哈赤による満族の統一を主題とする『奴爾哈赤伝奇』(遼寧電視台制作)がテレビ放映されていたが、テレビに描かれた奴爾哈赤の賛美と烏拉部布占泰の否定は、到底首肯し得ないので、告訴などの方法で異議を申し立てると強調されていたのが印象に残っている⁽²³⁾。

部族や民族の「統一」と記されるが、統一の裏側にある被統一者＝敗者の意識を理解する事の難しさを考えさせられる主張であった。全ての民族が「中華民族」に統合されていく現在、尹氏のような意識はどのように扱われるのであろうか。

以前には無かった史跡も整備された 20 年ぶりの烏拉街に別れを告げ、夕暮れの松花江を渡り吉林市へ戻った。

翌 11 日早朝にホテルを出発、吉林市と長春市の中間に位置する嘉龍空港へ、お世話になった劉小萌氏を始めとする吉林師範大学満族文化研究所の皆さんに見送られ、張永江氏と共に長春 8 時 40 分発北京 10 時 25 分着の CZ6145 便で北京へ帰着、9 日間に及ぶ吉林の探訪旅行が無事終了した。

⁽²³⁾ 1990 年 8 月に吉林で開催された「清先史学会」で、趙東升氏と尹郁山氏が烏拉部後裔の立場から家族史と家譜編纂について報告されたが、共に烏拉部が海西女直の中心であり、その独自性と満族内の正系を強調されていた。

おわりに

前年に続いて、今年も28年の時を隔てて伯都城や烏拉城を訪れる事が出来た。観光地化されていない史跡は、28年前と大きくは変わってはいない事を見いだして、ホッとするのは何故だろうか。中華人民共和国が、中華民族国家としての統合を主張し始めた現在、当然、歴史理解も統合されていくであろう。とするならば、各地の史跡や地方で出されていた史跡案内なども統合されていくのであろうか。

今後は、以前に探訪した史跡の記録、写真、集めたパンフレットなどを整理して、総合的に史跡の変容、そして歴史認識の変容を認識する一助としたい。少しは今後の研究の進展に寄与するのではないかと考えている。

今回の旅も例年同様に、劉小萌氏と張永江氏に助けられて歩き通す事が出来た。史跡に赴く交通手段を始めとする史跡探訪の条件は、以前に比べて格段に整備された。とはいえ、日本の日常に慣れた、そして脚力の無くなった年寄りには困難な事も少なくない。今年もまた、お二人をはじめ、許淑杰氏や呉忠良氏をはじめとする吉林師範大学満族文化研究所の皆様のおかげで、楽しく実りの多い毎日を過ごす事が出来た。

改めて諸氏に感謝する次第である。

(原載：『日中韓周縁域の宗教文化』Ⅰ、2015年)



写真 14-1 肇源座談会



写真 14-2 肇源博物館



写真 14-3 肇源博物館展示「尚姓宗譜」の写真



写真 14-4 尚広江氏所有の新調「家譜」



写真 14-5 尚広江氏所有の旧「家譜」祖先発祥部分



写真 14-6 尚大学氏所有「宗譜 1」



写真 14-7 尚大学氏所有「宗譜 1」祖先発祥部分



写真 14-8 尚大学氏所有の「宗譜 2」



写真 14-9 尚大学氏所有「宗譜 2」祖先発祥部分



写真 14-10 尚大学氏所有の「宗譜 3」祖先発祥部分



写真 14-11 クレーンに吊された爆竹



写真 14-12 松原規画展覧館

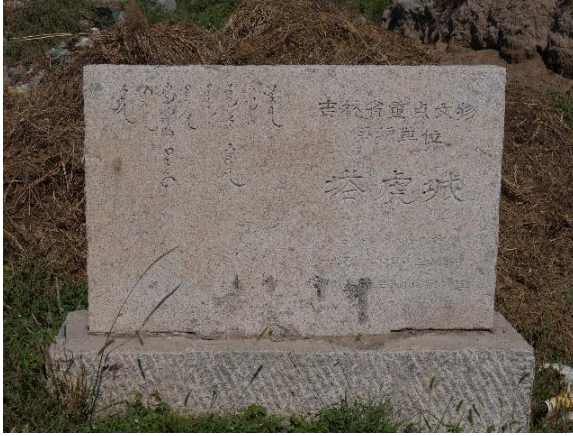


写真 14-13 蒙古・漢語で記された塔虎城史跡標示



写真 14-14 塔虎城南城壁（南門から東側）



写真 14-15 塔虎城西城壁（南門から遠望）



写真 14-16 遊覧船の行き交う查干湖



写真 14-17 孝庄（莊）祖陵陳列館の入り口



写真 14-18 孝庄祖陵滿蒙碑の龜趺

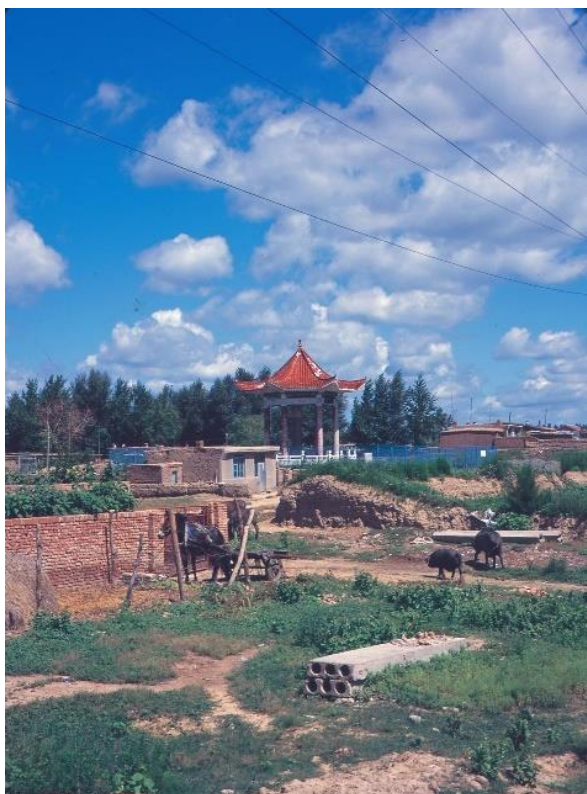


写真 14-19 新築された「満蒙碑」碑亭（2001 年）



写真 14-20 「満蒙碑」碑面の満文（2001 年）



写真 14-21 石油を汲み上げる叩頭機



写真 14-22 泥林風景（大布蘇湖を遠望）



写真 14-23 伯都古城西城壁と史跡標示



写真 14-24 伯都古城西門付近



写真 14-25 建築中の永善寺



写真 14-26 伯都古城西城壁（1987 年）



写真 14-27 伯都古城西門付近（1987 年）



写真 14-28 吉拉吐鄉錫伯屯村の聞き取り



写真 14-29 祥大爺府中庭と回廊



写真 14-30 祥大爺府の外観



写真 14-31 七大爺府の玄関



写真 14-32 七大爺府の外観



写真 14-33 舒蘭市完顔希尹博物館



写真 14-34 完顔希尹博物館の墓区説明



写真 14-35 完顔希尹第一墓区の史跡標示



写真 14-36 完顔希尹第一墓区の文官像



写真 14-37 完顔希尹第二墓区の全景



写真 14-38 完顔希尹第二墓区の文官像



写真 14-39 完顔希尹第二墓区の石羊像



写真 14-40 烏拉街滿族鎮人民政府（2014 年）



写真 14-41 烏拉街滿族鎮人民政府（1988 年）



写真 14-42 人民政府の表札（1994 年）



写真 14-43 校庭の一隅に残る薩府



写真 14-44 薩府の建築



写真 14-45 後府の正房



写真 14-46 後府の正房の建築



写真 14-47 史跡標示の建つ魁府正面



写真 14-48 魁府の建築



写真 14-49 魁府の正房



写真 14-50 人民政府招待所の表札がある魁府正面(1994 年)



写真 14-51 魁府の説明(1994 年)



写真 14-52 打牲烏拉總管衙門の建築址



写真 14-53 打牲烏拉總管衙門(1987 年)



写真 14-54 打牲烏拉總管衙門（1987 年）



写真 14-55 打牲烏拉總管衙門（1988 年）



写真 14-56 龍潭區滿族學校の標示がある南門



写真 14-57 内城内の点将台全景



写真 14-58 革命烈士記念塔



写真 14-59 内城の西側城壁



写真 14-60 内城東側城壁



写真 14-61 学校の校庭と点将台（1987年）



写真 14-62 内城壁（1987年）



写真 14-63 内城に建つ学校管理規則揭示（1988年）



写真 14-64 内城 学校の校庭（1988年）



写真 14-65 畑になった内城内部(1988 年)



写真 14-66 革命烈士記念塔(1994 年)



写真 14-67 点将台上部 (1994 年)



写真 14-68 烏拉古城史跡標示(1994 年)